

福岡市埋蔵文化財調査報告書第868集

ZASSHONOKUMA

S I T E

雜餉隈遺跡5

—第14・15次調査報告—



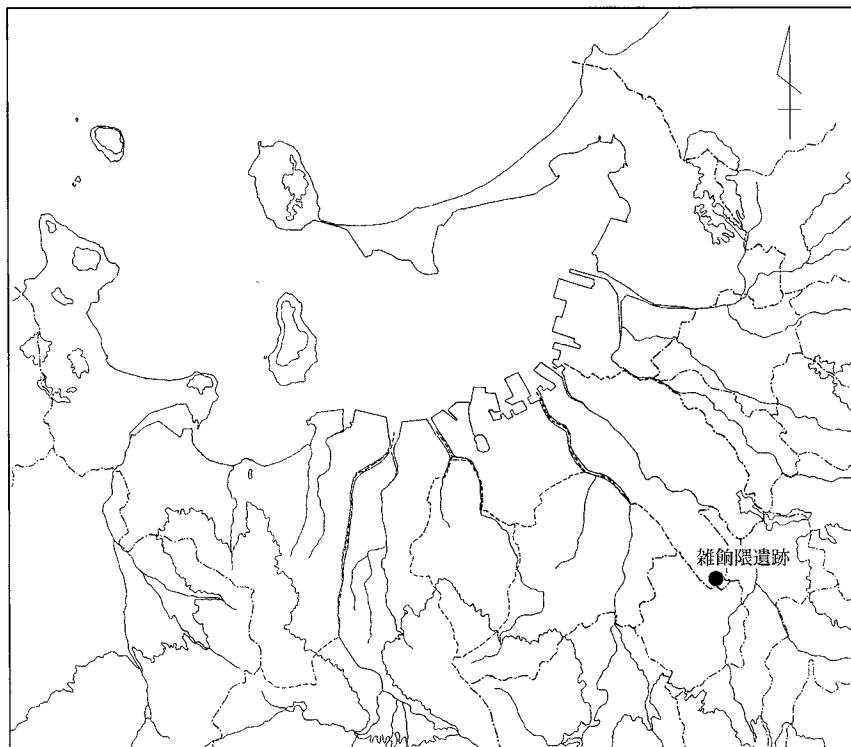
2005

福岡市教育委員会

岡三リビック(株) 埋蔵文化財調査室

ZASSHONOKUMA SITE
雜餉隈遺跡 5

— 第 14・15 次調査報告 —



遺跡略号 調査番号
ZSK-14 0243
ZSK-15 0349

2005

福岡市教育委員会
岡三リビック(株) 埋蔵文化財調査室



カラー写真 1. 第 14 次調査 北側全景（南側から）



カラー写真 2. SC005 壺穴式住居跡
竈・土坑 1 遺物出土状況（南側から）



カラー写真 3. SC008 壺穴式住居跡
竈・P2 遺物出土状況（東側から）



カラー写真 4. SC013 壺穴式住居跡
竈 2・P4 遺物出土状況（西側から）



カラー写真 5. SC011・SC012 壺穴式住居跡
竈完掘状況（西側から）

卷頭カラー 2



カラー写真 6. 第 15 次調査 SR002 (右)・SR003 (左) 木棺墓 (南側から)
遺構の長軸方向の傾きは、ほぼ同じで、共に東側の床面に完存の壺が出土する



カラー写真 7. SR002 木棺墓遺物出土状況 (北側から)



カラー写真 8. SR002 木棺墓出土の壺 (西側から)



カラー写真 9. SR003 木棺墓遺物出土状況 (南側から)



カラー写真 10. SR003 木棺墓出土の
有柄式磨製石剣と磨製石鎌
(南側から)



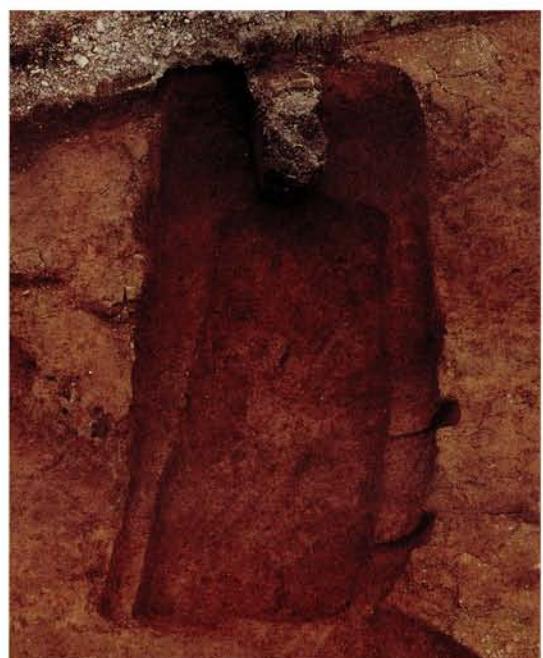
カラー写真 11. SR011 木棺墓遺物出土状況（東側から）
手前の壺とベルト部分以外の、裏込めされた粘土を掘削した状態



カラー写真 12. SR011 木棺墓完掘状況（東側から）



カラー写真 13. SR015 木棺墓遺物出土状況（西側から）
床面は 2 段に掘削され、石剣と石鎌は上段の高さで認められた



カラー写真 14. SR015 木棺墓完掘状況（西側から）



カラー写真 15. SR015 木棺墓遺物出土状況（南側から）
右側の壺は、遺構の上面で認められた



カラー写真 16. SR015 木棺墓出土の
有柄式磨製石剣と磨製石鎌
(南側から)

卷頭カラー 4



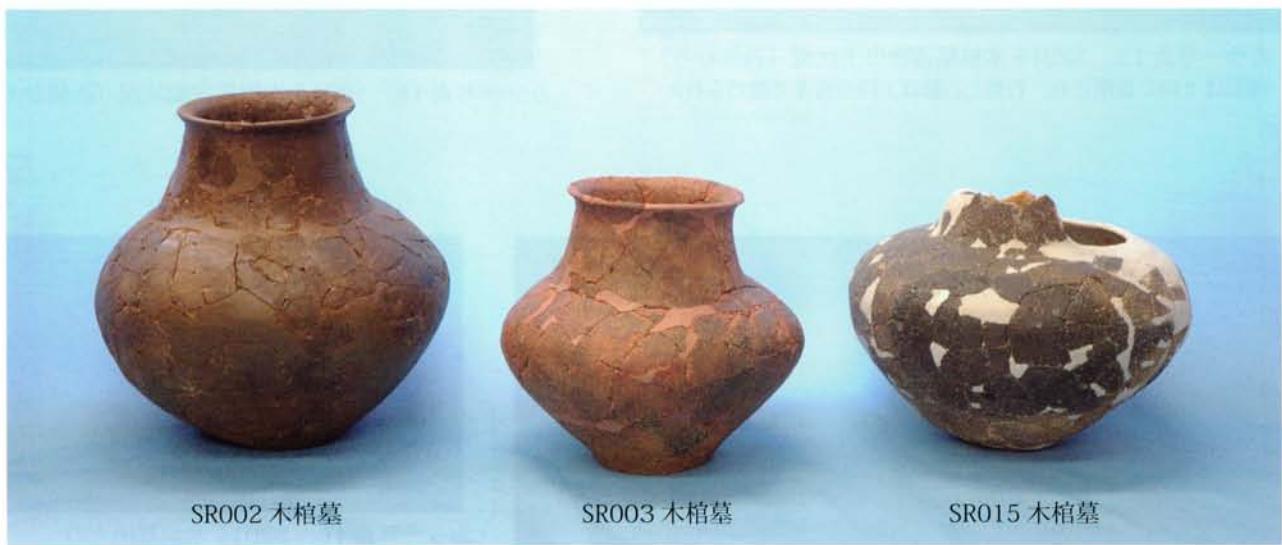
カラー写真 17. SR003 木棺墓出土の
有柄式磨製石剣と磨製石鏃



カラー写真 18. SR011 木棺墓出土の
有柄式磨製石剣



カラー写真 19. SR015 木棺墓出土の
有柄式磨製石剣と磨製石鏃



SR002 木棺墓

SR003 木棺墓

SR15 木棺墓

カラー写真 20. 木棺墓出土の壺

序

現在、国際化の流れの中でアジア地域により一層開かれた国際都市を目指し、まちづくりを進めている福岡市は、古くからアジア大陸との交流を通じて発展してきました。本市では、この交流を物語る文化財の保護、活用に努めていますが、開発によりやむを得ず失われていく遺跡については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は、博多区雑餉隈遺跡内の開発事業に先立って行われた第14次・15次発掘調査を報告するものです。調査の結果、旧石器時代・弥生時代・奈良時代における遺構および遺物が発見され、当時の生活を復元する上で多大な成果を挙げることができました。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告に至るまでの費用負担などのご協力を賜りました株式会社理研ハウス、九州旅客鉄道株式会社様をはじめとする関係者の方々および地元の方々には、多大なご理解とご協力をいただきました。ここに感謝の意を表すとともに、本書を文化財保護や普及、教育などに活用していただければ幸甚に存じます。

平成17年3月31日

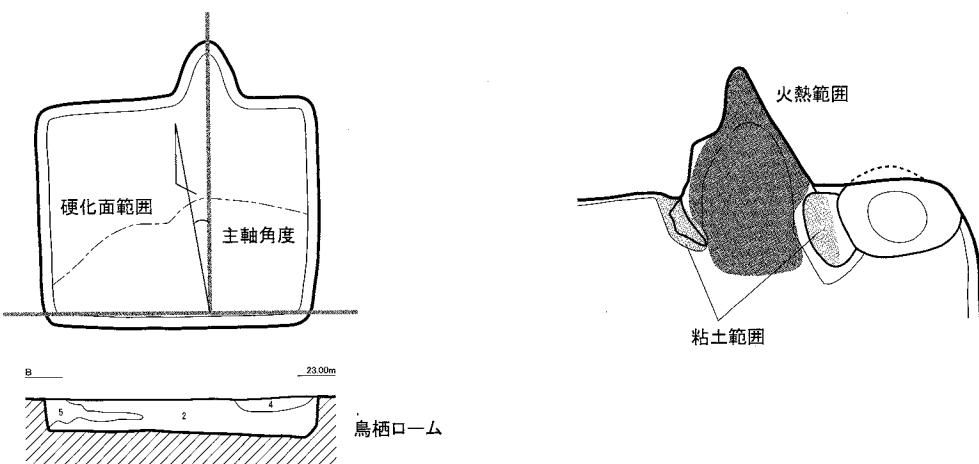
福岡市教育委員会
教育長 植木とみ子

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会の指導のもと、岡三リビック(株)埋蔵文化財調査室が実施した雑餉隈遺跡の第14次・15次発掘調査の報告書である。
2. 第14次調査は、理研ハウスの集合住宅建設に伴い2002年11月1日から2003年1月24日にかけて実施した。
第15次調査は、九州旅客鉄道(株)の集合住宅建設に伴う2003年11月10日から2004年3月5日にかけて実施した。
3. 本書の執筆・編集は、堀苑孝志・天野直子・入江俊行が分担して行った。
4. 遺構の実測図は、堀苑孝志・入江俊行が行った。
5. 遺物の実測図は、天野直子・平野由紀子・佐田裕一・中下まり江が行った。
6. 遺構・遺物のトレース図は、Adobe Illustrator 10を使用し、松尾祥子・倉園眞記がトレースを行った。
7. 遺構・遺物の写真は、堀苑孝志が撮影した。
8. 英文訳は、倉園眞記が行った。
9. 遺構及び遺物の色調については、『新版標準土色帖 2002年版』を基準にした。
10. 遺構番号は調査区内で連番をつけ、遺構の略号を冠して呼称する。遺構の略号は以下の通りである。
　　竪穴式住居跡 SC　　土坑 SK　　木棺墓 SR　　柱穴 P　　小穴 SP
11. 方位は真北で統一し、磁北は西偏約6° 20'となる。
12. 本報告書に係わる図面・写真・遺物等は、『埋蔵文化財の整理・収蔵要項』福岡市教育委員会1994年に従い、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管する。

凡　　例

1. Fig(図)・Tab(表)・PL(写真)の見方
 - ① Fig(図)・Tab(表)・PL(写真)のキャプション番号は、第14次と15次の混乱を避けるため通し番号とした。
 - ② Fig(図)・Tab(表)・PL(写真)中の遺物と遺構の各番号は、収蔵する都合で第14次と15次は分けて通し番号とした。
2. 遺構平面図の見方
 - ① 住居跡の主軸線の角度は、対面する壁面と竪中心を通る軸線が垂直に交わるように設定し、真北からの傾斜角度を指す。
 - ② 竪の被熱部分と粘土部分の表現は、2種類のトーンによって区別する。

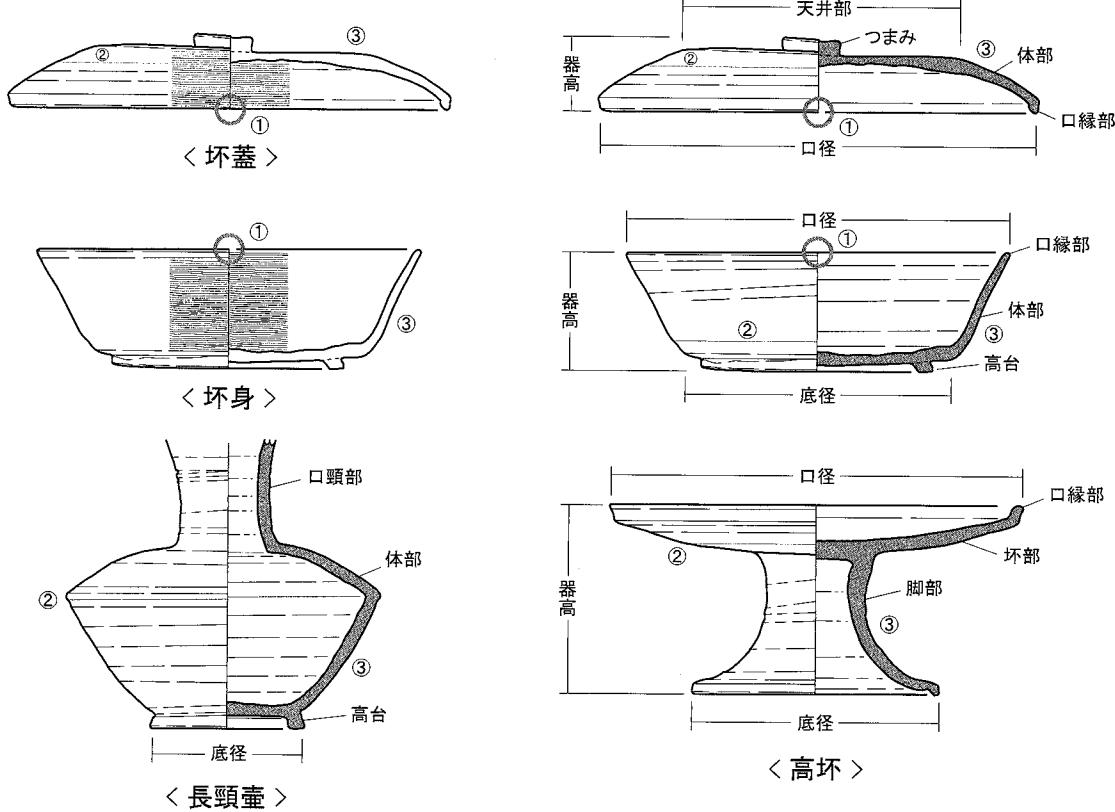


3. 遺物実測図の見方と各部の名称

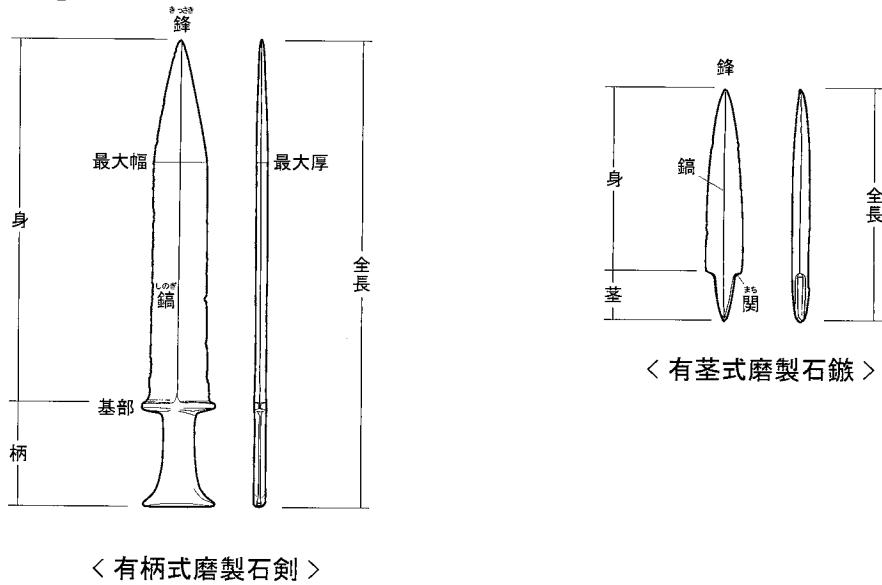
本書における遺物実測図の表現および各部の名称は、以下の通りである。

- ① 土器の残存度が 1/2 以下で、片側を反転させて推定実測したものについては、中心線に対し間隔を開けて表現する。
- ② 回転ヘラ削り調整が行われた位置は、稜線よりも細い実線で表現する。
- ③ 土器の断面において、網かけのないものは土師器、あるものは須恵器を表現する。

【奈良時代】



【弥生時代】



本文目次

I. 遺跡の概要			
1. 遺跡の立地と環境	1	SK006.....	114
2. 遺跡の歴史的背景	1	SC007.....	115
II. 第14次調査の概要		SC008.....	116
1. 調査に至る経緯	7	SC009.....	118
2. 調査体制	7	SK010.....	122
III. 第14次発掘調査の記録		SR011.....	124
SC001.....	8	SK012.....	126
SC002.....	9	SK013.....	126
SC003.....	15	SK014.....	127
SK004.....	17	SR015.....	128
SC005.....	18	SK016.....	130
SC006.....	21	SC017.....	131
SC007.....	25	SC018.....	131
SC008.....	28	SC019.....	131
SC009.....	34	搅乱・表土	134
SK010.....	37	VI. まとめ	
SC011.....	38	1. 調査の概要	140
SC012.....	41	2. 古代の集落について	140
SC013.....	44	3. 古代の出土遺物について	142
SC014.....	48	4. 古代の雜餉隈遺跡から見えてくるもの	143
SC015.....	49	5. 弥生早期の木棺墓について	144
SC016.....	54	6. 有柄式磨製石剣と弥生早期の雜餉隈遺跡	146
SC017.....	57	VII. SUMMARY	148
SC018.....	61	報告書抄録	149
SK019.....	64		
SK020.....	65		
SC021.....	68		
SK022.....	75		
SC023.....	76		
SC024.....	80		
SK025.....	83		
SK026.....	83		
試掘坑1・2	84		
旧石器	85		
搅乱	86		
IV. 第15次調査の概要			
1. 調査に至る経緯	105	Fig. 1 雜餉隈遺跡と周辺遺跡	2
2. 調査体制	105	Fig. 2 調査区位置図-1	3
V. 第15次発掘調査の記録		Fig. 3 調査区位置図-2	4
SC001.....	106	Fig. 4 第14・15次調査遺構配置図	5, 6
SR002.....	110	Fig. 5 SC001 遺構平断面図	8
SR003.....	111	Fig. 6 SC001 出土遺物実測図	9
SK004.....	113	Fig. 7 SC002 遺構平断面図	10
SC005.....	113	Fig. 8 SC002 竪1・2 平断面図	11

挿図目次

Fig. 9 SC002 出土遺物実測図-1	12
Fig. 10 SC002 出土遺物実測図-2	13
Fig. 11 SC003 遺構平断面図	15
Fig. 12 SC003 出土遺物実測図	16
Fig. 13 SK004 遺構平断面図	17
Fig. 14 SK004 出土遺物実測図	17
Fig. 15 SC005 遺構平断面図	18
Fig. 16 SC005 竪平断面図	19
Fig. 17 SC005 出土遺物実測図	20
Fig. 18 SC006 遺構平断面図	22
Fig. 19 SC006 竪平断面図	23
Fig. 20 SC006 出土遺物実測図	24

Fig.21	SC007 遺構平断面図	25
Fig.22	SC007 竈 1 平断面図	26
Fig.23	SC007 竈 2 平断面図	26
Fig.24	SC007 出土遺物実測図	27
Fig.25	SC008 遺構平断面図	29
Fig.26	SC008 竈平断面図	30
Fig.27	SC008 出土遺物実測図-1	31
Fig.28	SC008 出土遺物実測図-2	32
Fig.29	SC009 遺構平断面図	35
Fig.30	SC009 竈平断面図	35
Fig.31	SC009 出土遺物実測図	36
Fig.32	SK010 遺構平断面図	37
Fig.33	SK010 出土遺物実測図	37
Fig.34	SC011 遺構平断面図	38
Fig.35	SC011 竈平断面図	39
Fig.36	SC011 出土遺物実測図	40
Fig.37	SC012 遺構平断面図	42
Fig.38	SC012 竈平断面図	42
Fig.39	SC012 出土遺物実測図	43
Fig.40	SC013 遺構平断面図	45
Fig.41	SC013 竈 1 平断面図	45
Fig.42	SC013 竈 2 平断面図	46
Fig.43	SC013 出土遺物実測図	47
Fig.44	SC014 遺構平断面図	48
Fig.45	SC015 遺構平断面図	49
Fig.46	SC015 竈平断面図	50
Fig.47	SC015 出土遺物実測図-1	50
Fig.48	SC015 出土遺物実測図-2	51
Fig.49	SC015 出土遺物実測図-3	52
Fig.50	SC016 遺構平断面図	55
Fig.51	SC016 竈平断面図	55
Fig.52	SC016 出土遺物実測図	56
Fig.53	SC017 遺構平断面図	58
Fig.54	SC017 竈平断面図	58
Fig.55	SC017 出土遺物実測図-1	59
Fig.56	SC017 出土遺物実測図-2	60
Fig.57	SC018 遺構平断面図	61
Fig.58	SC018 竈平断面図	62
Fig.59	SC018 出土遺物実測図	63
Fig.60	SK019 遺構平断面図	64
Fig.61	SK019 出土遺物実測図	65
Fig.62	SK020 遺構平断面図	65
Fig.63	SK020 出土遺物実測図-1	66
Fig.64	SK020 出土遺物実測図-2	67
Fig.65	SC021 遺構平断面図	69
Fig.66	SC021 出土遺物実測図-1	70
Fig.67	SC021 出土遺物実測図-2	71
Fig.68	SC021 出土遺物実測図-3	72
Fig.69	SK022 遺構平断面図	75
Fig.70	SK022 出土遺物実測図	75
Fig.71	SC023 遺構平断面図	76
Fig.72	SC023 竈平断面図	77
Fig.73	SC023 出土遺物実測図-1	77
Fig.74	SC023 出土遺物実測図-2	78
Fig.75	SC023 出土遺物実測図-3	79
Fig.76	SC024 遺構平断面図	81
Fig.77	SC024 出土遺物実測図	82
Fig.78	SK025 遺構平断面図	83
Fig.79	SK026 遺構平断面図	83
Fig.80	試掘坑 1・2 平断面図	84
Fig.81	旧石器出土遺物実測図	85
Fig.82	搅乱出土遺物実測図	86
Fig.83	SC001・SK006 遺構平断面図	106
Fig.84	SC001 出土遺物実測図-1	107
Fig.85	SC001 出土遺物実測図-2	108
Fig.86	SR002 遺構平断面図	110
Fig.87	SR002 出土遺物実測図	110
Fig.88	SR003 遺構平断面図	111
Fig.89	SR003 出土遺物実測図	112
Fig.90	SK004 遺構平断面図	113
Fig.91	SC005 遺構平断面図	113
Fig.92	SC005 竈平断面図	114
Fig.93	SK006 出土遺物実測図	115
Fig.94	SC007 遺構平断面図	115
Fig.95	SC007 出土遺物実測図	116
Fig.96	SC008 遺構平断面図	117
Fig.97	SC008 出土遺物実測図	118
Fig.98	SC009 遺構平断面図	119
Fig.99	SC009 竈平断面図	120
Fig.100	SC009 出土遺物実測図	121
Fig.101	SK010 遺構平断面図	123
Fig.102	SK010 出土遺物実測図	123
Fig.103	SRO11 遺構平断面図	124
Fig.104	SRO11 出土遺物実測図	125
Fig.105	SK012・013 遺構平断面図	126
Fig.106	SK014 遺構平断面図	127
Fig.107	SK014 出土遺物実測図	127
Fig.108	SRO15 遺構平断面図	128
Fig.109	SRO15 出土遺物実測図	129
Fig.110	SK016 遺構平断面図	130
Fig.111	SC017・018・019 遺構平断面図	131
Fig.112	SC017 出土遺物実測図	132
Fig.113	SC018 出土遺物実測図	133
Fig.114	搅乱・表土出土遺物実測図	134

Fig.115	竪穴式住居跡の規模と類型	140
Fig.116	竪穴式住居跡の主軸角度	140
Fig.117	重複する竪穴式住居跡出土の遺物	143

表目次

Tab. 1	SC001 遺構観察表	8
Tab. 2	SC001 出土遺物観察表	9
Tab. 3	SC002 遺構観察表	12
Tab. 4	SC002 出土遺物観察表-1	13
Tab. 5	SC002 出土遺物観察表-2	14
Tab. 6	SC003 遺構観察表	16
Tab. 7	SC003 出土遺物観察表	16
Tab. 8	SK004 出土遺物観察表	17
Tab. 9	SC005 遺構観察表	19
Tab.10	SC005 出土遺物観察表	21
Tab.11	SC006 遺構観察表	23
Tab.12	SC006 出土遺物観察表	24
Tab.13	SC007 遺構観察表	27
Tab.14	SC007 出土遺物観察表	28
Tab.15	SC008 遺構観察表	30
Tab.16	SC008 出土遺物観察表-1	33
Tab.17	SC008 出土遺物観察表-2	34
Tab.18	SC009 遺構観察表	36
Tab.19	SC009 出土遺物観察表	36
Tab.20	SK010 出土遺物観察表	37
Tab.21	SC011 遺構観察表	39
Tab.22	SC011 出土遺物観察表-1	40
Tab.23	SC011 出土遺物観察表-2	41
Tab.24	SC012 遺構観察表	43
Tab.25	SC012 出土遺物観察表	44
Tab.26	SC013 遺構観察表	46
Tab.27	SC013 出土遺物観察表	47
Tab.28	SC014 遺構観察表	48
Tab.29	SC015 遺構観察表	50
Tab.30	SC015 出土遺物観察表-1	53
Tab.31	SC015 出土遺物観察表-2	54
Tab.32	SC016 遺構観察表	55
Tab.33	SC016 出土遺物観察表	57
Tab.34	SC017 遺構観察表	59
Tab.35	SC017 出土遺物観察表	60
Tab.36	SC018 遺構観察表	62
Tab.37	SC018 出土遺物観察表	64
Tab.38	SK019 出土遺物観察表	65
Tab.39	SK020 出土遺物観察表-1	67
Tab.40	SK020 出土遺物観察表-2	68
Tab.41	SC021 出土遺物観察表	69

Tab.42	SC021 出土遺物観察表-1	73
Tab.43	SC021 出土遺物観察表-2	74
Tab.44	SK022 出土遺物観察表	75
Tab.45	SC023 遺構観察表	77
Tab.46	SC023 出土遺物観察表-1	79
Tab.47	SC023 出土遺物観察表-2	80
Tab.48	SC024 遺構観察表	81
Tab.49	SC024 出土遺物観察表	82
Tab.50	旧石器出土遺物観察表	86
Tab.51	攪乱出土遺物観察表	86
Tab.52	SC001 遺構観察表	107
Tab.53	SC001 出土遺物観察表-1	108
Tab.54	SC001 出土遺物観察表-2	109
Tab.55	SR002 出土遺物観察表	110
Tab.56	SR003 出土遺物観察表	112
Tab.57	SC005 遺構観察表	114
Tab.58	SK006 出土遺物観察表	115
Tab.59	SC007 遺構観察表	116
Tab.60	SC007 出土遺物観察表	116
Tab.61	SC008 遺構観察表	117
Tab.62	SC008 出土遺物観察表	118
Tab.63	SC009 遺構観察表	121
Tab.64	SC009 出土遺物観察表	122
Tab.65	SK010 出土遺物観察表	123
Tab.66	SR011 出土遺物観察表	125
Tab.67	SK014 出土遺物観察表	127
Tab.68	SR015 出土遺物観察表	130
Tab.69	SC017 遺構観察表	132
Tab.70	SC017 出土遺物観察表	132
Tab.71	SC018 遺構観察表	133
Tab.72	SC018 出土遺物観察表	133
Tab.73	SC019 遺構観察表	134
Tab.74	攪乱・表土出土遺物観察表	134

図版目次

【巻頭図版】

巻頭カラー 1

- カ-写真 1. 第 14 次調査 北側全景
- カ-写真 2. SC005 竪穴式住居跡
竈・土坑 1 遺物出土状況
- カ-写真 3. SC008 竪穴式住居跡
竈遺物出土状況
- カ-写真 4. SC013 竪穴式住居跡
竈遺物出土状況
- カ-写真 5. SC011・SC012 竪穴式住居跡
竈完掘状況

卷頭カラー 2	
が-写真 6. SR002・SR003 木棺墓	⑯. SC018 竪穴式住居跡 竈
が-写真 7. SR002 木棺墓遺物出土状況	⑰. SK019 土坑
が-写真 8. SR002 木棺墓出土の壺	⑱. SK020 土坑
が-写真 9. SR003 木棺墓遺物出土状況	
が-写真 10. SR003 木棺墓出土の 有柄式磨製石剣と磨製石鏃	
卷頭カラー 3	
が-写真 11. SR011 木棺墓遺物出土状況	PL4 90
が-写真 12. SR011 木棺墓完掘状況	⑲. SC021 竪穴式住居跡
が-写真 13. SR015 木棺墓遺物出土状況	⑳. SC024・SC023 竪穴式住居跡
が-写真 14. SR015 木棺墓完掘状況	SK022・SK026 土坑 完掘状況
が-写真 15. SR015 木棺墓遺物出土状況	㉑. 調査区南側全景
が-写真 16. SR015 木棺墓出土の 有柄式磨製石剣と磨製石鏃	㉒. SK025 土坑
卷頭カラー 4	㉓. 試掘坑 1 旧石器出土状況
が-写真 17. SR003 木棺墓出土の 有柄式磨製石剣と磨製石鏃	㉔. SK020 土坑
が-写真 18. SR011 木棺墓出土の 有柄式磨製石剣	㉕. 調査区北側全景
が-写真 19. SR015 木棺墓出土の 有柄式磨製石剣と磨製石鏃	
が-写真 20. 木棺墓出土の壺	
PL1 87	
①. SC001 竪穴式住居跡	PL5 遺物写真 001～025 91
②. SC002 竪穴式住居跡 竈 1・2	PL6 遺物写真 026～047 92
③. SC002 竪穴式住居跡	PL7 遺物写真 048～078 93
④. SC003 竪穴式住居跡	PL8 遺物写真 079～098 94
⑤. SK004 土坑	PL9 遺物写真 099～128 95
⑥. SC005 竪穴式住居跡	PL10 遺物写真 129～155 96
PL2 88	PL11 遺物写真 156～178 97
⑦. SC006・SC007 竪穴式住居跡	PL12 遺物写真 179～199 98
⑧. SC006 竪穴式住居跡	PL13 遺物写真 200～222 99
⑨. SC008 竪穴式住居跡	PL14 遺物写真 223～250 100
⑩. SC009 竪穴式住居跡・SK010 土坑	PL15 遺物写真 251～267 101
⑪. SC003・SC012・SC013・SC014・SC011 竪穴式住居跡 使用面全景	PL16 遺物写真 268～289 102
⑫. SC015 竪穴式住居跡	PL17 遺物写真 290～302 103
PL3 89	PL18 遺物写真 303～322 104
⑬. SC016 竪穴式住居跡	PL19 135
⑭. SC018・SC017 竪穴式住居跡	①. SC001 竪穴式住居跡
⑮. SC017 竪穴式住居跡 竈使用面完掘状況	②. SC005 竪穴式住居跡
	③. SC008 竪穴式住居跡
	④. SC009 竪穴式住居跡
	⑤. SK010 土坑
	⑥. SC017・018・019 竪穴式住居跡
	⑦. SC018 竪穴式住居跡 P1 遺物出土状況
	PL20 遺物写真 001～025 136
	PL21 遺物写真 026～039 137
	PL22 遺物写真 040～049 138
	PL23 遺物写真 050～065 139

I. 遺跡の概要

1. 遺跡の立地と環境

雑餉隈遺跡が所在する福岡平野は博多湾に面し、海浜・砂丘・潟・沖積低地・段丘・丘陵・山地と多様な自然環境を内包している。長い歴史の中では、海岸部における環境の変化が最も著しく、海進・海退や砂丘の形成などが絶えず行われてきた。また内陸部も河川による侵食や堆積作用がみられ、こうした環境の変化が先人の営みを、大きく左右してきたことはいうまでもない。

雑餉隈遺跡は行政区分でいうと、福岡市の南端に位置し、東側に大野城市、西側に春日市の市境が迫る。地形的には春日丘陵の東側に平行して延びる、標高 20 数mの台地上にある。この台地は北西から緩やかな谷が幾筋も入り込み、それぞれが舌状地形を形成する。この舌状台地ごとに、南八幡遺跡・麦野 A～C 遺跡、そして雑餉隈遺跡に分けられるが、地形的な境界は漠然としている。当該調査地点は、その舌状地形において、南端部を占める位置にあり、縁辺に向かうに従い緩やかに傾斜していく。

基本土層は花崗岩の風化礫層を基盤とし、その上に粗砂・細砂・シルトが堆積する。さらに上層は阿蘇火碎流による八女粘土層と鳥栖ローム・新期ロームで形成され、遺構はこのローム上面で確認されることになる。

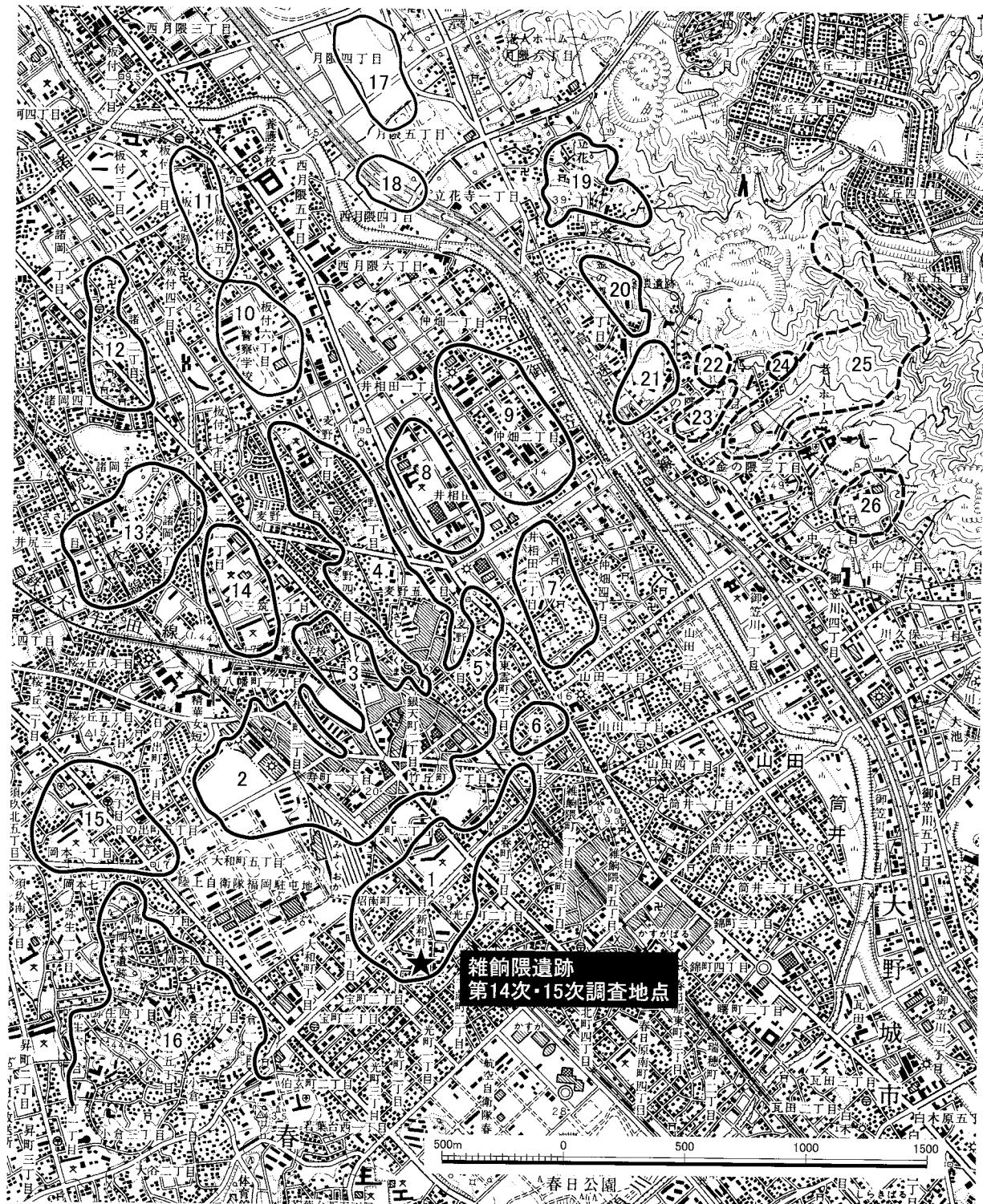
2. 遺跡の歴史的背景

当遺跡は先でも述べた、南八幡遺跡や麦野遺跡とは密接な関連性にある。こうした呼称は便宜上、舌状台地ごとに呼び分けられているに過ぎなく、一連の古代集落跡といえる。

各時代を簡単にみておくと、旧石器時代の遺物は新期ロームの上層から出土し、尖頭器や石刃などが確認されているが、僅少な量である。

弥生時代においても、依然として遺構の密度には希薄性が感じられる。主な発見例を抜き出してみると、雑餉隈遺跡 5 次調査において、前期の住居跡と貯蔵穴が存在する。さらに同地点では、中期段階に入る直径 8 mにおよぶ円形の大型住居跡がみつかっている。ここ以外では南八幡遺跡の 2 次と 3 次調査で、住居跡が確認されている程度である。しかし、本書に収められている第 15 次の調査成果では、夜臼式の土器を伴う 4 基の木棺墓が確認され、その内の 3 基には大陸からもたらされたと考えられる、有柄式磨製石剣が副葬されていたという新発見があった。これにより、この周辺における弥生時代のあり方に再認識を迫るのは当然であり、巨視的には弥生文化の伝播を考える上で興味深い問題を提起するに至った。

奈良時代に入ると、遺構密度は急激に増加する傾向がみられる。雑餉隈遺跡をはじめ、広範囲におよぶ遺跡群の中で集落が営まれる。しかし、これらの集落は 8 世紀代に忽然と登場し、およそ 1 世紀で消滅していく。その後は、中世の遺構が僅かに点在する程度である。こうした特異とも映る歴史的背景には、律令体制の整備がなされていく過程での、大陸との対外的諸問題や西海道九国二島の九州統轄における緊張といった、内憂外患の影響も多分にしてあったものと考えられる。こうした重要な役割を担わされたのが大宰府であり、外交、防衛、九州経営と、まさに「遠の朝廷」と呼ばれる機能を果たしていた。こうした大宰府と当該遺跡は、近い位置関係にあることからも、何らかの関連性があったことは想像し難くはないはずである。



- 1.雑餉隈遺跡 2.南八幡遺跡 3.麦野C遺跡 4.麦野A遺跡 5.麦野B遺跡 6.井相田B遺跡 7.井相田A遺跡 8.井相田C遺跡 9.仲島遺跡 10.高畠遺跡
 11.板付遺跡 12.諸岡B遺跡 13.佐原遺跡 14.三筑遺跡 15.須玖遺跡群 16.岡本遺跡群 17.下月隈C遺跡 18.立花寺B遺跡 19.立花寺遺跡 20.金隈遺跡
 21.金隈上屋敷遺跡 22.影ヶ浦遺跡 23.持田ヶ浦古墳群E群 24.堤ヶ浦古墳群 25.持田ヶ浦古墳群 26.御陵古墳群

Fig.1 雜餉隈遺跡と周辺遺跡 (1/25,000)



Fig.2 調査区位置図 -1

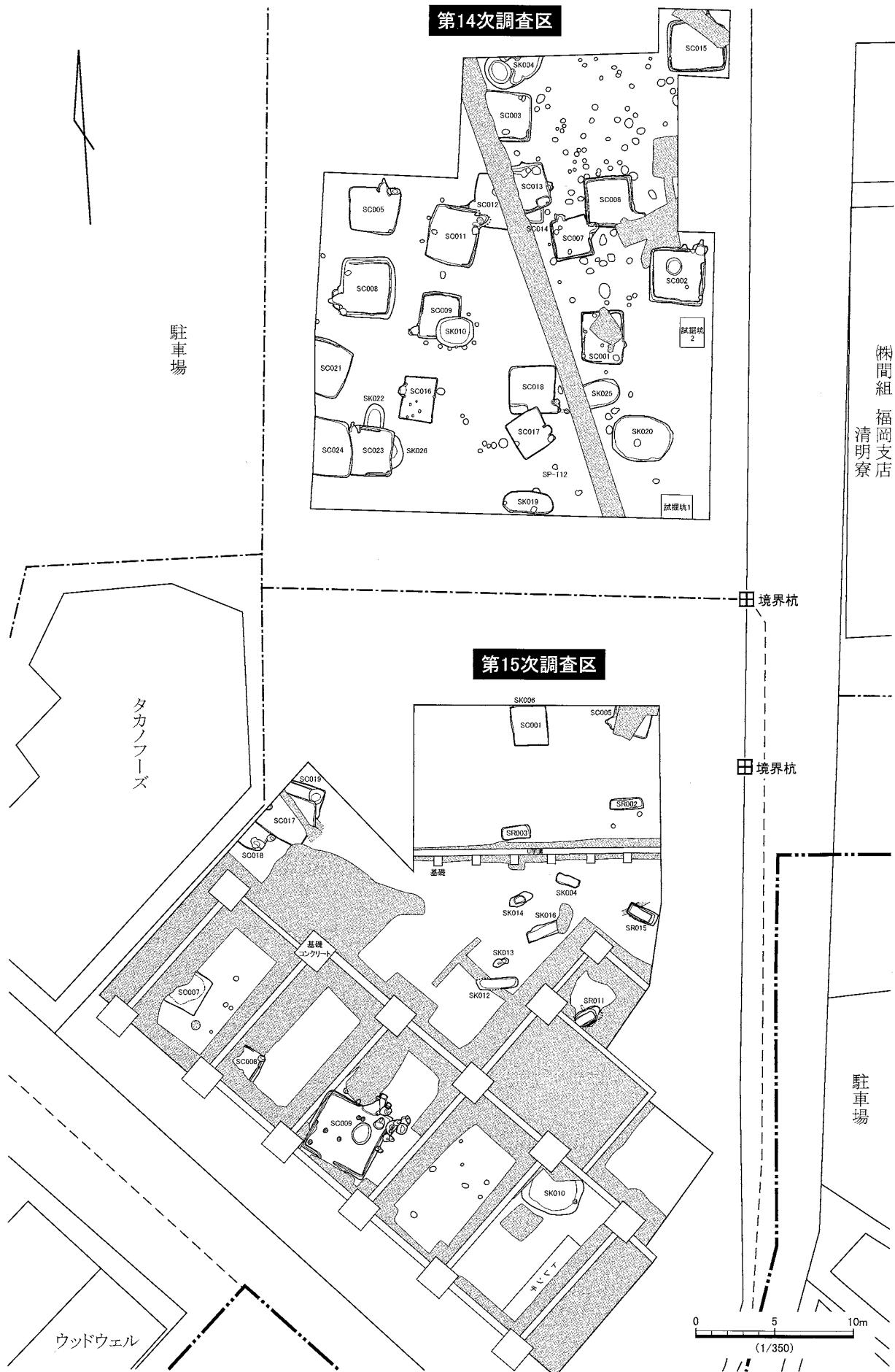


Fig.3 調査区位置図 -2

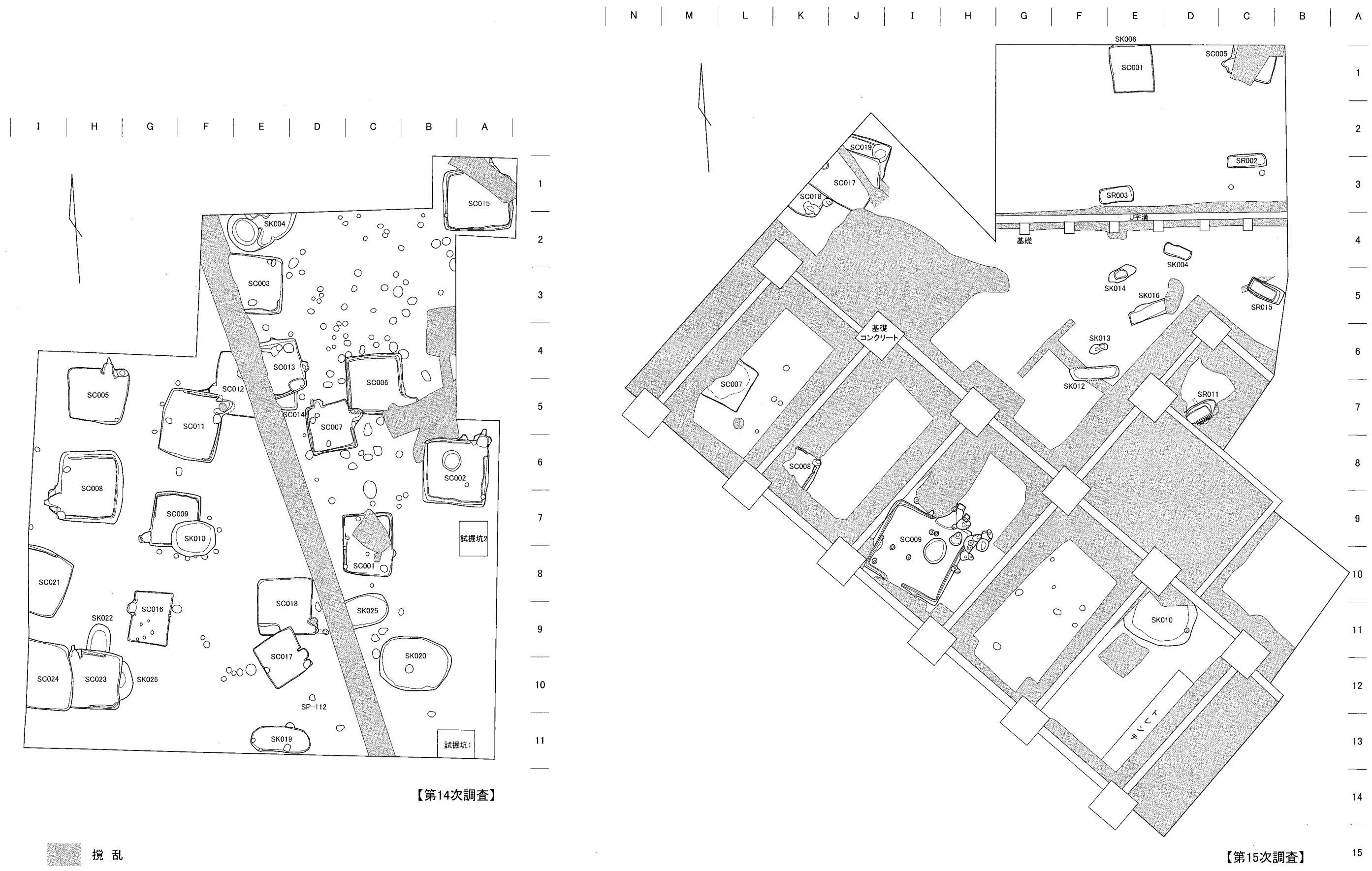


Fig.4 第14・15次調査遺構配置図

雜餉隈遺跡 第14次調査



II. 第14次調査の概要

1. 調査に至る経緯

平成14年8月19日に、(株)理研ハウスの代表取締役社長・新井英淳氏より、福岡市博多区新和町二丁目24番地1号（総面積1,358.97m²）について、集合住宅建設に係る埋蔵文化財事前審査願が福岡市教育委員会に提出された（事前審査番号14-2-329）。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である雑餉隈遺跡群に含まれており、申請地周辺においても埋蔵文化財発掘調査が多く行われてきた地点である。これを受けた福岡市教育委員会では、平成14年9月3日に試掘調査を行い、対象地内において遺構が存在することが明らかになった。このため事業者と福岡市教育委員会で、埋蔵文化財の取り扱いについて協議がなされた。

この結果、事業地内において地下に掘削がおよぶ範囲について、発掘調査を行う合意を得ることができた。しかし福岡市教育委員会が発掘調査に着手する時期と、事業者の工事日程に調整が困難な事態が生じた。そこで民間調査機関である岡三リビック(株)埋蔵文化財調査室が、(株)理研ハウスの調査委託を受けて発掘調査を受託することになり、(株)理研ハウス、岡三リビック(株)埋蔵文化財調査室、福岡市教育委員会の三者間で、適正な発掘調査を実施するための協定書が取り交わされた。また、福岡市教育委員会の指導のもと、岡三リビック(株)埋蔵文化財調査室が発掘調査を行うことになった。発掘調査は平成14年11月1日から開始し、平成15年1月24日に終了することができた。整理作業および報告書作成は調査終了後に開始し、平成16年3月31日に第15次調査と合本し刊行するに至った。

なお、現地で調査を行うにあたり、ご理解と多大な協力をして頂いた(株)理研ハウスをはじめとする事業者関連各位、および指導を賜った福岡市教育委員会の諸氏には、ここに記して感謝の意を表します。(敬称略)

池崎譲二・久住猛雄・小池史哲・田上勇一郎・瀧本正志・田中壽夫・常松幹雄・吉留秀敏

山口譲治・山崎純男・米倉秀紀

福岡市教育委員会埋蔵文化財課・福岡市埋蔵文化財センター・(株)理研ハウス・(株)友清商店

2. 調査体制

事業主体（調査委託）	(株)理研ハウス
調査主体	福岡市教育委員会
調査担当（調査受託）	岡三リビック(株) 埋蔵文化財調査室
調査員	堀苑孝志（埋蔵文化財調査室 室長） 入江俊行（埋蔵文化財調査室 研究員） 天野直子（埋蔵文化財調査室 研究員） 整理作業のみ
発掘作業	加治久佳・神前美起・菊澤将憲・城戸一郎・倉園真記・黒木三千夫 柴田徳平・中下まり江・西村秀行・古川満
整理作業	佐田祐一・倉園真記・中下まり江・平野由紀子・松尾祥子

III. 第14次発掘調査の記録

SC001 壁穴式住居跡

【遺構】

攪乱により中央部が床面下まで大きく抉られる。また、全体的に削平がおよび、壁面の高さは0.15m前後と周囲の住居跡と比較しても浅い。

東壁には小さく突出する部分があり、これが竈の奥壁かと思われる。火熱作用を窺わせるものや、粘土などの構築部材は認められなかった。

【遺物】

出土遺物の量は少ないが、ある程度の時期を窺い知ることのできるものに、南東隅の小穴内から出土した壺蓋(001)がある。断面三角形の口縁部を垂直に短く屈曲させる特徴から、8世紀代前半の所産と考えられる。

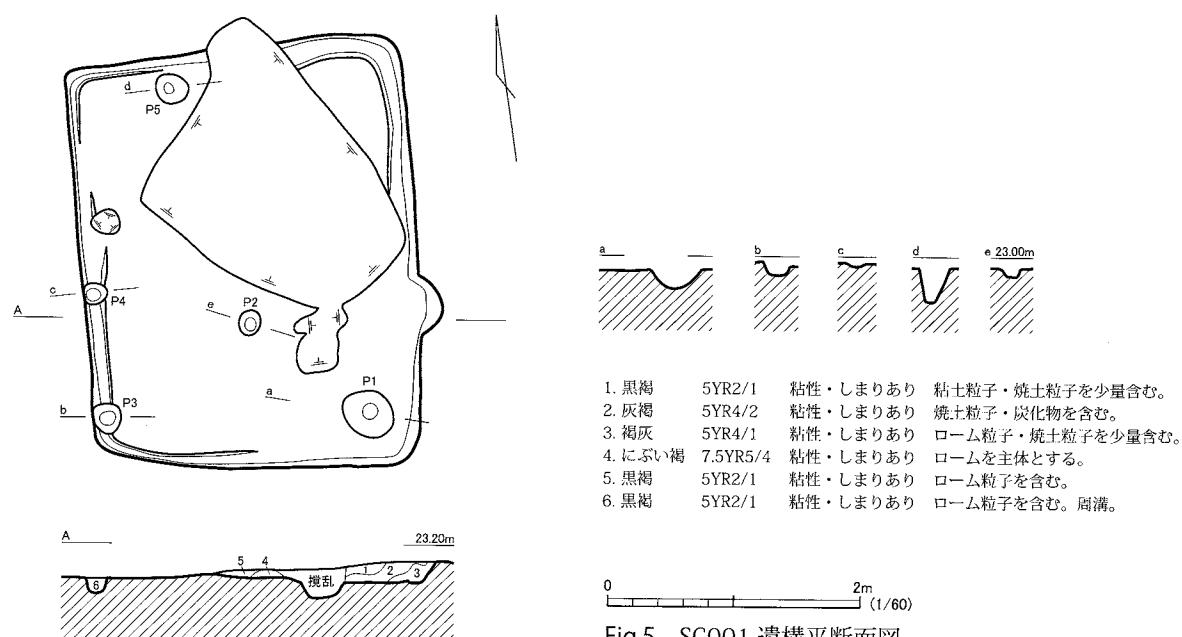


Fig.5 SC001 遺構平面図

全 体	平面形態 主軸角度 規 模 壁 ピット 周 溝 床 面 掘 形	長方形 N - 96 - E 南北 3.35 m × 東西 2.65 m (西辺は周溝外側を基準に計測した値) 西壁は攪乱により削平され残存しない 東壁も攪乱の影響はあるが、深さ 0.17 mを測る 小穴 5 基 ほぼ全周する 全体的にロームが硬化する なし
竈	位 置 形 状 中心軸長 燃焼口幅 壁 火 床 袖 部	東壁の中央南側寄り 奥壁部分が、小さく突出する 0.25m 0.40m 攪乱のため削平され浅い 火熱を受けた形跡は認められず 認められず 認められず

Tab.1 SC001 遺構観察表

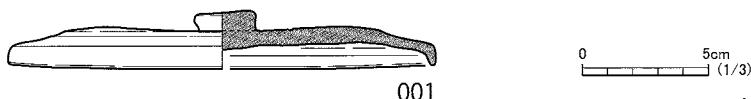


Fig.6 SC001 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
001	須恵器	P1	(17.0)	—	2.3	明褐灰 7.5YR 7/1	口縁部は断面三角形で、ほぼ垂直に短く屈曲する。内側に明瞭な稜が残る。天井部は回転ヘラ削り調整。ツマミ頂部に板目状の圧痕あり。
	壺蓋						

Tab.2 SC001 出土遺物観察表

SC002 穫穴式住居跡

【遺構】

住居跡北西側を攪乱により削平される。規模および深さから判別すると、当該調査において大型の部類に属する。

床面は全体的に硬化しており、東側竈の手前側を除き周溝が全周する。また、中央からやや北側寄りには、浅鉢状の土坑が認められる。

さらに床面を掘り下げると、凹凸の著しい掘方が認められ、貼床であったことが分かる。

竈は北壁に2箇所認めることができ、相互の新旧を明確にすることは可能である。旧竈はほぼ中央に構築され、小さく奥壁が突出する。周囲からは竈の構築部材および炭化物等は認められず、火熱を受け赤褐色に硬化した面が、周溝により破壊されることから、こちらが当初に機能していたと判断した。そして、この竈の廃絶後に、新たな竈を東隅付近に構築する。

旧竈と比較すると、新竈の方が規模が大きい。また、両壁面上に棚状の段が浅く削られ、上面には粘土が薄く認められる。

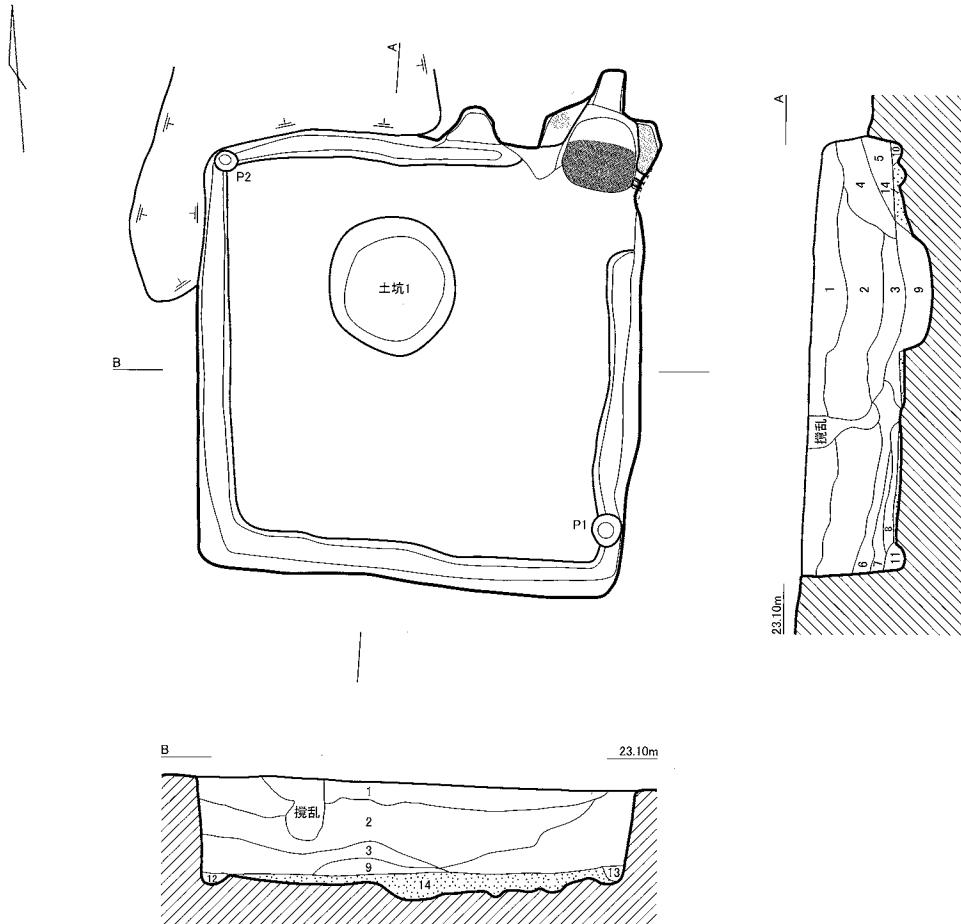
【遺物】

埋土から出土する遺物量は多く、下層に掘り進むに従い、完存もしくはそれに近い残存度の高い状態のものが増える傾向にある。

壺身（004～021）は、断面四角の低い高台が、底端部より内側に貼り付く。いずれも体部が、直線的に外上方に立ち上がる。中には火ダスキが、底部から体部にかけて認められるもの（003）もある。

壺蓋はツマミのないもの（022）が認められる。全体的に肉厚で、天井部はヘラで起こした際の痕が調整されずに残り、内面はハケ目が放射状に施される。口縁部は丸味を帯び、垂直に短く屈曲させる。ツマミがあるもの（023）は、口縁部が断面三角形で、垂直に短く屈曲させ、内側に明瞭な稜が残る。

壺身の高台が貼り付けられる位置や壺蓋の口縁部の特徴から、8世紀代前半を主体とした遺物構成と考えられる。



- | | | | |
|--------|----------|------------|-------------------------------|
| 1. 黒 | 7.5YR3/1 | 粘性弱・しまりあり | ローム粒子を少量含む。 |
| 2. 黒褐 | 7.5YR3/1 | 粘性弱・しまりあり | ローム粒子を少量含む。1よりやや明るい。 |
| 3. 黒 | 7.5YR2/1 | 粘性弱・しまりあり | ローム粒子・ロームブロックを少量含む。 |
| 4. 黒褐 | 7.5YR3/1 | 粘性弱・しまりあり | ローム粒子・ロームブロックを多量含む。粘土粒子を少量含む。 |
| 5. 褐灰 | 7.5YR5/1 | 粘性・しまりあり | ローム粒子・ロームブロック・粘土を少量含む。 |
| 6. 褐 | 7.5YR4/4 | 粘性・しまりあり | ローム粒子・ロームブロック・粘土を少量含む。 |
| 7. 灰褐 | 7.5YR4/2 | 粘性弱・しまり弱 | ローム粒子・焼土・粘土を少量含む。 |
| 8. 褐灰 | 7.5YR5/1 | 粘性あり・硬くしまる | ローム粒子を少量・粘土を多量に含む。 |
| 9. 黑褐 | 7.5YR3/1 | 粘性・しまりあり | ローム粒子・焼土・粘土を少量含む。 |
| 10. 黑褐 | 7.5YR3/2 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を少量含む。周溝。 |
| 11. 黑褐 | 7.5YR3/2 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を少量含む。周溝。 |
| 12. 黑褐 | 7.5YR3/2 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を少量含む。周溝。 |
| 13. 黑褐 | 7.5YR3/2 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を少量含む。周溝。 |
| 14. 黑褐 | 7.5YR3/1 | | ロームを多量含み、硬くしまる。掘方。 |

0 2m (1/60)

Fig.7 SC002 遺構平面図

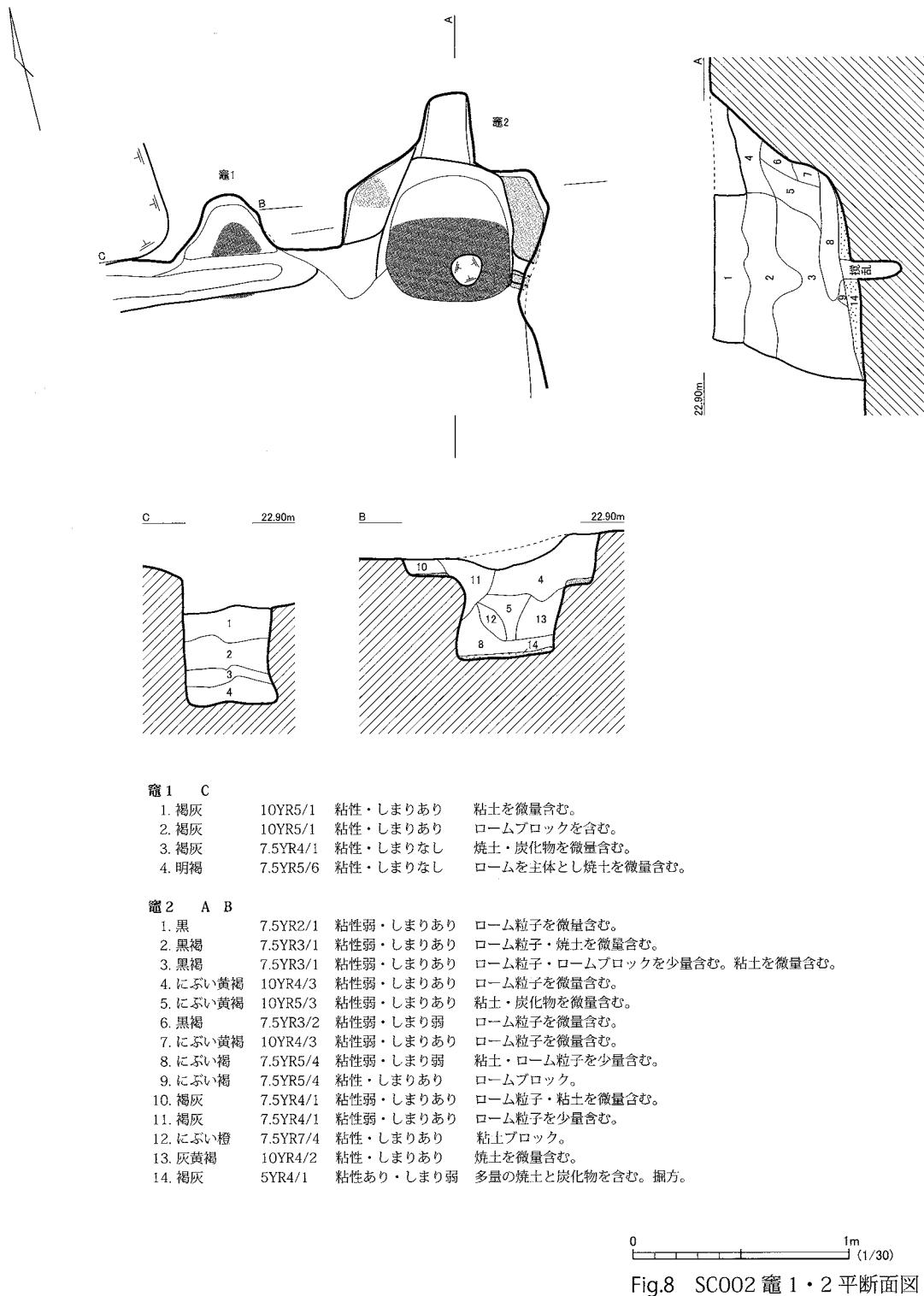


Fig.8 SC002 窓 1・2 平断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	竈 1(旧)・竈 2(新) N - 5 - E
	規 模	南北 3.50 m × 東西 3.50 m
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.76 m を測る
	ピット	床面中央から、やや北側寄りに直径約 1.00 m × 1.10 m、深さ 0.25 m の円形を呈する土坑あり 他に小穴 2 基
	周 溝	西側の竈 1(旧)を切りほぼ全周する
竈	床 面	全体的に貼床が施され硬化する
	掘 形	床面下は全体的に凹凸の著しい掘方が認められる
	位 置	新旧の 2 基が北壁に認められる 西側が竈 1(旧)で、東側寄りが竈 2(新)とする
	形 状	竈 1(旧)：奥壁部分のみが小さく突出する
	中心軸長	竈 1(旧) : 0.30m 竈 2(新) : 0.65m
	燃焼口幅	竈 1(旧) : 0.45m 竈 1(新) : 0.55m
竈	壁	竈 1(新)・竈 2(旧)の 2 基とも火熱を受けた面は認められず
	火 床	竈 1(旧)は周溝によって部分的に破壊される 竈 2(新)は火熱を受けた部分が赤褐色化し薄く堆積する
	袖 部	竈 1(旧)については袖部は認められない 竈 2(新)は左袖がロームを削りだして構築される

Tab.3 SC002 遺構観察表

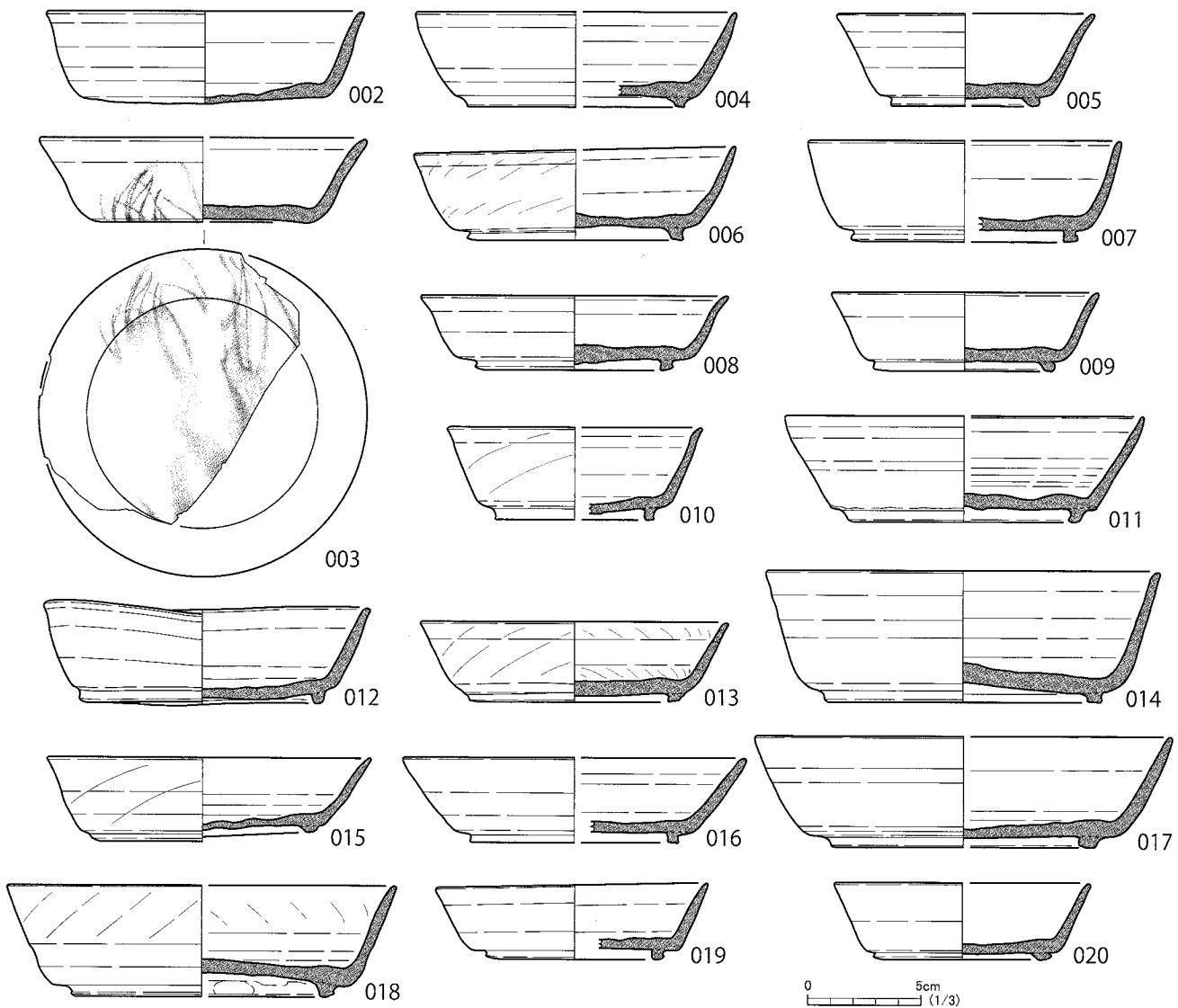


Fig.9 SC002 出土遺物実測図 - 1

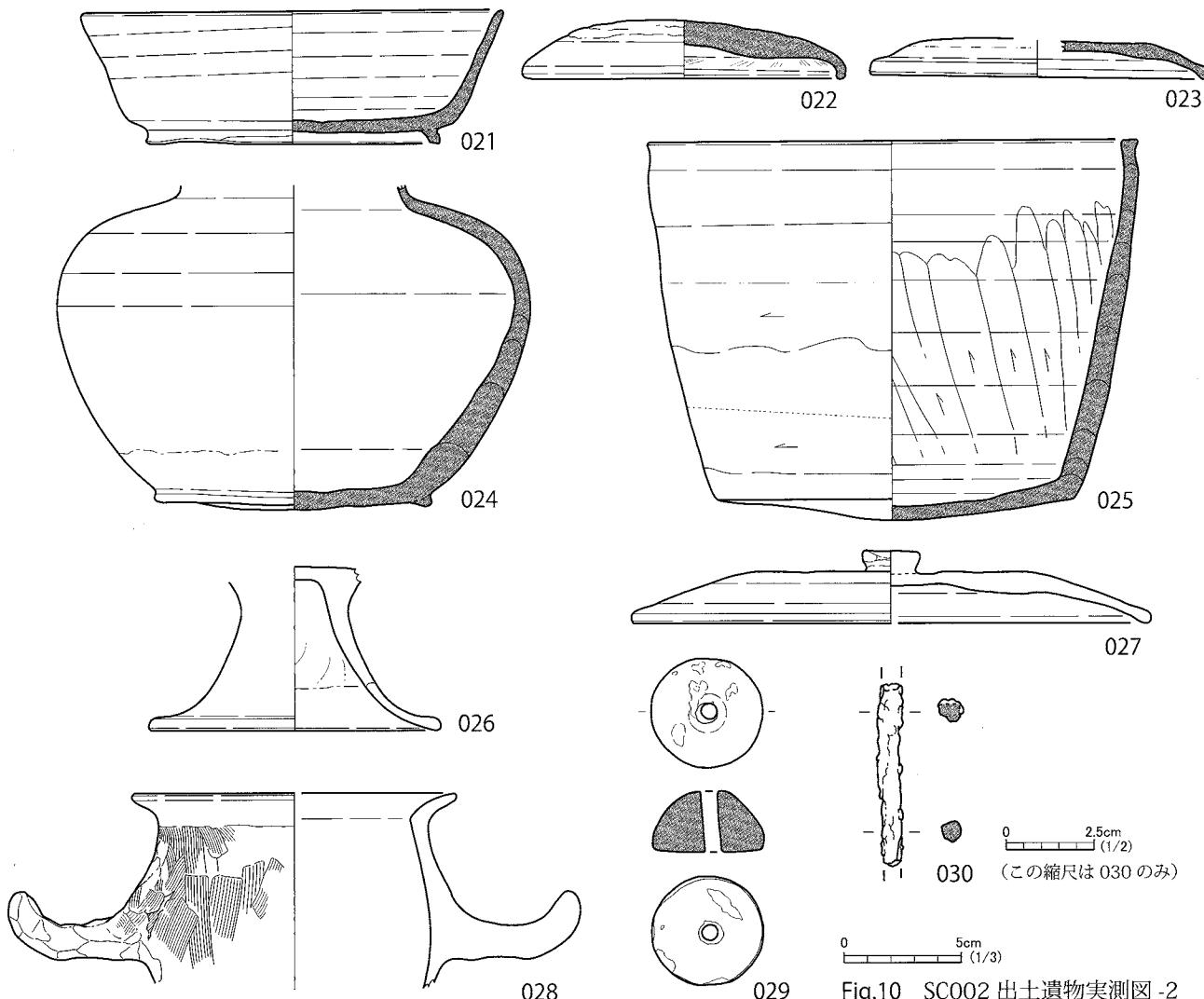


Fig.10 SC002 出土遺物実測図 -2

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
002	須恵器	床面上	14.0	10.8	4.1	灰白 7.5YR 8/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。
	坏						
003	須恵器	床面上	(14.5)	10.2	3.8	明褐灰 7.5YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部が外反する。外面は底部から体部にかけてと、内面に僅かに火ダスキーが認められる。
	坏						
004	須恵器	床面上	(14.2)	(9.6)	4.2	褐灰 7.5YR 6/1	体部はわずかに内彎気味となる。断面四角の高台が、底端部付近に貼り付けられる。
	坏身						
005	須恵器	埋土下層	(11.4)	(6.6)	4.1	明褐灰 7.5YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部で外反する。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	坏身						
006	須恵器	床面上	(14.2)	9.6	4.2	褐灰 7.5YR 6/1	体部はわずかに内彎気味で、外面には下位から口縁に向かって絞りあがた痕が斜め方向に残る。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	坏身						
007	須恵器	床面上	(13.9)	(10.0)	4.5	明褐灰 7.5YR 7/1	体部はわずかに内彎気味となる。断面四角の高台が、底端部より内側に跳ね上がるよう貼り付けられる。
	坏身						
008	須恵器	埋土上層	13.6	8.7	3.4	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部で外反する。断面四角の高台が、底端部より内側に跳ね上がるよう貼り付けられる。
	坏身						

Tab.4 SC002 出土遺物観察表 -1

()内の数値は推定の法量を表す

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
009	須恵器	埋土上層 掘方	11.8	8.0	3.5	灰白 7.5YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部で外反する。断面四角の高台が開き気味に、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
010	須恵器	埋土下層	(11.2)	(7.0)	4.1 ~ 4.4	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部で外反する。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。体部外面には下位から口縁に向け、絞りあげた痕が斜め方向に残る。
	环身						
011	須恵器	埋土下層	(15.9)	10.3	4.7	明褐灰 7.5YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が内傾気味に、底端部より内側に貼り付けられる。底部外面の中央に「×」印の線刻あり。
	环身						
012	須恵器	埋土上層	14.4 ~ 15.5	10.8	3.9 ~ 4.7	明褐灰 7.5YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底部は回転ヘラ切り後に、周縁を回転ヘラ削り調整。器形に歪みが生じる。
	环身						
013	須恵器	埋土上層	13.8	9.3	3.9	明褐灰 7.5YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部両面には下位から口縁に向け、絞りあげた痕が斜め方向に残る。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底部は回転ヘラ切り後に、周縁を回転ヘラ削り調整。
	环身						
014	須恵器	埋土上層・埋土下層 竈内	17.4	12.2	5.8	にぶい赤褐 5YR 5/3	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の低い高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底部は回転ヘラ切り後に、ナデ調整。
	环身						
015	須恵器	埋土下層	14.3	9.9	3.9	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に開き気味に立ち上がる。体部外面には下位から口縁に向け、絞りあげた痕が斜め方向に残る。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底部は回転ヘラ切り後に、ナデ調整。器形に歪みが生じる。
	环身						
016	須恵器	埋土下層	(15.2)	(9.2)	3.75	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に開き気味に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。器形に歪みが生じる。
	环身						
017	須恵器	埋土下層	(18.4)	11.6	4.9	明褐灰 7.5YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が内傾気味に、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
018	須恵器	埋土上層 埋土下層	(17.2)	(11.6)	4.9	明褐灰 7.5YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部両面には下位から口縁に向け、絞りあげた痕が斜め方向に残る。断面四角の高台が底端部より内側に、外に跳ね上げるように貼り付けられる。
	环身						
019	須恵器	埋土下層 P1	12.0	7.9	3.4	明褐灰 7.5YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に跳ね上げるように貼り付けられる。
	环身						
020	須恵器	P1	(11.3)	7.9	3.4	灰白 7.5YR 8/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。底部は回転ヘラ切り後に、周縁部を手持ちでナデ調整する。低い断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
021	須恵器	埋土下層	18.0	12.5	5.7	灰白 7.5YR 8/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
022	須恵器	床面上	13.8	—	2.6	褐灰 7.5YR 6/1	全体的に肉厚で、天井部外面は未調整のため、さらに厚みを増す粗雑なつくりである。内面を真上からみると、放射線状にハケ目が認められる。
	蓋						
023	須恵器	埋土上層 埋土下層	14.3	—	1.6	明褐灰 7.5YR 7/1	口縁部は断面三角形で、垂直に短く屈曲する。天井部外面は回転ヘラ削り調整。
	环蓋						
024	須恵器	埋土下層	不明	11.8	不明	灰白 7.5YR 8/1	頸部から上が欠損するが、短頸壺である。体部の上位が最も肩の張りが強く、この下位には縱方向に連続してヘラが認められる。底端部に低い高台が、開き気味に貼り付けられる。
	短頸壺						
025	須恵器	埋土下層	20.8	15.2	16.2	明褐灰 7.5YR 7/1	体部外面下半は回転ヘラ削した後に、横ナデが行われる。体部内面は上方に向かい、垂直に撫であげた痕が連続して認められる。底部は丸みを帯び、回転ヘラ削りが施される。
	鉢						
026	土師器	竈上2	不明	(12.5)	不明	黄橙 7.5YR 7/8	壺部は欠損。脚部両面には、絞りあげた痕が斜め方向に残る。
	高壺						
027	土師器	埋土上層	22.2	—	3.1	橙 5YR 7/6	口縁部は僅かに摘み出す程度で、端部を肉厚にする。天井部外面は回転ヘラ切り後に、ハケ目を施す。
	环蓋						
028	土師器	埋土上層	(13.9)	不明	不明	橙 5YR 6/6	外面にはハケ目が、内面にはヘラ削りが密に施される。
	甑						
029	土製品	埋土上層	径	厚さ	孔口	重さ(g)	裁頭円錐形の紡輪部。完存品。
	紡錘車		1.6-4.8	2.6	0.7	49.5	
030	鉄製品	埋土下層	現存長			6.0	幹部の上下端部および皿部は欠損する。断面方形。
	釘		5.2	—	—		

Tab.5 SC002 出土遺物観察表 -2

()内の数値は推定の法量を表す

SC003 穫穴式住居跡

【遺構】

調査区を南北に縦断する攪乱溝に、西側が破壊され形状を留めない。しかし、北西の隅がかろうじて残存していることで、およその規模を知ることは可能である。

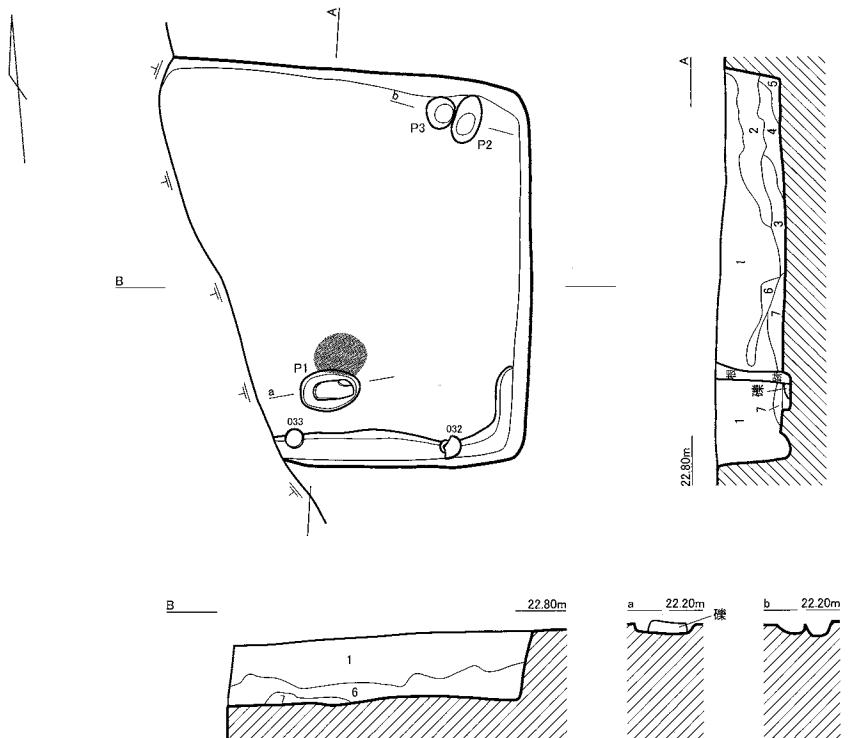
床面はロームが全体的に、硬化した状態で認められる。南側中央付近には浅い小穴があり、平滑な面を上にした状態で、礫が確認される。さらにこの小穴の北側に接した範囲は、強い火熱作用を受けた結果、赤褐色に硬化した部分が認められる。

竈らしきものを現況で認めるることはできなかったが、おそらく攪乱を受けて痕跡を全く留めない西壁に構築されていたと推測される。

【遺物】

遺物は当遺構を攪乱する溝からも認められ、破壊時に掘り返され混入したと推測される。明確に当遺構に伴うものは、南壁周溝部分で高坏（032）と坏蓋（033）がある。高坏は脚が短かく、口縁部を直立に屈曲させる。

坏蓋は口縁部を下方に僅かに摘み出す程度のもので、その際の指先による窪みが、沈線となって外周にみられる。この様な特徴は、8世紀代前半の所産と考えられる。



1. 褐灰 5YR4/1 粘性・しまりあり ロームブロック・粘土ブロックを多量含む。
2. 黒褐 5YR3/1 粘性・しまりあり ロームブロックを中量含む。
3. 黒褐 5YR2/1 粘性・しまりあり ロームブロックを少量含む。
4. 褐灰 5YR4/1 粘性・しまりあり ロームブロックを多量含む。
5. 黒褐 5YR3/1 粘性・しまりあり ローム粒子を少量含む。
6. 黒褐 5YR3/1 粘性・しまりあり ローム粒子を少量含む。
7. 褐灰 5YR4/1 粘性・しまりあり ロームブロックを多量含む。

Fig.11 SC003 遺構平面断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	竈が未確認のため不明
	規 模	南北 3.19 m × 東西 3.00 m (推定)
	壁	西壁は搅乱により削平され残存しないが、これ以外はほぼ垂直に掘削され、深さ 0.50 mを測る
	ピット	南側中央の小穴に平坦面を上にする礫が 1 基あり、周囲が火熱を受け硬化する 他に小穴 2 基
	周 溝	南壁から南東隅にかけ認められる 西壁は搅乱のため不明
竈	床 面	全体的にロームが硬化する
	掘 形	なし
	位 置	西壁に構築されていたと推測されるが、搅乱のため消失した可能性あり
	形 状	不明
	中心軸長	不明
	燃焼口幅	不明
壁	壁	不明
	袖 部	不明

Tab.6 SC003 遺構観察表

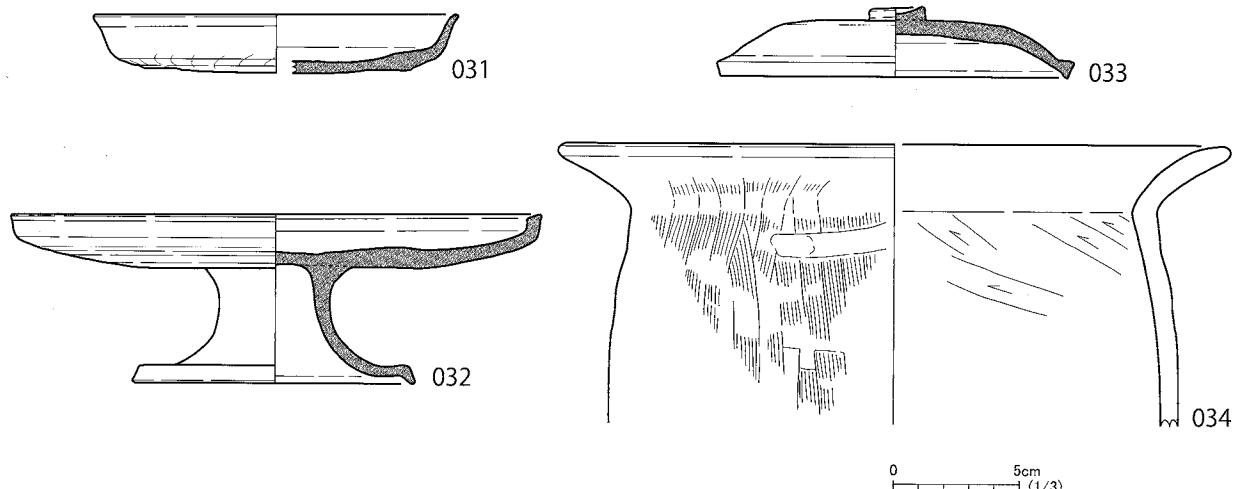


Fig.12 SC003 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)			色調	特 徴
			口径	底径	器高		
031	須恵器	埋土下層	14.5	(10.5)	2.4	明褐灰 7.5YR 7/1	口縁部は外反する。体部下位は回転ヘラ削り。体部外面には下位から口縁に向か、絞りあげた痕が斜め方向に残る。
	皿						
032	須恵器	埋土下層	21.1	11.2	6.8	明褐灰 7.5YR 7/2	壺部は浅く、口縁部を短く直立させる
	高壺						
033	須恵器	埋土下層	13.8	—	2.8	褐灰 7.5YR 6/1	口縁部は、体部の端部を摘み出した程度の断面三角形で内傾する。天井部は回転ヘラ削り調整。
	壺蓋						
034	土師器	埋土下層	(26.7)	—	不明	淡橙 5YR 8/4	外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。
	甕						

Tab.7 SC003 出土遺物観察表

()内の数値は推定の法量を表す

SK004 土坑

【遺構】

平面形態は橢円形を呈するものと推測されるが、北側の約1/3が調査区外にあり、未確認である。推定では $1.4 \times 4m$ の規模で深さは0.4mを測る。底面は凹凸が著しい不整面である。しかしこの上層において、壁面沿いの一部が僅かながら硬化しており、床面と認識できなくもなく、円形の住居跡の可能性が指摘できる。すると底面の凹凸は、掘方として理解できる。

但し、ここではあえて積極的に住居跡とはせず、土坑として留めることにした。それは今後の類例を待ち、再検討していかなければならない遺構と判断したからに他ならない。

【遺物】

出土する遺物の量は少なく、小破片が主体である。壊身(035・036)は、底端部より内側に低い高台が貼り付けられる特徴から、8世紀代前半の所産と考えられる。

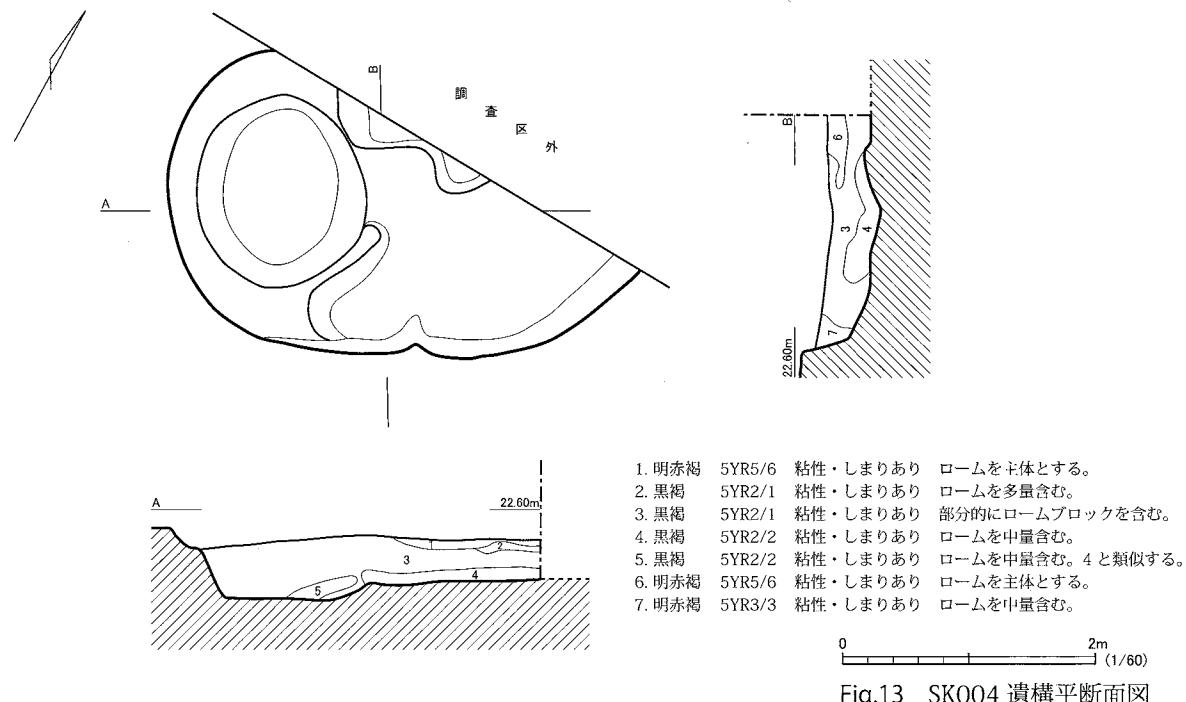


Fig.13 SK004 遺構平断面図



Fig.14 SK004 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特 徴
			口径	底径	器高		
035	須恵器	埋土	(11.7)	(8.4)	3.55	褐灰 7.5YR 5/1	体部はわずかに内彎気味に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に跳ね上がるよう貼り付けられる。
	壊身						
036	須恵器	埋土	(12.4)	(7.4)	4.9	明褐灰 7.5YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が内傾し、底端部より内側に貼り付けられる。
	壊身						

Tab.8 SK004 出土遺物観察表

()内の数値は推定の法量を表す

SC005 穫穴式住居跡

【遺構】

良好な残存状態で確認できた部類である。床面はロームが全体的に硬化した状態で認められる。南東隅には浅い小穴が掘られ、完存の土器がまとめて出土する。ここは竈の脇ということもあり、収納の場とした機能的なものか、祭祀的行為に起因したものといえる。

竈は北壁の東側寄りに構築される。竈の袖部分は、向かって左側が粘土で作られるのに対し、右側はローム面を削り出した低い高まりを成す。そしてこの削り出した袖脇に、先ほどの小穴は位置する。

【遺物】

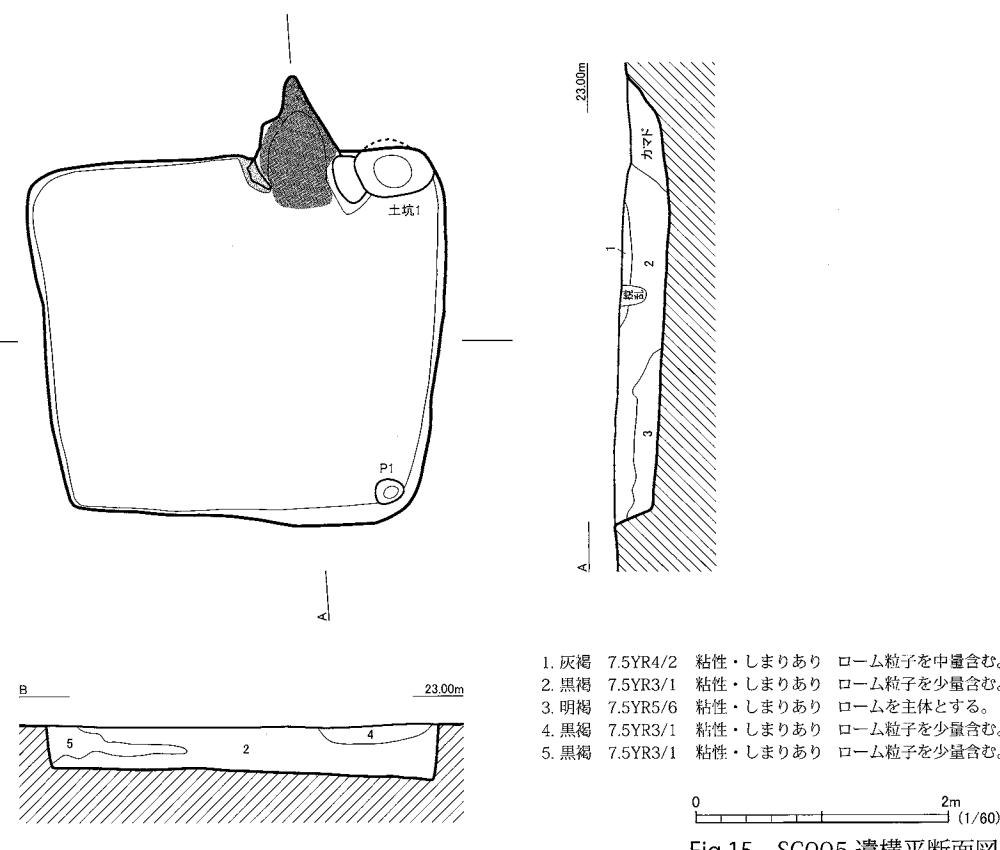
壺身（038～040）は断面四角の低い高台が、底端部より内側に貼り付く。いずれも体部が、直線的に外上方に立ち上がる。

高壺（041）は、短い口縁を直立させた浅い壺部を持つものがあり、短い脚部には絞り上げた痕が薄く認められる。

壺蓋には口縁部を屈曲させるもの（042・043）と、そうでないもの（044）がある。前者は今回の調査において多勢を占めるが、後者は寡少である。

出土状況において注目しておくべきものに、竈袖脇の小穴から出土した高壺（041）・壺身（040）・壺（046）がある。これら3種の器種が、祭祀を行うまでの意識的なセットとして埋納されたと考えるならば、興味ある事例である。しかし位置的に収納の場も考慮でき、慎重に検討していくべき課題である。

遺物の特徴から8世紀代前半の所産と考えられるが、さらに高壺や口縁部を消失した壺蓋から、前半中葉以降の様相を反映した構成とも捉えられる。



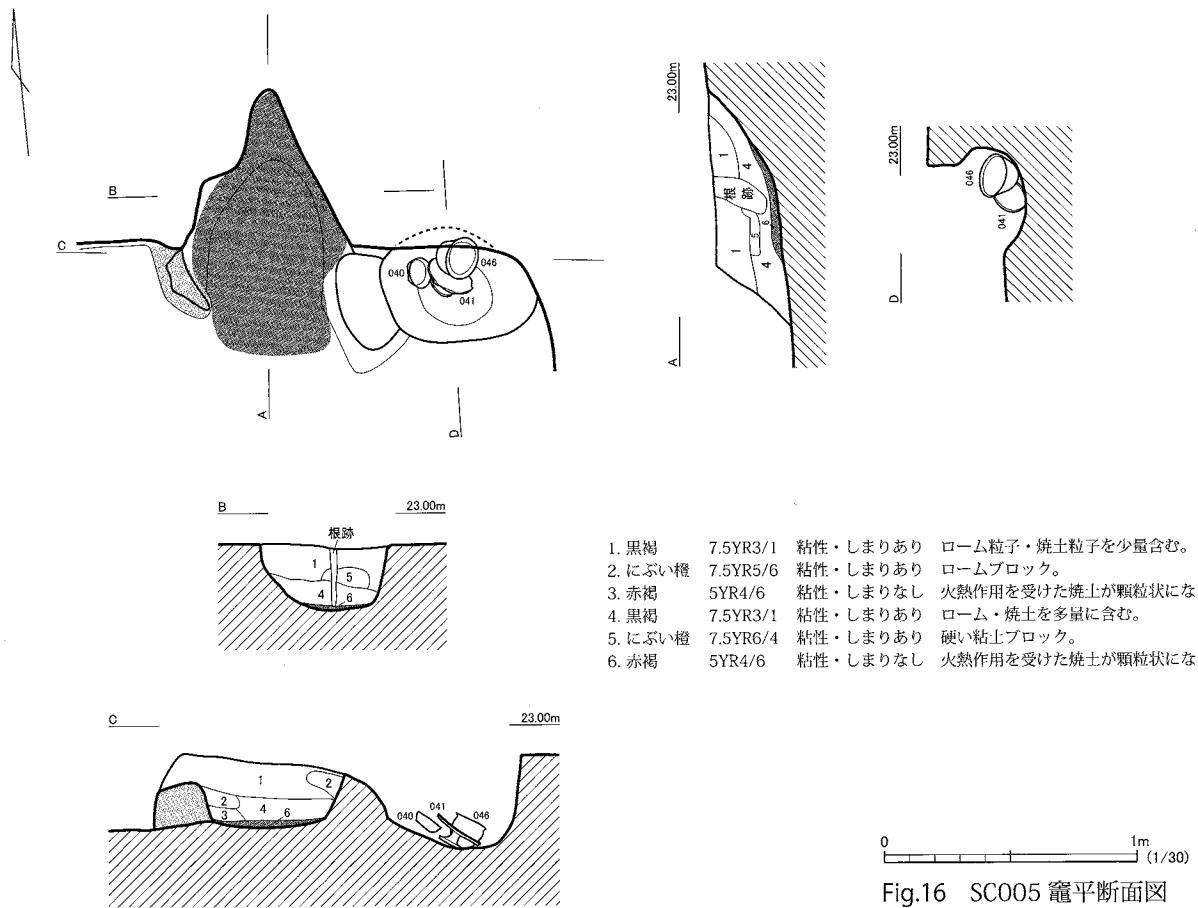


Fig.16 SC005 瓠平面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	N - 6 - E
	規 模	南北 2.85 m × 東西 3.10 m
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.4 m を測る
	ピット	北東隅に 0.45 × 0.60 m、深さ 0.15 m の土坑があり、完形の土器が出土
	周 溝	南東隅に小穴 1 基
竈	床 面	全体的に硬化する
	掘 形	なし
	位 置	北壁の東側寄り
竈	形 状	煙道部が突出する
	中心軸長	0.60m
	燃焼口幅	0.45m
	壁	全体的に火熱作用を受け、赤褐色に硬化する
	火 床	火熱作用を受けた層が認められる
	袖 部	西側の袖は粘土で構築されるのに対し、東側は床面を削りだし小高い高まりとする

Tab.9 SC005 遺構観察表

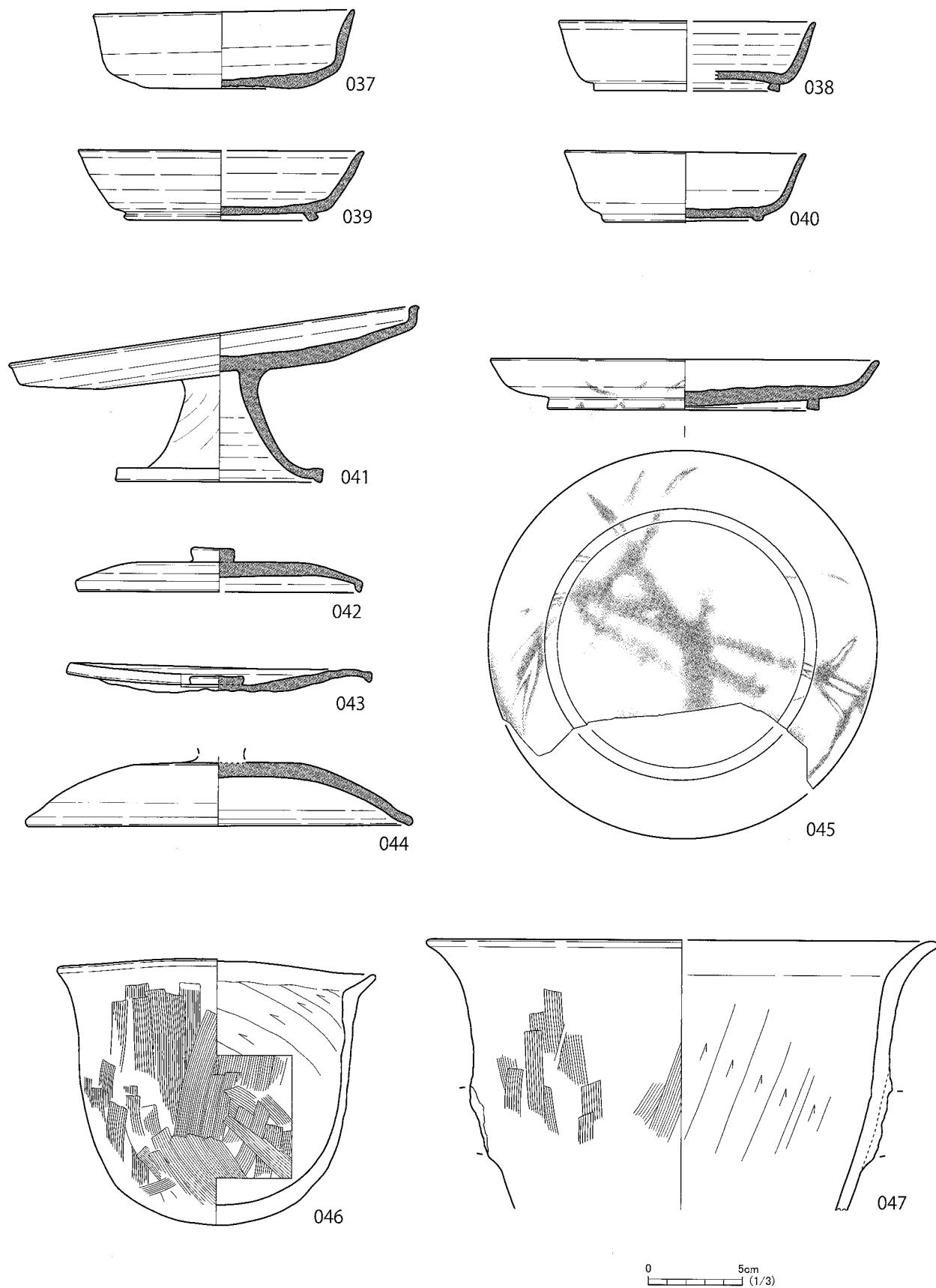


Fig.17 SC005 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
037	須恵器 环	床面上	13.8	8.3	4.2	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。
	环身					褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。器形に歪みが生じる。
038	須恵器 环身	床面上	(13.6)	(9.8)	3.85	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身					褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に跳ね上るように貼り付けられる。
040	須恵器 环身	P1	12.8	8.5	3.8	灰白 2.5Y 8/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。焼成不良で軟質。
	环身					明褐灰 7.5YR 7/1	环部は浅く、外面は回転ヘラ削り。口縁部を短く直立させる。脚部は短く、外面には絞りあげた痕が斜め方向に残る。
041	須恵器 高环	P1	21.9	11.0	9.4	明褐灰 7.5YR 7/1	环部は浅く、外面は回転ヘラ削り。口縁部を短く直立させる。脚部は短く、外面には絞りあげた痕が斜め方向に残る。
	环身					褐灰 7.5YR 6/1	口縁部は断面三角形で、垂直に短く屈曲し、内側に明瞭な稜が残る。天井部は回転ヘラ削り調整。
042	須恵器 环蓋	竈火床上	(14.9)	—	2.4	褐灰 7.5YR 6/1	口縁部は断面三角形で、垂直に短く屈曲し、内側に明瞭な稜が残る。天井部は回転ヘラ削り調整。
	环蓋					褐灰 7.5YR 4/1	口縁部は断面三角形で、垂直に短く屈曲し、内側に明瞭な稜が残る。天井部は体部よりも下に陥没し、焼成時の歪みが著しい。天井部は回転ヘラ削り調整。
044	須恵器 环蓋	床面上	16.1	—	1.6	褐灰 7.5YR 6/1	口縁は屈曲させない。天井部が高く、回転ヘラ削り調整。口辺が丸味を帯び、内面の稜が不明瞭。
	环蓋					褐灰 7.5YR 6/1	口縁は屈曲させない。天井部が高く、回転ヘラ削り調整。口辺が丸味を帯び、内面の稜が不明瞭。
045	須恵器 盤	床面上	20.6	14.4	2.7	褐灰 7.5YR 5/1	外面底部から体部にかけ火ダスキが認められる。底部は回転ヘラ切り後に、回転ヘラ削り調整。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	盤					褐灰 7.5YR 5/1	底部は丸底である。体部の張りは弱く、口縁は大きく外側に開く。胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁は横ナデ。
046	土師器 甕	P1	16.9	—	14.1	にぶい橙 5YR 7/4	把手は欠損。胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。
	甕					橙 5YR 7/6	把手は欠損。胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。
047	土師器 甕	床面上 竈上	(27.1)	—	不明	橙 5YR 7/6	把手は欠損。胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。

Tab.10 SC005 出土遺物観察表

()内の数値は推定の法量を表す

SC006 竪穴式住居跡

【遺構】

南東隅が搅乱され消失する。遺構の平面形態には影響しないが、北西側にも埋土を大きく抉り取る搅乱がみられた。南西隅にはSC007 竪穴式住居跡の竈が約1/2ほど重複する。この両遺構の時期的相互関係は、火熱作用を受け硬化した竈の内壁が、SC006 竪穴式住居跡内に残存することから、SC006 竪穴式住居跡の廃絶後に、SC007 竪穴式住居跡が構築されたと判断した。

床面はロームが全体的に硬化した状態で認められた。この床面上に柱穴を確認することはできなかったが、北東隅と北西隅の住居跡壁外に小穴がある。同様のものは南東隅と南西隅にも存在したと考えられるが、搅乱とSC007 竪穴式住居跡により不明である。

また、床面の南西隅では、环身(051)と皿(052)が、伏せ並べられた状態で出土しており、住居廃絶時の祭祀行為も窺われる。

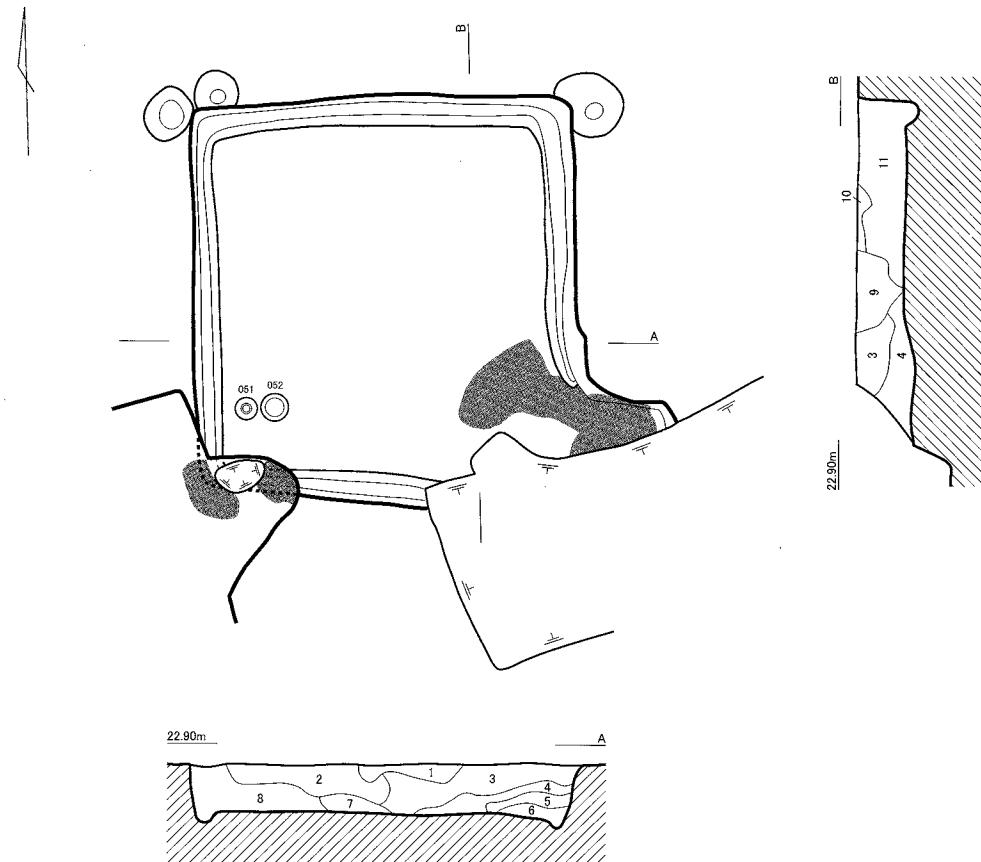
竈は東壁の南側に構築されているが、搅乱のため約1/2を消失する。火熱作用を受け、赤褐色に硬化した面が奥壁から、手前の焚口まで広範囲に認められる。

【遺物】

环身(049～051)は断面四角の低い高台が、底端部より内側に貼り付く。いずれも体部が、直線的に外上方に立ち上がる。中には火ダスキが、底部から体部にかけ認められるものもある。

环蓋(054・055)は口縁部が断面三角形で、垂直に短く屈曲し、内側に明瞭な稜が残る。

环身の高台が貼り付けられる位置や环蓋の口縁部の特徴から、8世紀代前半でも前葉を主体とした遺物構成と考えられる。



1. 灰褐色 7.5YR4/2 粘性あり・しまり弱 ローム粒子・粘土を少量含む。
 2. 黒褐色 7.5YR2/2 粘性あり・しまり弱 ローム粒子を少量含む。
 3. 灰褐色 7.5YR4/2 粘性あり・しまり弱 ローム粒子を少量・粘土を微量含む。
 4. 黒 7.5YR2/1 粘性あり・しまり弱 ローム粒子を少量含む。
 5. 黑褐色 7.5YR3/2 粘性あり・しまり弱 ローム粒子を少量含む。
 6. 黑褐色 7.5YR2/2 粘性あり・しまり弱 ローム粒子を少量含む。
 7. 黑 7.5YR2/1 粘性あり・しまり弱 ローム粒子を少量含む。
 8. 黑褐色 7.5YR3/2 粘性あり・しまり弱 ローム粒子・ロームブロックを少量含む。
 9. 灰褐色 7.5YR4/2 粘性あり・しまり弱 ローム粒子・ロームブロックを多量含む。
 10. 黑褐色 7.5YR3/2 粘性あり・しまり弱 ローム粒子を少量含む。
 11. 灰褐色 7.5YR4/1 粘性あり・しまり弱 ローム粒子・ロームブロックを多量含む。

0 2m (1/60)

Fig.18 SC006 遺構平面図

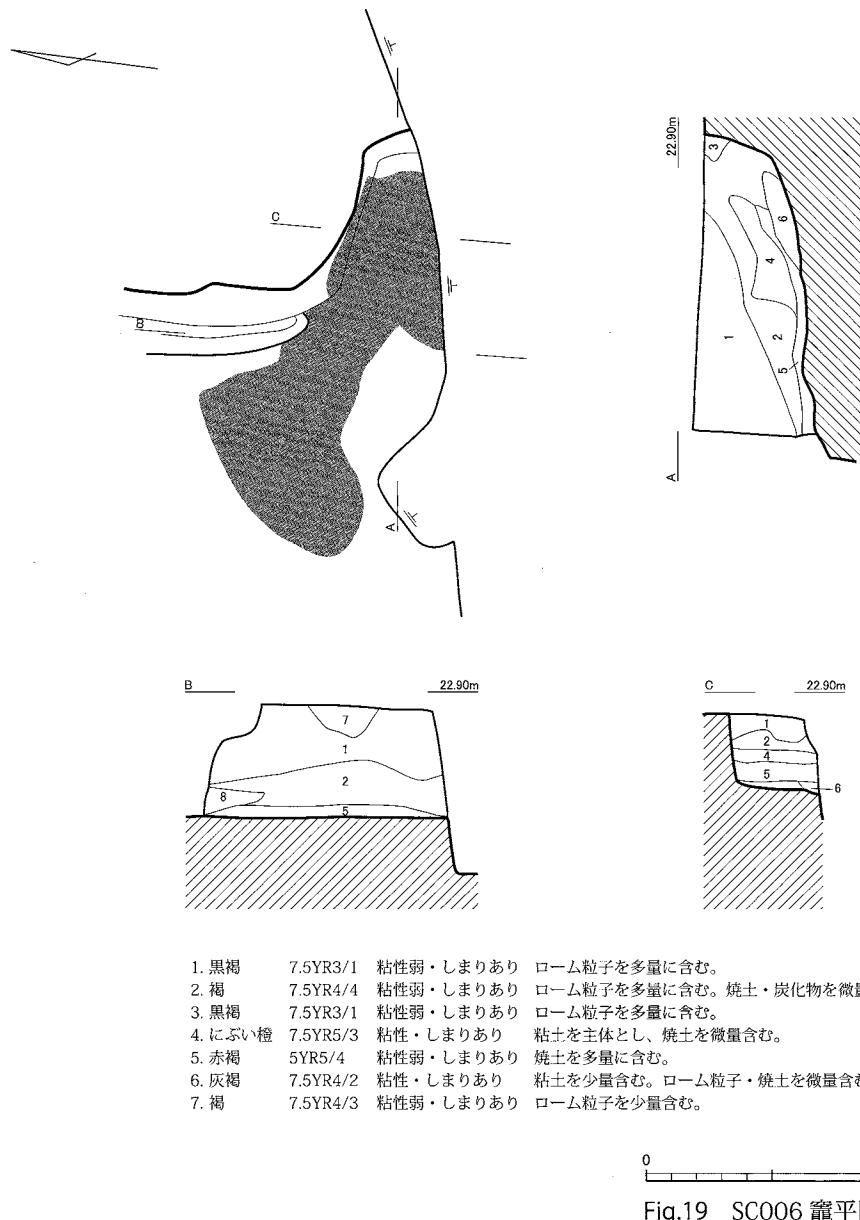


Fig.19 SC006 竪平断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	N - 90 - E
	規 模	南北 3.25 m × 東西 3.05 m
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.40 m を測る
	ピット	なし
	周 溝	ほぼ全周する
掘 形	床 面	全体的に硬化する
		なし
竪	位 置	東壁の南側寄り
	形 状	煙道部が突出するが、南側半分が攪乱のため消失
	中心軸長	0.65m (推定)
	燃焼口幅	0.70m (推定)
	壁	全体的に火熱作用を受け、赤褐色に硬化する
	火 床	火熱作用を受けた面が認められる
	袖 部	認められず

Tab.11 SC006 遺構観察表

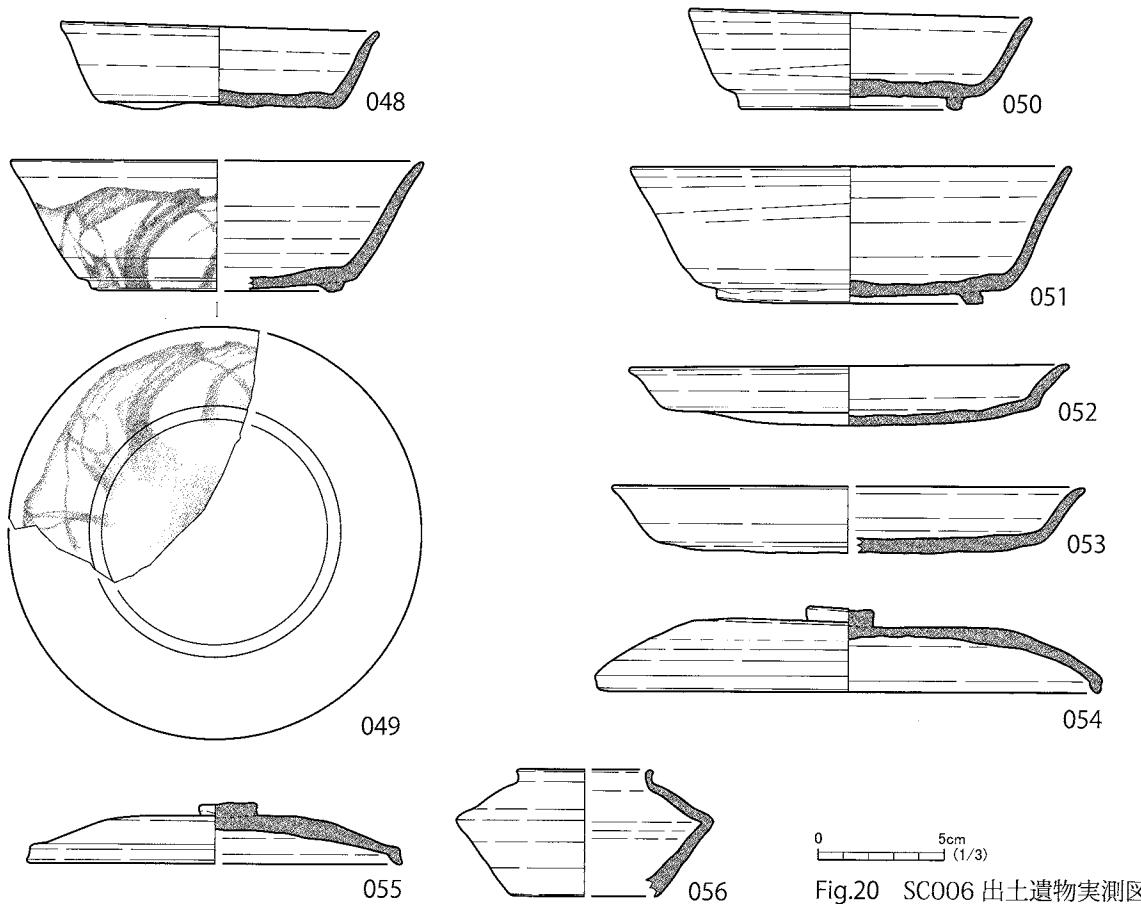


Fig.20 SC006 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
048	須恵器 环	埋土下層	12.6	9.4	3.5	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。
049	須恵器 环身	埋土下層	(16.4)	(10.0)	5.2	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部より内側に貼り付けられる。底端部はヘラ削り調整。底部から体部にかけ火ダスキが認められる。
050	須恵器 环身	床面上	13.6	8.8	4.0	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部下位は丸みを帯びる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底部から体部にかけ火ダスキが認められる。
051	須恵器 环身	床面上	17.5	10.6	5.5	明褐灰 7.5YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部より内側に貼り付けられる。底部は回転ヘラ切り後に、ナデ調整。
052	須恵器 皿	床面上	17.5	15.1	2.5	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁で外反する。底部は丸味を帯びる。体部が大きく歪みむ箇所に、他個体の皿の体部破片が癒着する。
053	須恵器 皿	埋土下層	(18.8)	(15.2)	2.7	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁で外反する。
054	須恵器 环蓋	床面上	20.1	—	3.4	褐灰 7.5YR 5/1	口縁部は断面三角形で、ほぼ垂直に短く屈曲し、内側に明瞭な稜が残る。天井部は回転ヘラ削り調整。
055	須恵器 环蓋	竈火床上	(14.9)	—	2.45	にぶい橙 7.5YR 7/4	口縁部は断面三角形で、ほぼ垂直に短く屈曲し、内側に明瞭な稜が残る。天井部は回転ヘラ切り後に、ナデ調整。
056	須恵器 短頸壺	埋土	(5.4)	(5.8)	(5.1)	褐灰 7.5YR 6/1	体部中央を屈曲させ算盤玉状を呈する。短い口縁が垂直に屈曲する。

Tab.12 SC006 出土遺物観察表

()内の数値は推定の法量を表す

SC007 懸穴式住居跡

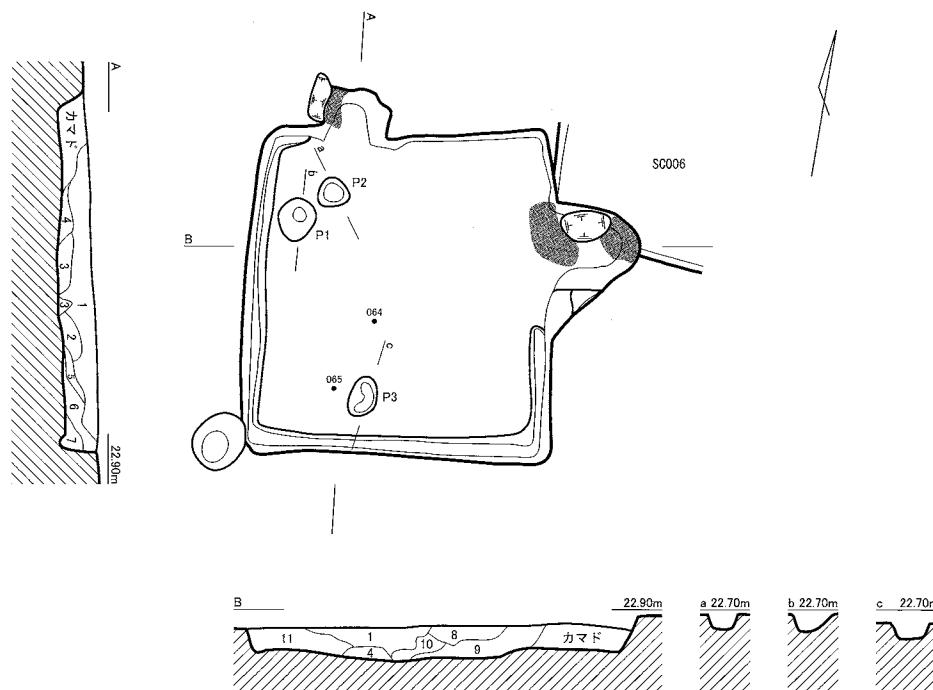
【遺構】

竈とSC006 懸穴式住居跡の重複関係は前述したとおりで、当遺構が時期的に新しい。床面はロームが、全体的に硬化した状態で認められる。

竈は北壁の西側寄りと、東壁中央付近の2箇所に存在する。相互の時期関係については、東壁の竈付近に粘土や焼土が見当たらないのに対し、北壁の竈に集中することが認められる。こうした状況から、北壁の竈が住居廃絶時まで機能していたと判断し、東壁から北壁へと竈は造り替えられたと考えた。

【遺物】

环身(057～059)は、底端部より内側に高台が貼り付く傾向から、8世紀代前半と位置づけられる。但し环蓋(061・062)については、口縁部を軽く摘み出された程度で、内側の稜は認められるものの、消失化していく傾向がみ出せる点から、前半中葉以降と考えてもよいのではないだろうか。



- | | | | |
|--------|----------|----------|------------------------|
| 1. 黒褐 | 7.5YR3/2 | 粘性・しまりあり | 炭化物・焼上・粘土を微量含む。 |
| 2. 黒 | 7.5YR2/1 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を微量含む。 |
| 3. 灰褐 | 7.5YR4/2 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を少量含む。 |
| 4. 黒褐 | 7.5YR3/2 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を少量含む。 |
| 5. 黒褐 | 7.5YR3/2 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を微量含む。 |
| 6. 灰褐 | 7.5YR4/2 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を少量含む |
| 7. 黒褐 | 7.5YR3/1 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を少量含む。 |
| 8. 灰褐 | 7.5YR4/2 | 粘性・しまりあり | ローム粒子・ロームブロック・焼土を少量含む。 |
| 9. 黒 | 7.5YR3/1 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を少量含む。 |
| 10. 灰褐 | 7.5YR5/2 | 粘性・しまりあり | ローム粒子・粘土を少量含む。 |
| 11. 黒褐 | 7.5YR3/2 | 粘性・しまりあり | ローム粒子・ロームブロックを少量含む。 |

Fig.21 SC007 遺構平面図

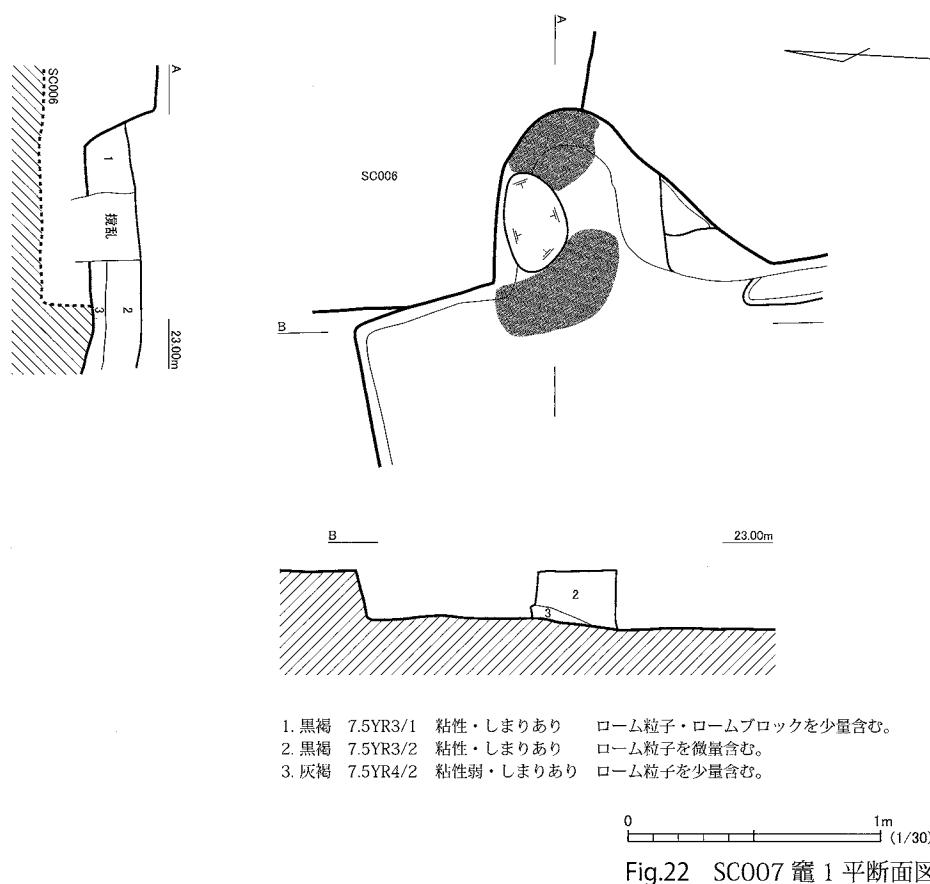


Fig.22 SC007 竪1 平断面図

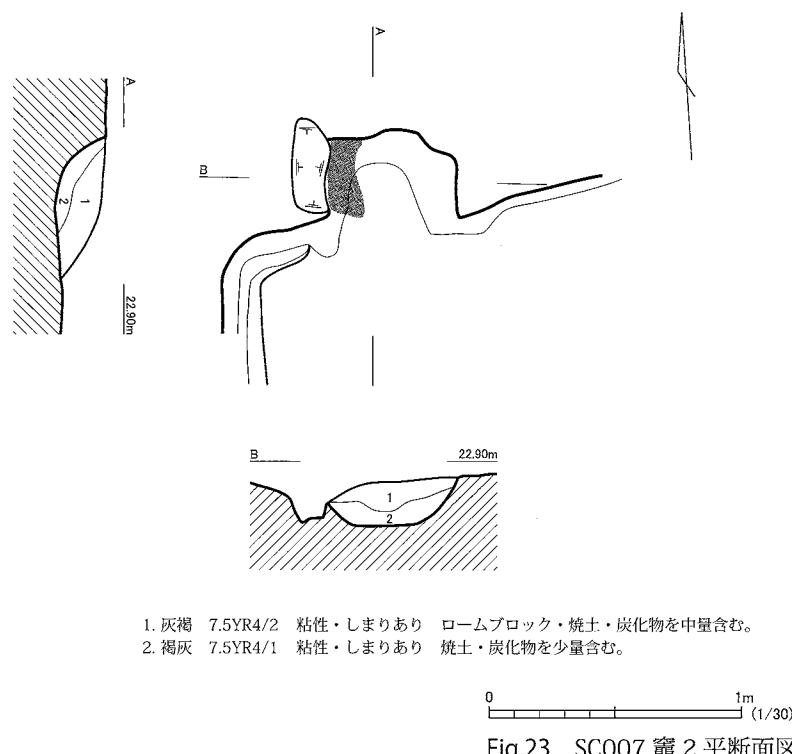
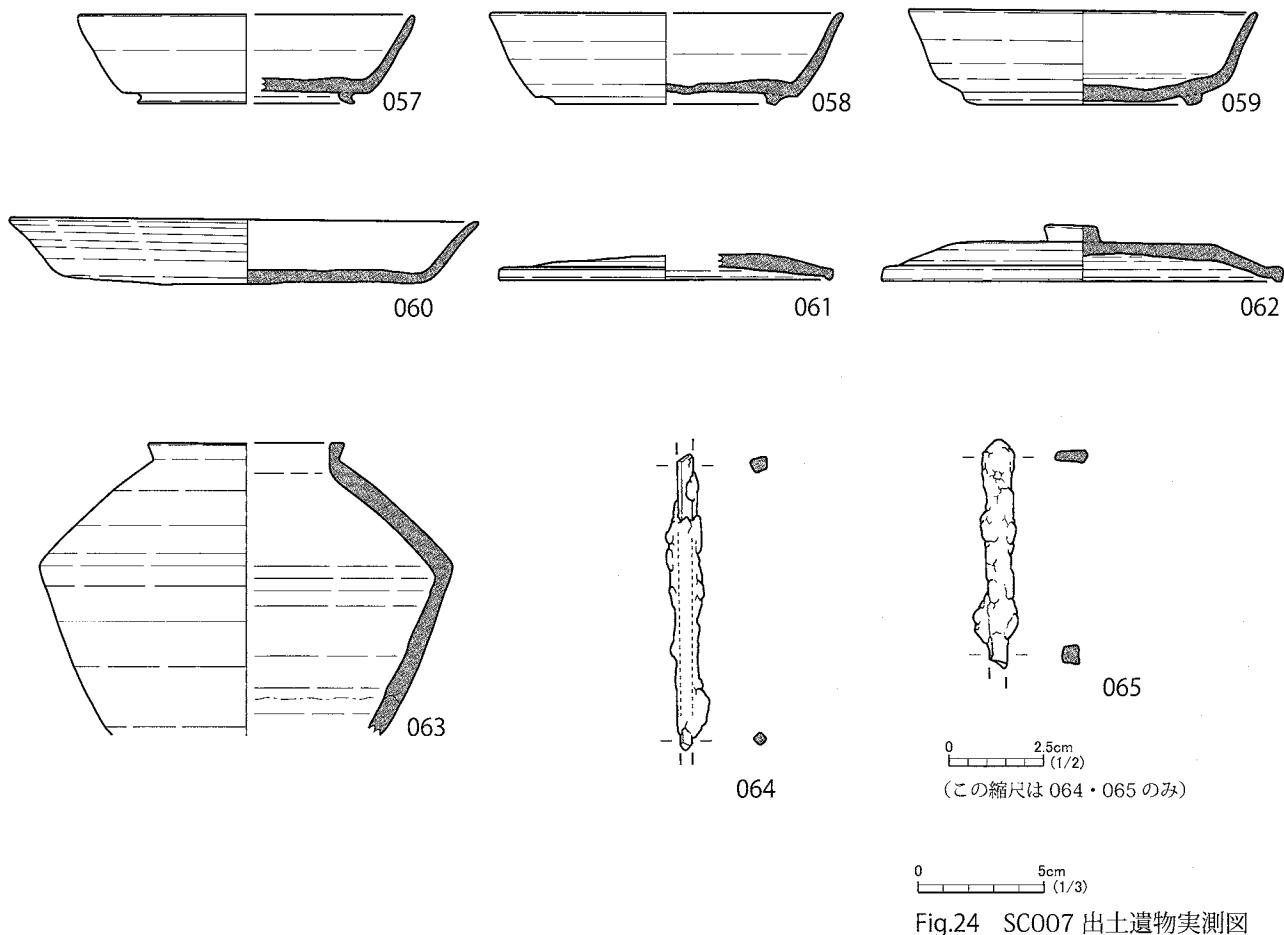


Fig.23 SC007 竪2 平断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	竈1(旧) N-81-E 竈2(新) W-11-N
	規 模	南北2.50m×東西2.50m
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ0.25mを測る
	ピット	小穴3基
	周 溝	北西隅から西壁、南壁を経て東壁の竈脇まで認められる
	床 面	全体的に硬化する
竈	掘 形	なし
	位 置	東壁の中央を竈1(旧)、北壁の西側寄りを竈2(新)とする2基が認められる
	形 状	竈1(旧)：SC006に重複し構築されることから、火熱面でおおよその形状を類推 竈2(新)：一部に搅乱がおよぶが、形状は認識でき、煙部が突出する
	中心軸長	竈1(旧) 0.70m
	燃焼口幅	竈1(新) 0.30m 竈1(旧) 0.60m 竈2(新) 0.35m
	壁	竈1(旧)・竈2(新)とも火熱作用を受けた面が部分的に認められる
	火 床	竈1(旧)・竈2(新)とも火熱作用を受けた面が認められる
	袖 部	竈1(旧)・竈2(新)とも認められず

Tab.13 SC007 遺構観察表



0 2.5cm (1/2)

(この縮尺は 064・065のみ)

0 5cm (1/3)

Fig.24 SC007 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
057	須恵器 坏身	埋土下層	(13.4)	(8.6)	3.5	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外方に立ち上がる。高台はハの字状に、開き気味に底端部より内側に貼り付けられる。
058	須恵器 坏身	埋土上層 埋土下層	(14.0)	(8.8)	3.65	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外方に立ち上がる。断面四角の高台が内傾気味に、底端部より内側に貼り付けられる。
059	須恵器 坏身	埋土上層	13.8	9.4	3.8	褐灰 7.5YR 7/1	体部はやや外反しつつ立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部より内側に貼り付けられる。底部は回転ヘラ切り後に、ナデ調整。
060	須恵器 皿	埋土下層 床面上・攪乱	18.6	14.5	2.7	にぶい黄橙 10YR 7/2	体部は直線的に外方に立ち上がり、口縁部でやや外反する。底部は回転ヘラ切り後に、ナデ調整。焼成不良で軟質。
061	須恵器 坏蓋	埋土上層・埋土下層 竈内・攪乱	13.2	—	不明	褐灰 7.5YR 6/1	口縁部内側には稜が認められるものの、端部は摘み出した程度の僅かなものである。天井部は回転ヘラ削り調整。
062	須恵器 坏蓋	埋土上層 埋土下層	18.0	—	2.3	褐灰 7.5YR 7/1	口縁部内側には稜が認められるものの、端部は摘み出した程度の僅かなものである。天井部は回転ヘラ削り調整。
063	須恵器 短頸壺	床面上	(7.8)	不明	不明	灰白 7.5YR 8/2	体部は算盤玉状を呈し、口縁がほぼ垂直に屈曲する。体部下位は回転ヘラ削り。
064	鉄製品 釘	床面上	現存長 7.8	最大幅 —	厚さ —	重さ(g) 7.8	幹部の上下端部および皿部は欠損する。断面方形。
065	鉄製品 鉄鎌	床面上	6.1	0.9	0.5	7.9	尖根式。茎部が途中から欠損する。

Tab.14 SCO07 出土遺物観察表

()内の数値は推定の法量を表す

SCO08 穫穴式住居跡

【遺構】

床面は全体的に硬化しており、東側のみは貼床が施される。南西隅では小穴が認められ、この辺りからは遺物（070・071・084・085・090）が、折り重なるようにして出土した。残存状態は欠損するものが多く、住居廃絶時に投棄したものと推測される。

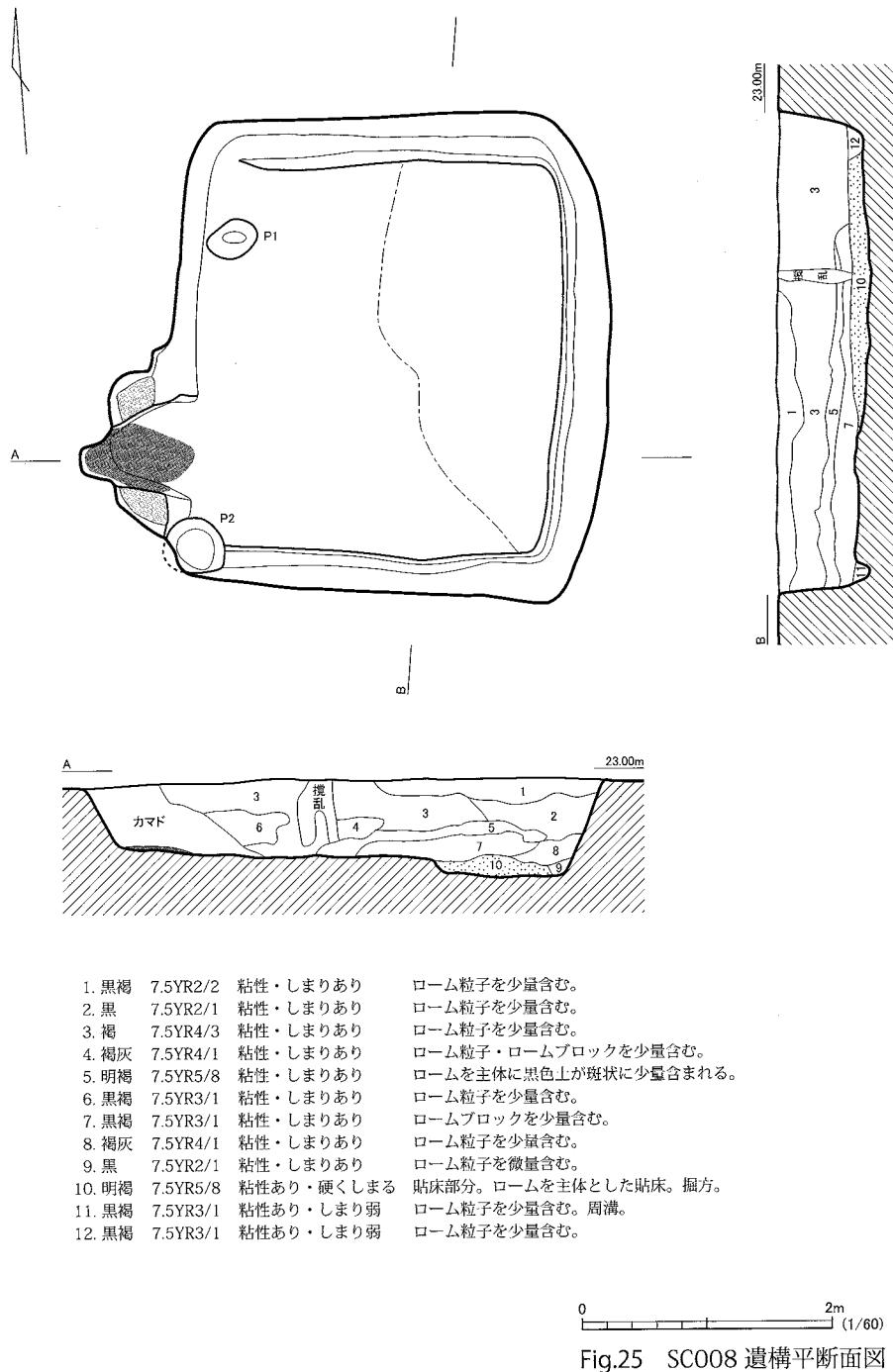
竈は西壁の南側寄りに構築される。両袖の基部はロームを削り出して造られる。奥壁両脇は浅い段が削り込まれ、この上面に粘土が薄く認められる。

【遺物】

坏身は高台が底端部より内側に貼り付くタイプ（066・069～077）と、底端部際もしくは近くに貼り付くタイプ（067・068）に分けられる。

坏蓋は断面三角形に短く屈曲させたタイプ（081・082）と、口縁部を軽く摘み出した程度で僅かなもの（079・080）に分けられる。当然ながら後者は、前者に比ベ口縁部内側の稜は不明瞭となりがちである。

坏身と坏蓋をみる限りでは、8世紀代前半代の所産といえるが、2つの特徴が混在している点から、或いは前半中葉以降の様相を示すものかと思われる。



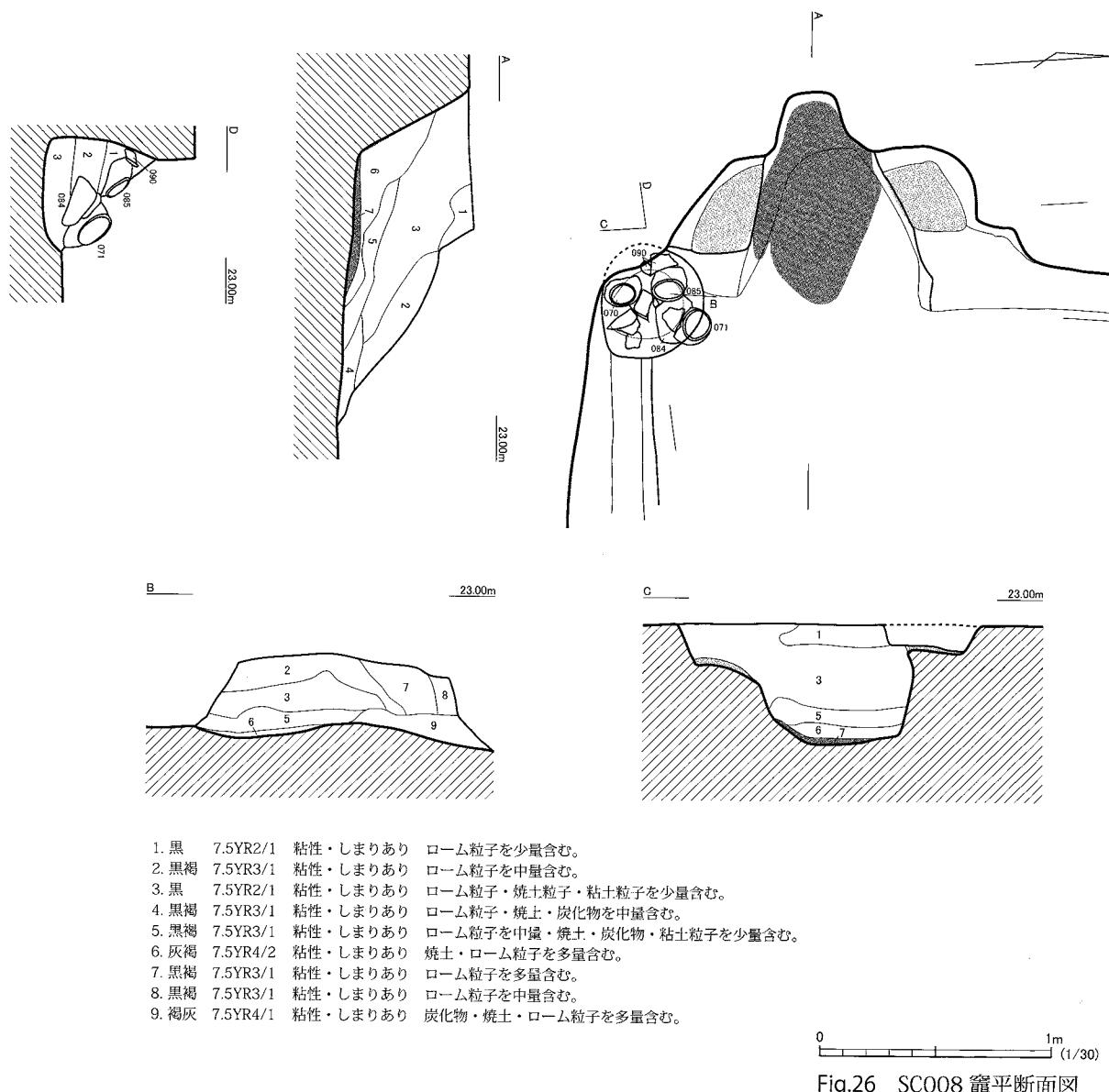


Fig.26 SC008 窯平面断面図

全 体	平面形態	長方形
	主軸角度	W-84-N
	規 模	南北 3.80 m × 東西 3.50 m
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.60 m を測る
	ビット	竈の南脇に径が約 0.50 m、深さ 0.10 m の小穴があり、完形の土器がまとまって出土 西壁近く北側に小穴 1 基
	周 溝	西壁以外をコの字状に認められる
	床 面	全体的に硬化する
竈	掘 形	東側半分に掘方が認められる
	位 置	西壁の南側寄り
	形 状	奥壁部分が細長く突出する
	中心軸長	両側壁上は棚状の段が削りだされ、粘土が一面に認められる
	燃焼口幅	7.50m
	壁	9.00m
	火 床	全体的に火熱作用を受け、赤褐色に硬化する
袖 部	火 床	火熱作用を受けた層が認められる
	袖 部	認められず

Tab.15 SC008 遺構観察表

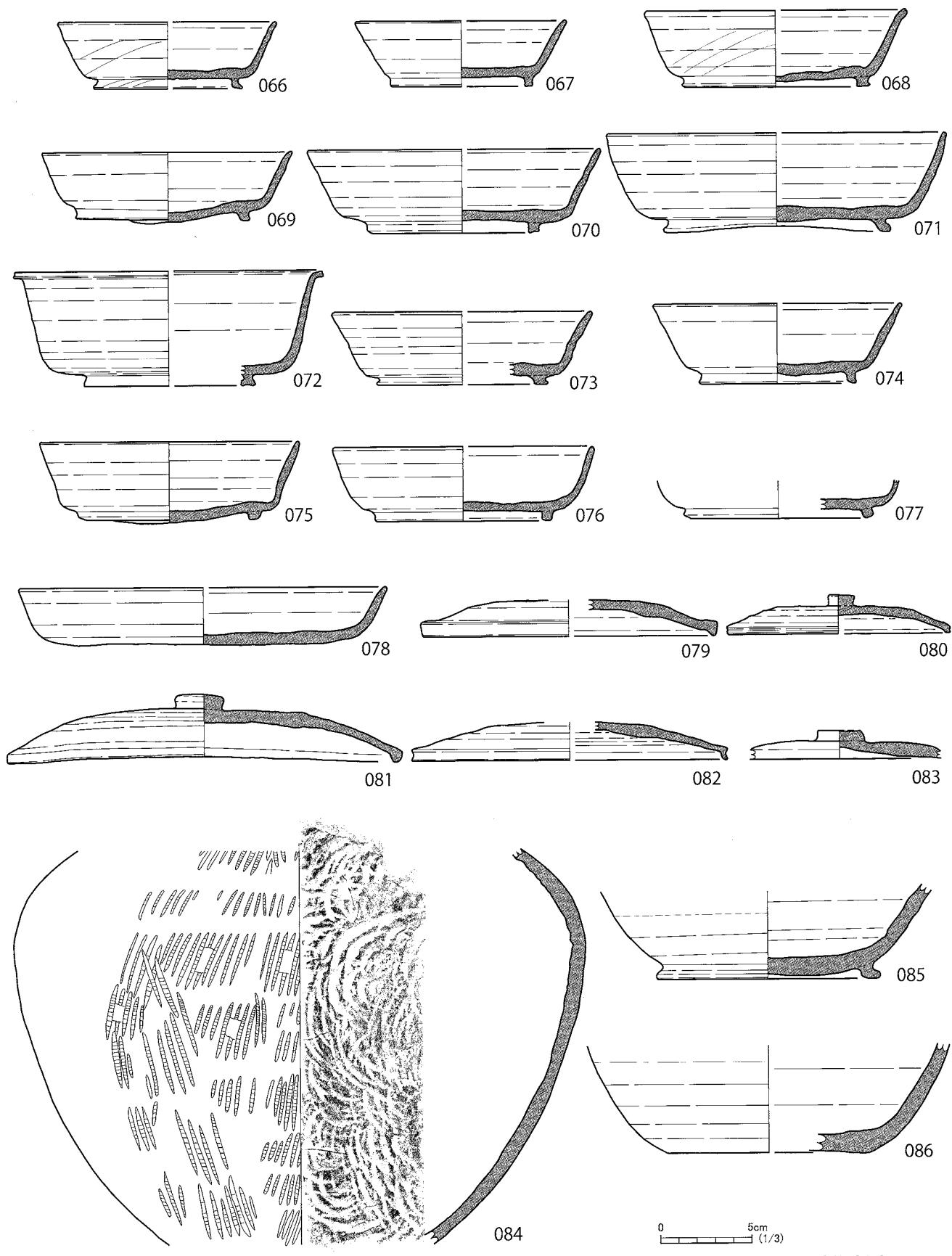


Fig.27 SC008 出土遺物実測図 -1

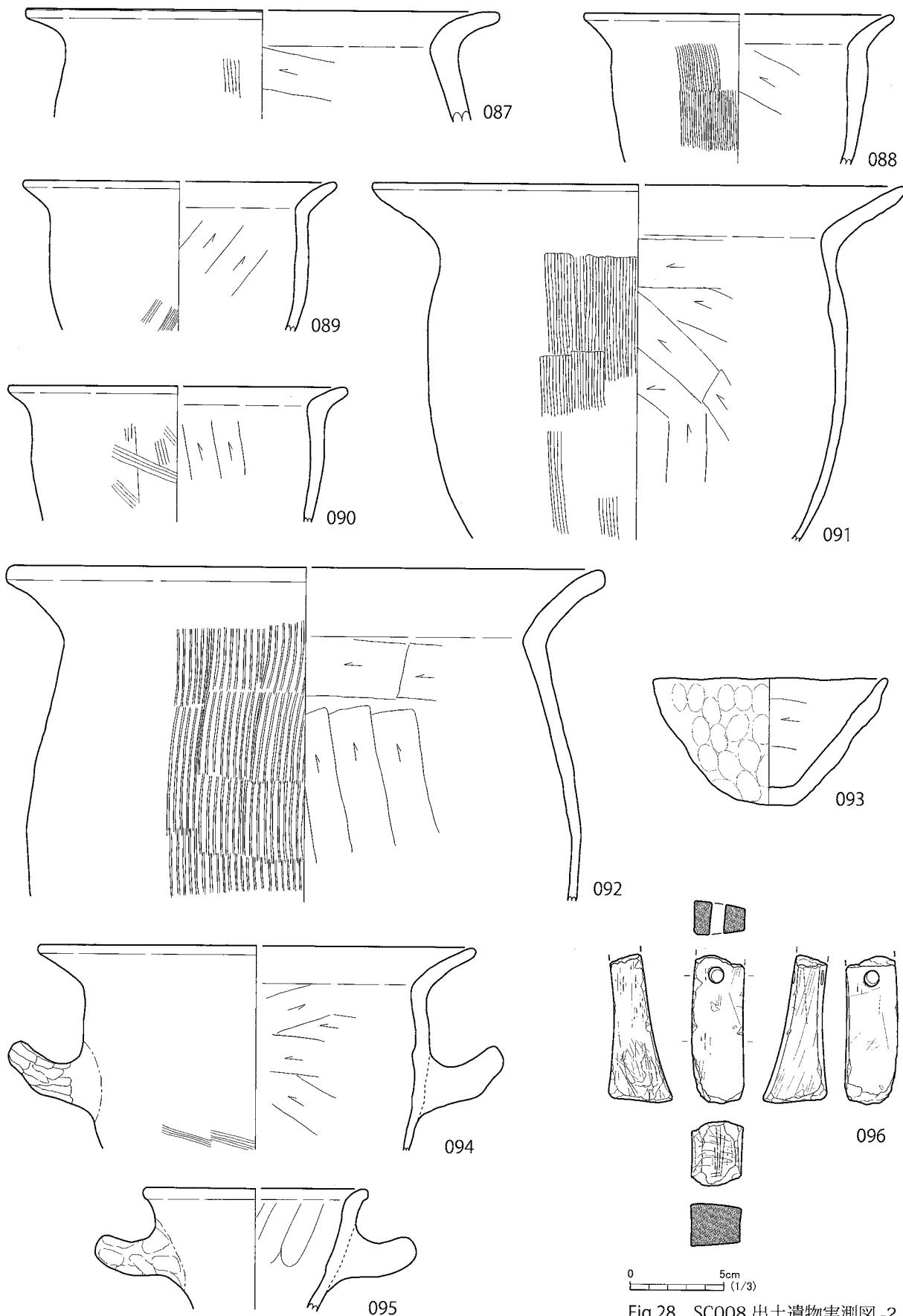


Fig.28 SC008 出土遺物実測図 -2

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
066	須恵器	掘方	(12.0)	(8.2)	3.75	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部外面には下位から口縁に向け、絞りあげた痕が斜め方向に残る。高台は底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
067	須恵器	床面上	(11.6)	7.8	3.6	明褐灰 7.5YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部よりやや内側に貼り付けられる。
	环身						
068	須恵器	埋土下層	(14.3)	10.1	4.2	明褐灰 7.5YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁が外反する。体部外面には下位から口縁に向け、絞りあげた痕が斜め方向に残る。断面四角の高台が、底端部よりやや内側に貼り付けられる。底部はヘラ切り後に、ナデ調整。
	环身						
069	須恵器	埋土下層	13.7	9.5	3.9	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底部は回転ヘラ切り後の調整を施さない。
	环身						
070	須恵器	P2	(15.9)	9.4	4.6	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
071	須恵器	P2	(18.0)	12.4	5.4	灰黄橙 10YR 6/2	体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
072	須恵器	埋土上層 床面上	(17.0)	(9.4)	6.3	灰白 10YR 7/1	体部は直線的に上方に立ち上がり、口縁部を直角に屈曲させ端面を平らにする。体部下位は回転ヘラ削り。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
073	須恵器	埋土上層 床面上	(14.3)	(9.4)	4.0	にぶい黄橙 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
074	須恵器	埋土下層	(13.6)	8.6	4.4	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
075	須恵器	埋土上層 床面上	14.2	10.0	4.5	にぶい橙 7.5YR 7/3	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
076	須恵器	埋土上層 埋土下層	(14.3)	9.7	4.1	にぶい黄橙 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底部は回転ヘラ切り後の調整を施さない。焼成不良で軟質。
	环身						
077	須恵器	埋土上層 埋土下層	不明	(10.4)	不明	にぶい黄橙 10YR 7/2	断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底部は回転ヘラ切り後の調整を施さない。焼成不良で軟質。
	环身						
078	須恵器	埋土上層・埋土下層 掘方	(20.2)	14.1	3.2	灰白 10YR 8/2	底部は回転ヘラ切り後に、周縁部をナデ調整。
	皿						
079	須恵器	埋土下層 床面上	(16.0)	—	不明	褐灰 10YR 5/1	口縁部は断面三角形で、ほぼ垂直に短く屈曲する。天井部は回転ヘラ削り調整。
	环蓋						
080	須恵器	埋土上層	(12.2)	—	2.15	褐灰 10YR 5/1	口縁部内側には稜が認められるものの、端部は摘み出した程度の僅かなものである。天井部は回転ヘラ削り調整。
	环蓋						
081	須恵器	床面上	21.6	—	3.8	灰白 10YR 8/2	口縁部は断面三角形で、ほぼ垂直に短く屈曲する。天井部は回転ヘラ削り調整。焼成不良で軟質。
	环蓋						
082	須恵器	竈内	(17.2)	—	不明	橙 5YR 6/6	口縁部は断面三角形で、ほぼ垂直に短く屈曲する。天井部は回転ヘラ削り調整。焼成不良で軟質。
	环蓋						
083	須恵器	埋土上層	不明	—	不明	浅黄橙 10YR 8/3	天井部は回転ヘラ削り後に、ナデ調整。焼成不良で軟質。
	环蓋						
084	須恵器	P2	不明	不明	不明	にぶい黄橙 10YR 7/2	体部外側は平行タタキ痕、内面には青海波文の当具痕が認められる。
	甕						
085	須恵器	P2	不明	12.2	不明	褐灰 10YR 5/1	体部下位は回転ヘラ削りが施される。断面四角の高台が、開き気味に貼り付く。
	短頸壺						
086	須恵器	埋土下層	不明	(11.0)	不明	褐灰 10YR 6/1	底部は回転ヘラ切り後に、周縁部のみを回転ヘラ削りする。体部下位は回転ヘラ削りが施される
	鉢						
087	土師器	竈内 床面上	(25.4)	不明	不明	橙 7.5YR 7/6	体部外側はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
	甕						

Tab.16 SC008 出土遺物観察表 -1

()内の数値は推定の法量を表す

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
088	土師器	竈内 床面上	(16.6)	不明	不明	にぶい橙 7.5YR 7/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
	甕						
089	土師器	埋土上層	(16.8)	不明	不明	橙 5YR 6/6	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
	甕						
090	土師器	P2	(18.2)	不明	不明	浅黄橙 7.5YR 8/3	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
	甕						
091	土師器	埋土下層	(28.4)	不明	不明	浅黄橙 7.5YR 8/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
	甕						
092	土師器	埋土下層	(32.0)	不明	不明	橙 5YR 6/6	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
	甕						
093	土師器	埋土上層 埋土下層	12.5	2.0	6.85	橙 5YR 5/6	尖底の底部から直線的に体部が外上方に立ち上がり、口縁を薄くする。 外面は指頭痕が密に認められる。内面はヘラ削り。
	鉢						
094	土師器	床面上	(23.4)	不明	不明	浅黄橙 7.5YR 6/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
	甕						
095	土師器	床面上	(12.0)	不明	不明	橙 5YR 6/6	内面を指頭でなであげる。
	甕						
096	石製品	埋土下層	現存長	最大幅	最大厚	重さ(g)	使用頻度の高い面が、磨り減り大きく湾曲する。他の面にも使用時の 擦痕が認められる。穿孔あり。砂岩製。
	砥石		7.9	2.8	3.4	78.7	

Tab.17 SC008 出土遺物観察表 -2

()内の数値は推定の法量を表す

SC009 竪穴式住居跡

【遺構】

南東隅はSK010 土坑に破壊され消失する。

床面はロームが全体的に硬化した状態で認められる。

竈は西壁の南側寄りに構築される。奥壁先端に攪乱があるものの、平面の形態を認識するには、さほど影響をおよぼすことはない。竈内は全体的に著しい火熱作用を受け、壁面は赤褐色に硬化し、火床も良好な状態で確認できた。袖部分については、向かって左側奥壁の延長に、住居の南壁があることから、構造的に構築できたかは疑問である。右側の袖は確認するには至らなかった。

【遺物】

出土遺物は小破片が大部分を占めた。また、他の住居跡と比較しても点数は寡少といえ、時期等を窺い知ることのできる良好なものが乏しかった。

そうした中で竈の火床上から、土師器の坏身(097)が1点出土している。残存する部分は底部から高台にかけての部位で、底径が12.3cmを測る大振りの器種となる。断面四角の太く低い高台が、底端部際に貼り付く。体部はやや内湾気味となるが、上位が残存しないので具体的にし得ない。器表面は脆弱化が進み、調整等の有無を確認するのは困難である。

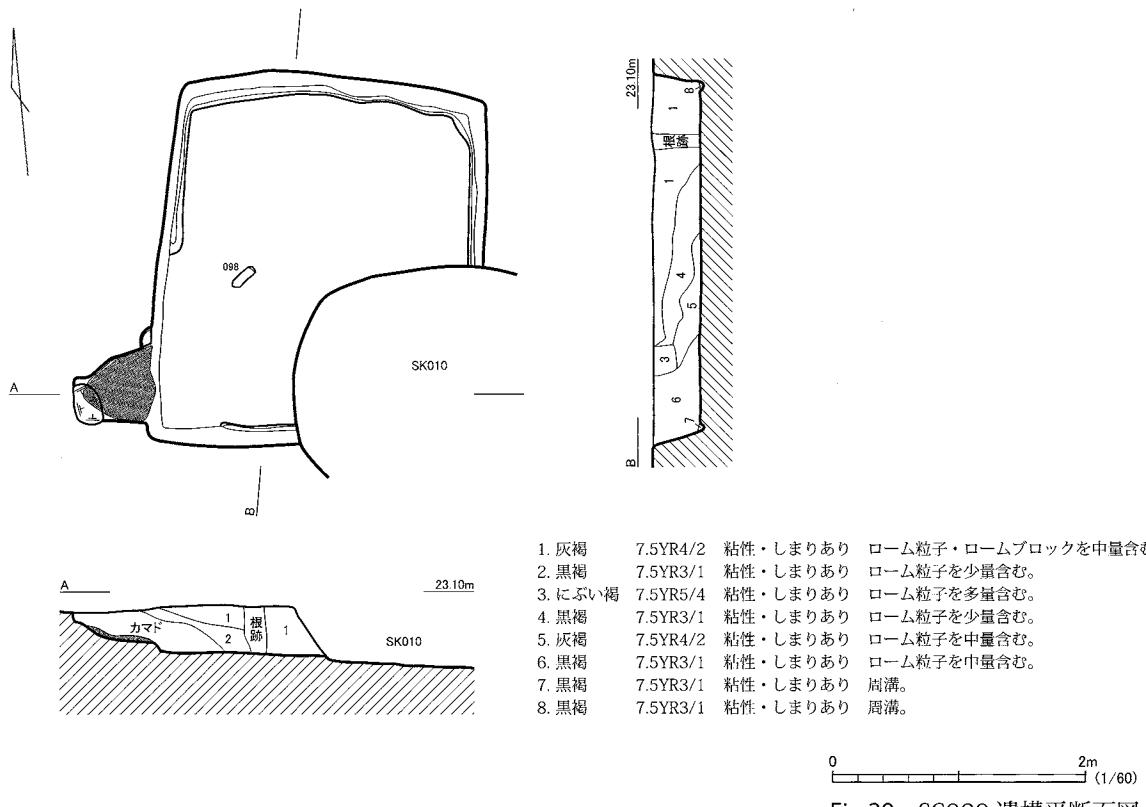


Fig.29 SC009 遺構平面図

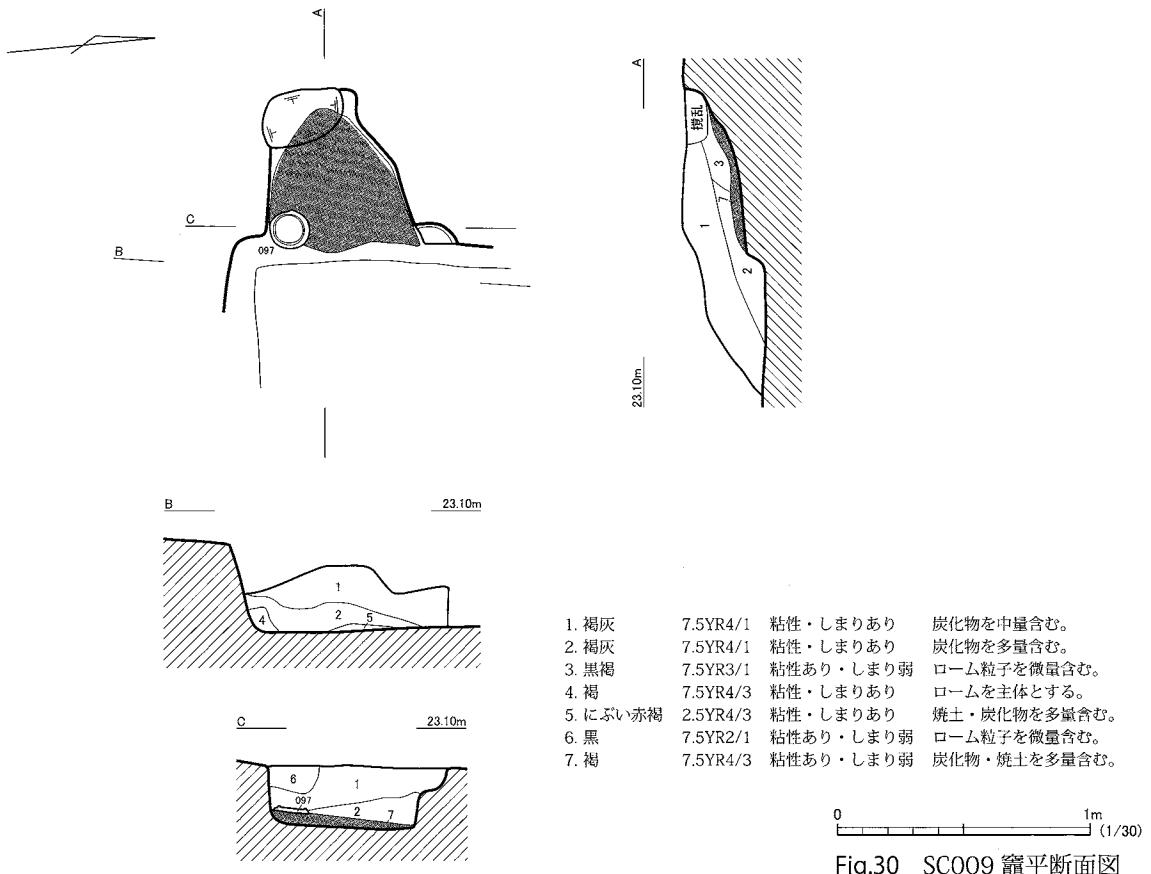


Fig.30 SC009 瓢平面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	W-80-N
	規 模	南北 2.95 m × 東西 2.55 m
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.40 m を測る
	ピット	なし
	周 溝	竈およびこの周辺部以外を周る
竈	床 面	全体的に硬化する
	掘 形	なし
	位 置	西壁の南側寄り
	形 状	奥壁部分が細長く突出する 片側壁面上に小さな段が認められる
	中心軸長	0.60m
	燃焼口幅	0.55m
竈	壁	全体的に火熱作用を受け、赤褐色に硬化する
	火 床	火熱作用を受けた面が認められる
	袖 部	認められず

Tab.18 SC009 遺構観察表

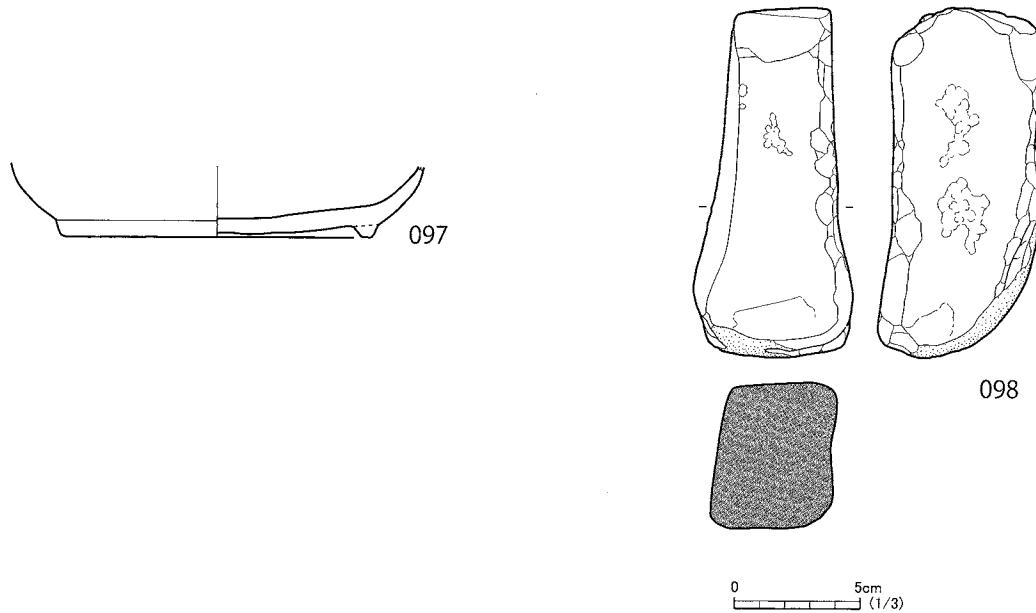


Fig.31 SC009 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特 徴
			口径	底径	器高		
097	土師器 环身	竈内 火床上	不明	12.3	不明	浅黄橙 7.5YR 8/6	底部のみが残存する。底部際に低い高台、貼り付けられる。
098	石製品 砥石	床面上	最大長	最大幅	厚さ	重さ(g)	砂岩製。
			13.9	6.3	6.4	775.0	

Tab.19 SC009 出土遺物観察表

SK010 土坑

【遺構】

SC009 横穴式住居跡を破壊し構築される。平面の形態はやや押し潰された円形で、規模は 1.8 × 2.4m を測る。底面は浅鉢状を呈し、深さは 0.5m を測る。当遺構の性格は具体的にし得ないが、周縁を小穴が周ることより、何らかの関連性が考えられる。同様の状況は、SC009 横穴式住居跡と重複する部分でもあり得ただろうが、住居跡の埋土中に、こうした小穴を確認するのは容易ではなく、未確認である。

【遺物】

出土遺物は少ないが、体部が直線的外方に立ち上がり、低い高台が底端部より内側に貼り付く环身(099)から、8世紀代前半の所産と考えられる。

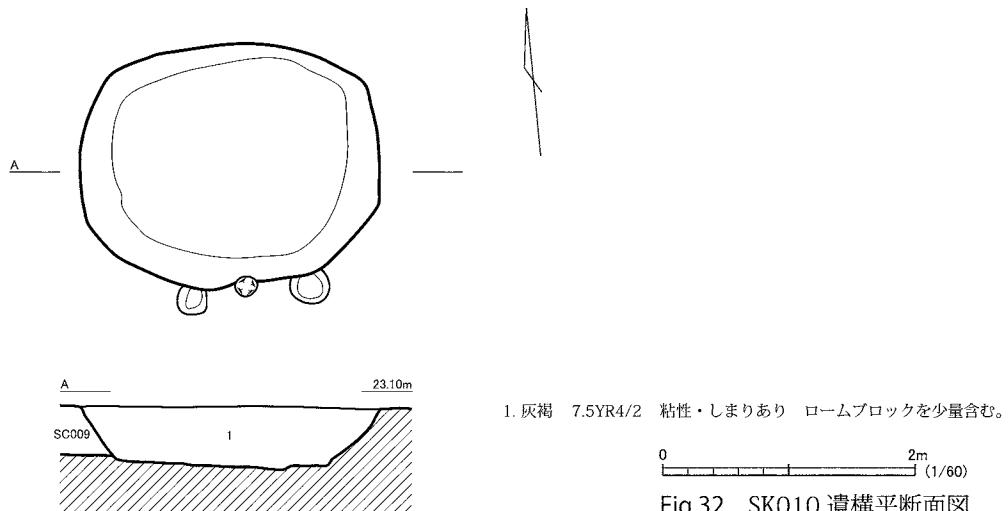


Fig.32 SK010 遺構平断面図



Fig.33 SK010 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
099	須恵器 环身	埋土下層	(13.4)	(9.2)	4.35	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に跳ね上がるよう貼り付けられる。
100	須恵器 皿	埋土上層 埋土下層	(13.4)	(10.4)	2.1	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。

Tab.20 SK010 出土遺物観察表

()内の数値は推定の法量を表す

SC011 竪穴式住居跡

【遺構】

SC012 竪穴式住居跡の竈と南西隅を破壊して構築されることから、両遺構の相互関係は当遺構の方が新しいと判断できる。床面はロームが全体的に硬化した状態で認められる。

竈は西壁の北側に構築される。火床の中央はかき出された跡なのか、深く窪み、その周囲が火熱を受け赤褐色に硬化している。奥壁から先を SC012 竪穴式住居跡の埋土内に求めるのは困難であったが、およそその形態を把握することは可能である。

【遺物】

坏身（102～106）は四角の低い高台が底端部より内側に貼り付き、体部は直線的に外上方に立ち上がる。

坏蓋は口縁部を軽く摘み出した程度で僅かなもの（108）と、断面三角形に短く屈曲させたもの（109）に分けられる。

こうした特徴から8世紀前半を主体とした遺物構成とみなせる。さらに蓋の口縁部が消失化していく点や、坏部が浅く、短い口縁をほぼ垂直に屈曲させた高坏（107）から、前半中葉以降の様相を反映しているものと考える。

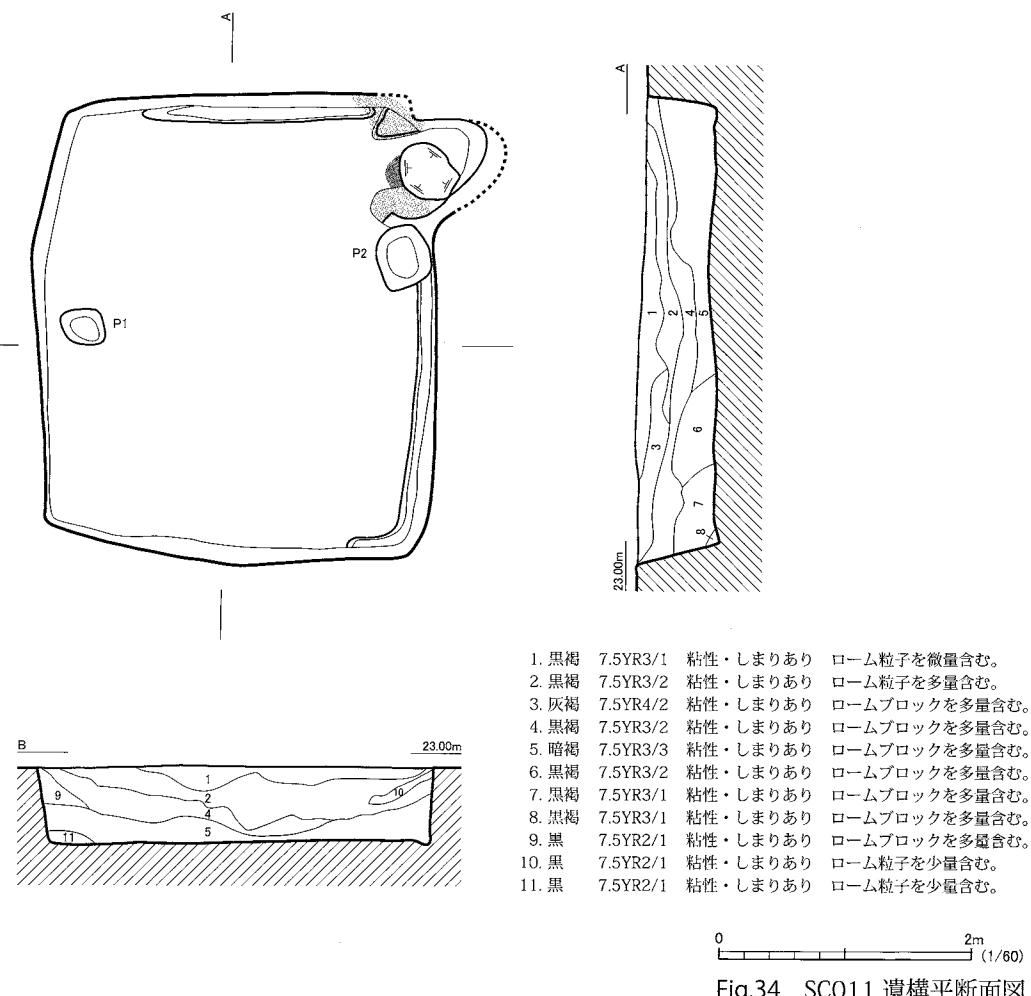
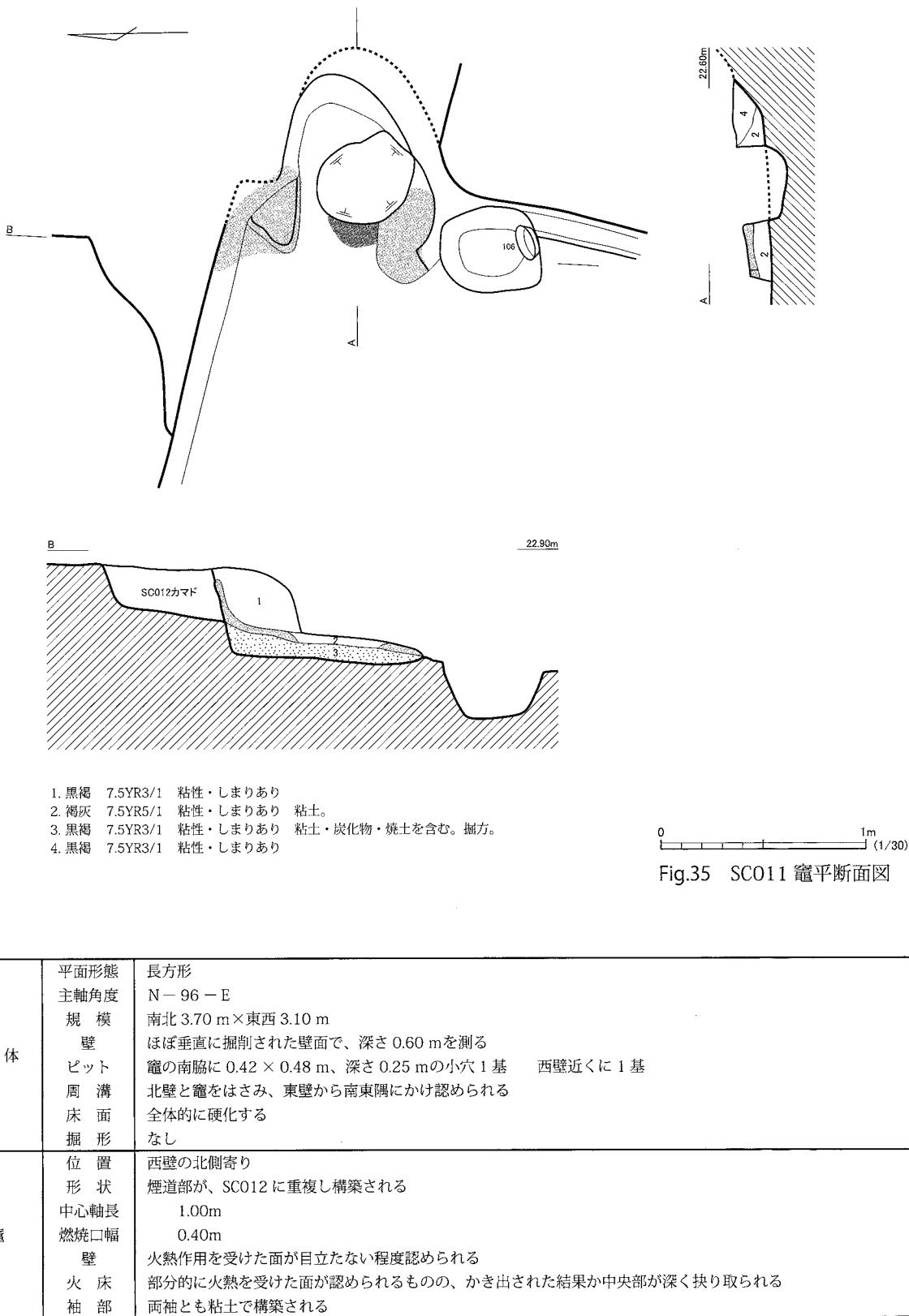


Fig.34 SC011 遺構平面断面図



Tab.21 SC011 遺構観察表

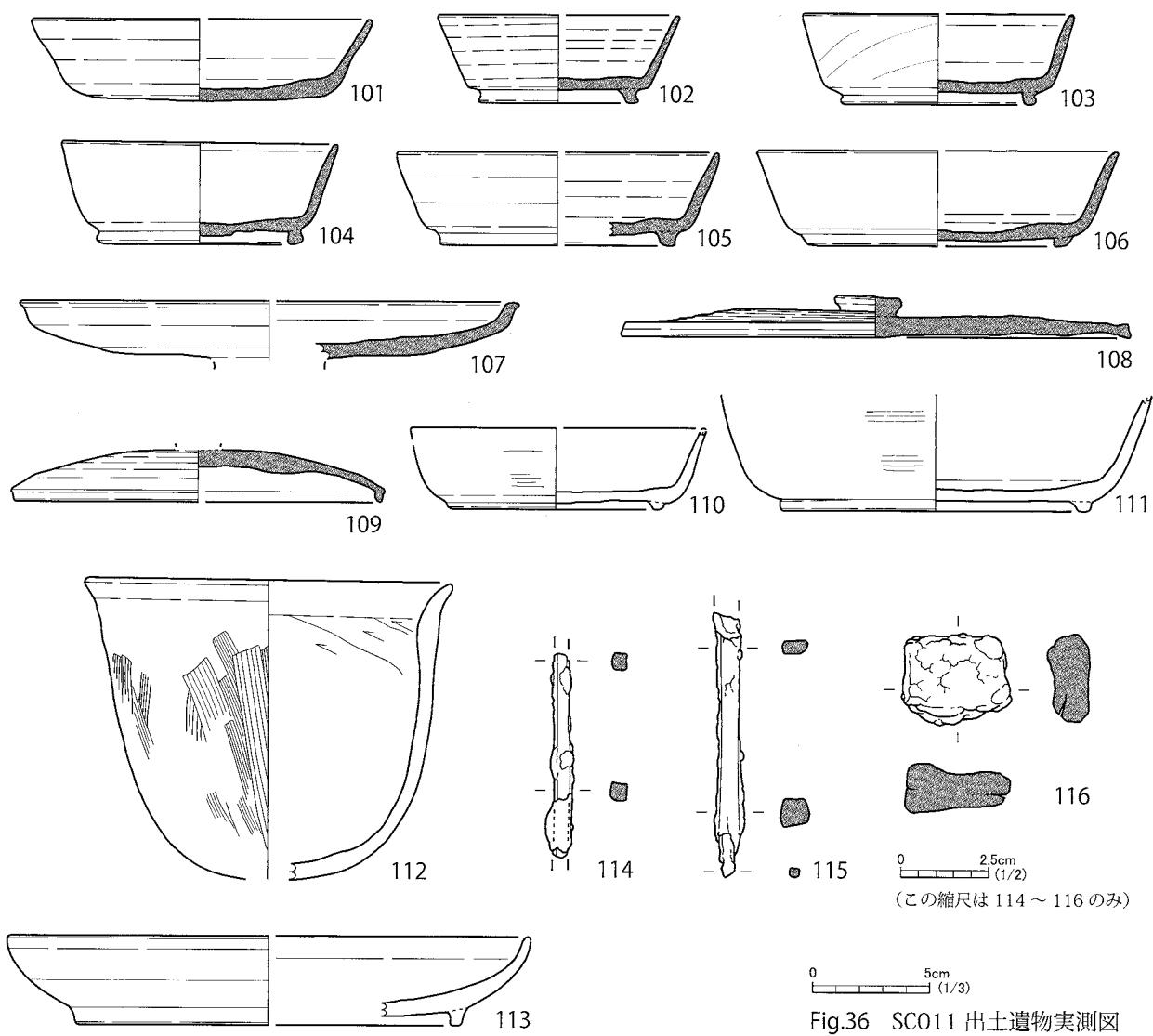


Fig.36 SC011 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特 徴
			口径	底径	器高		
101	須恵器 环	埋土下層	(14.6)	10.8	3.5	にぶい黄橙 10YR 7/3	体部は直線的に外上方に立ち上がる。底部は回転ヘラ切り後に、ナデ調整。
102	須恵器 环身		(10.4)	6.8	3.8	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部下位は回転ヘラ削り。断面四角の高台が開き気味に、底端部より内側に貼り付けられる。
103	須恵器 环身	埋土下層 床面上	(11.6)	8.4	3.9	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、下位から口縁に向け絞りあげた痕が斜め方向に残る。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。器形に歪みが生じる。
104	須恵器 环身	埋土上層・埋土下層 SC014 埋土下層	11.8	8.8	4.4	にぶい黄橙 10YR 7/3	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部下位は回転ヘラ削り。断面四角の高台が、底端部より内側に跳ね上げるように貼り付けられる。
105	須恵器 环身	埋土上層	(13.8)	(10.0)	4.0	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部下位は丸みを帯び、断面四角の高台が底端部付近に貼り付けられる。
106	須恵器 环身		(15.4)	11.2	4.1	浅黄橙 10YR 8/3	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。焼成不良で軟質。

Tab.22 SC011 出土遺物観察表 -1

()内の数値は推定の法量を表す

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
107	須恵器 环坏	埋土上層 埋土下層	(21.2)	不明	不明	にぶい橙 7.5YR 7/4	环部は浅く、口縁部は丸みを帯び、開き気味に立ち上がる。端部は外側に摘み出される。环部外面は回転ヘラ削り調整。
108	須恵器 环蓋	埋土上層 埋土下層	21.8	—	1.8	褐灰 7.5YR 5/1	口縁部内側には稜が認められるものの、端部は摘み出した程度の僅かなものである。天井部は低く、扁平である。天井部外面は回転ヘラ削り調整。
109	須恵器 环蓋	埋土下層	15.7	—	不明	浅黄橙 10YR 8/2	口縁部は断面三角形で、ほぼ垂直に屈曲し、内側に明瞭な稜が残る。天井部は低く、水平である。天井部外面は回転ヘラ削り調整。
110	土師器 环身	埋土下層 床面上	(12.6)	9.2	(3.5)	浅黄橙 10YR 8/4	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
111	土師器 环身	P1	不明	13.3	不明	浅黄橙 10YR 8/3	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部下位は丸みを帯び、断面四角の高台が底端部付近に貼り付けられる。
112	土師器 甕	埋土上層 埋土下層	15.8	—	(12.9)	にぶい橙 2.5YR 6/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。底部は丸底となる。
113	土師器 盤	埋土下層	(22.4)	(16.4)	3.8	橙 5YR 6/6	体部外面下位をヘラ削り。
114	鉄製品 釘	埋土上層	現存長 5.8	幅 0.5	厚さ —	重さ(g) 4.4	幹部の上下端部および皿部は欠損する。断面方形。
115	鉄製品 鉄鎌	埋土下層	7.6	0.7	0.4	7.5	尖根式。根・範被の先端部を欠損する。
116	鉄製品 鉄塊	埋土上層	—	—	—	23.0	器種不明の鉄の塊。劣化が著しい。

Tab.23 SC011 出土遺物観察表 -2

()内の数値は推定の法量を表す

SC012 穫穴式住居跡

【遺構】

東側の約 1/2 を搅乱の溝に、竈から南西隅にかけてを SC011 穫穴式住居跡により消失する。搅乱の溝内からは多数の遺物が採取できたが、当遺構のものも混入していると思われる。また、この搅乱を挟んだ東側には、SC013 と SC014 穫穴式住居跡が存在する。これらとの相互関係については、重複する部分が皆無で不明といえる。

床面はロームが全体的に硬化し、中央部では粘土塊が山盛りの状態で確認されるが、性格等は不明である。

竈は東壁の南側寄りに構築されるが、SC011 穫穴式住居跡の北壁に約 1/2 が消失する。これにより遺構相互の時期差は理解できる。

【遺物】

环身（117～119）は体部が外方に直線的に立ち上がり、断面四角の低い高台が底端部よりやや内側に貼り付く。

环蓋は口縁部を軽く摘み出した程度で僅かなもの（122）と、断面三角形に短く屈曲させたタイプ（123）がある。

こうした特徴から 8 世紀代前半を主体とした遺物構成とみなせるが、环蓋の口縁部が消失化していく点から、前半中葉以降として捉えてよいのではないだろうか。

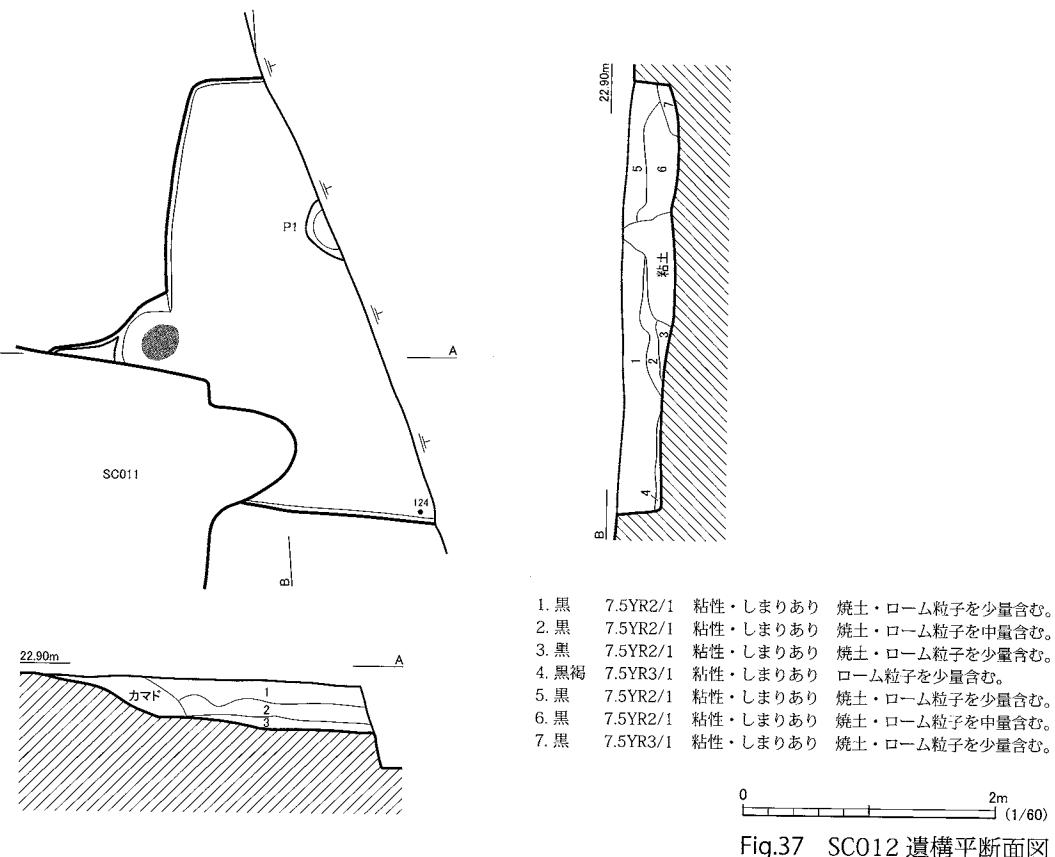


Fig.37 SC012 遺構平断面図

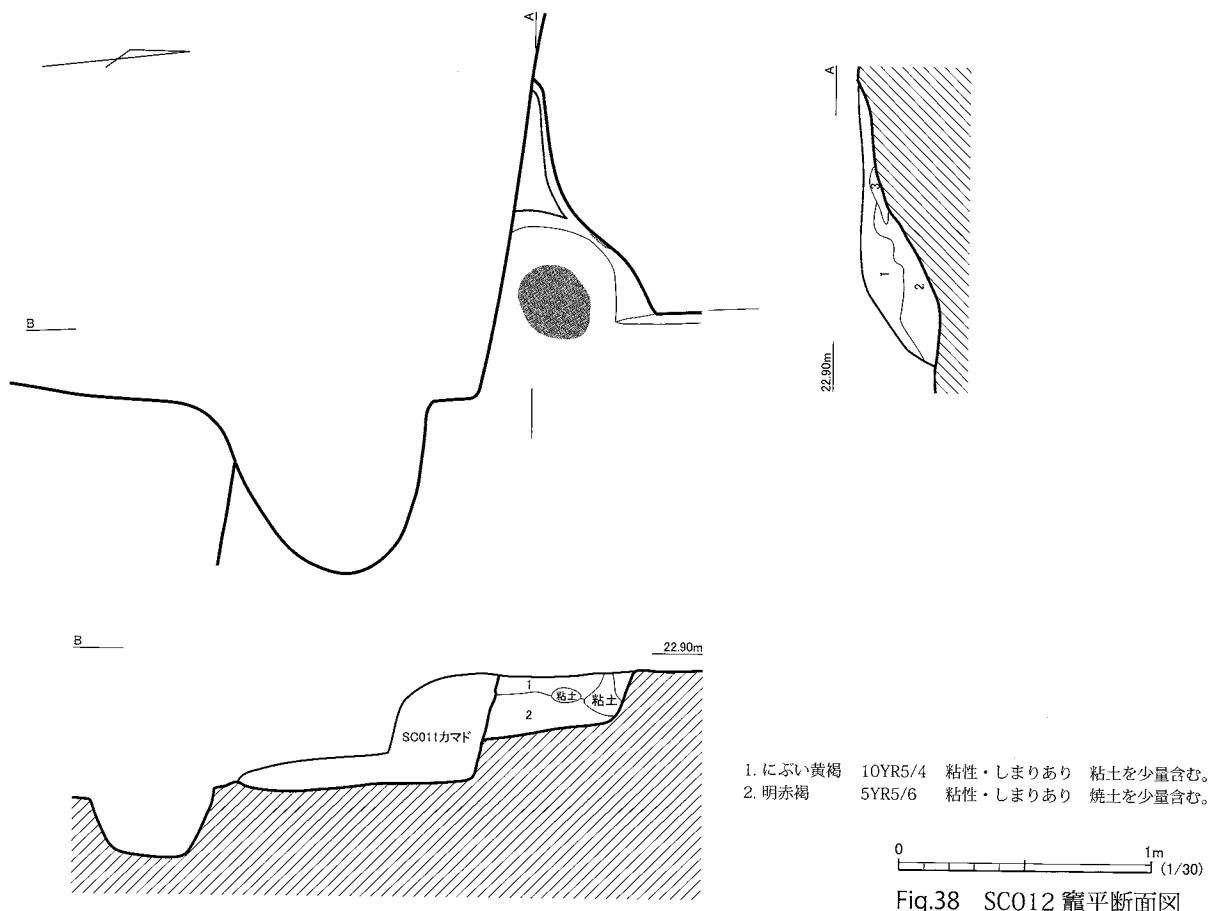


Fig.38 SC012 瓢平断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	W—82—N
	規 模	南北 3.40 m × 東西は東側が搅乱により消失しているため不明
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.40 m を測る
	ピット	中央北よりに直径 0.50、深さ 0.13 m の浅い小穴 1 基
	周 溝	なし
窓	床 面	全体的に硬化する
	掘 形	なし
	位 置	西壁の南側寄り
竈	形 状	煙道部が、SC011 の北壁によって破壊される
	中心軸長	1.00m (推定)
	燃焼口幅	0.60m (推定)
	壁	煙道部から煙り出しの部分で、深さが変化する
	火 床	火熱作用を受けた面が認められる
	袖 部	認められず

Tab.24 SC012 遺構観察表

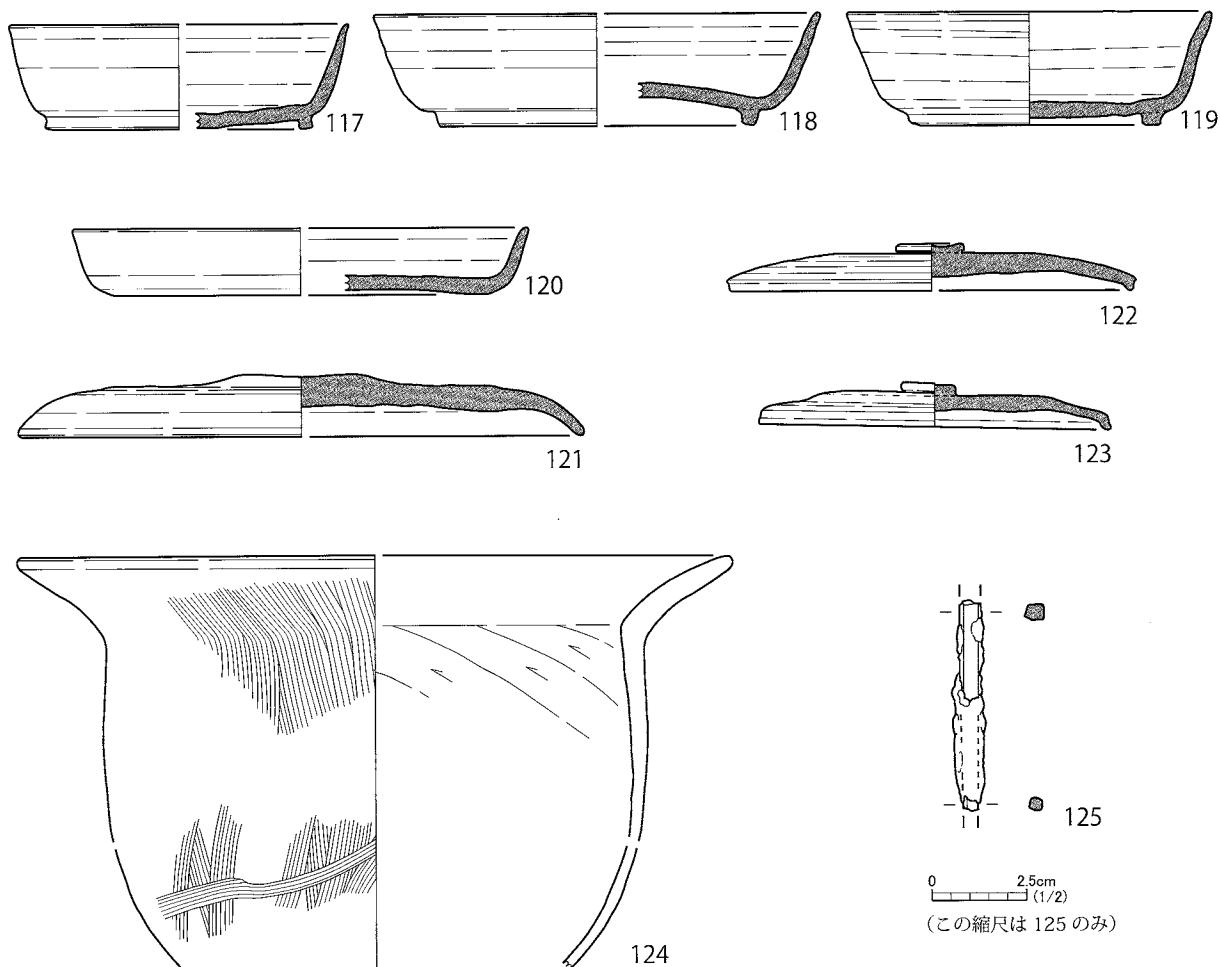


Fig.39 SC012 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
117	須恵器	床面上	(13.4)	(10.6)	4.2	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部付近に貼り付けられる。
	坏身						
118	須恵器	床面上	(17.8)	(12.4)	4.55	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底部は歪みを生じ、盛り上がる。
	坏身						
119	須恵器	埋土下層	14.5	9.9	4.5	灰褐 7.5YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部付近に貼り付けられる。
	坏身						
120	須恵器	埋土上層	(18.2)	(14.8)	2.65	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。底部は回転ヘラ削り調整。
	皿	埋土下層					
121	須恵器	埋土上層	(22.4)	—	2.5	褐灰 7.5YR 6/1	天井部は未調整。
	蓋	埋土下層					
122	須恵器	埋土下層	(16.0)	—	1.9	褐灰 7.5YR 6/1	口縁部内側には稜が認められるものの、端部はつまみ出した程度の僅かなものである。天井部は回転ヘラ削り調整。
	坏蓋						
123	須恵器	埋土下層	14.0	—	1.9	褐灰 7.5YR 6/1	口縁部は断面三角形で、短く屈曲する。天井部は回転ヘラ削り調整。器形に歪みが生じる。
	坏蓋						
124	土師器	埋土下層	28.4	不明	不明	にぶい黄橙 10YR 7/3	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。
	甕						
125	鉄製品	床面上	現存長	幅	厚さ	重さ(g)	幹部の上下端部および皿部は欠損する。断面方形。
	釘		5.6	—	—	5.1	

Tab.25 SC012 出土遺物観察表

() 内の数値は推定の法量を表す

SC013 竪穴式住居跡

【遺構】

西側の約 1/3 を搅乱の溝により消失する。SC012 竪穴式住居跡と同様に、搅乱時に掘り返された遺物が溝内に含まれる。南側は SC014 竪穴式住居跡と重複し、当遺構の方が時期的には新しい。

竈は北壁の中央付近と東壁の南側寄りの 2箇所に認めることができる。北壁の竈は奥壁が小さく突き出す程度で、火熱面が部分的に残る。火床であった付近には浅い窪みと火熱面があり、かき出しだ跡と考えられる。

東壁の竈も奥壁と、向かって左側の袖が残存する。この袖は砂岩を部材として用い、さらに粘土で覆い構築される。竈の手前には同様の砂岩が 2石転がっていたが、これらも部材として用いられたと推測できる。こうした状況から、当初の竈は北壁にあり、後に東壁に造り替えられ、住居廃絶時まで存続していたと考えられる。

当遺構の北東隅と南東隅には浅い小穴が認められるが、いずれも竈の脇隅という位置を占める点では、収納の場としての従属的関係にあるものと考えられる。

【遺物】

坏身（126）は体部が直線的に上方に立ち上がり、その角度も大きく開かない。高台は底端部の内側に貼り付き、8世紀前半の特徴と捉えられる。

刀子（129）、鎌（130～132）といった鉄製品が出土する。

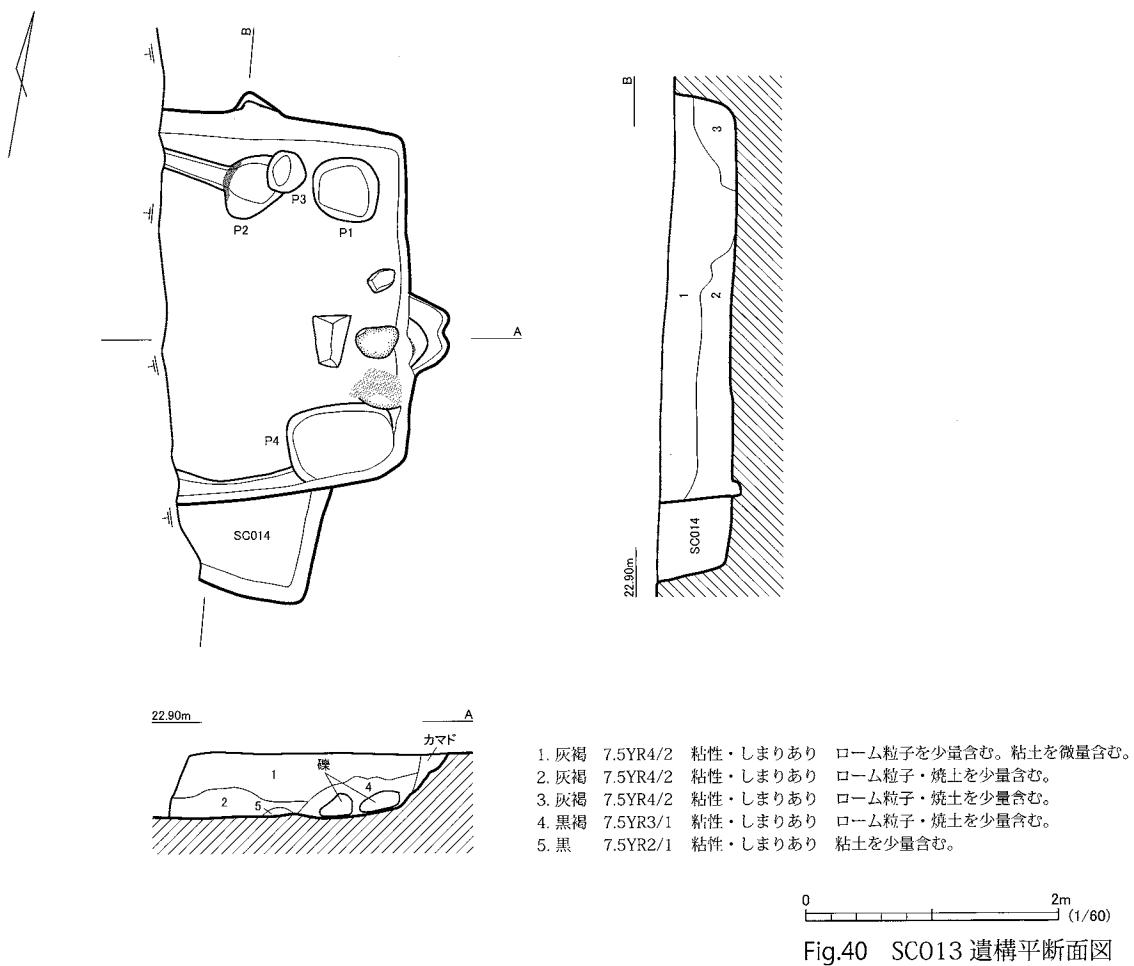


Fig.40 SC013 遺構平面図

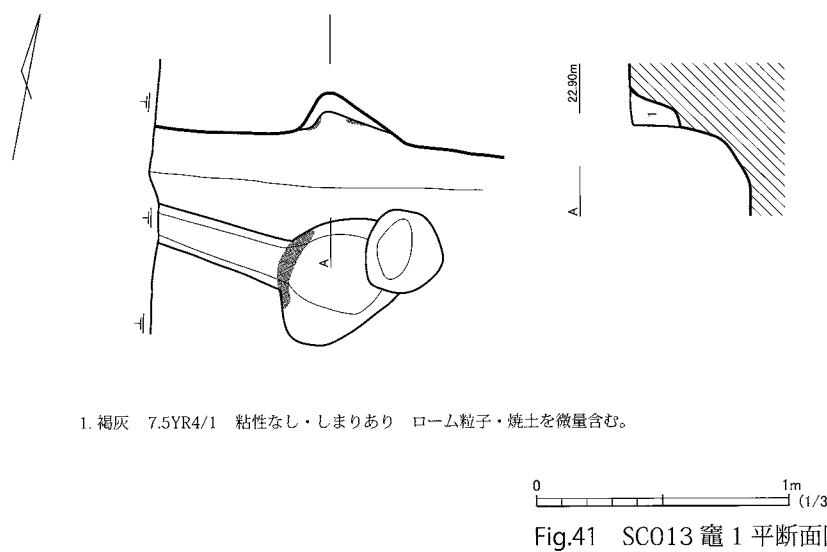
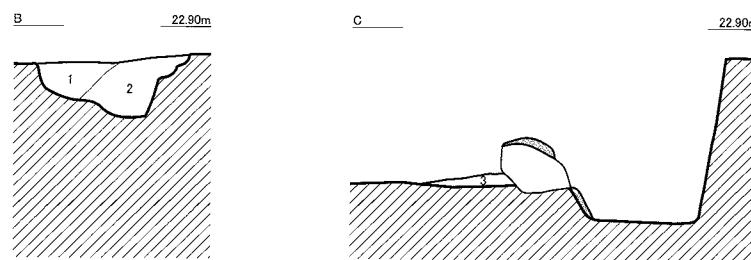
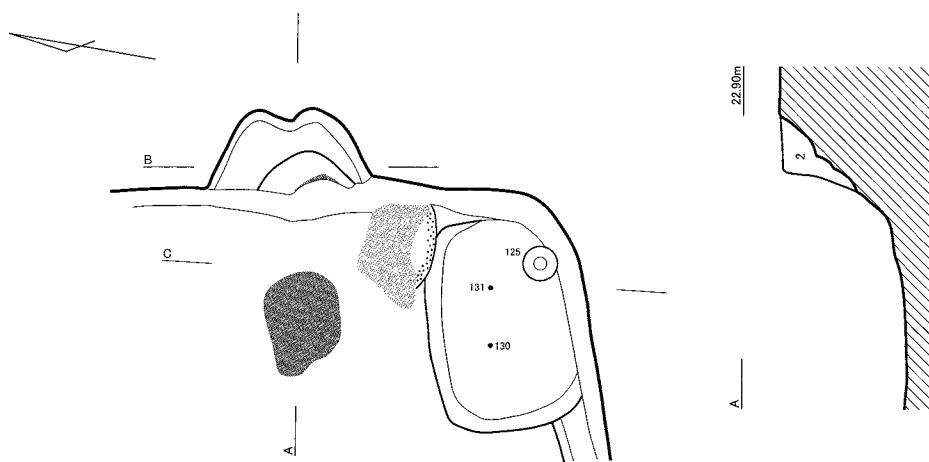


Fig.41 SC013 罐1 平断面図



1. 褐灰 7.5YR4/1 粘性・しまりあり ローム粒子を微量含む。
 2. 黒褐 7.5YR3/1 粘性・しまりあり ローム粒子を微量含む。
 3. 褐灰 5YR4/1 粘性あり・しまり弱 燧土・炭化物・粘土で構成される。

0 1m (1/30)

Fig.42 SC013 竪2 平断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	竪1(旧) W-8-N 竪2(新) N-80-E
	規 模	南北3.10m×東西は西側が攪乱により消失しているため不明
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ0.55mを測る
	ピット	竪2(新)の南脇に0.55×0.85m、深さ0.13mの土坑1基 竪1(旧)周辺に3基あり、1基は竪のかき出し跡か?
	周 溝	南壁に認められる 西壁は攪乱のため消失しており不明
竪	床 面	全体的に硬化する
	掘 形	なし
	位 置	北壁の中央を竪1(旧)、東壁の南側寄りを竪2(新)とする2基が認められる
	形 状	竪1(旧)：奥壁部分が小さく突出する 竪2(新)：奥壁部分が小さく突出する 燃焼口付近に礫があり竪を構築していた部材と考えられる
	中 心 軸 長	竪1(旧) 0.15m 竪2(新) 0.30m
	燃 焼 口 幅	竪1(旧) 0.40m 竪2(新) 0.60m
壁	火 床	竪1(旧)・竪2(新)において僅かに火熱を受けた面を認める
	袖 部	竪1(旧)：燃焼口付近にかき出した浅い窪みがあり、その内側の一部に火熱を受けた面を認める 竪2(新)：燃焼口付近が火熱作用を受けたていた
	袖 部	竪1(旧)：認められず 竪2(新)：南側袖が残存しており、大きめの礫を芯材に、これを粘土で覆い構築

Tab.26 SC013 遺構観察表

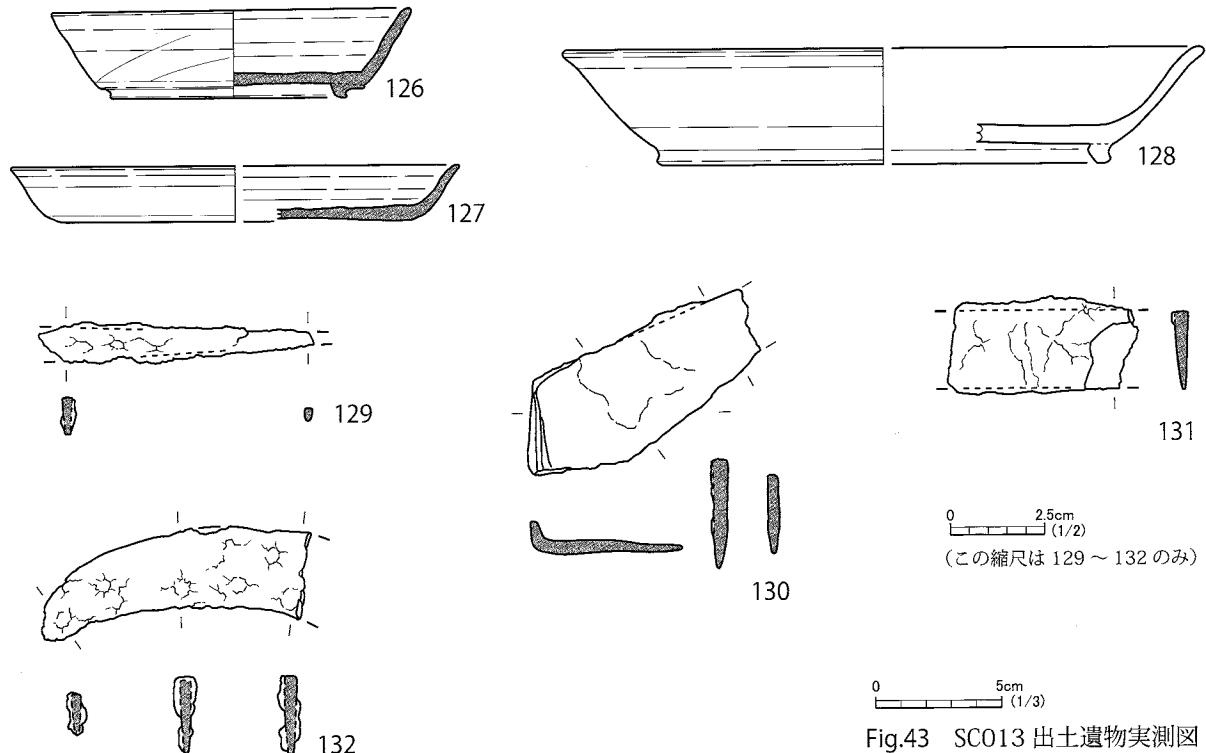


Fig.43 SC013 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特 徴
			口径	底径	器高		
126	須恵器 壺身	P4	14.3	9.4	3.6	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部下位は回転ヘラ削り。外面には下位から口縁に向け、絞りあげた痕が斜め方向に残る。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	須恵器 皿		(17.8)	(14.0)	2.2	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部下位は回転ヘラ削り。
128	土師器 盤	埋土下層	(25.5)	(18.0)	4.6	にぶい黄橙 10YR 6/4	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部で外反する。体部下位は回転ヘラ削り。断面四角の高台が、底端部に開き気味に貼り付けられる。
	鉄製品 刀子		現存長 7.2	最大幅 0.9	厚さ 0.1-0.2	重さ(g) 6.1	身部と茎部が途中から欠損する。
130	鉄製品 鎌	埋土上層	7.1	3.0	0.1-0.2	17.9	先端部と折り曲げの一部が欠損する。
	鉄製品 鎌		5.0	2.1	0.1-0.3	16.4	両端部が欠損する。
132	鉄製品 鎌	P4	7.1	2.1	0.1-0.3	14.5	先端部側が残存し、以下は途中から欠損する。
	鉄製品 鎌						

() 内の数値は推定の法量を表す

Tab.27 SC013 出土遺物観察表

SC014 竪穴式住居跡

【遺構・遺物】

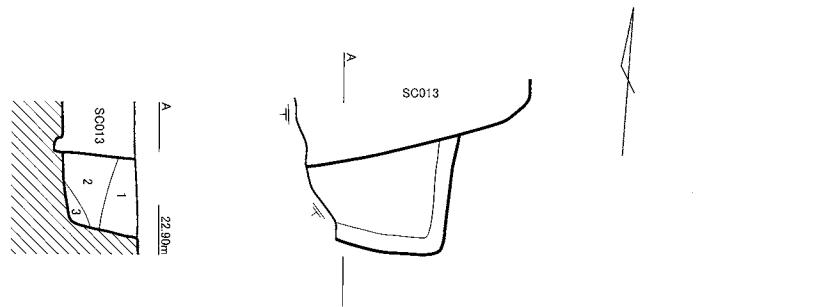
北側がSC013 竪穴式住居跡と重複し、西側は攪乱の溝により消失しているため、南東隅の僅かな部分しか残存していない。床面はロームが硬化した状態で認められる。

竈についても、住居跡の大部分が消失していたため、位置は不明である。

遺物は攪乱の溝内から採取した中に、かなりの量が混入している思われるが、当遺構に確実に伴い出土したものはない。

この辺りは竪穴式住居が接近し、重複するものが多いのであるが、SC011～SC014 竪穴式住居跡の4軒についての相互関係を、まとめて再確認しておきたい。

まず、SC011とSC012 竪穴式住居跡、SC013とSC014 竪穴式住居跡は、直接に重複する部分がみられたので、その相互関係を明らかにすることは可能であった。しかし調査区を南北に縦断する溝を挟む格好にある、前者のグループと後者のグループでは、遺構から時期差を具体的にするのは困難であった。



- 1. 灰褐 7.5YR4/2 粘性・しまりあり ローム粒子を少量含む。粘土を微量含む。
- 2. 灰褐 7.5YR4/2 粘性・しまりあり ローム粒子・粘土を少量含む。
- 3. 明赤褐 5YR5/6 粘性・しまりあり 焼土・ローム粒子・粘土を微量含む。

Fig.44 SC014 遺構平面断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	竈が未確認のため不明
	規 模	SC013 と攪乱に大部分が破壊され、南東隅しか残存せず不明
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.55 m を測る
	ピット	確認した範囲においては認められず
	周 溝	確認した範囲においては認められず
竈	床 面	確認した範囲においては認められず
	掘 形	確認した範囲においてはなし
	位 置	確認した範囲においては認められず
	形 状	不明
	中心軸長	不明
	燃焼口幅	不明
	壁	不明
	火 床	不明
	袖 部	不明

Tab.28 SC014 遺構観察表

SC015 穫穴式住居跡

【遺構】

住居跡の北東側および竈は、現代のゴミ穴による搅乱が大きく挿する。また、この周囲も広い範囲で埋土が掘削され、残存していたのは南側半分であったが、遺物の出土量は多い方である。

竈は北壁の東側寄りに構築され、奥壁から煙道を残すのみである。この竈を挟み、左右の住居跡壁面が、食い違うようである。

【遺物】

壊身（134～144）は断面四角の低い高台が、底端部より内側に貼り付き、体部が直線的に外上方に立ち上がる。

壊蓋は口縁部を断面三角形に短く屈曲させたタイプ（151・154～156）、摘み出す程度のタイプ（158・159）、口縁部が消失したタイプ（152）が認められる。

高壊（148・149）は壊部が浅く、短い口縁が、開き気味に屈曲する。この両者は脚部の長さが異なる。

壊身や壊蓋の特徴から8世紀代前半を主体とした遺物構成とみなせるが、一部の壊蓋において口縁部が退化していく傾向や、高壊の形態から類推すると、前半中葉以降の様相を反映しているものと考えられる。

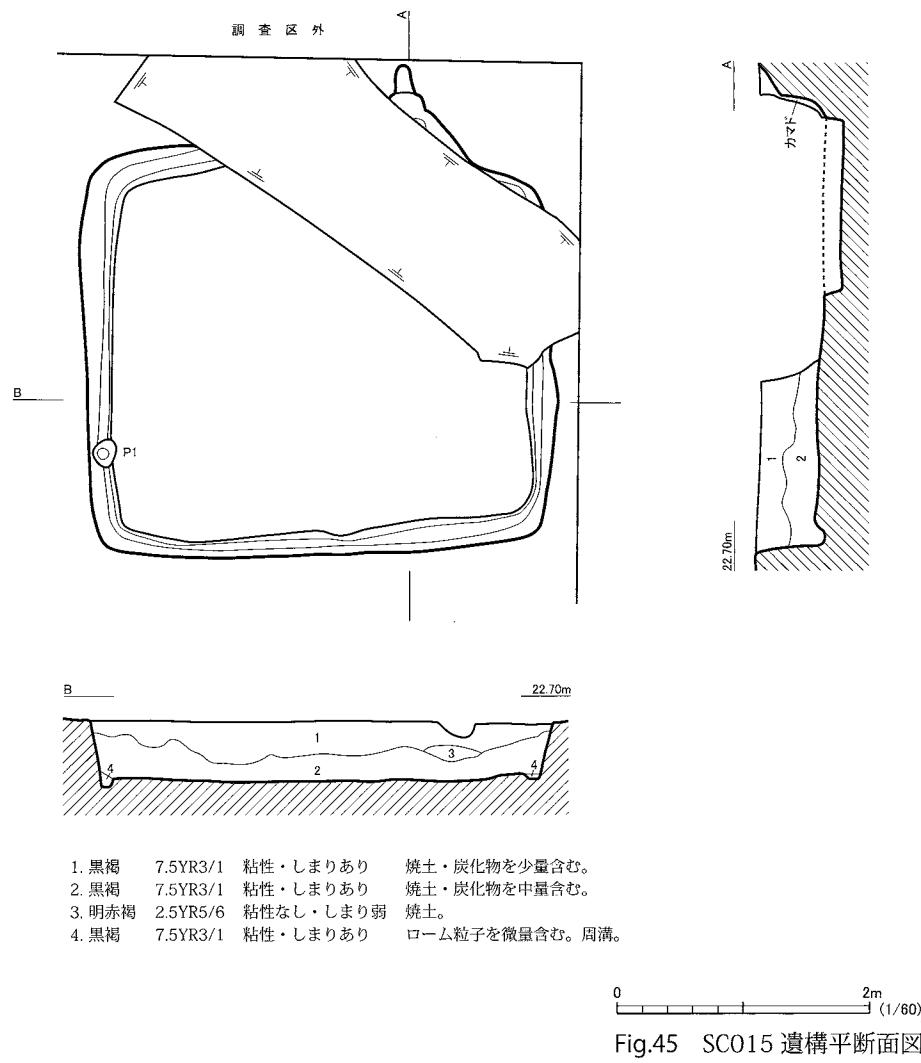


Fig.45 SC015 遺構平面図

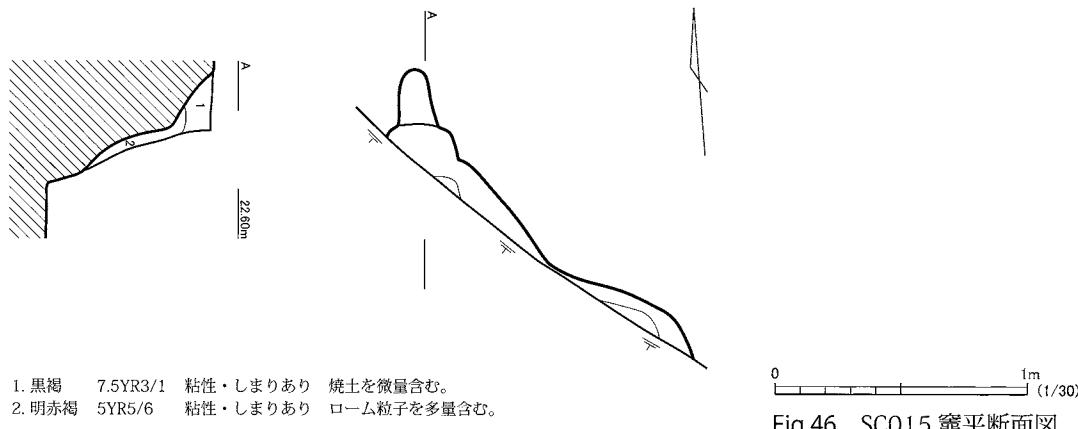


Fig.46 SC015 窯平面断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	N - 2 - E
	規 模	南北 3.30 m × 東西 3.60 m
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.50 m を測る
	ピット	確認できた範囲においては認められず
	周 溝	北壁と東壁の一部が搅乱により消失するが、竈を挟みほぼ全周するものと考えられる
竈	床 面	全体的に硬化する
	掘 形	なし
	位 置	北壁の東側寄り
	形 状	搅乱により大部分が消失しているが、煙道は長くのびる
	中心軸長	0.80m (推定)
竈	燃焼口幅	0.60m (推定)
	壁	確認できた範囲においては火熱を受けた面は認められず
	火 床	搅乱により不明
竈	袖 部	搅乱により不明

Tab.29 SC015 遺構観察表

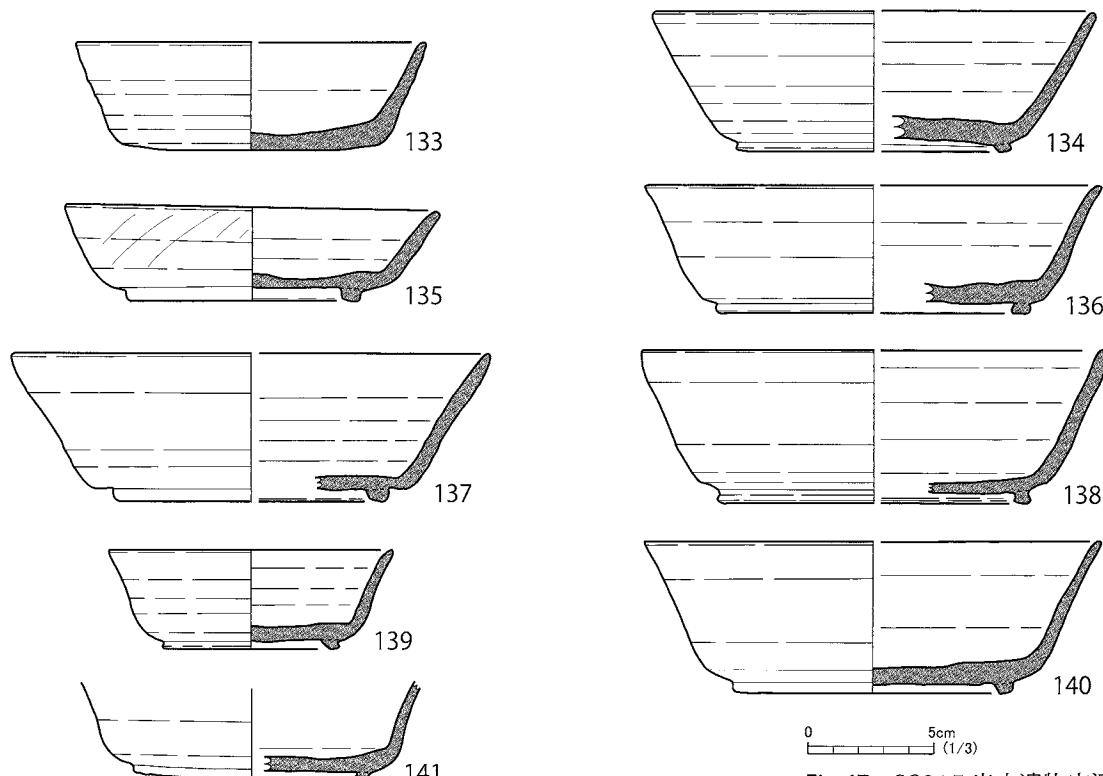


Fig.47 SC015 出土遺物実測図 -1

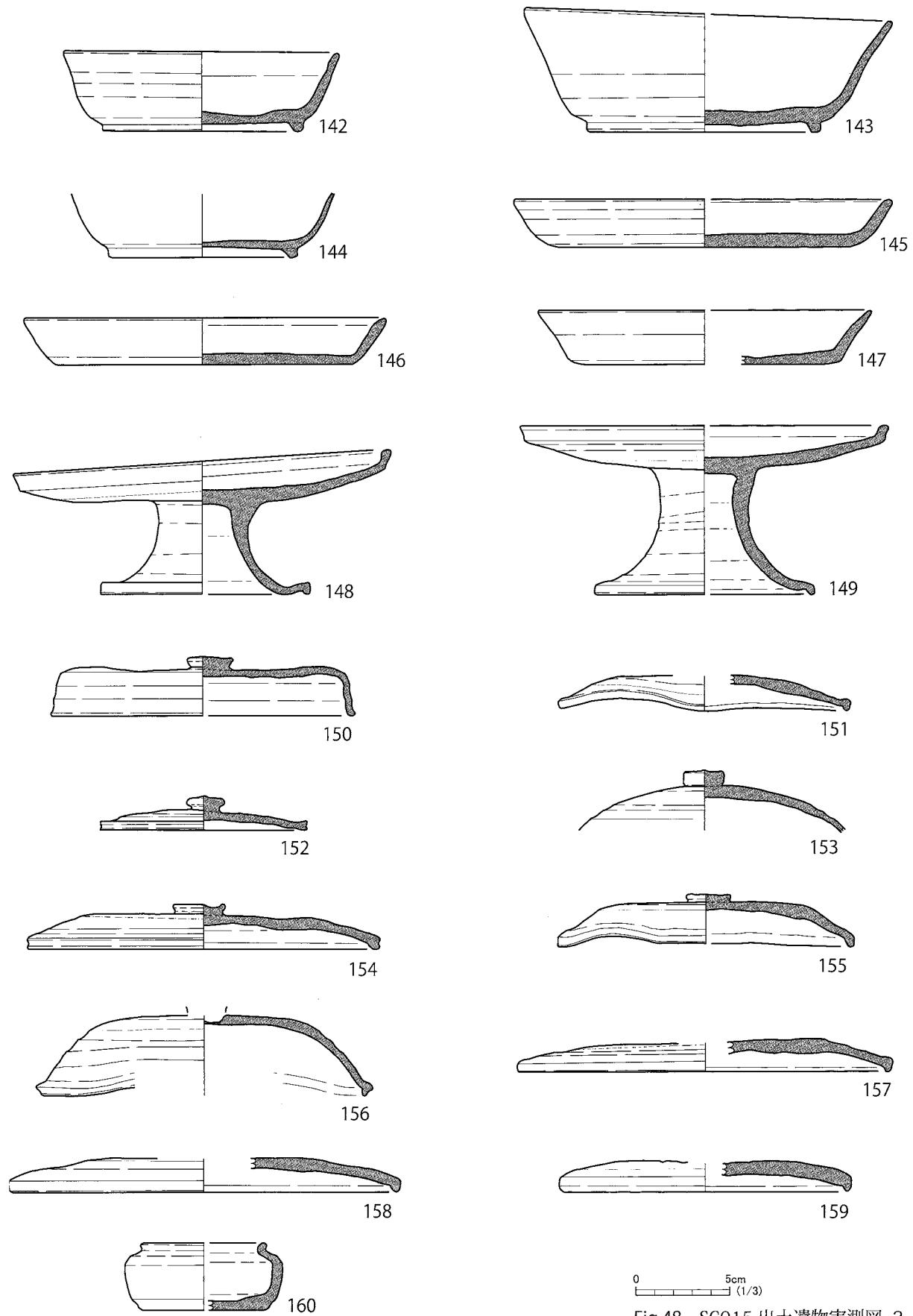


Fig.48 SC015 出土遺物実測図 -2

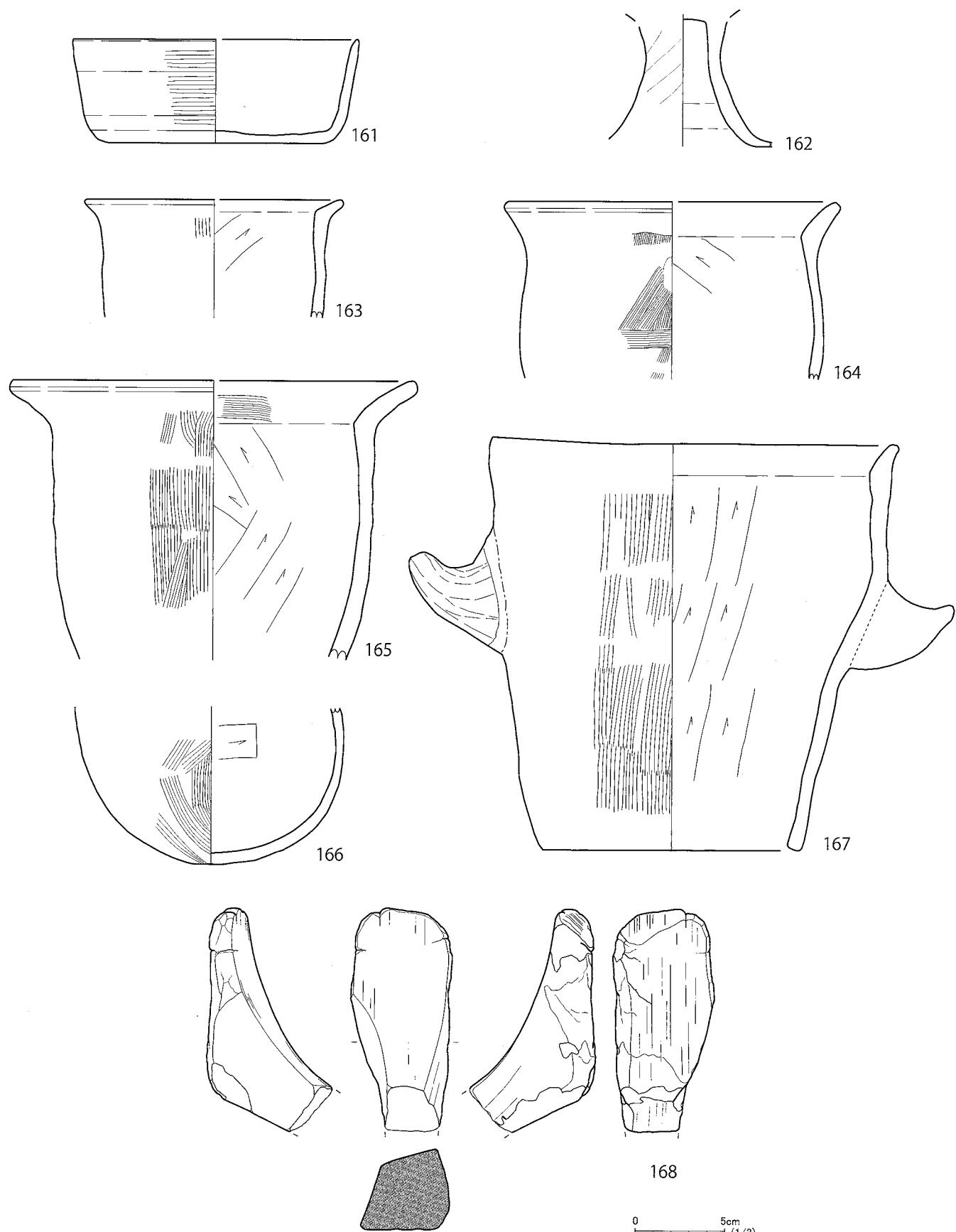


Fig.49 SCO15 出土遺物実測図 -3

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
133	須恵器	攪乱	(13.9)	10.1	4.3	にぶい黄橙 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。底端周縁部は手持ちヘラ削りによる調整。
	环						
134	須恵器	埋土下層	(17.8)	(11.0)	5.5	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
135	須恵器	埋土下層	14.9	9.2	3.9	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部外面には下位から口縁に向け、絞りあげた痕が斜め方向に残る。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
136	須恵器	埋土下層	(18.1)	(12.4)	5.1	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部でやや外反する。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
137	須恵器	埋土下層	(19.0)	(10.6)	5.9	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
138	須恵器	埋土上層・埋土下層 床面上	(18.4)	(12.5)	6.1	にぶい黄橙 10YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
139	須恵器	攪乱	11.4	7.1	3.9	灰白 10YR 8/2	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部でやや外反する。断面四角の高台が底端部より内側に、外に跳ね上げるように貼り付けられる。
	环身						
140	須恵器	埋土下層	(18.3)	11.2	6.0	にぶい橙 2.5YR 6/6	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部より内側に貼り付けられる。底部は回転ヘラ削り調整。
	环身						
141	須恵器	床面上	不明	9.4	不明	明褐灰 7.5YR 7/1	断面四角の高台が内傾気味に、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
142	須恵器	床面上	(14.8)	—	4.4	灰白 10YR 8/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部付近に貼り付けられる。焼成不良で軟質。
	环身						
143	須恵器	埋土下層	(19.7)	12.3	6.7	灰白 10YR 8/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部付近に貼り付けられる。焼成不良で軟質。
	环身						
144	須恵器	埋土下層	不明	3.4	9.8	浅黄橙 10YR 8/3	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部に貼り付けられる。焼成不良で軟質。
	环身						
145	須恵器	埋土下層	(20.2)	15.3	2.6	灰白 10YR 8/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。底部は回転ヘラ削り調整。
	皿						
146	須恵器	埋土下層	(19.3)	15.7	2.5	灰白 10YR 8/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。焼成不良で軟質。
	皿						
147	須恵器	床面上	(17.8)	(14.3)	2.9	にぶい黄橙 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。焼成不良で軟質。
	皿						
148	須恵器	埋土上層 埋土下層	20.1	11.1	6.45 ~ 7.7	褐灰 7.5YR 6/1	环部は浅く、外面は回転ヘラ削り調整。口縁部を短く外傾気味に立てる。
	高环						
149	須恵器	埋土下層	(19.6)	11.7	9.0	褐灰 7.5YR 6/1	环部は浅く、外面は回転ヘラ削り調整。口縁部を短く外傾気味に立てる。
	高环						
150	須恵器	埋土下層	(16.2)	—	3.25	褐灰 7.5YR 5/1	天井部は回転ヘラ削り調整。
	壷蓋						
151	須恵器	埋土下層	15.5	—	不明	褐灰 7.5YR 6/1	口縁部は断面三角形で、短く屈曲する。天井部は回転ヘラ削り調整。
	壷蓋						
152	須恵器	埋土下層	11.0	—	1.8	褐灰 7.5YR 6/1	口縁端部を僅かに摘み出し肉厚にする程度で、稜線は判然としない。天井部は回転ヘラ削り調整。
	蓋						
153	須恵器	床面上	不明	—	不明	褐灰 7.5YR 6/1	天井部は回転ヘラ削り調整。
	壷蓋						
154	須恵器	埋土上層 埋土下層	18.8	—	2.4	褐灰 7.5YR 6/1	口縁部内側には稜が認められるものの、端部は摘み出した程度の僅かなものである。天井部は回転ヘラ削り調整。
	壷蓋						

Tab.30 SC015 出土遺物観察表 -1

() 内の数値は推定の法量を表す

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
155	須恵器 坏蓋	埋土下層	15.8	—	2.8	褐灰 7.5YR 6/1	口縁部は断面三角形で、短く外傾して屈曲する。天井部は回転ヘラ削り調整。器形に歪みが生じる。
156	須恵器 坏蓋	埋土下層	(18.0)	—	不明	褐灰 10YR 4/1	口縁部は断面三角形で、短く内傾して屈曲する。天井部は回転ヘラ削り調整。器形に歪みが生じる。
157	須恵器 坏蓋	埋土下層	20.0	—	不明	灰白 10YR 8/1	口縁部内側には稜が認められるものの、端部は摘み出した程度の僅かなものである。天井部は回転ヘラ削り調整。
158	須恵器 坏蓋	埋土下層	(20.9)	—	不明	灰白 10YR 8/1	口縁部内側には稜が認められるものの、端部は摘み出した程度の僅かなものである。天井部は回転ヘラ削り調整。
159	須恵器 坏蓋	埋土上層	(15.5)	—	不明	明褐灰 7.5YR 7/1	口縁端部は摘み出した程度の僅かなものである。天井部は回転ヘラ削り調整。
160	須恵器 短頸壺	埋土下層	(6.8)	(6.6)	3.6	褐灰 7.5YR 6/1	体部下位は回転ヘラ削り。口縁部を短く直立させる。底部は手持ちヘラ削り。
161	土師器 坏	床面上	(16.2)	12.6	5.8	浅黄橙 7.5YR 8/4	体部は直線的に外上方に立ち上がり、外面にはハケ目。底部は回転ヘラ切り後に、ナデ調整。
162	土師器 高坏	床面上	不明	不明	不明	浅黄橙 10YR 8/3	坏部は欠損。脚部外面には、絞りあげた痕が斜め方向に残る。
163	土師器 甕	埋土下層	(14.4)	不明	不明	橙 5YR 6/6	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
164	土師器 甕	埋土下層	(18.8)	不明	不明	にぶい橙 5YR 6/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
165	土師器 甕	埋土上層	(22.8)	不明	不明	にぶい橙 7.5YR 6/3	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
166	土師器 壺	床面上	不明	—	不明	にぶい橙 5YR 7/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。底部は丸底となる。
167	土師器 甕	埋土下層	(22.8)	14.4	22.7 ~ 23.1	橙 5YR 7/6	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
168	石製品 砥石	床面上	最大長 12.5	最大幅 5.7	最大厚 7.0	重さ(g) 340.0	使用頻度の高い面が、磨り減り大きく湾曲する。他の面にも使用時の擦痕が認められる。

Tab.31 SC015 出土遺物観察表 -2

()内の数値は推定の法量を表す

SC016 積穴式住居跡

【遺構】

平面形態が長方形を呈し、壁高も他の住居跡と比較すると浅い。床面はロームが全体的に硬化し、周溝は認められない。

竈は西壁の北側寄りに構築される。奥壁までが短く、燃焼口の幅が広い。

両袖は残存しており、粘土で構築される。

【遺物】

坏身(170～173)は低い高台が、底端部より内側に貼り付き、体部が直線的に外上方に立ち上がる。

坏蓋(176・177)は口縁部を僅かに摘み出し、肉厚にした程度で、口縁部内側の稜は消失している。

こうした特徴から8世紀代前半を主体とした遺物構成とみなせるが、坏蓋の口縁部の消失化を考慮すると、前半中葉以降のものとして捉えることも可能ではないだろうか。

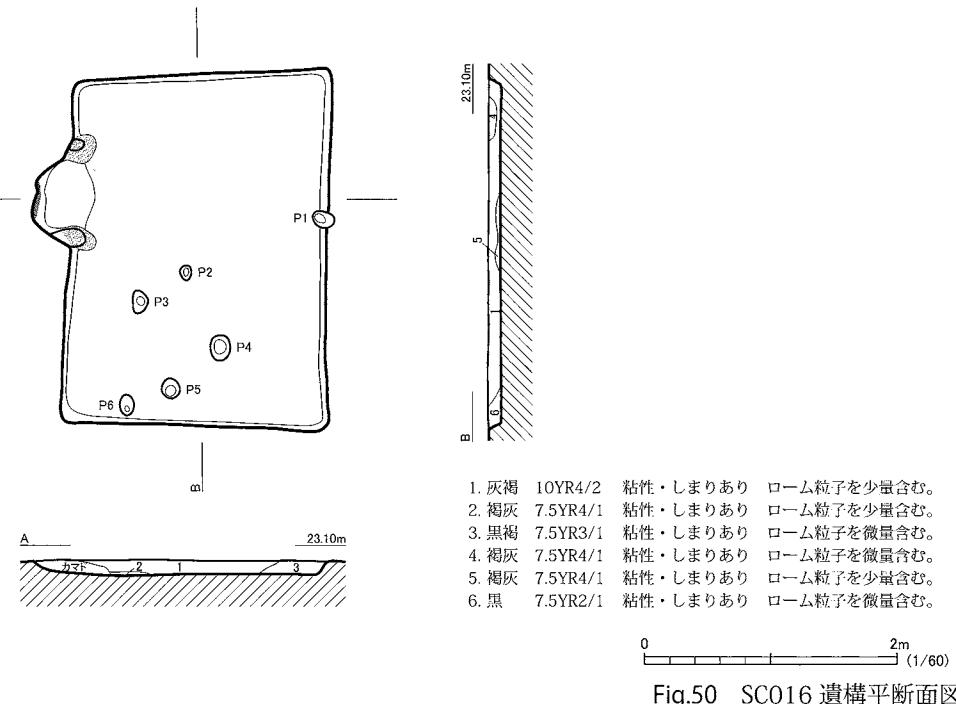


Fig.50 SC016 遺構平面図

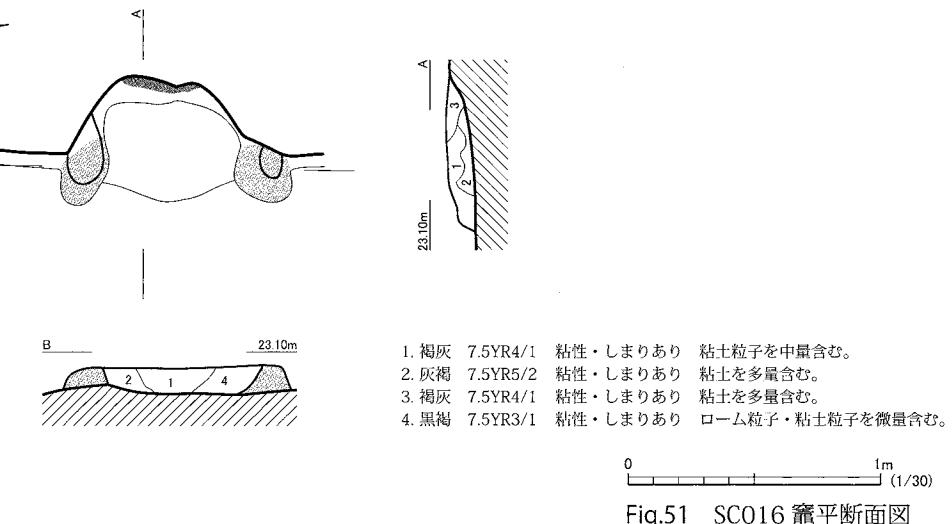


Fig.51 SC016 竪平面図

全 体	平面形態	長方形
	主軸角度	W—78—N
	規 模	南北2.75m×東西2.05m
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ0.10mを測る
	ピット	不規則な配置で6基が認められる
	周 溝	なし
竪	床 面	全体的に硬化する
	掘 形	なし
	位 置	西壁の北側寄り
竪	形 状	燃焼口が広く、奥壁までが短い
	中心軸長	0.40m(推定)
	燃焼口幅	0.50m(推定)
	壁	奥壁に火熱を受けた面を認める
	火 床	なし
袖 部	袖 部	両袖を粘土により構築

Tab.32 SC016 遺構観察表

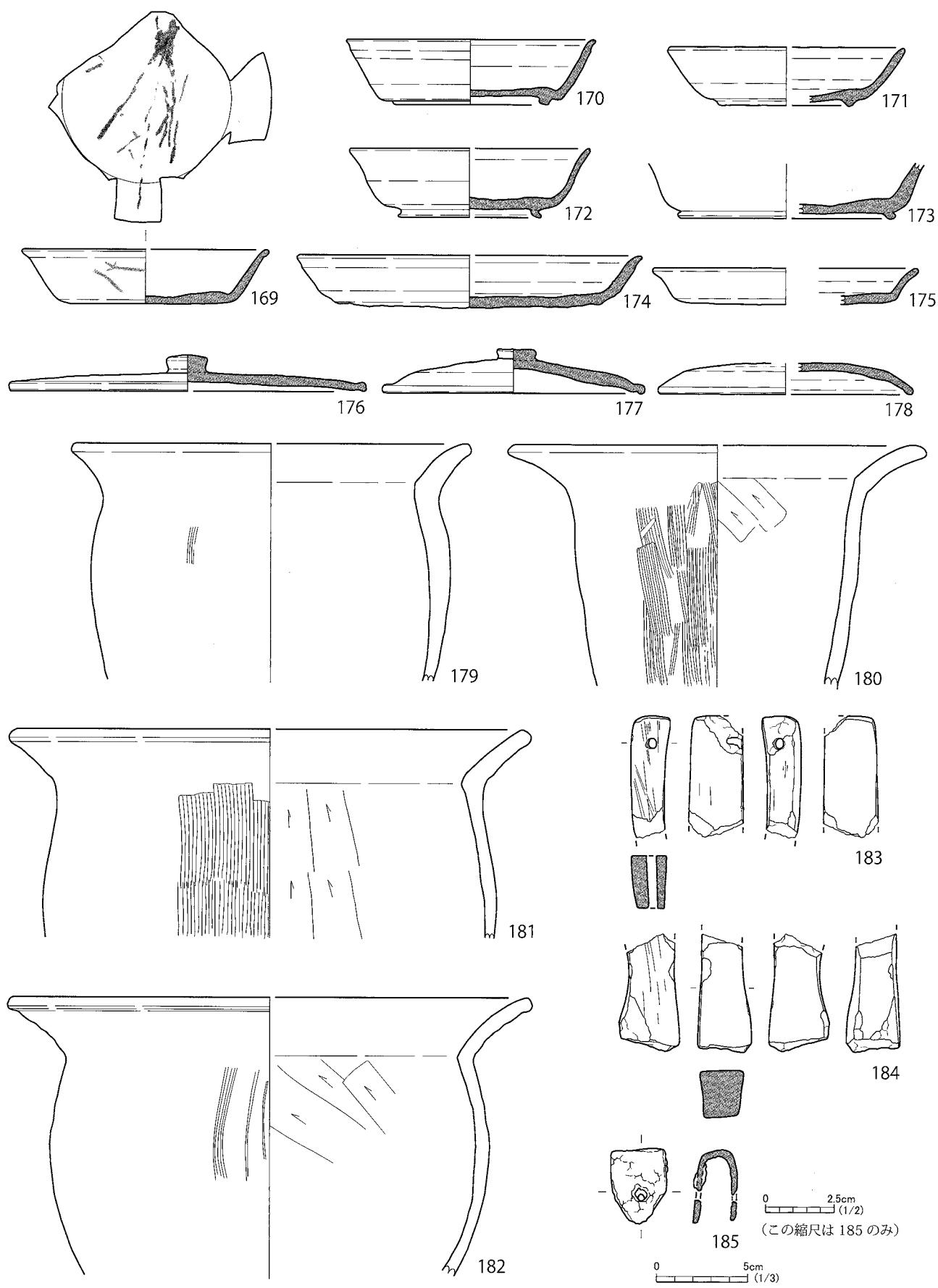


Fig.52 SC016 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
169	須恵器 环	埋土	(13.6)	9.3	3.0	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外方に立ち上がる。内面および体部外面に火ダスキが認められる。底部は回転ヘラ切りした後の調整は認められない。
170	須恵器 环身	床面上	13.6	8.4	3.6	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外方に立ち上がる。断面四角の高台が内傾気味に、底端部より内側に貼り付けられる。
171	須恵器 环身	床面上	(13.0)	(7.3)	3.2	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に開き気味に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部より内側に貼り付けられる。
172	須恵器 环身	床面上	(13.2)	(7.8)	3.8	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外方に立ち上がり、口縁部で外反する。断面四角の高台が、底端部に開き気味に貼り付けられる。
173	須恵器 环身	埋土	不明	(11.9)	不明	灰白 10YR 8/2	断面四角の高台が大きく開き、底端部に貼り付けられる。焼成不良で軟質。
174	須恵器 皿	床面上	(18.9)	(14.5)	2.9	にぶい黄橙 10YR 7/2	体部は直線的に外方に立ち上がり、口縁部でやや外反する。底部は回転ヘラ切り後の調整は認められない。
175	須恵器 皿	埋土	(14.6)	(12.2)	2.0	灰黄褐 10YR 6/2	体部は直線的に外方に立ち上がり、口縁部で外反する。底部は回転ヘラ切りしたままの状態。
176	須恵器 环蓋	床面上	(19.5)	—	2.0	灰黄褐 10YR 6/2	口辺は退化し認められない。天井部は回転ヘラ削り調整。
177	須恵器 环蓋	埋土	14.4	—	2.4	褐灰 10YR 5/1	口縁内面の稜は失われ、端部は僅かにつまみ出した程度である。天井部外面は回転ヘラ切り後に、手持ちヘラ削り。
178	須恵器 环蓋	埋土	(14.0)	—	不明	にぶい黄橙 10YR 7/3	口辺は退化し認められない。天井部は回転切り後に、手持ちヘラ削り。焼成不良で軟質。
179	土師器 甕	埋土	(22.0)	不明	不明	にぶい橙 5YR 6/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。胎土に砂礫を多量に含む。
180	土師器 甕	埋土	(23.0)	不明	不明	にぶい橙 5YR 6/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。肉厚なつくりで、胎土に砂礫を多量に含む。
181	土師器 甕	埋土	(28.6)	不明	不明	にぶい赤褐 5YR 5/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
182	土師器 甕	埋土	(28.8)	不明	不明	にぶい赤褐 5YR 6/3	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
183	石製品 砥石	埋土	最大長 6.7	最大幅 3.0	最大厚 2.0	重さ(g) 54.3	表砂岩製。使用頻度の高い面が、磨り減り湾曲する。側面に穿孔あり。砂岩製。
184	石製品 砥石	床面上	6.5	3.0	3.0	76.4	使用頻度の高い面が、磨り減り湾曲する。他の面にも使用時の擦痕が認められる。砂岩製。
185	鉄製品 金具	埋土	長さ 2.8	最大幅 1.9	厚さ 2.6	重さ(g) 7.2	板状の金属を中央部でU字状に折り曲げる。両端部に孔をもつ。

Tab.33 SC016 出土遺物観察表

()内の数値は推定の法量を表す

SC017 懸穴式住居跡

【遺構】

北東隅がSC018 懸穴式住居跡と重複しており、当遺構の床面が上位で認められることから、相互の時期については、こちらが新しいと判断した。

竈は東壁の南側寄りに構築される。形態は奥壁までが短く、燃焼口の幅が広い。竈に向かい右脇には浅い小穴が認められるが、まとまった遺物は認められない。

【遺物】

环身（186）は体部を欠くが、高台が底端部より内側に貼り付くことから8世代紀前半の所産と考えられる。环蓋（187）もほぼ同時期のものではあるが、口縁部は摘み出す程度の短さで、消失していく特徴が窺われ、前半中葉以降として捉えられなくもない。

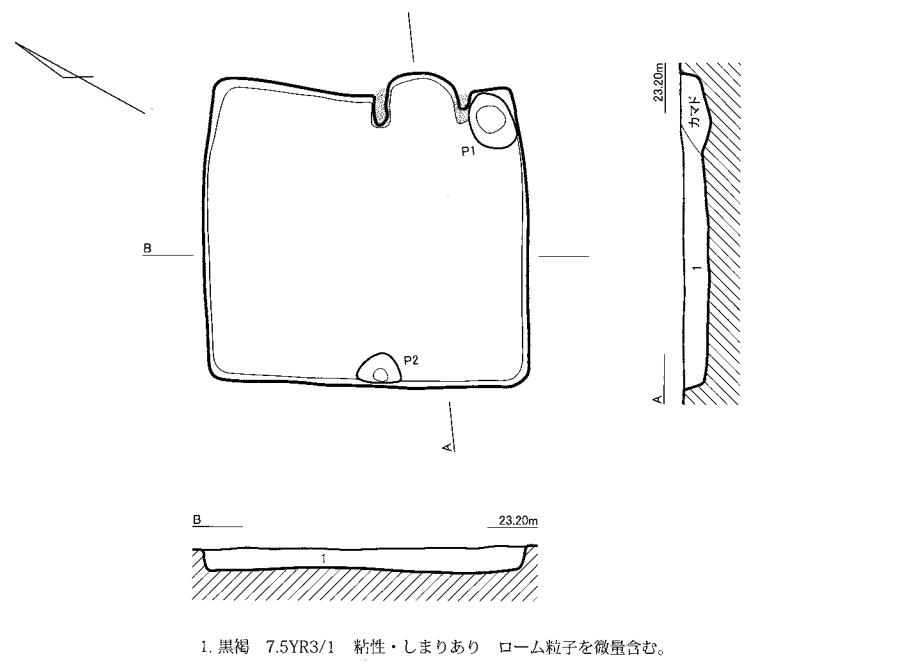


Fig.53 SC017 遺構平断面図

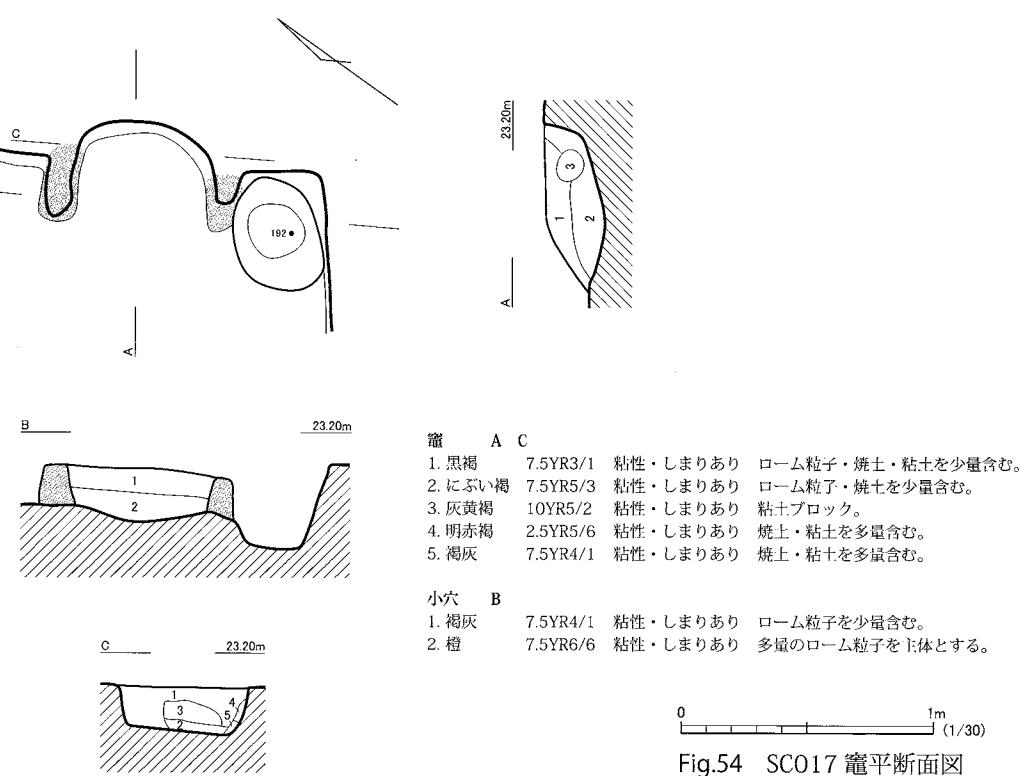


Fig.54 SC017 窯平断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	N - 67 - E
	規 模	南北 2.55 m × 東西 2.45 m
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.15 m を測る
	ピット	竈の南脇に 0.33 × 0.45 m、深さ 0.10 の小穴 1 基
	周 溝	なし
床 面	床 面	全体的に硬化する
	掘 形	なし
竈	位 置	東壁の南側寄り
	形 状	燃焼口が広く、奥壁までが短い
	中心軸長	0.50m
	燃焼口幅	3.50m
	壁	火熱を受けた面は認められず
	火 床	なし
	袖 部	両袖を粘土により構築

Tab.34 SC017 遺構観察表

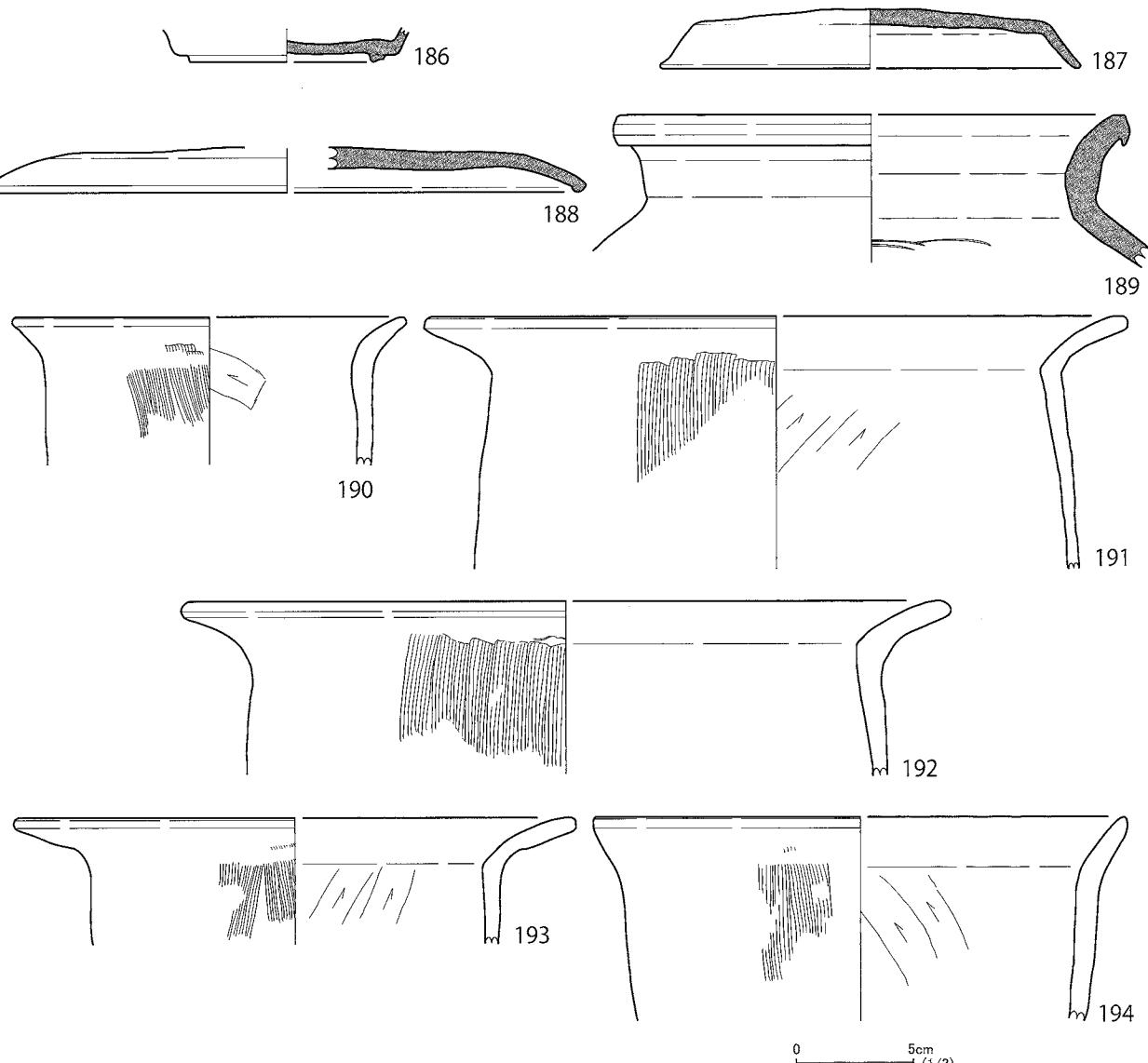


Fig.55 SC017 出土遺物実測図 -1

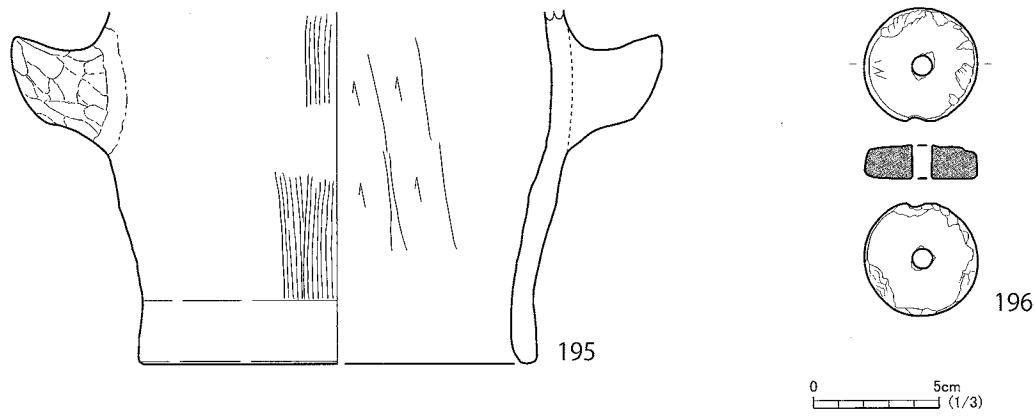


Fig.56 SC017 出土遺物実測図 -2

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
186	須恵器	床面上	不明	8.4	不明	褐灰 10YR 6/1	断面四角の低い高台が底端部より内側に、外に跳ね上げるように貼り付けられる。
	壺身						
187	須恵器 蓋	埋土	(18.0)	—	2.5	褐灰 10YR 6/1	口縁部をハの字状に屈曲させる。天井部はヘラ切り後は、ナデ調整。
188	須恵器 壺蓋	竈外	(25.6)	—	不明	褐灰 10YR 6/1	口縁部は端部を摘み出した程度の僅かなものである。天井部は回転ヘラ削り調整。
	壺						
189	須恵器 壺	竈外	(22.0)	不明	不明	にぶい黄橙 10YR 6/1	口縁端部を外側に折り曲げ、肥厚にする。内面には青海波紋が認められる。
190	土師器 甕	竈内	(16.8)	不明	不明	橙 5YR 6/6	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
191	土師器 甕	竈外	(30.0)	不明	不明	橙 5YR 6/6	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
192	土師器 甕	竈火床上	(32.8)	不明	不明	橙 5YR 6/6	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
193	土師器 甕	P1	(24.0)	不明	不明	橙 5YR 6/6	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
194	土師器 甕	床面上	(22.8)	不明	不明	橙 5YR 6/6	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
195	土師器 甕	埋土	不明	(15.8)	不明	橙 5YR 7/6	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
196	石製品 紡錘車	床面上	径	厚さ	孔径	重さ(g)	円板状の紡輪部。滑石製。
			4.5	1.3	0.8	46.5	

() 内の数値は推定の法量を表す

Tab.35 SC017 出土遺物観察表

SC018 竪穴式住居跡

【遺構】

南壁沿いにベッド状の段が認められ、その一部を SC017 竪穴式住居跡が破壊する。段は床面より 10cm 前後の高さで、ロームを削り出し構築される。平面形態は 1.1 m × 0.5 m の長方形を呈する。

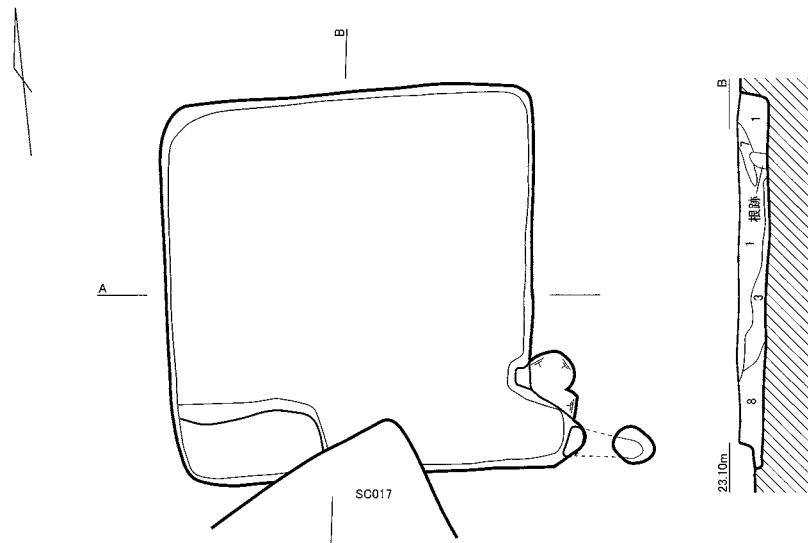
竈は東壁の南側に構築される。竈に向かい左側には、ロームを削り出した袖部が認められる。右側については、住居の南壁がそのまま延長して、竈の壁面となるため、袖部らしきものは認められない。奥壁には穴が穿たれ、煙道部がトンネルの状態で延びる。その先端には煙出しの小穴があり、土師器の甕の破片が集中して出土する。

【遺物】

环身（197～203）は体部下位が丸味を帯び、高台は底端部よりやや内側に貼り付く傾向が認められる。

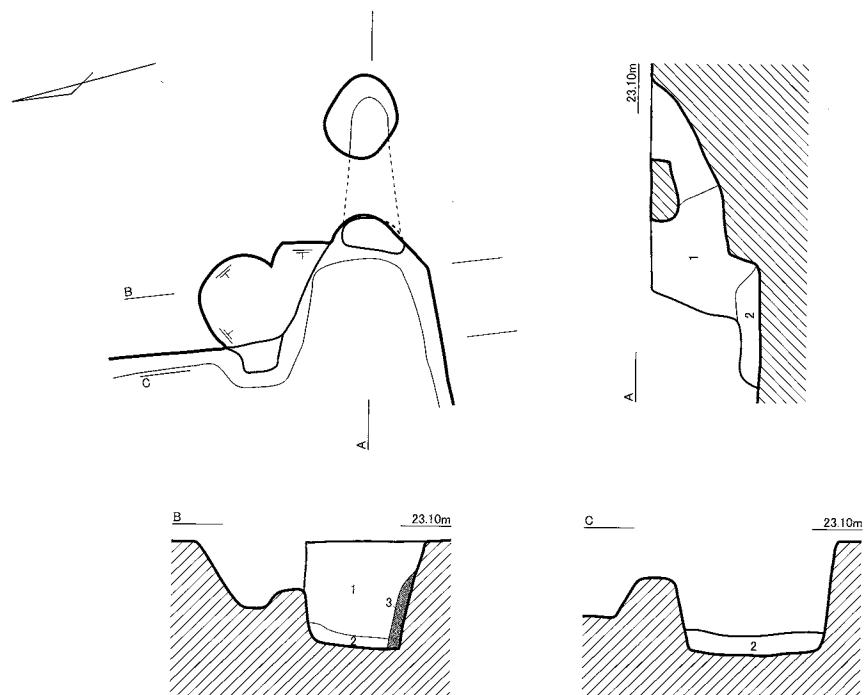
环蓋（204・205）は口縁部を断面三角形にし、内傾気味に短く屈曲させる。内側には稜が明瞭に認められる。これらの特徴から 8 世紀前半の所産と考えられる。

この他には、体部上位に「大」とヘラ書きされた文字を持つ甕（208）が認められる。



- | | | | |
|---------|----------|----------|----------------------|
| 1. 黒褐 | 7.5YR3/1 | 粘性・しまりあり | ローム粒子・粘土・焼土を少量含む。 |
| 2. にぶい橙 | 7.5YR6/4 | 粘性・しまりあり | ロームブロック・粘土を多量含む。 |
| 3. 褐灰 | 7.5YR4/1 | 粘性・しまりあり | ロームブロック・粘土を中量含む。 |
| 4. 褐灰 | 7.5YR4/1 | 粘性・しまりあり | ロームブロック・粘土を少量含む。 |
| 5. 褐灰 | 7.5YR4/1 | 粘性・しまりあり | ロームブロック・粘土を少量含む。 |
| 6. 褐灰 | 10YR6/1 | 粘性・しまりあり | 粘土を多量含む。焼土・炭化物を微量含む。 |
| 7. 褐灰 | 10YR6/1 | 粘性・しまりあり | 粘土を多量含む。焼土・炭化物を微量含む。 |
| 8. 黒褐 | 7.5YR3/1 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を微量含む。 |

Fig.57 SC018 遺構平面図



1. 黒褐色 7.5YR3/1 粘性・しまりあり ローム粒子・焼土・粘土を少量含む。
2. 褐灰色 7.5YR4/1 粘性・しまりあり 粘土。
3. 黒褐色 7.5YR3/1 粘性なし 热作用を受け颗粒状となった焼土を多量に含む。
4. 黒褐色 7.5YR3/1 粘性・しまりあり ローム粒子を少量含む。

Fig.58 SC018 窯平面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	N - 96 - E
	規 模	南北 3.00 m × 東西 2.90 m
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.25 m を測る
	ピット	なし
	周 溝	なし
	床 面	全体的に硬化する 南壁西側にベッド状の段あり
竈	掘 形	なし
	位 置	東壁の南側
	形 状	煙道が長く延び、その先に煙出しの小穴がある
	中心軸長	1.05m
	燃焼口幅	0.45m
	壁	火熱を受けた面は認められず 住居の南壁が延長し、竈の壁をなす
	火 床	なし
袖 部	袖 部	北側にロームを削り出した短い袖が認められる

Tab.36 SC018 遺構観察表

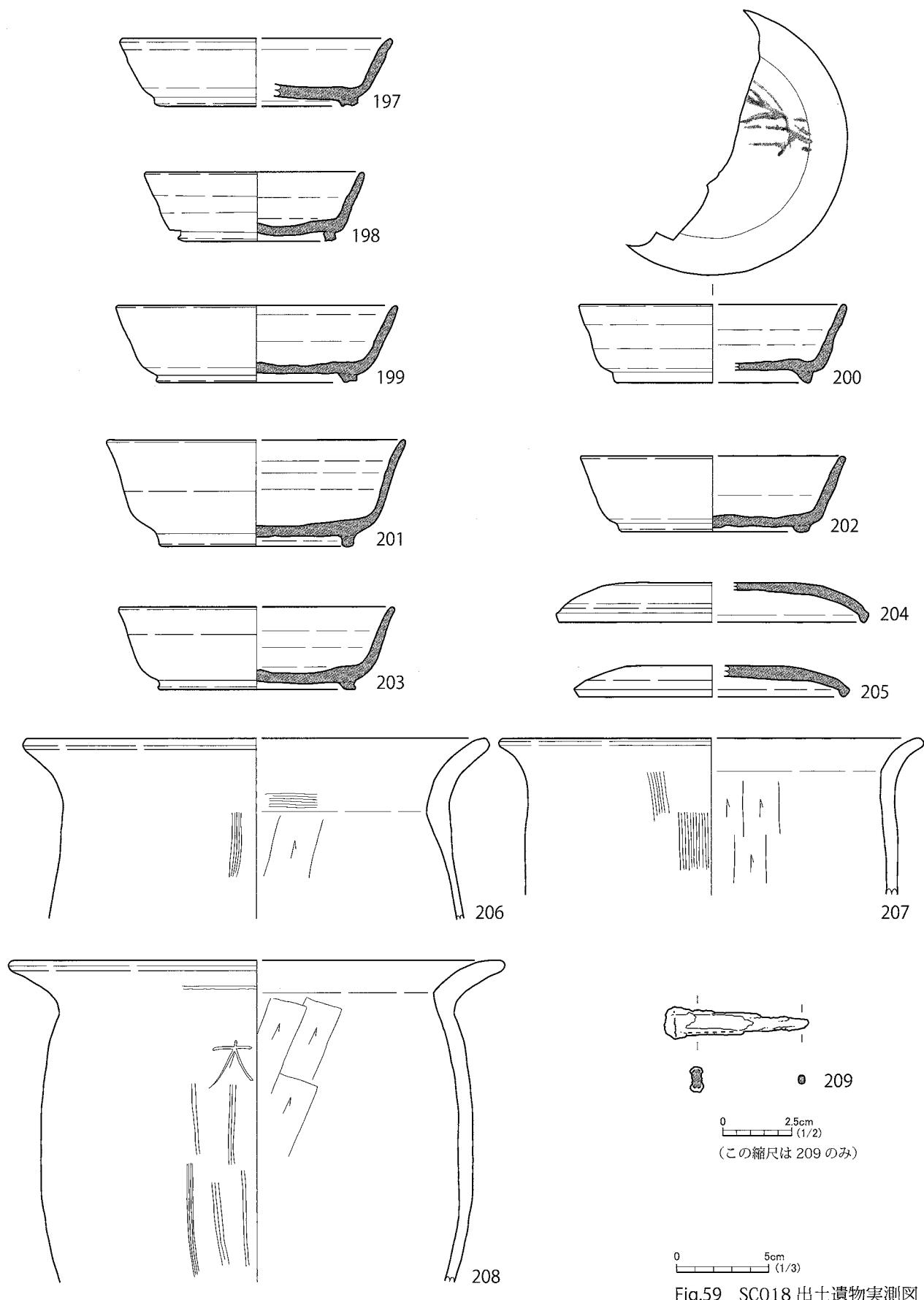


Fig.59 SC018 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
197	須恵器 环身	埋土下層	(14.8)	(11.1)	3.7	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部に開き気味に貼り付けられる。
198	須恵器 环身	埋土	12.0	8.5	3.8	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に開き気味に貼り付けられる。
199	須恵器 环身	埋土	15.3	10.9	4.2	にぶい橙 7.5YR 7/4	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部付近に貼り付けられる。
200	須恵器 环身	埋土	(14.6)	(10.6)	4.3	灰褐 7.5YR 5/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面三角の高台が、底端部付近に貼り付けられる。高台内に火ダスキ。
201	須恵器 环身	埋土上層 床面上	(16.2)	(10.6)	5.8	褐灰 10YR 4/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部付近に貼り付けられる。
202	須恵器 环身	埋土	(14.4)	10.4	4.15	灰白 7.5YR 8/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部付近に貼り付けられる。焼成不良で軟質。
203	須恵器 环身	埋土	(15.0)	(10.8)	4.5	灰白 7.5YR 8/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部付近に貼り付けられる。焼成不良で軟質。
204	須恵器 环蓋	埋土	(16.6)	—	2.15	褐灰 7.5YR 6/1	口縁部は断面三角形で、垂直に短く屈曲する。天井部は回転ヘラ削り調整。
205	須恵器 环蓋	埋土	(14.5)	—	1.75	にぶい橙 7.5YR 7/3	口縁部は断面三角形で、内傾気味に短く屈曲する。天井部は回転ヘラ削り調整。
206	土師器 甕	埋土	(25.4)	不明	不明	橙 5YR 7/6	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
207	土師器 甕	甕内	(23.0)	不明	不明	橙 5YR 6/6	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
208	土師器 甕	埋土上層 床面上	(27.0)	不明	不明	灰白 7.5YR 8/1	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。体部上位に「大」のヘラ書きが認められる。
209	鉄製品 刀子	埋土	残存長 5.2	最大幅 0.7	厚さ 0.4	重さ(g) 4.4	刀子の茎部と思われる。周りに木質の材が付着する。

()内の数値は推定の法量を表す

Tab.37 SCO18 出土遺物観察表

SK019 土坑

【遺構】

平面の形態は小判状で、底面は浅鉢状を呈する。

【遺物】

环蓋（210）は口縁部が断面三角形で、垂直に屈曲させ、内側には稜が明瞭に認められる。こうした特徴から、8世紀代前半の所産として捉えることができる。

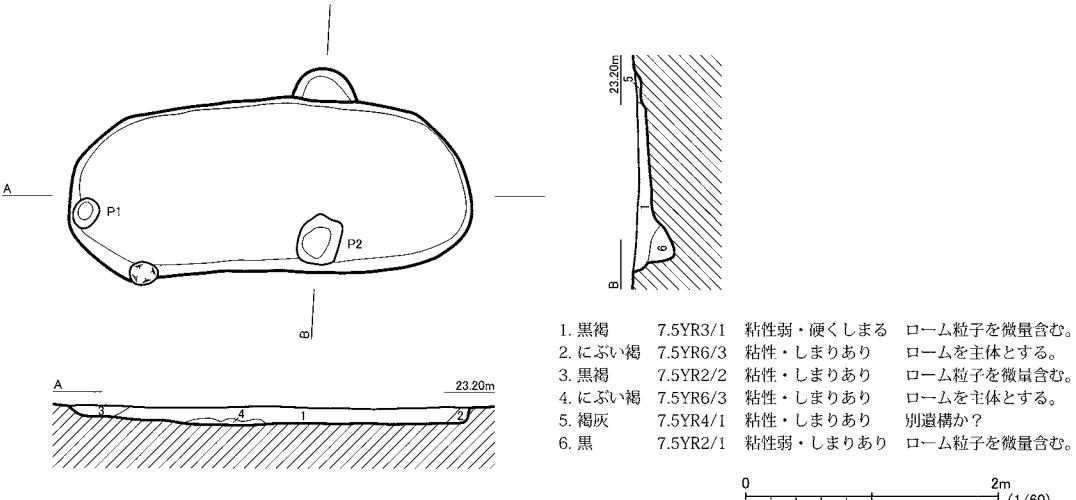


Fig.60 SK019 遺構平断面図

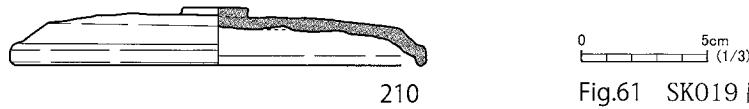


Fig.61 SK019出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
210	須恵器	埋土	16.5	—	2.3	灰白 7.5YR 8/1	口縁部は断面三角形で、ほぼ垂直に屈曲する。内側に稜が明瞭に認められる。天井部は低く、ほぼ水平である。焼成不良で軟質。
	壺蓋						

Tab.38 SK019出土遺物観察表

SK020 土坑

【遺構】

平面の形態は楕円形を呈する。底面は浅鉢状で、ロームが全体的に硬化した状態で認められる。このような状況から、住居跡としての性格も検討できなくはないが、土坑として捉えることに留めた。今後の類例を待ち、再検討しなければならない遺構といえる。

【遺物】

壺身は高台の貼り付く位置が、底端部より内側にあるもの(212・214・219)と、体部下位が湾曲し、底部との境が不明瞭で、そうした位置に高台が貼り付くもの(213・216～218)に大きく分けられる。

壺蓋(221・222)は断面三角形の口縁部を、ほぼ垂直に短く屈曲させ、内側には稜が明瞭にみられる。

壺身の高台の位置や壺蓋の口縁部の特徴から、8世紀代前半を主体とした遺物構成と考えられる。

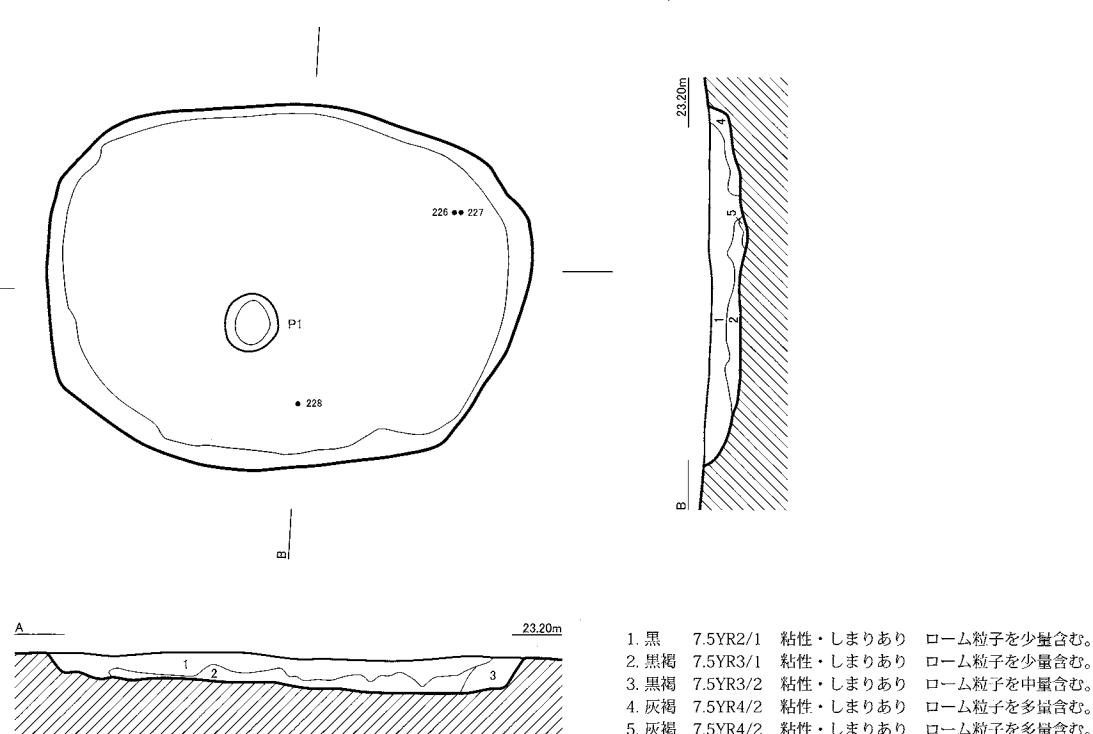
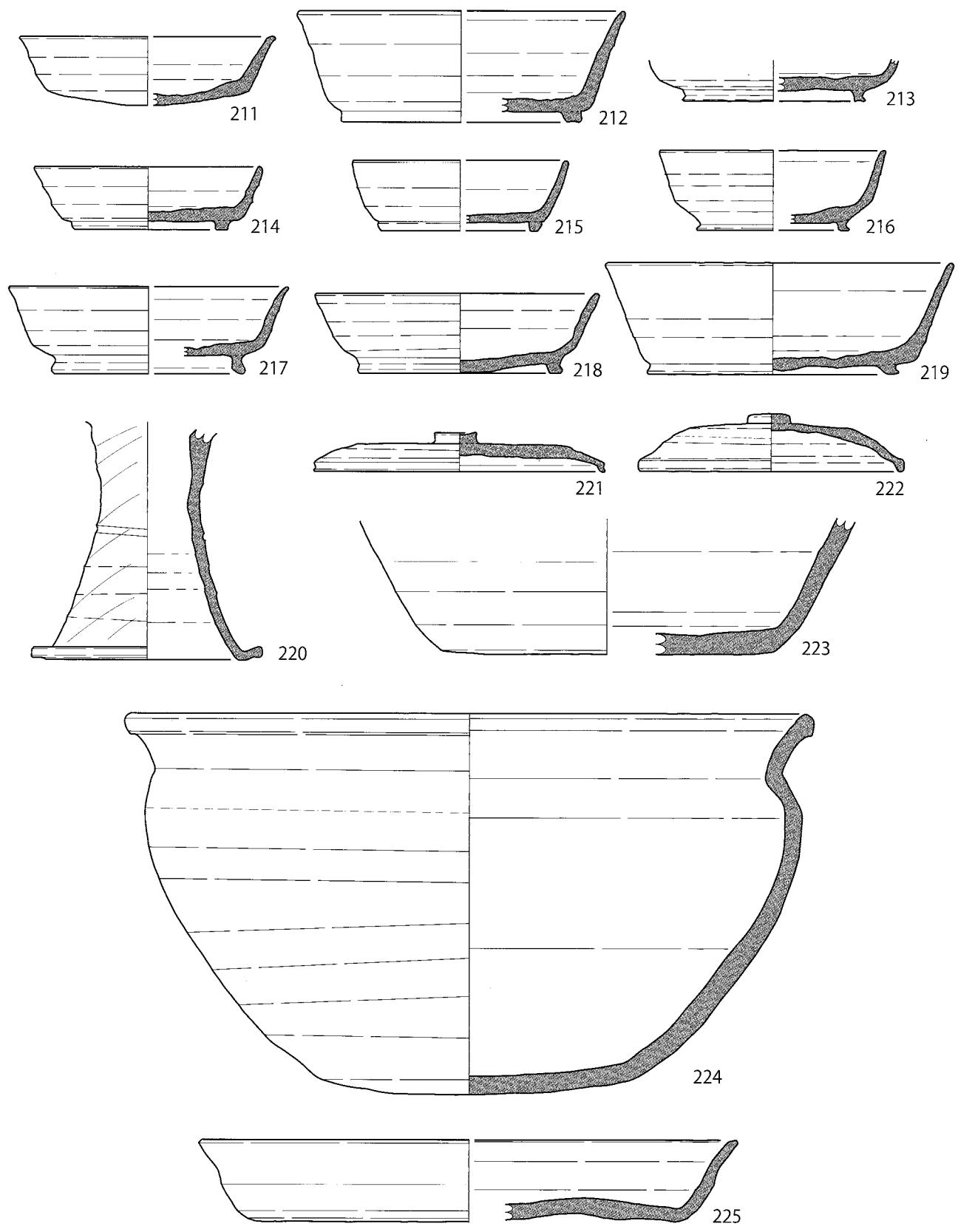


Fig.62 SK020遺構平断面図



0 5cm
(1/3)

Fig.63 SK020 出土遺物実測図 -1

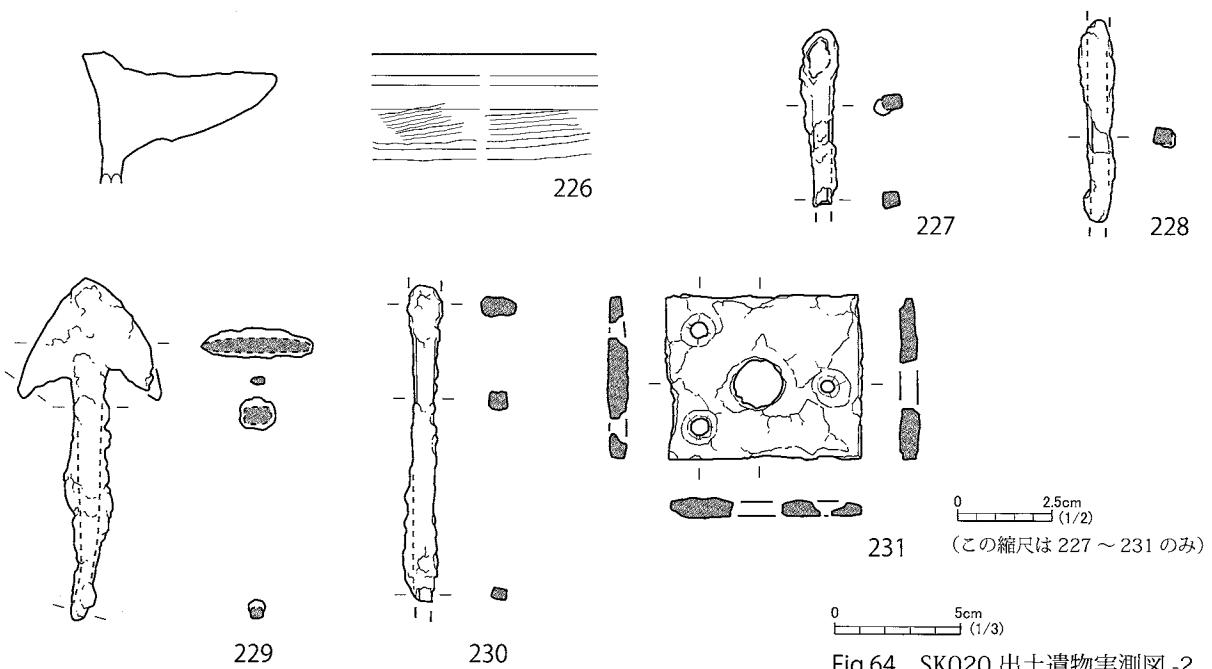


Fig.64 SK020 出土遺物実測図 -2

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
211	須恵器	旧表土	(13.8)	(10.8)	3.7	灰黄褐 7.5YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁でやや外反する。
	环						
212	須恵器	埋土	(17.6)	(12.8)	6.0	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部付近に貼り付けられる。体部と底部の境が丸みを帯びる。
	环身						
213	須恵器	埋土	—	9.8	不明	褐灰 7.5YR 6/1	断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
214	須恵器	埋土	12.2	8.2	3.4	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
215	須恵器	埋土	(11.6)	(8.4)	3.8	褐灰 7.5YR 6/1	口縁部以下がヘラ削り調整。断面四角の高台が、底端部に貼り付けられる。
	环身						
216	須恵器	床面上	(12.2)	(8.2)	4.3	褐灰 7.5YR 6/1	外面体部は底部から下位にかけて大きく開き、これより上位は角度を立ち上げ、直線的に口縁に至る。断面四角の高台が、底端部に貼り付けられる。
	环身						
217	須恵器	埋土	(15.0)	(10.4)	4.7	にぶい橙 7.5YR 6/4	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁でやや外反する。体部と底部の境が丸みを帯びる。高い高台が貼り付けられる。
	环身						
218	須恵器	埋土 旧表土	15.2	10.9	4.3	灰褐 7.5YR 6/2	体部と底部の境が丸みを帯びる。体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部付近に貼り付けられる。
	环身						
219	須恵器	埋土	18.7	13.5	6.0	浅黄橙 10YR 8/4	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部付近に貼り付けられる。焼成不良で軟質。
	环身						
220	須恵器	埋土	不明	12.4	不明	褐灰 10YR 4/1	高い脚部のみが残存し、外面には綾りあげた痕が斜め方向に残る。外面の中央付近に太い沈線が1条廻る。
	高环						
221	須恵器	埋土	15.6	—	2.1	明褐灰 7.5YR 7/2	口縁部は端部を摘み出した程度の僅かなものである。天井部は回転ヘラ削り調整。
	蓋						
222	須恵器	埋土 床面上	14.3	—	3.1	明褐灰 7.5YR 7/2	口縁部断面は丸みを帯び、垂直に短く屈曲する。天井部は回転ヘラ削り調整。焼成不良で軟質。
	环蓋						

Tab.39 SK020 出土遺物観察表 -1

()内の数値は推定の法量を表す

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
223	須恵器 鉢	埋土	不明	(18.0)	不明	灰白 7.5YR 8/2	体部下位は回転ヘラ削り。焼成不良で軟質。
224	須恵器 鉢	埋土 旧表土	37.0	16.7	20.5	灰白 7.5YR 8/2	鈍角な肩部をつくり、そこから口縁を外反させる。口縁部は端部を外側に折り返し、肥厚にする。肩部下は回転ヘラ削りが施される。焼成不良で軟質。
225	須恵器 盤	旧表土	(29.0)	(23.6)	4.4	褐灰 10YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部で外反する。体部下半は回転ヘラ切り。
226	土師器 竈	埋土	不明	不明	不明	橙 5YR 6/6	竈炊口の鍔部分である。全面にハケ目の調整が施され、その後に横ナデされる。貼り合わせ部分には、刻み目をつける。
227	鉄製品 釘	埋土	残存長 4.7	幅 —	厚さ —	重さ(g) 5.7	幹部の下端部を欠損する。断面方形。皿部は残存するが、鍔のため形状は不明。
228	鉄製品 釘	埋土	5.4	—	—	6.1	幹部の上下端部および皿部は欠損する。断面方形。
229	鉄製品 鉄鎌	埋土	9.1	3.8	0.4	21.2	平根式で根は腸操をもつ。ほぼ完存品。
230	鉄製品 鉄鎌	埋土	8.4	0.9	0.5	8.9	尖根式。根・鎌被の先端部を欠損する。
231	鉄製品 金具	旧表土	縦 4.4	横 5.2	厚さ 0.6	重さ(g) 38.6	中央に大きめの孔があり、この周間に3つの小さめの孔が並ぶ。小さい孔は、いずれも同一の片面から削られ捕鉢状の断面を呈する。

Tab.40 SK020 出土遺物観察表 -2

() 内の数値は推定の法量を表す

SC021 竪穴式住居跡

【遺構】

西側の約1/2が調査区外にあるため、全体を確認するには至らなかった。竈についても未調査部分の、北壁西側か西壁のいずれかに構築されていたと推測される。

壁面上端は直線的でなく、中央がやや膨らむ。下端もこれにほぼ並行する傾向から、上端が崩れた結果ではないものと思われる。

【遺物】

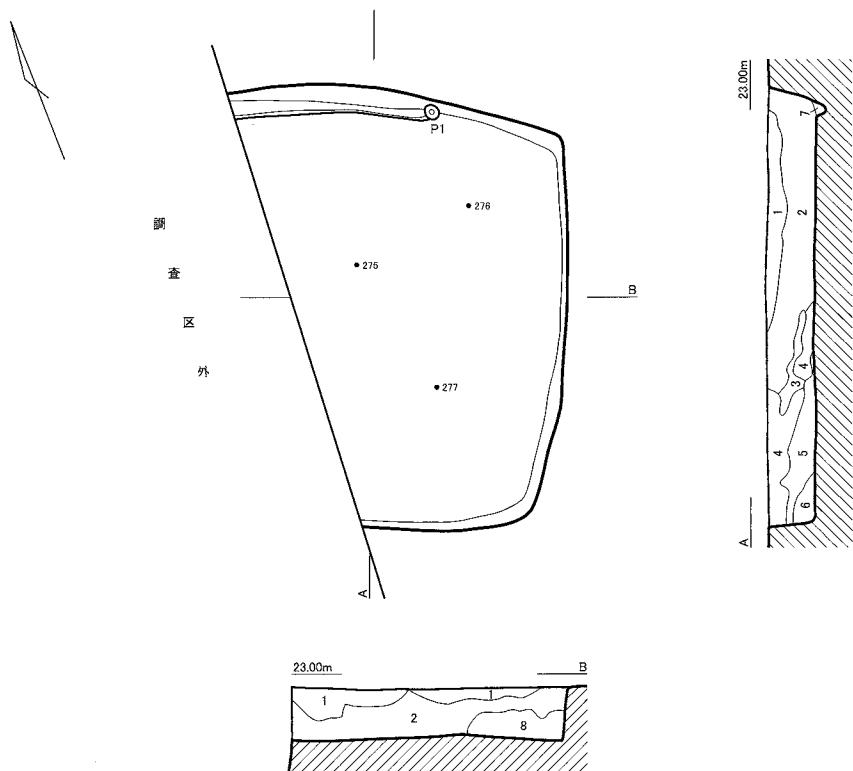
埋土から出土する遺物量は多く、下層に掘り進むに従い、完存もしくはそれに近い良好な残存状態のものが増える傾向にある。

壺身(233～253)は、断面四角の低い高台が底端部より内側に貼り付き、体部下位から底部にかけて丸みを帯びるものが多い。

壺蓋は宝珠形のツマミを貼り付け、口縁部を垂直に下方へと長く延ばしたタイプ(257)。口縁部を外に開き長く延ばしたタイプ(269)。断面三角形の口縁部を短く屈曲させるタイプ(258～261)。口縁部を僅かに摘み出す程度のもの(262・263)に大別できる。

長頸壺(265～267)は3点を出土するが、いずれも完存品ではなく、体部の上位を屈曲させ明瞭な稜をなす。類似するものは、大宰府の第Ⅱ期政庁の地鎮具として用いられている。

こうした壺身や壺蓋の特徴から、遺物は8世紀代前半を主体とした構成であるが、一部においては中葉以降のものとして、捉えられなくもない壺蓋もある。



1. 黒褐 7.5YR3/1 粘性・しまりあり 焼土・炭化物・ローム粒子を少量含む。
 2. 灰褐 7.5YR4/2 粘性・しまりあり ローム粒子・炭化物・焼土を中量含む。
 3. 灰褐 7.5YR4/2 粘性・しまりあり ロームブロックを多量に含む。
 4. 黒褐 7.5YR3/1 粘性・しまりあり 焼土・炭化物・ローム粒子を少量含む。
 5. 灰褐 7.5YR4/2 粘性・しまりあり ローム粒子を少量含む。
 6. 黒褐 7.5YR3/1 粘性・しまりあり ローム粒子を少量含む。
 7. 灰褐 7.5YR4/2 粘性・しまりあり ローム粒子を少量含む。周溝。
 8. 灰褐 7.5YR4/2 粘性・しまりあり 焼土・炭化物・ローム粒子を少量含む。

Fig.65 SC021 遺構平断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	竈が未確認のため不明
	規 模	南北 3.40 m × 東西は西側が調査区外のため不明
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.40 m を測る
	ピット	確認した範囲においては認められず
	周 溝	東壁にはなく、北壁の一部に認められる これ以外は調査区外のため不明
	床 面	全体的に硬化する
竈	掘 形	確認した範囲においては認められず
	位 置	確認した範囲においては認められず
	形 状	不明
	中心軸長	不明
	燃焼口幅	不明
	壁	不明
	火 床	不明
	袖 部	不明

Tab.41 SC021 遺構観察表

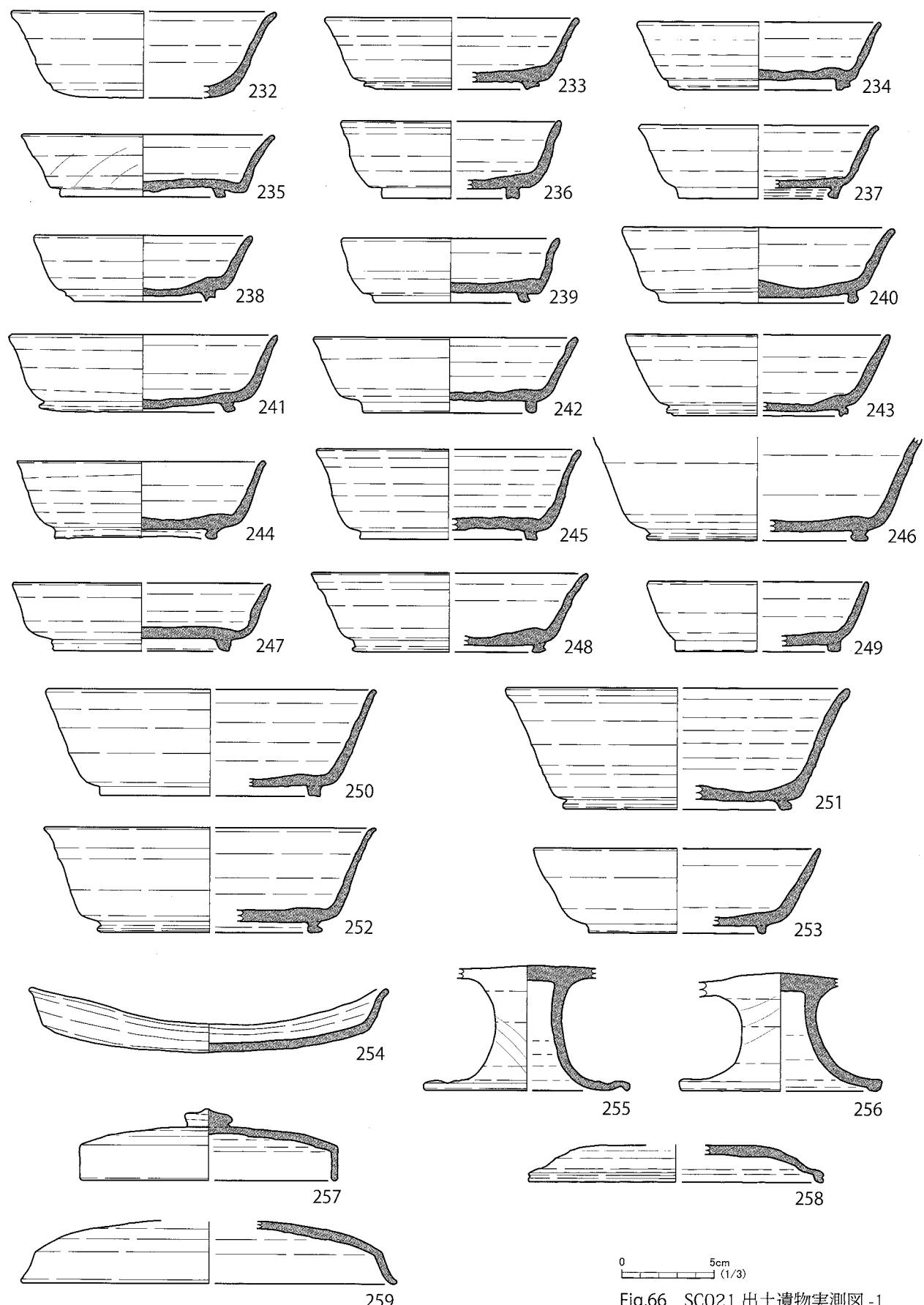


Fig.66 SC021 出土遺物実測図 -1

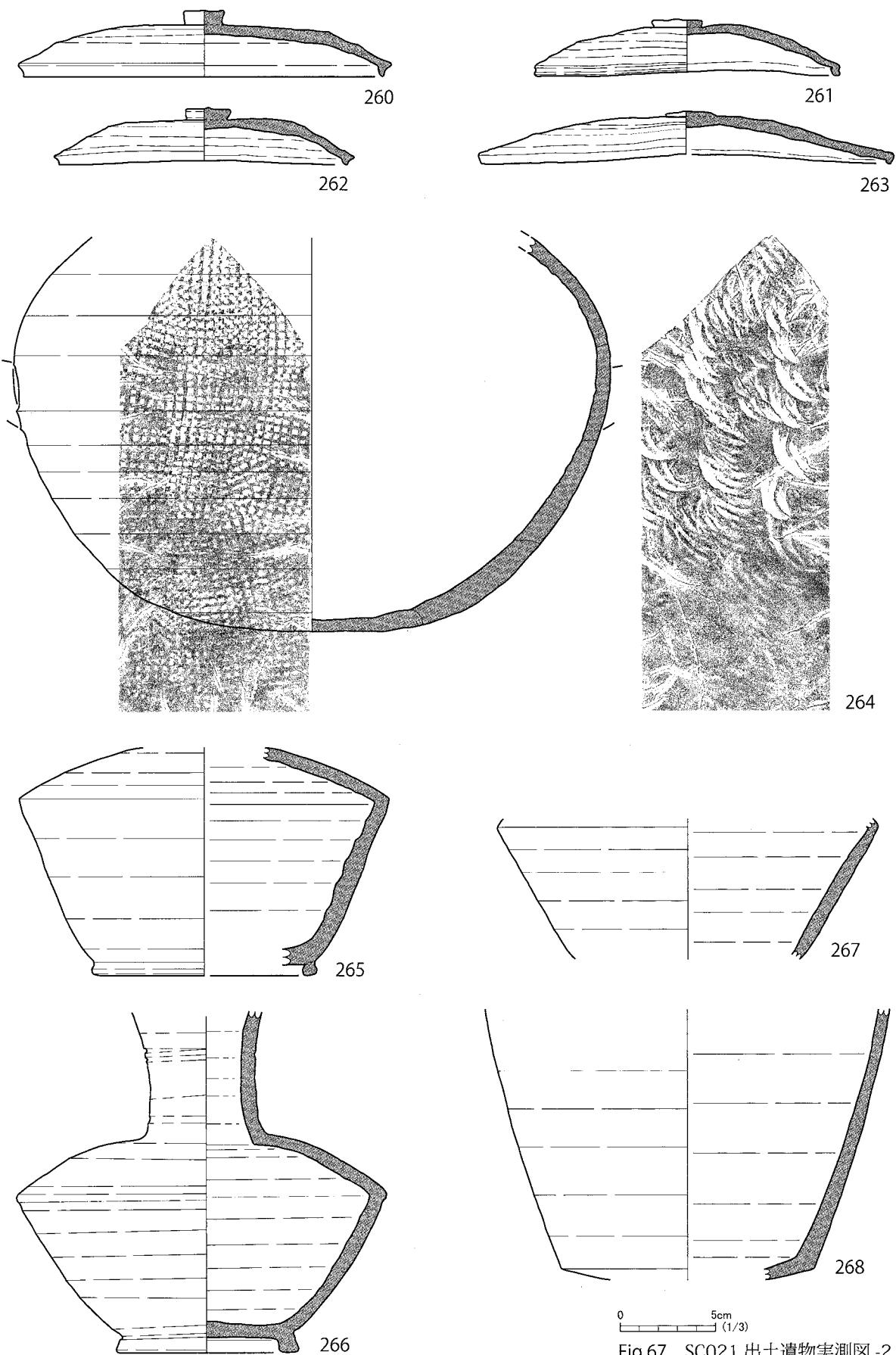
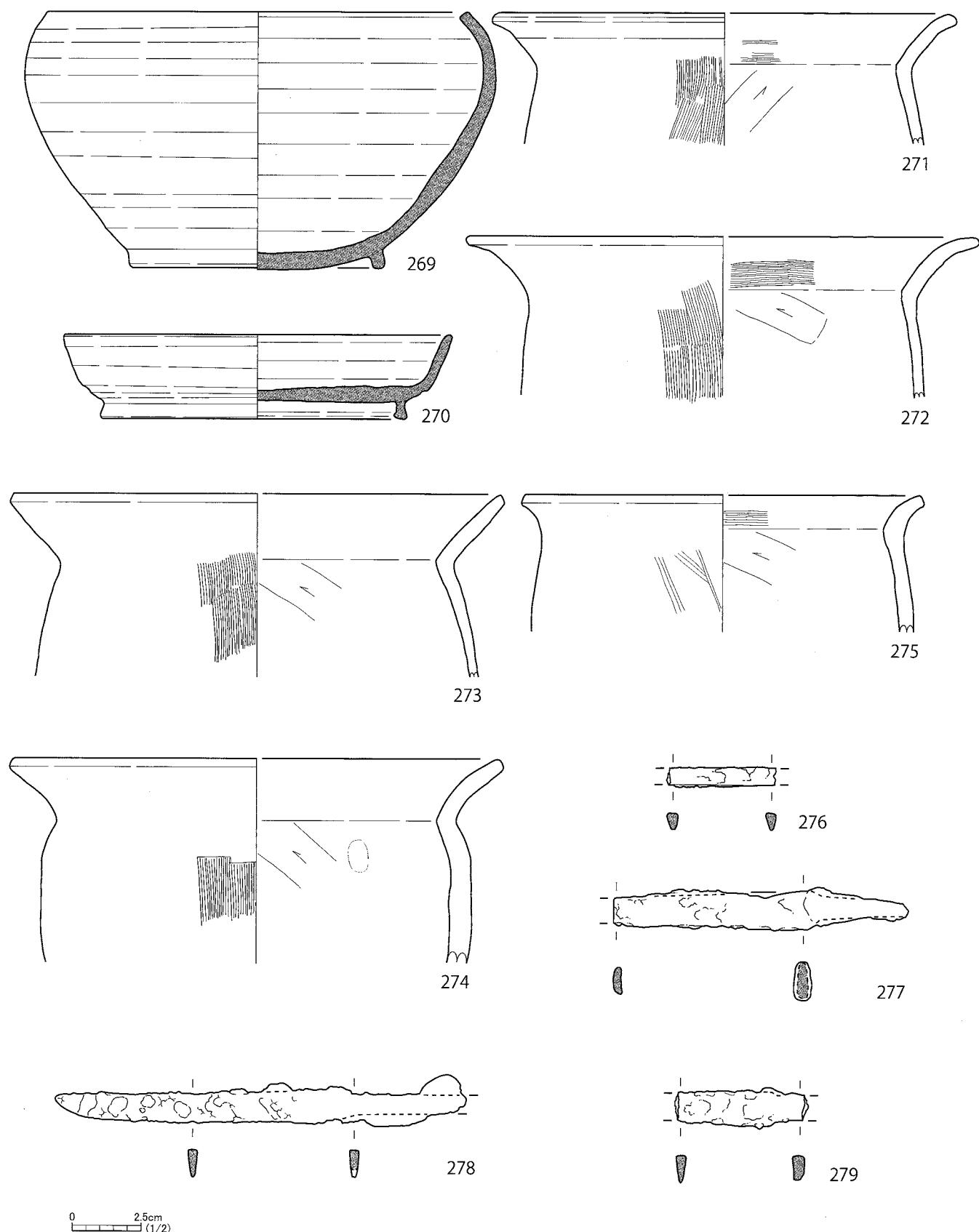


Fig.67 SC021 出土遺物実測図 -2



0 2.5cm (1/2)
(この縮尺は 276 ~ 279 のみ)

Fig.68 SC021 出土遺物実測図 -3

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
232	須恵器 环	埋土下層 床面上	(14.4)	(9.8)	4.7	灰白 10YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部で外反する。
233	須恵器 环身	床面上	(13.8)	(9.5)	3.9	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁でやや外反する。断面四角の高台が底端部より内側に、外に跳ね上げるように貼り付けられる。
234	須恵器 环身	埋土下層	(13.2)	(9.8)	3.7	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁でやや外反する。体部下半は回転ヘラ削り調整。断面四角の高台が底端部付近に、外に跳ね上げるように貼り付けられる。
235	須恵器 环身	埋土下層	13.2	8.9	3.4	褐灰 10YR 5/1	体部はみかけでは歪みが生じるため外反するが、直線的に外上方に立ち上がる型である。体部外側には下位から口縁に向け、絞りあげた痕が斜め方向に残る。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
236	須恵器 环身	埋土下層	(12.0)	(7.5)	4.2	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁でやや外反する。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
237	須恵器 环身	床面上	(13.0)	(8.6)	4.0	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁で外反する。断面四角の高台が内傾気味に、底端部付近に貼り付けられる。
238	須恵器 环身	埋土上層 埋土下層	11.8	8.1	3.6	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁でやや外反する。断面四角の高台が底端部より内側に、外に跳ね上げるように貼り付けられる。
239	須恵器 环身	床面上	11.8	8.5	3.5	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁でやや外反する。体部下半は回転ヘラ削り。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
240	須恵器 环身	埋土上層 床面上	14.8	10.8	4.1	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
241	須恵器 环身	埋土上層・埋土下層 床面上	14.6	10.6	4.2	褐灰 7.5YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
242	須恵器 环身	埋土上層	14.3	9.4	4.1	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
243	須恵器 环身	埋土下層	(14.4)	(9.8)	4.4	にぶい黄橙 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が底端部より内側に、外に跳ね上げるように貼り付けられる。
244	須恵器 环身	床面上	13.5	8.8	4.2	明褐灰 7.5YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
245	須恵器 环身	埋土上層	(14.3)	9.7	4.9	明褐灰 7.5YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
246	須恵器 环身	埋土上層	不明	12.0	不明	にぶい黄橙 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
247	須恵器 环身	床面上	(14.0)	9.6	3.7	にぶい黄橙 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
248	須恵器 环身	埋土下層	(15.0)	(10.4)	4.3	灰黄褐 10YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部でやや外反する。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
249	須恵器 环身	埋土下層	(12.0)	(9.0)	3.8	灰黄褐 10YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部付近に貼り付けられる。
250	須恵器 环身	埋土下層	(18.0)	(12.0)	5.8	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
251	須恵器 环身	床面上	(18.6)	(12.4)	6.6	にぶい黄橙 10YR 7/3	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部で外反する。断面四角の高台が、開き気味に底端部に貼り付けられる。焼成不良で軟質。
252	須恵器 环身	埋土上層 埋土下層	(18.0)	(12.2)	5.7	灰黄褐 10YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
253	須恵器 环身	埋土下層	(15.6)	(9.6)	4.6	にぶい黄橙 10YR 7/3	体部は直線的に外上方に立ち上がる。高台は底端部より内側に貼り付けられる。焼成不良で軟質。
254	須恵器 皿	埋土下層 床面上	19.5	17.8	3.5	褐灰 10YR 4/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部でやや外反する。底部は回転ヘラ切りしたままの状態。器形は歪みが著しく、大きく反りあがる。
255	須恵器 高坏	埋土下層	不明	(11.2)	不明	褐灰 10YR 5/1	坏部は欠損。脚部外側には、絞りあげた痕が斜め方向に残る。脚端部は断面三角形で、ほぼ垂直に屈曲させる。

Tab.42 SCO21 出土遺物観察表 -1

()内の数値は推定の法量を表す

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
256	須恵器 高环	埋土下層	不明	(11.0)	不明	褐灰 10YR 5/1	坏部は欠損。脚部外面には、絞りあげた痕が斜め方向に残る。脚端部は丸みをもたせ、内面の稜が明瞭である。
257	須恵器 壺蓋	床面上	(14.0)	—	3.9	褐灰 10YR 6/1	天井部は回転ヘラ削り調整。ツマミは擬宝珠。体部は垂直に長く屈曲する。
258	須恵器 蓋	床面上	(16.0)	—	不明	褐灰 10YR 6/1	口縁部は断面三角形で、ほぼ垂直に屈曲する。天井部は回転ヘラ削り調整。
259	須恵器 蓋	埋土下層	(20.4)	—	不明	暗灰 N 3/0	天井部はナデ調整。内外面体部におよび内面底部に炭素を付着させる。焼成不良で軟質。
260	須恵器 环蓋	埋土下層	19.6	—	3.5	灰褐 7.5YR 5/2	口縁部は断面三角形で、内傾する。天井部は回転ヘラ削り調整。
261	須恵器 环蓋	床面上	16.0	—	3.0	にぶい黄橙 10YR 7/2	口縁部は断面三角形で、ほぼ垂直に屈曲する。天井部は回転ヘラ切り後に、調整を施さない。
262	須恵器 环蓋	床面上	15.7	—	3.0	褐灰 10YR 6/1	口縁部内側の稜は不明瞭で、端部は摘み出した程度の僅かなものが内傾する。天井部は回転ヘラ削り調整。
263	須恵器 环蓋	床面上	(21.8)	—	2.7	灰白 10YR 8/2	口縁部は端部が僅かに屈曲するが、内面の稜は明確に認められる。天井部は回転ヘラ削り調整。焼成不良で軟質。
264	須恵器 甕	床面上	不明	(5.8)	不明	灰白 10YR 8/1	底部から胴部にかけ格子状のタタキ目、内面は青海波文の當て具痕が認められる。胴部は大きく内湾する。底部は丸みを帯び、胴部との境が判然としない。胴部の最も張り出した位置には把手がつくが、欠損する。
265	須恵器 長頸壺	埋土下層 床面上	不明	(12.0)	不明	灰褐 7.5YR 6/2	頸部から上が欠損するが、長頸壺である。体部の上位で屈曲する。肩部より下位は回転ヘラ削り。底端部に、低い高台が貼り付けられる。
266	須恵器 長頸壺	埋土上層・埋土下層 床面上	不明	9.5	不明	灰褐 5YR 5/2	口縁部を欠損するが、長頸壺である。体部の上位で屈曲する。肩部より下位は回転ヘラ削り。底端部に、高台が貼り付けられる。
267	須恵器 長頸壺	埋土下層	不明	不明	不明	灰黄褐 10YR 6/2	長頸壺の体部で、下半は回転ヘラ削りが認められる。
268	須恵器 鉢	埋土上層 埋土下層	不明	(13.4)	不明	にぶい黄橙 10YR 7/2	体部下半は回転ヘラ削り。底部は丸みを帯びる。
269	須恵器 鉢	埋土上層 埋土下層	23.0	13.8	14.0	灰白 10YR 8/1	体部外面は下半が回転ヘラ削り。口縁部を大きく内傾させる。底部は丸みを帯び、低い高台を貼り付ける。焼成不良で軟質。
270	須恵器 盤	埋土下層	21.2	16.7	4.6	灰黄褐 10YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部に貼り付けられる。
271	土師器 甕	埋土下層	(25.4)	不明	不明	にぶい橙 5YR 7/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
272	土師器 甕	床面上	(28.0)	不明	不明	にぶい橙 5YR 7/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ、内面はハケ目を施した後に横ナデ。
273	土師器 甕	埋土下層 床面上	(27.0)	不明	不明	にぶい橙 5YR 7/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
274	土師器 甕	埋土上層	(27.0)	不明	不明	にぶい橙 5YR 7/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
275	土師器 甕	埋土下層	(22.0)	不明	不明	にぶい橙 5YR 7/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は外面を横ナデ、内面はハケ目を施した後に横ナデ。
276	鉄製品 刀子	埋土下層	現存長 4.0	最大幅 0.6	厚さ 0.2-0.4	重さ(g) 2.6	身部の両端および茎部が欠損する。
277	鉄製品 刀子	埋土下層	10.7	1.4	0.2-0.3	18.3	身部の先端側が欠損する。
278	鉄製品 刀子	埋土下層	15.0	1.2	0.1-0.4	18.2	茎部が途中から欠損する。
279	鉄製品 刀子	埋土上層	4.9	1.3	0.1-0.4	6.3	身部の両端および茎部が欠損する。

() 内の数値は推定の法量を表す

Tab.43 SC021 出土遺物観察表 -2

SK022 土坑

【遺構】

平面の形態は小判状を呈すると思われるが、南側をSC023 竪穴式住居跡により消失する。規模は2.0 × 2.1mを測る。底面は浅鉢状を呈し、深さは0.3mを測る。遺構の性格は不明である。

【遺物】

壺身（281～283）は体部が直線的に外方に立ち上がり、低い高台が底端部より内側に貼り付くことから、8世紀代前半の所産として捉えることができる。

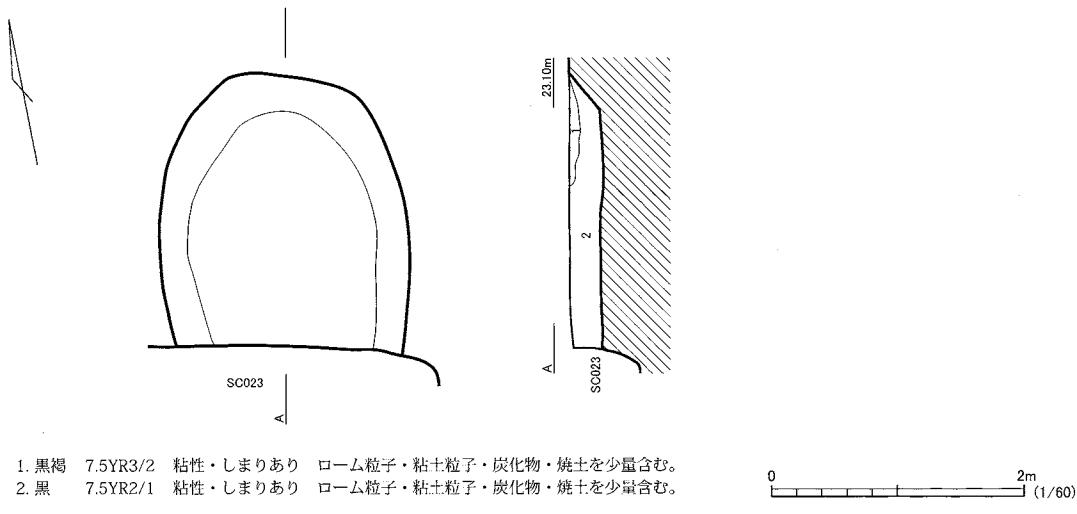


Fig.69 SK022 遺構平面図

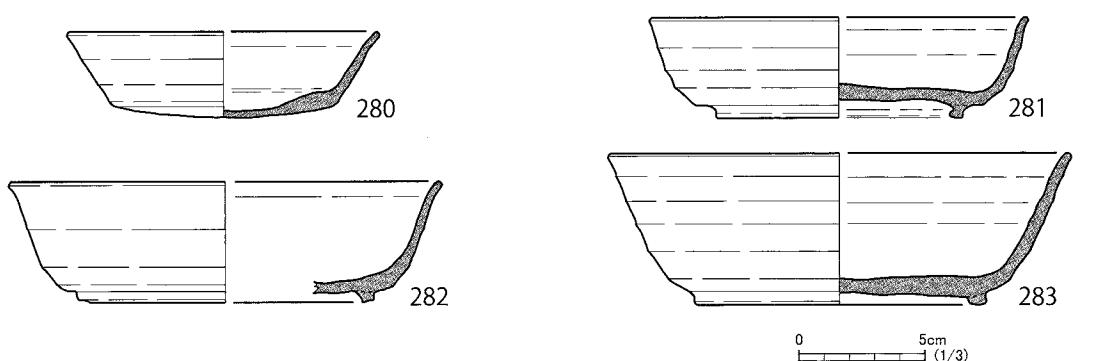


Fig.70 SK022 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
280	須恵器 壺	埋土	(12.4)	(8.8)	3.4	灰黄褐 10YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。底部は丸みを帯び、回転ヘラ切り後にナデ調整。
281	須恵器 壺身	埋土	(15.0)	(9.8)	4.0	褐灰 10YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
282	須恵器 壺身	埋土	(16.6)	(11.8)	4.8	褐灰 10YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
283	須恵器 壺身	埋土	(18.4)	11.0	6.05	灰黄褐 10YR 5/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底部は回転ヘラ切り後の調整を施さない。

Tab.44 SK022 出土遺物観察表

()内の数値は推定の法量を表す

SC023 竪穴式住居跡

【遺構】

西壁および竈の袖部の一部を SC024 竪穴式住居跡により消失し、北壁は SK022 土坑、東壁は SK026 土坑を壊し構築されている。

床面はロームが全体的に硬化しており、中央には粘土が山盛りの状態で認められるが、性格等は不明である。

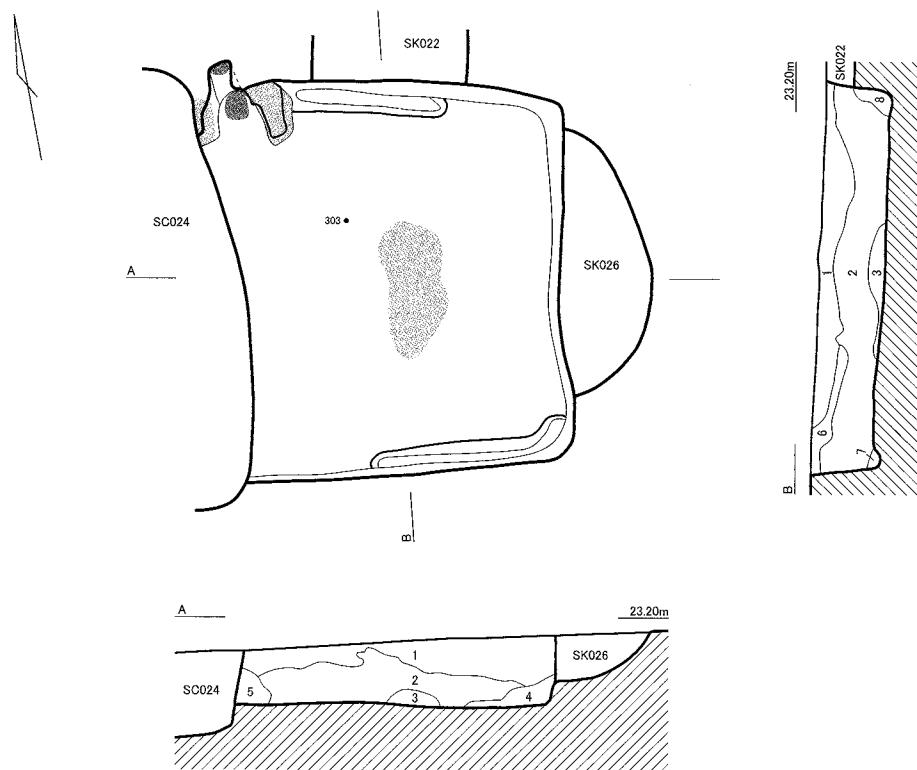
竈は住居跡の北壁の西隅に構築される。両袖は残存しており、粘土で構築される。

【遺物】

坏身は体部が外方に直線的に立ち上がり、高台が底端部より内側に貼り付くタイプ（286・287）と、体部と底部の境が丸みを帯び、そこに高台を貼り付けるタイプ（284・285）に分けられる。

坏蓋（288～292）は口縁部を断面三角形にし、下方に短く屈曲させる。その内側には稜が明瞭にみられる。

こうした特徴から、8世紀代前半の所産として捉えることができる。



- | | | | |
|-------|----------|----------|----------------|
| 1. 黒褐 | 7.5YR3/2 | 粘性・しまりあり | ロームブロックを中量含む。 |
| 2. 黒 | 7.5YR2/1 | 粘性・しまりあり | ロームブロックを多量含む。 |
| 3. 褐灰 | 7.5YR4/1 | 粘性・しまりあり | 粘土。 |
| 4. 黒 | 7.5YR2/1 | 粘性・しまりあり | ロームブロックを多量含む。 |
| 5. 黒褐 | 7.5YR3/2 | 粘性・しまりあり | ロームブロックを主体とする。 |
| 6. 黒 | 7.5YR2/1 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を少量含む。 |
| 7. 黒褐 | 7.5YR3/1 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を多量含む。周溝。 |
| 8. 黒 | 7.5YR2/1 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を少量含む。周溝。 |

Fig.71 SC023 遺構平面図

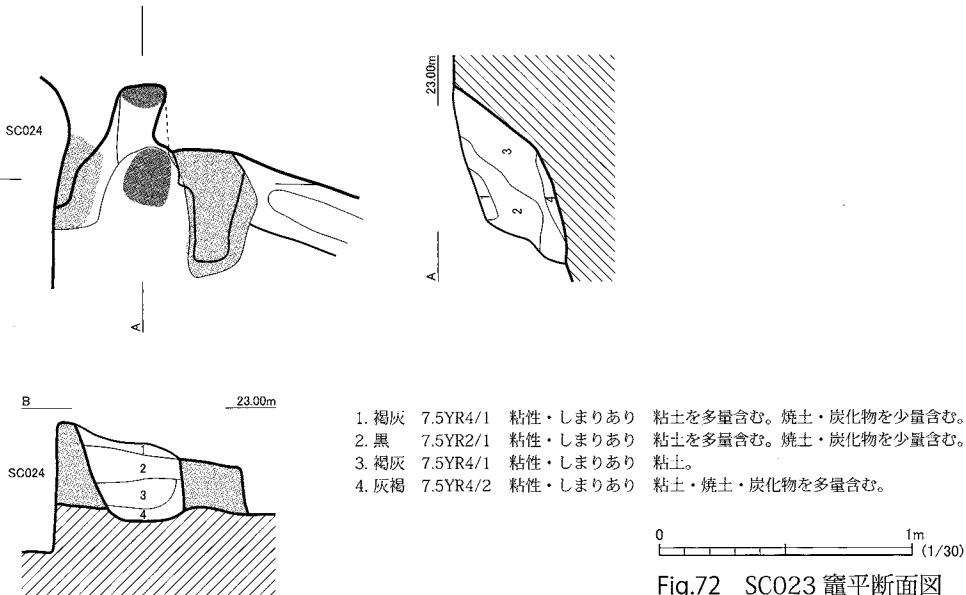


Fig.72 SC023 竪断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	N - 12 - E
	規 模	南北 3.10 m × 東西は西側が SC024 により搅乱されるため不明
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.55 m を測る
	ピット	なし
	周 溝	南壁から南東隅にかけ L 字状に認められる
竪	床 面	全体的に硬化する
	掘 形	なし
	位 置	北壁西隅
竪	形 状	SC024 に西袖の一部が破壊されるが、煙道が細く突出する
	中 心 軸 長	1.05m
	燃 焼 口 幅	0.70m
	壁	奥壁に火熱を受けた面を認める
	火 床	燃焼口付近が火熱作用を受けていた
	袖 部	両袖を粘土により構築

Tab.45 SC023 遺構観察表

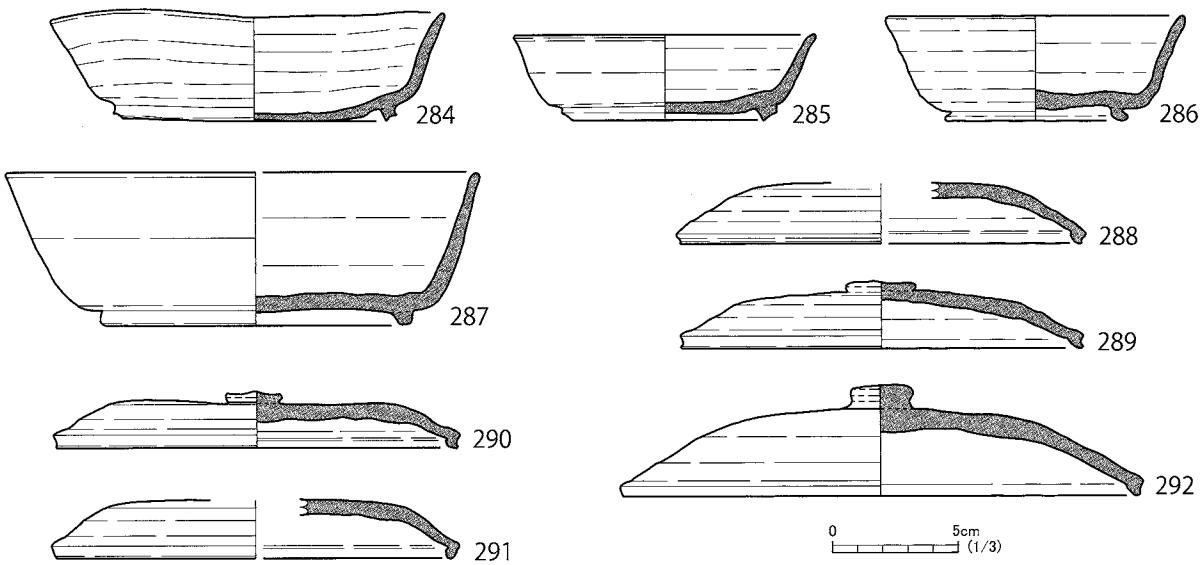


Fig.73 SC023 出土遺物実測図 -1

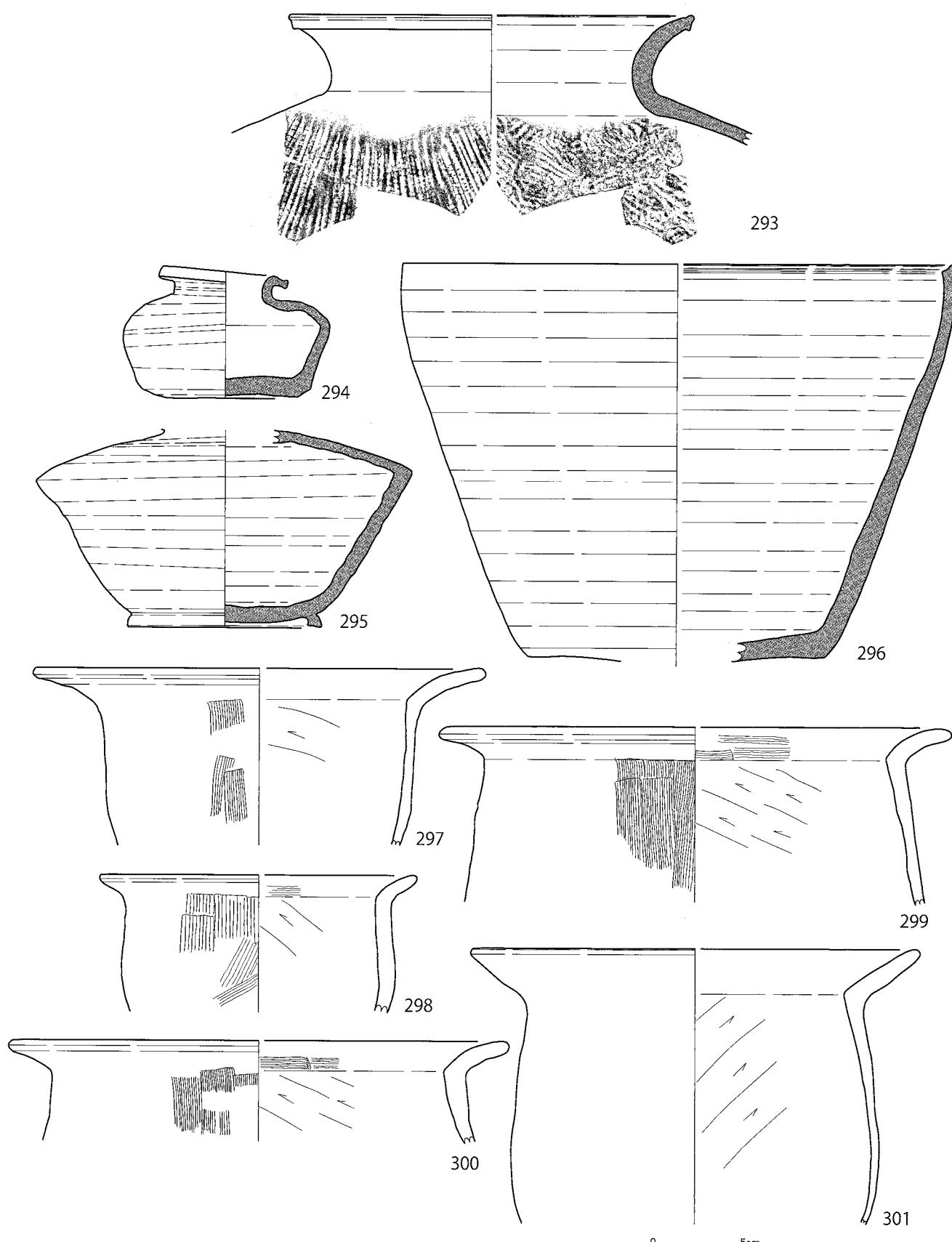


Fig.74 SC023 出土遺物実測図 -2

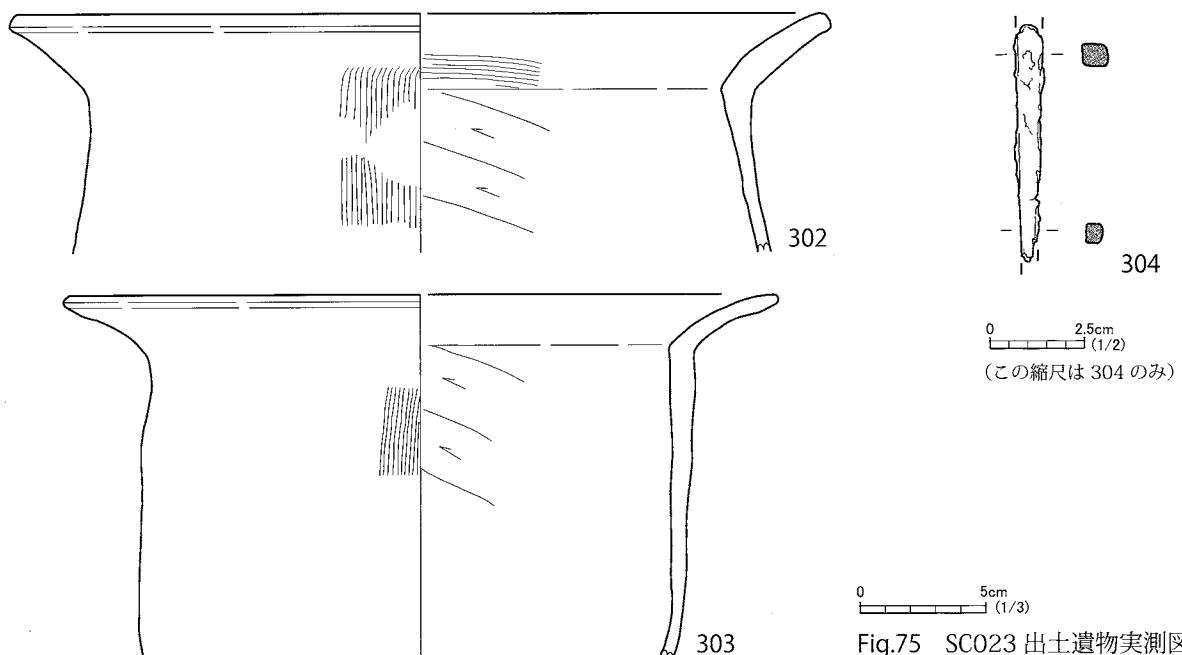


Fig.75 SC023 出土遺物実測図 -3

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
284	須恵器	埋土下層	15.7	11.2	4.1 ~ 4.5	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が底端部より内側に、外に跳ね上げるように貼り付けられる。底部は回転ヘラ切り後に、周縁をナデ調整。
	坏身						
285	須恵器	埋土下層	12.0	8.5	4.4	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が底端部より内側に、外に跳ね上げるように貼り付けられる。底部は回転ヘラ切り後の調整を施さない。
	坏身						
286	須恵器	埋土上層 床面上	11.9	7.2	4.2	にぶい黄橙 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。高台は開き気味に、底端部より内側に貼り付けられる。底部は回転ヘラ切り後の調整を施さない。
	坏身						
287	須恵器	埋土下層 床面上	(18.7)	12.4	6.1	灰白 7.5YR 8/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。調整不良で軟質。
	坏身						
288	須恵器	埋土下層	(16.2)	—	2.4	灰白 10YR 7/1	口縁部は断面三角形で、ほぼ垂直に屈曲する。天井部は回転ヘラ削り調整。
	坏蓋						
289	須恵器	埋土上層 埋土下層	16.0	—	2.3	にぶい黄橙 10YR 7/2	口縁部は断面三角形で、ほぼ垂直に屈曲する。天井部は回転ヘラ切り後の調整を施さない。
	坏蓋						
290	須恵器	埋土上層	16.1	—	不明	にぶい橙 5YR 7/3	口縁部は断面三角形で、ほぼ垂直に屈曲する。天井部は回転ヘラ削り調整。焼成不良。
	坏蓋						
291	須恵器	埋土上層	(16.2)	—	2.8	にぶい黄橙 10YR 7/2	口縁部は断面三角形で、内傾して屈曲する。天井部は回転ヘラ削り調整。焼成不良で軟質。
	坏蓋						
292	須恵器	埋土下層 床面上	20.7	—	4.4	灰白 10YR 8/2	口縁部は断面三角形で、垂直に短く屈曲する。焼成不良で軟質。
	坏蓋						
293	須恵器	埋土上層 床面上	(22.2)	不明	不明	にぶい赤褐 5YR 5/4	口端面を擗み出し、突堤とする。頸部外面には縦方向に沈線を連続させた後に、横ナデを施す。体部外面は平行タタキ痕、内面には同心円文当具痕が認められる。
	甕						
294	須恵器	床面上	7.2	7.8	6.5 ~ 7.3	暗灰 N 3/0	肩部が張り出し、頸部は短く口縁を大きく外反させる。底部は回転ヘラ切り後の調整を施さない。
	短頸壺						
295	須恵器	埋土下層	—	10.6	10.8	褐灰 10YR 6/1	頸部から上が欠損するが、長頸壺である。体部の上位で屈曲する。頸部より下位は回転ヘラ削り。底端部に、高台が貼り付けられる。
	長頸壺						

Tab.46 SC023 出土遺物観察表 -1

() 内の数値は推定の法量を表す

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
296	須恵器 鉢	埋土下層 床面上	(30.0)	(16.2)	(21.8)	褐灰 10YR 6/1	体部下位は回転ヘラ削り。底部は丸みを帯びる。
297	土師器 甕	埋土下層	(24.6)	不明	不明	にぶい橙 5YR 7/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
298	土師器 甕	埋土上層	(17.4)	不明	不明	にぶい橙 7.5YR 6/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は外面を横ナデ、内面はハケ目を施した後に横ナデ。
299	土師器 甕	竈内	(28.0)	不明	不明	橙 5YR 6/6	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は外面を横ナデ、内面はハケ目を施した後に横ナデ。
300	土師器 甕	竈内	(27.4)	不明	不明	橙 5YR 6/6	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は外面を横ナデ、内面はハケ目を施した後に横ナデ。
301	土師器 甕	埋土下層	(24.6)	不明	不明	にぶい橙 7.5YR 7/4	摩滅が著しいが、体部外面にはハケ目が僅かに認められる。内面はヘラ削りが施される。口縁部は外面を横ナデ、内面はハケ目を施した後に横ナデ。
302	土師器 甕	埋土上層	(32.6)	不明	不明	にぶい橙 7.5YR 7/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は外面を横ナデ、内面はハケ目を施した後に横ナデ。
303	土師器 甕	埋土下層 竈内	28.4	不明	不明	橙 7.5YR 7/6	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
304	鉄製品 釘	床面上	現存長 6.3	幅 —	厚さ —	重さ(g) 5.7	幹部の上下端部および皿部は欠損する。断面方形。

Tab.47 SC023 出土遺物観察表 -2

() 内の数値は推定の法量を表す

SC024 穫穴式住居跡

【遺構】

東側はSC023 穫穴式住居跡を破壊し構築される。西側は約1/2が調査区外にあるため、全体を確認するには至らなかった。

床面は硬化せず、しまりのない状態であった。さらに、この下を掘削すると、凹凸の著しい不整形の掘方が認められる。

竈については確認できてないが、未調査である住居跡の西側部分の、北壁か西壁のいずれかに構築されていたと推測される。

【遺物】

坏身(305・306)は体部が外方に直線的に立ち上がり、断面四角の低い高台が底端部より内側に貼り付く。

坏蓋(308・309)は口縁部が断面三角形で、ほぼ垂直に短く屈曲させる。この内側には稜が明瞭にみられる。

こうした特徴から8世紀代前半を主体とした所産と考えられる。

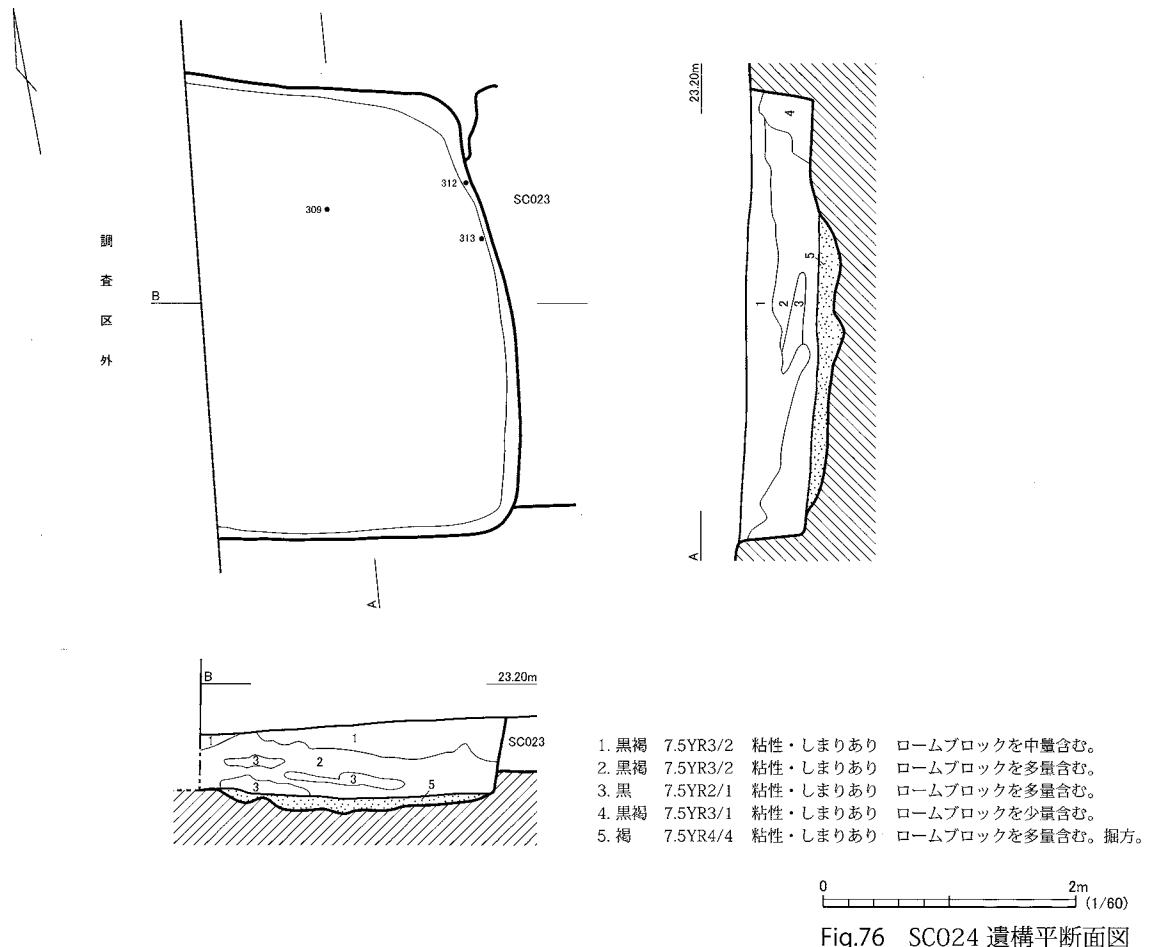


Fig.76 SC024 遺構平断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	竈が未確認のため不明
	規 模	南北 3.60 m × 東西は西側が調査区外のため不明
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.60 m を測る
	ピット	確認した範囲においては認められず
	周 溝	確認した範囲においては認められず
床 面	床 面	しまりがなく、掘方と区別するのが困難である
	掘 形	床面下は全体的に凹凸の著しい掘方が認められる
竈	位 置	確認した範囲においては認められず
	形 状	不明
	中心軸長	不明
	燃焼口幅	不明
	壁	不明
	火 床	不明
	袖 部	不明

Tab.48 SC024 遺構観察表

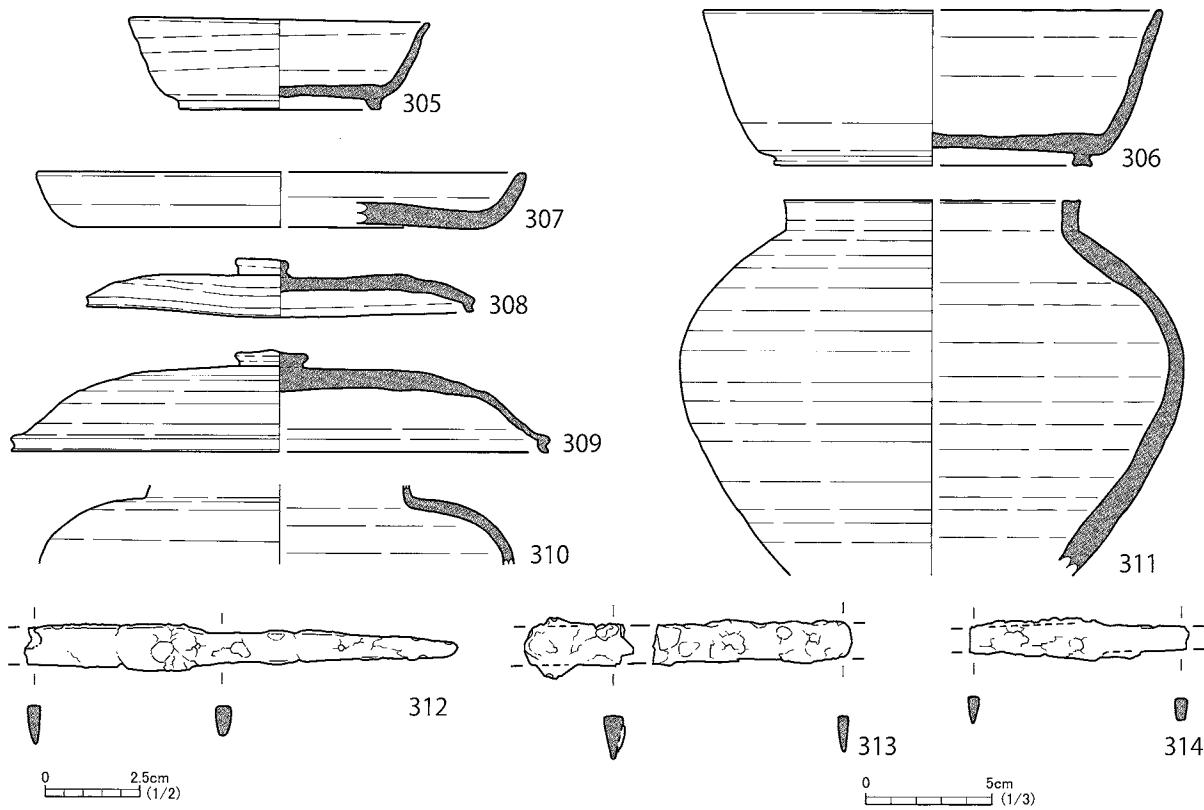


Fig.77 SC024 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
305	須恵器 环身	埋土上層・埋土下層 床面上	11.9	8.0	3.5 ~ 3.7	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部よりやや内側に貼り付けられる。底部は回転ヘラ切り後の調整を施さない。
306	須恵器 环身	埋土上層 埋土下層	(18.2)	(12.6)	6.2	にぶい黄橙 10YR 6/3	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。体部外面は黒色処理される。焼成不良で軟質。
307	須恵器 皿	埋土下層	(19.4)	(16.2)	2.2	浅黄橙 10YR 8/4	摩滅が著しく調整等は不明。焼成不良で軟質。
308	須恵器 环蓋	床面上	15.4	-	2.3	褐灰 10YR 6/1	口縁部は断面三角形で、ほぼ垂直に短く屈曲する。天井部は回転ヘラ削り調整。
309	須恵器 环蓋	床面上	(21.4)	-	4.0	浅黄橙 10YR 8/4	口縁部は断面三角形で、外反し屈曲する。天井部は回転ヘラ削り調整。焼成不良で軟質。
310	須恵器 短頸壺	埋土上層 埋土下層	不明	不明	不明	褐灰 10YR 4/1	肩部が張り出すが、この上下の部位は残存しない。
311	須恵器 短頸壺	埋土上層 埋土下層	(11.8)	不明	不明	にぶい黄橙 7.5YR 7/2	口縁部は直立し、端面は平らにする。最大径部付近以下は回転ヘラ削り。
312	鉄製品 刀子	埋土上層	現存長 11.4	幅 1.3	厚さ 0.1-0.3	重さ(g) 12.4	身部の先端側が欠損する。
313	鉄製品 刀子	埋土上層	不明	1.1	0.1-0.4	7.6	身部の両端および茎部が欠損する。
314	鉄製品 刀子	埋土下層	5.8	1.1	0.1-0.3	6.0	身部の先端側および茎部の一部が欠損する。

Tab.49 SC024 出土遺物観察表

()内の数値は推定の法量を表す

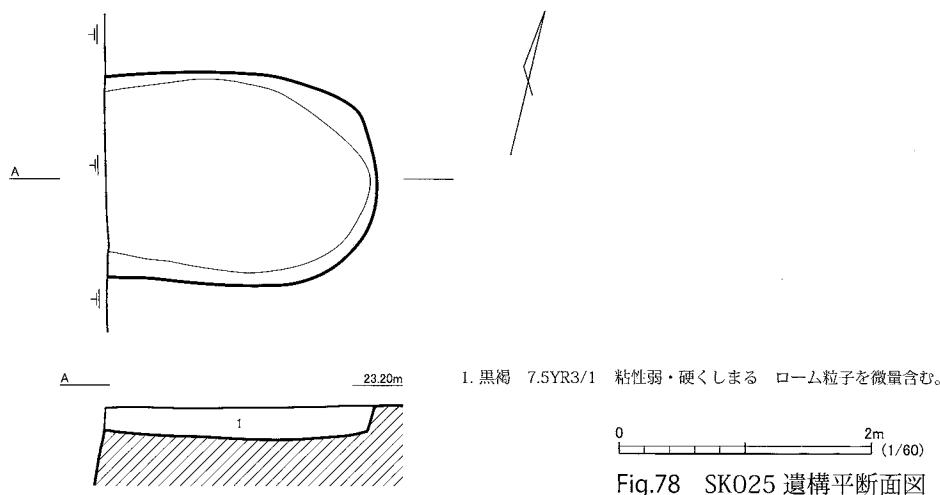
SK025 土坑

【遺構】

平面の形態は小判状を呈すると思われるが、西側を搅乱する溝により消失する。規模は 1.7 × 2.2m を測る。底面は浅鉢状を呈し、深さは 0.3m を測る。遺構の性格は不明である。

【遺物】

出土遺物は小破片のみで、時期は判然とし得ない。



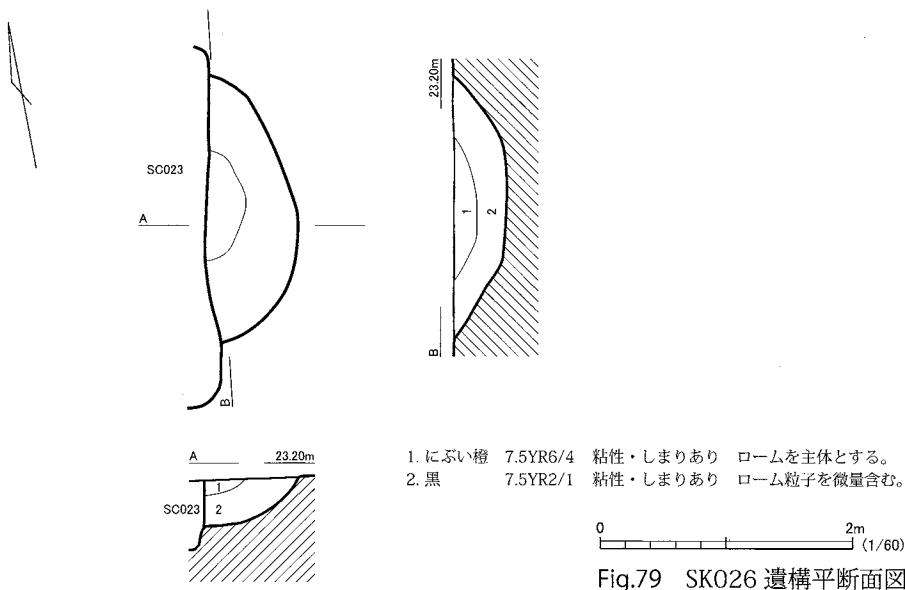
SK026 土坑

【遺構】

平面の形態は橢円形を呈すると思われるが、西側を SC023 壁穴式住居跡により消失する。規模は 0.7 × 1.1m を測る。底面は浅鉢状を呈し、深さ 0.4m を測る。遺構の性格は不明である。

【遺物】

出土遺物は小破片のみで、時期は判然とし得ない。



試掘坑 1・2

【出土時の状況】

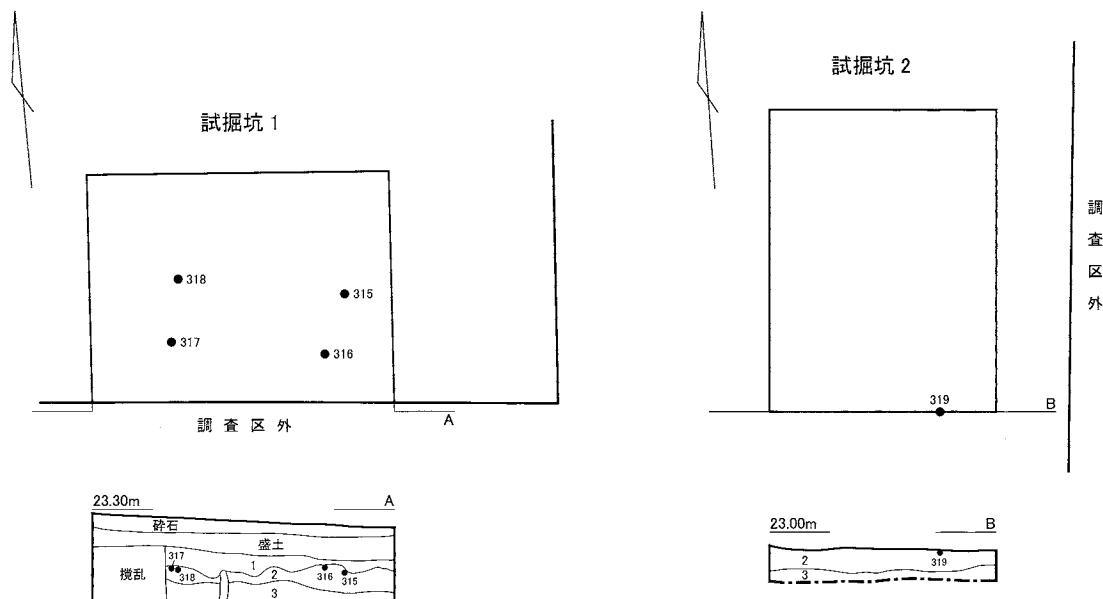
奈良時代の発掘調査を終えた後に、引き続いて旧石器時代を対象とした試掘坑を、2箇所設定したところ、双方から遺物が認められた。

まず試掘坑1とした 1.5×2.0 m四方の規模のものを、南壁側に設定し、奈良時代の遺構確認面でもあるロームを数cm掘り下げたところ、サヌカイト製の剥片を4点確認した。

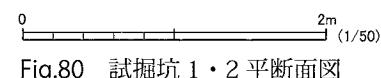
次に北側に約10mほど離れた位置に、同規模の試掘坑2を設定した。ここでもローム面を僅かに掘り下げた地点で、サヌカイト製の三稜尖頭器を出土した。

遺物が出土する層は、いずれも新期ローム上面から僅かに掘り下げた地点である。

今回は日程の都合等で、残念ながら範囲を拡幅して調査が行えなかったが、密度および分布範囲は広がると推測される。



1. 黒褐 7.5YR3/1 粘性・しまりあり 奈良時代の遺物包含層。
2. 明褐 7.5YR5/6 粘性・しまりあり 新期ローム(ソフト)。3と比較し軟質。
3. 橙 7.5YR6/8 粘性・しまりあり 鳥栖ローム(ハード)。



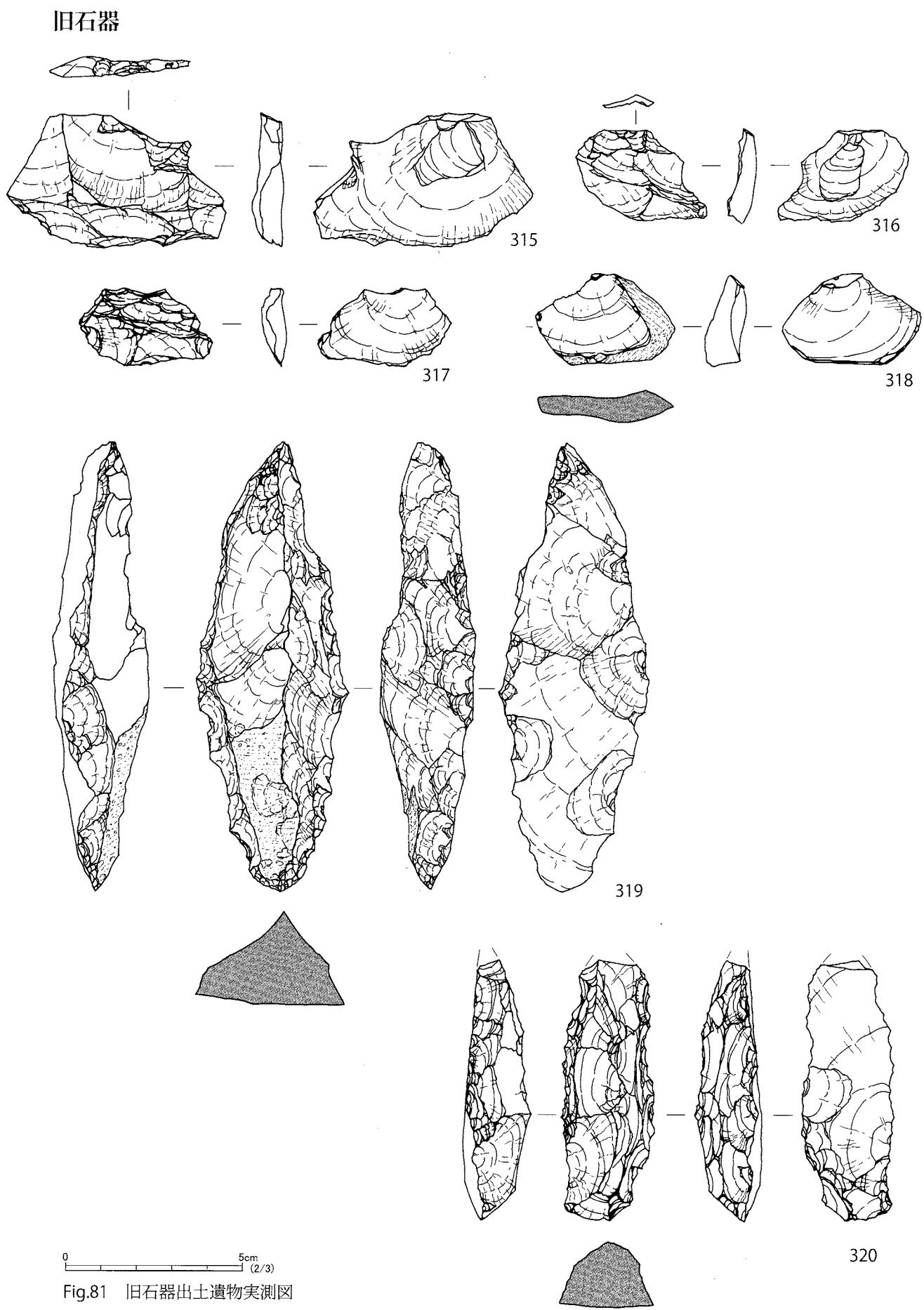


Fig.81 旧石器出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			(g)	特徴
			長さ	幅	厚さ		
315	石器	試掘坑1 新期ローム上層	3.7	0.1	0.7	15.72	風化が進行し、一部が青灰色を呈する。調整剥片。サヌカイト。
	剥片						
316	石器	試掘坑1 新期ローム上層	2.6	3.7	0.5	3.55	三稜尖頭器製作時の調整碎片と思われる。サヌカイト。
	剥片						
317	石器	試掘坑1 新期ローム上層	2.2	3.7	0.6	4.3	三稜尖頭器製作時の調整碎片と思われる。サヌカイト。
	剥片						
318	石器	試掘坑1 新期ローム上層	2.5	3.9	0.9	8.56	灰白色の黒曜石で、佐賀県椎場川産かと思われる。
	剥片						
319	石器	試掘坑2 新期ローム上層	12.8	5.3	2.7	100.0	風化が進んでいるが、保存状態は良好な完存品。サヌカイト。
	三稜尖頭器						
320	石器 三稜尖頭器	SP-112 新期ローム上層	7.4	2.6	1.8	35.9	風化が進んでいるが、保存状態は良好。先端部が欠損。サヌカイト。

Tab.50 旧石器出土遺物観察表

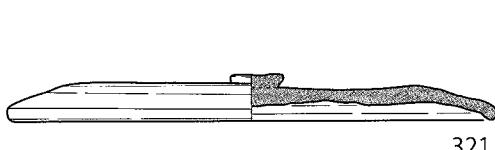
搅乱

調査区中央を、幅1.3mの近年の搅乱溝が延長30mにもわたり、南北方向に貫く。その途中においてSC003・SC012・SC013・SC014竪穴式住居跡、SK025土坑を破壊する。特に住居跡の周辺では、遺物が多く認められることから、これらの遺構から混入したものと判断される。

こうした、いずれの遺構に伴うものか不明なものの中から、残存度の良い2点を選び掲載した。

壺蓋(321)は、口縁部を摘み出す程度に短く屈曲させたもので、端部は断面三角形を呈する。内側には棱も認められる。8世紀代前半の所産と考える。

鉢(322)は低い筒状のもので、外面体部にハケ目がみられる。底部には葉脈の圧痕があり、作成時に下に敷いたものが残ったと考えられる。こうした事例は、往時の製作状況等を窺い知る上で興味深い。



321



322

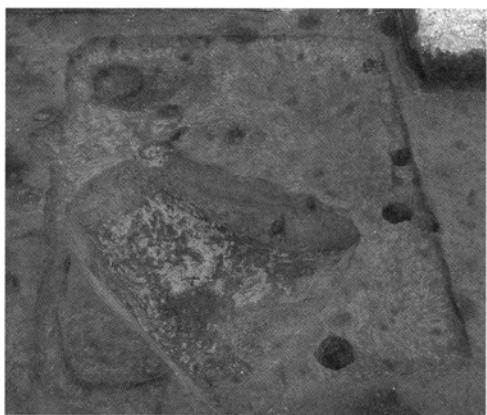
0 5cm (1/3)

Fig.82 搅乱出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
321	須恵器	搅乱溝一括	19.4	-	2.0	浅黄橙 10YR 8/4	口縁部内側には棱が認められるものの、端部は摘み出した程度の僅かなものである。天井部は回転ヘラ削り調整。焼成不良で軟質。
	壺蓋						
322	土師器	搅乱溝一括	8.3	7.0	4.0	明赤褐 5YR 5/6	体部は直立し外面にはハケ目が施される。底部には葉脈の圧痕あり。
	鉢						

Tab.51 搅乱出土遺物観察表

PL1



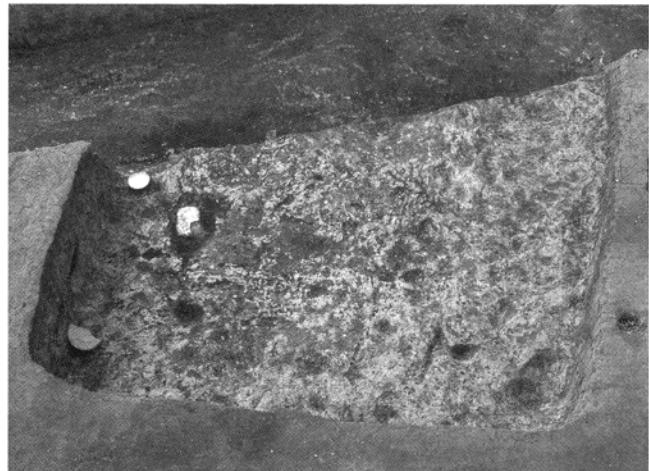
①. SC001 壴穴式住居跡（北から）



②. SC002 壴穴式住居跡 竈 1・2（南から）



③. SC002 壴穴式住居跡（南から）



④. SC003 壴穴式住居跡（東から）

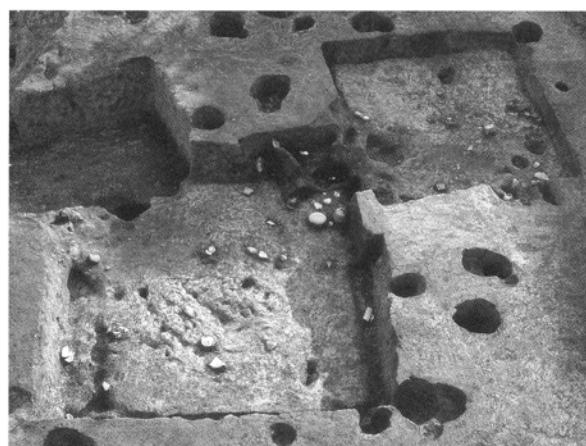


⑤. SK004 土坑（東から）



⑥. SC005 壴穴式住居跡（南から）

PL2



⑦. SC006 (左)・SC007 (右) 竪穴式住居跡 (北から)



⑧. SC006 竪穴式住居跡 (北から)



⑨. SC008 竪穴式住居跡 (東から)



⑩. SC009 (左) 竪穴式住居跡・SK010 (右) 土坑
(南から)

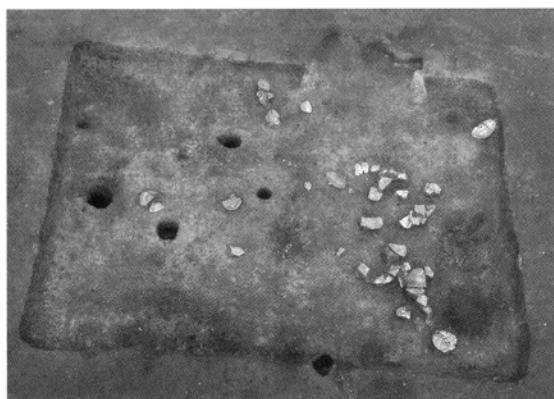


⑪. SC003 (一番奥)・SC012 (中央左) SC013 (中央右)
SC014 (中央右手前)・SC011 (手前) 竪穴式住居跡
使用面全景 (南から)



⑫. SC015 竪穴式住居跡 (南から)

PL3



⑬. SC016 壴穴式住居跡（東から）



⑭. SC018（左）・SC017（右） 壴穴式住居跡（西から）



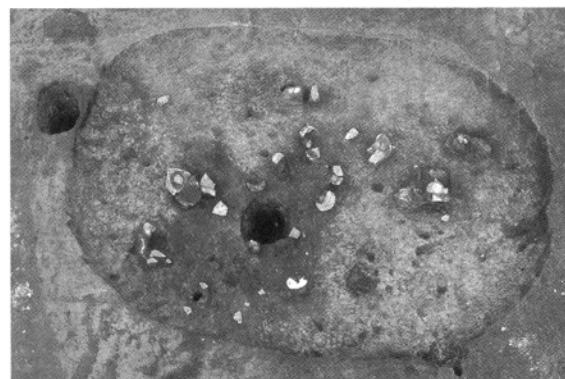
⑮. SC017 壴穴式住居跡 竈使用面完掘状況（東から）



⑯. SC018 壴穴式住居跡 竈（西から）



⑰. SK019 土坑（北から）



⑱. SK020 土坑（南から）

PL4



⑯. SC021 竪穴式住居跡（東から）



⑰. SC024（一番奥）・SC023（中央左）竪穴式住居跡
SK022（中央右）・SK026（手前）土坑
完掘状況（東から）



㉑. 調査区南側全景（東から）



㉒. SK025 土坑（南から）



㉓. 試掘坑 1 旧石器出土状況（北から）

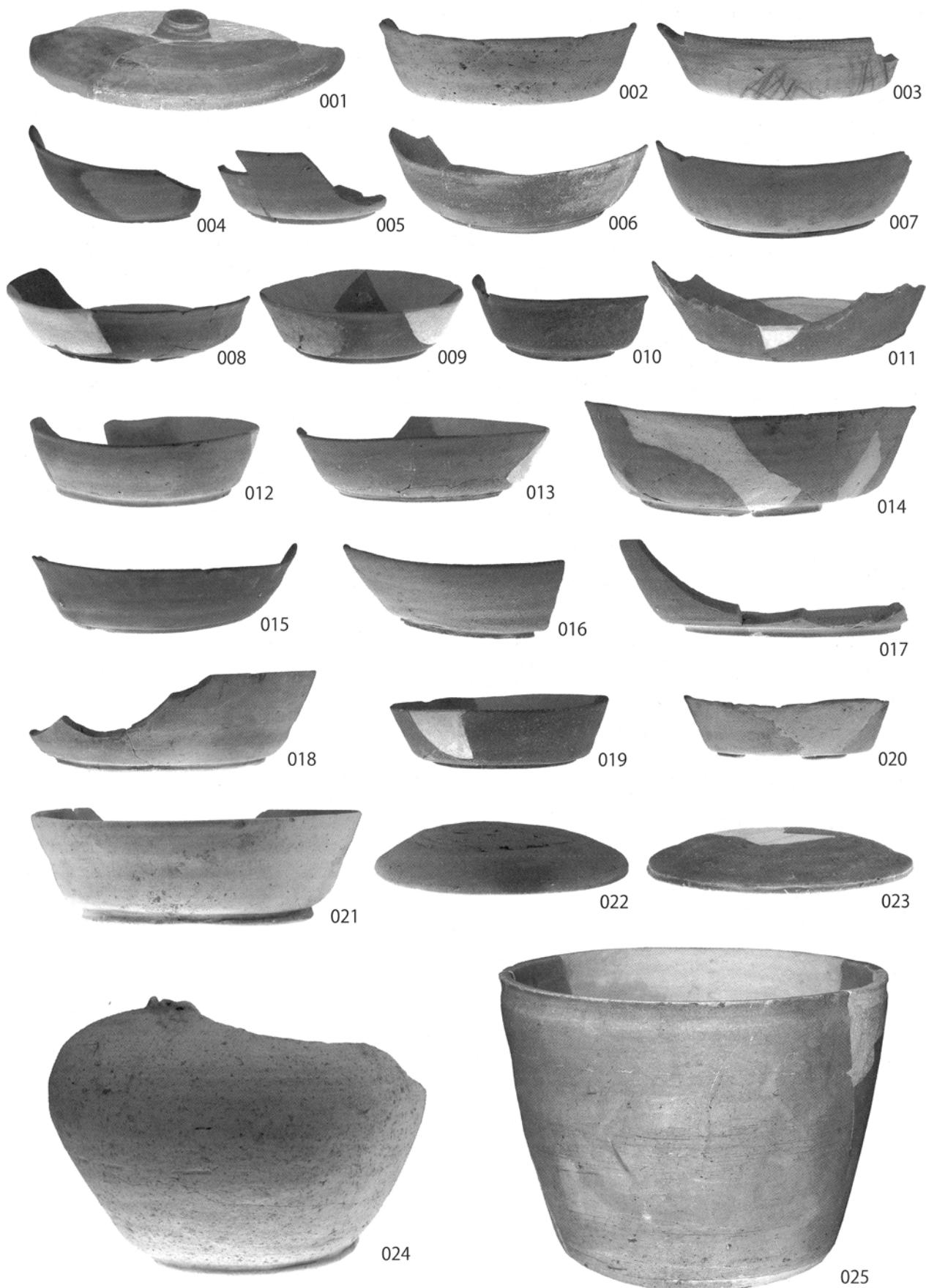


㉔. SK020 土坑（南から）

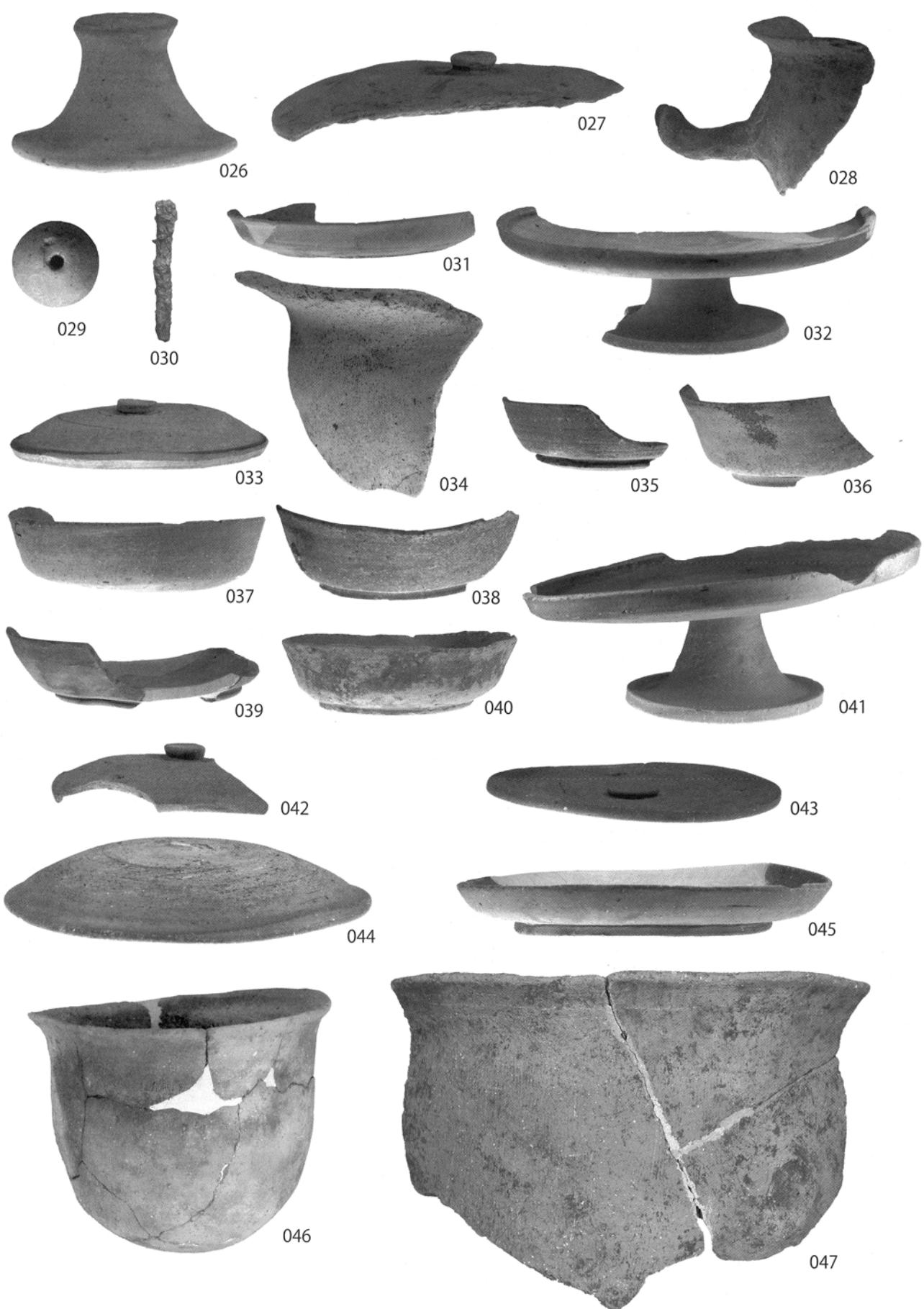


㉕. 調査区北側全景（南から）

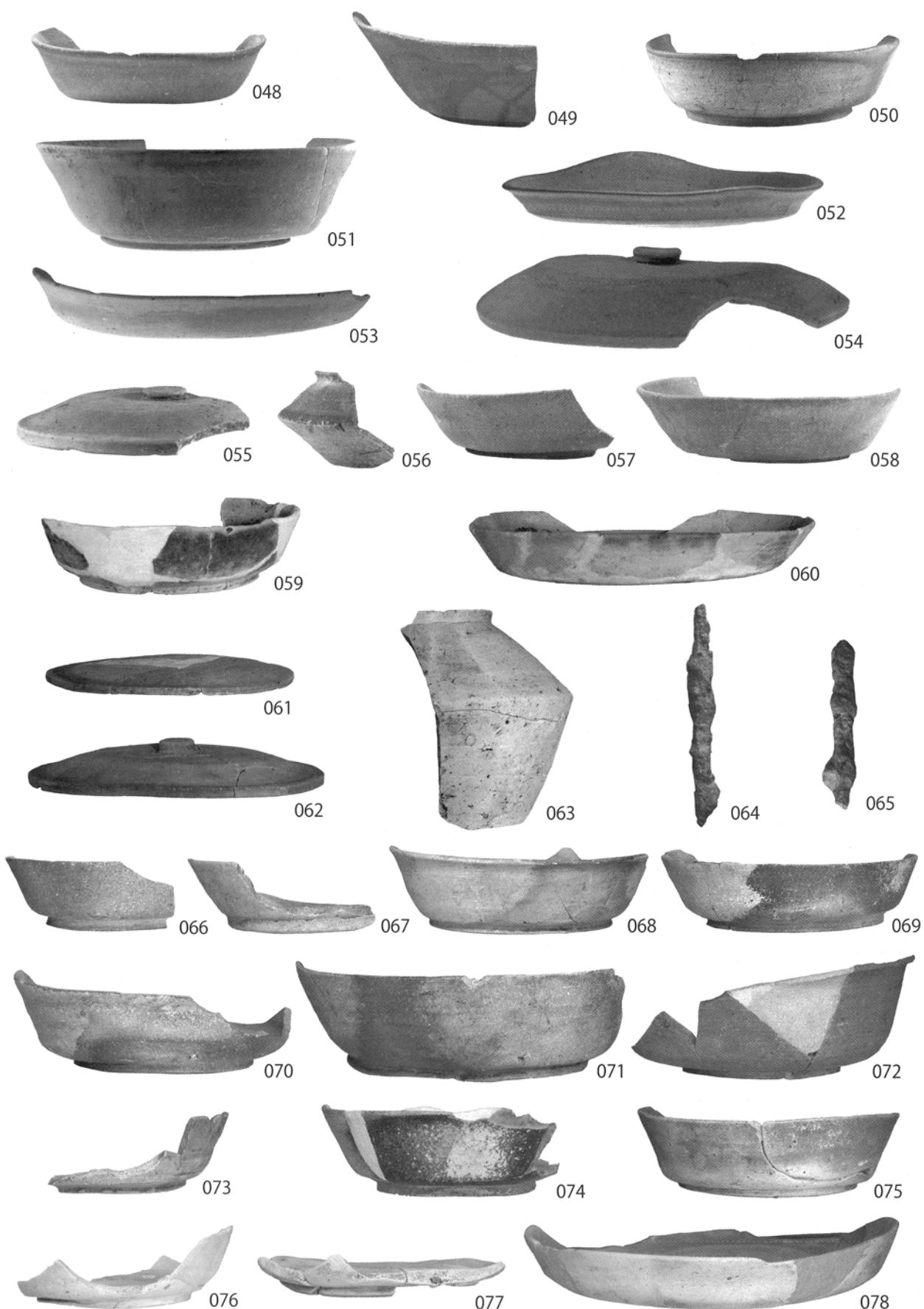
PL5



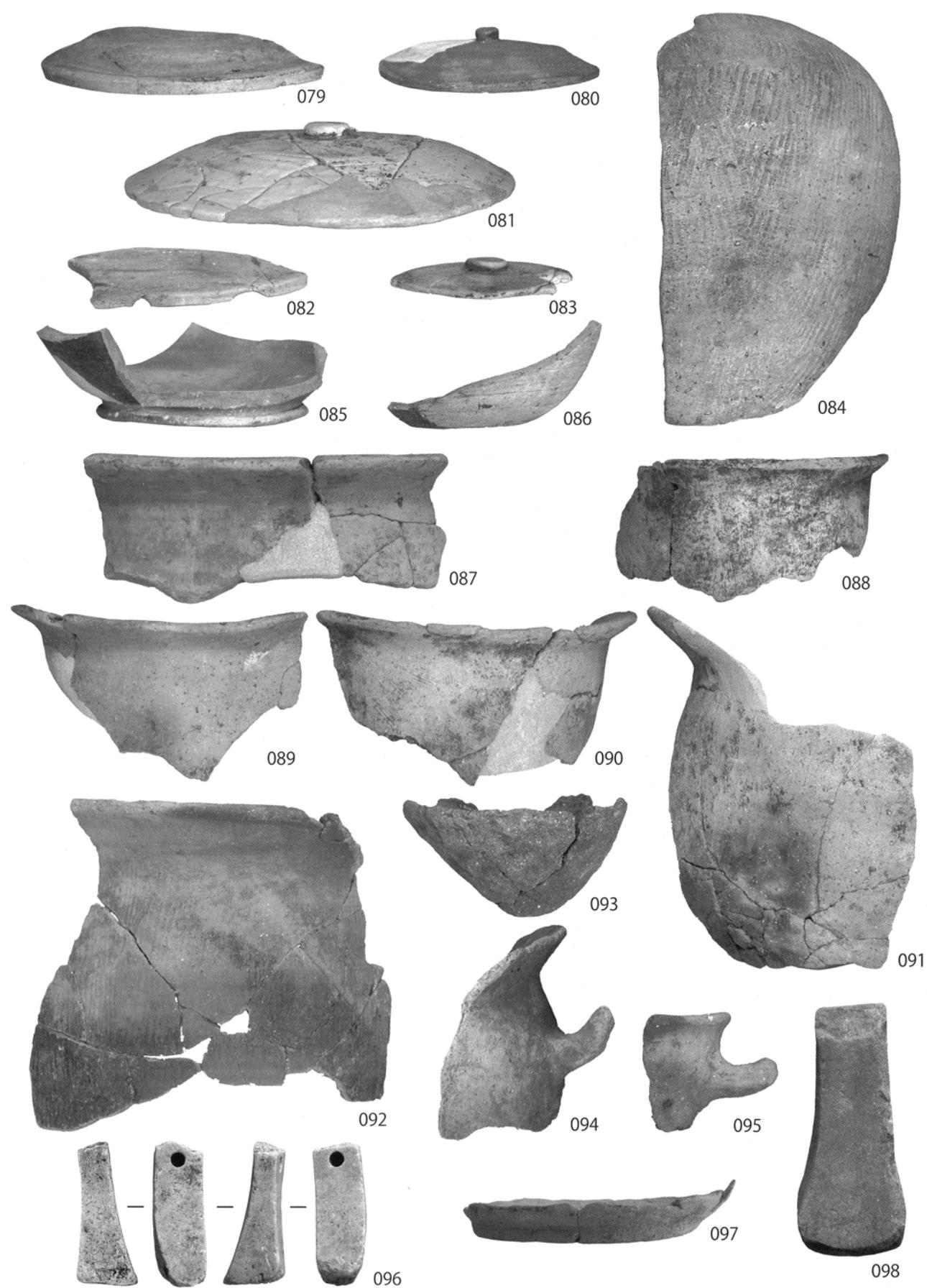
PL6



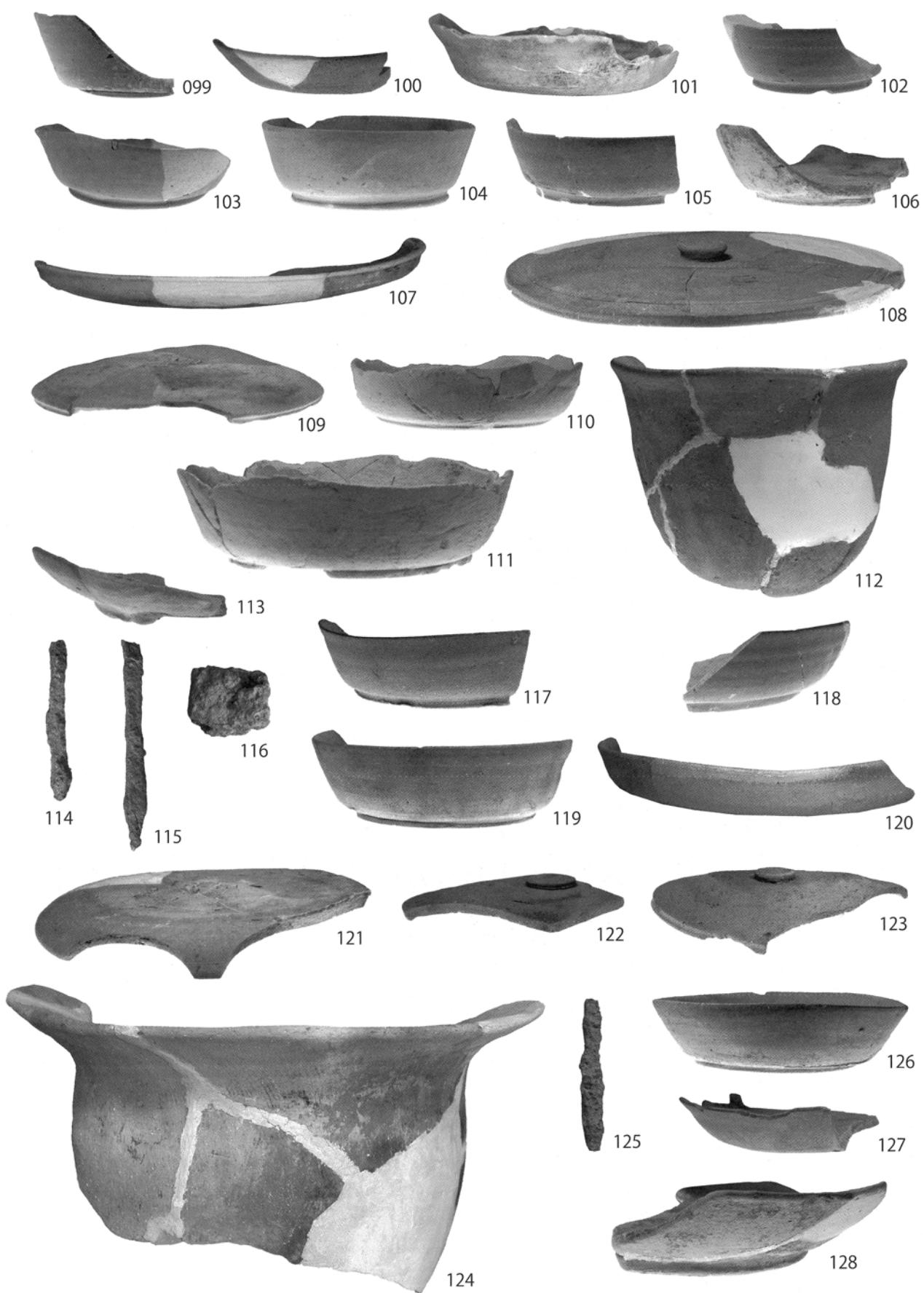
PL7



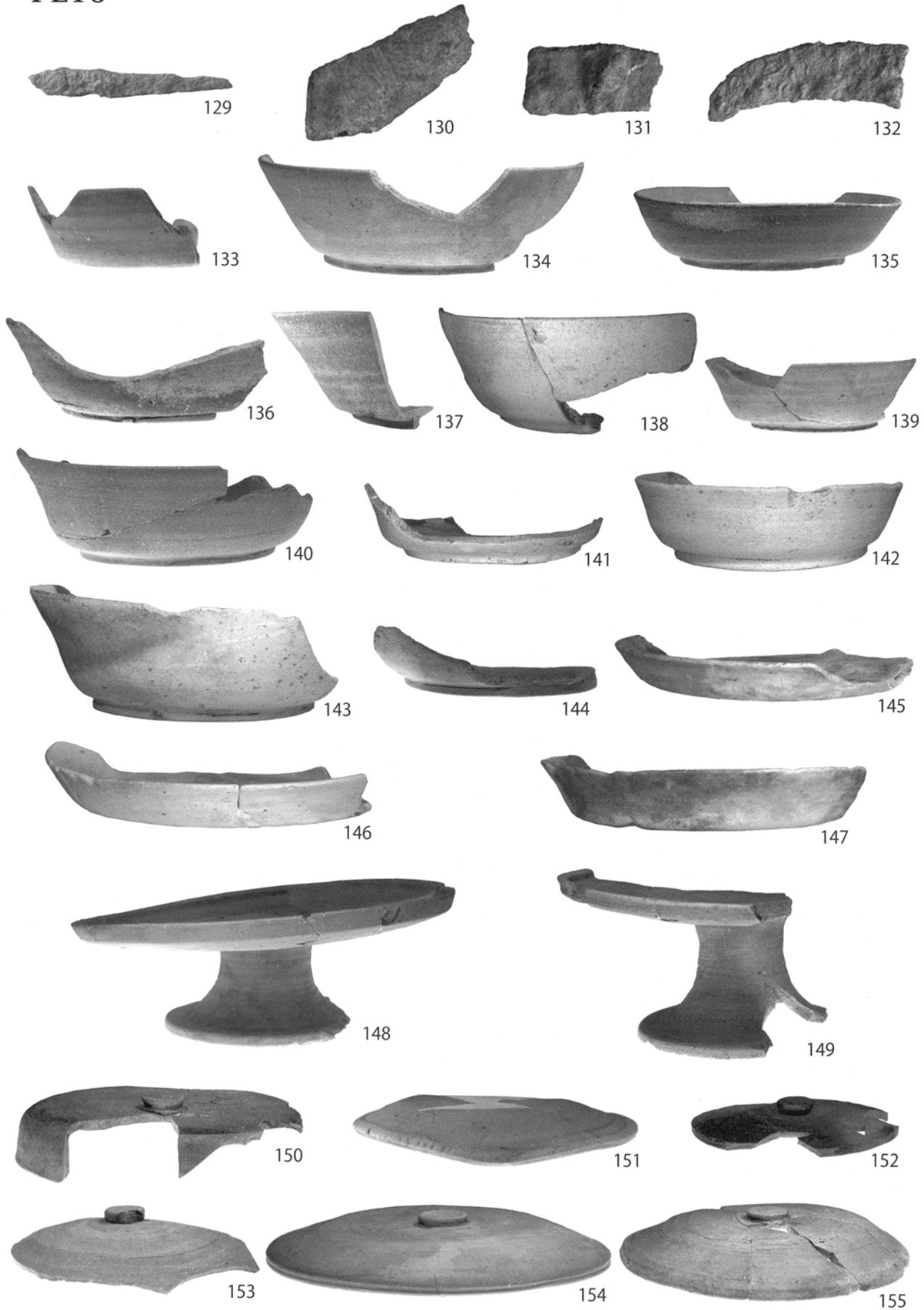
PL8



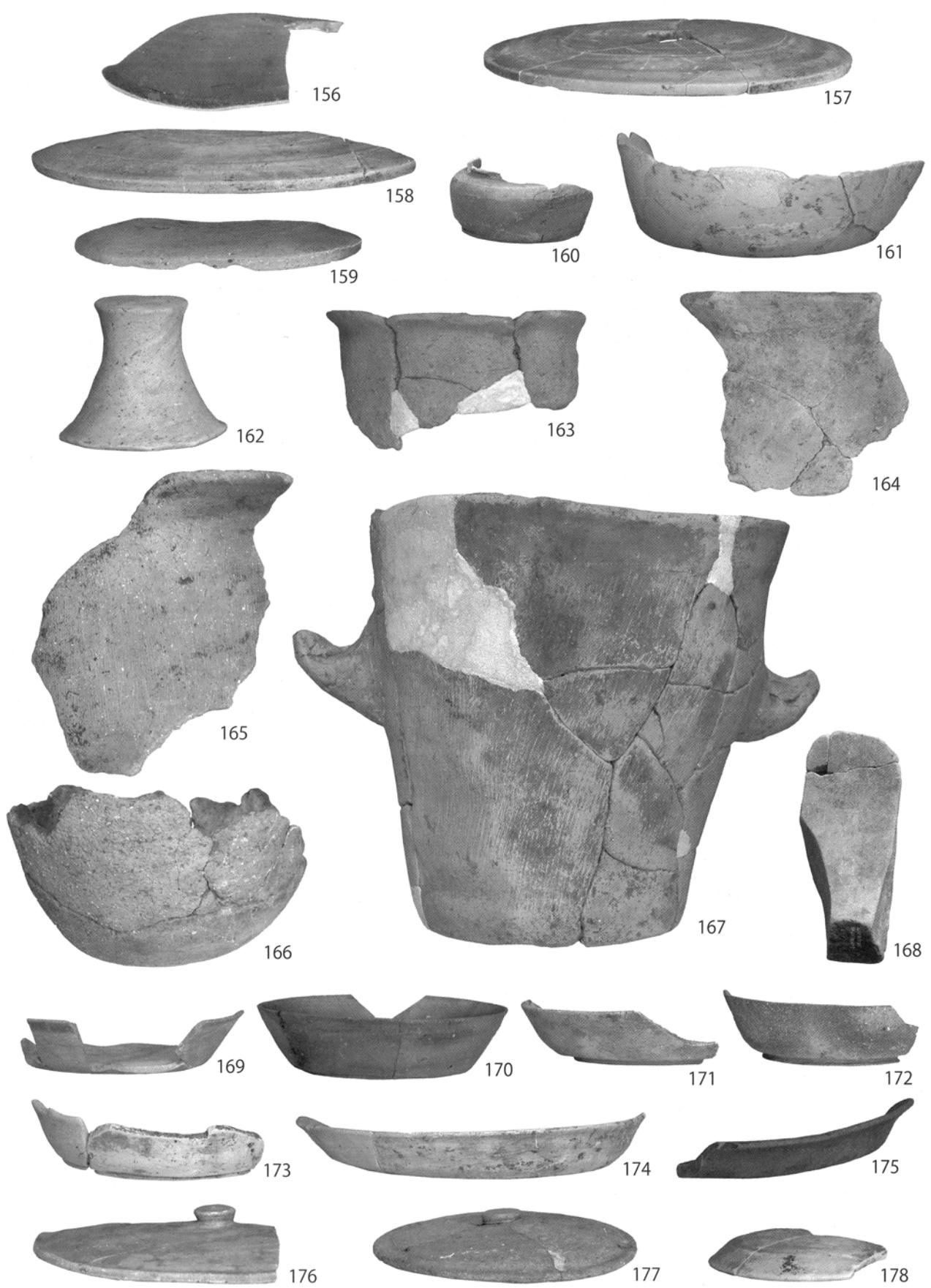
PL9



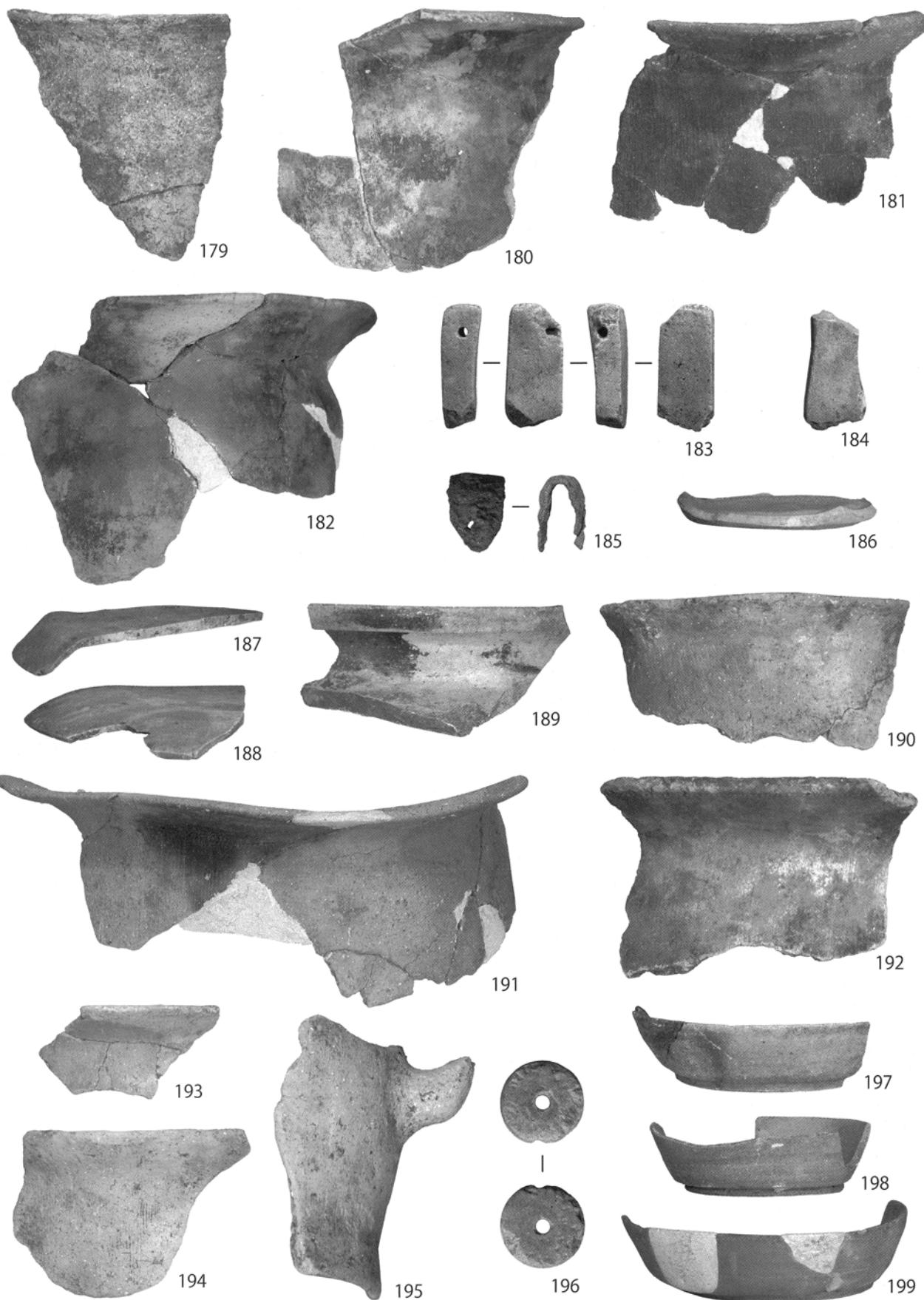
PL10



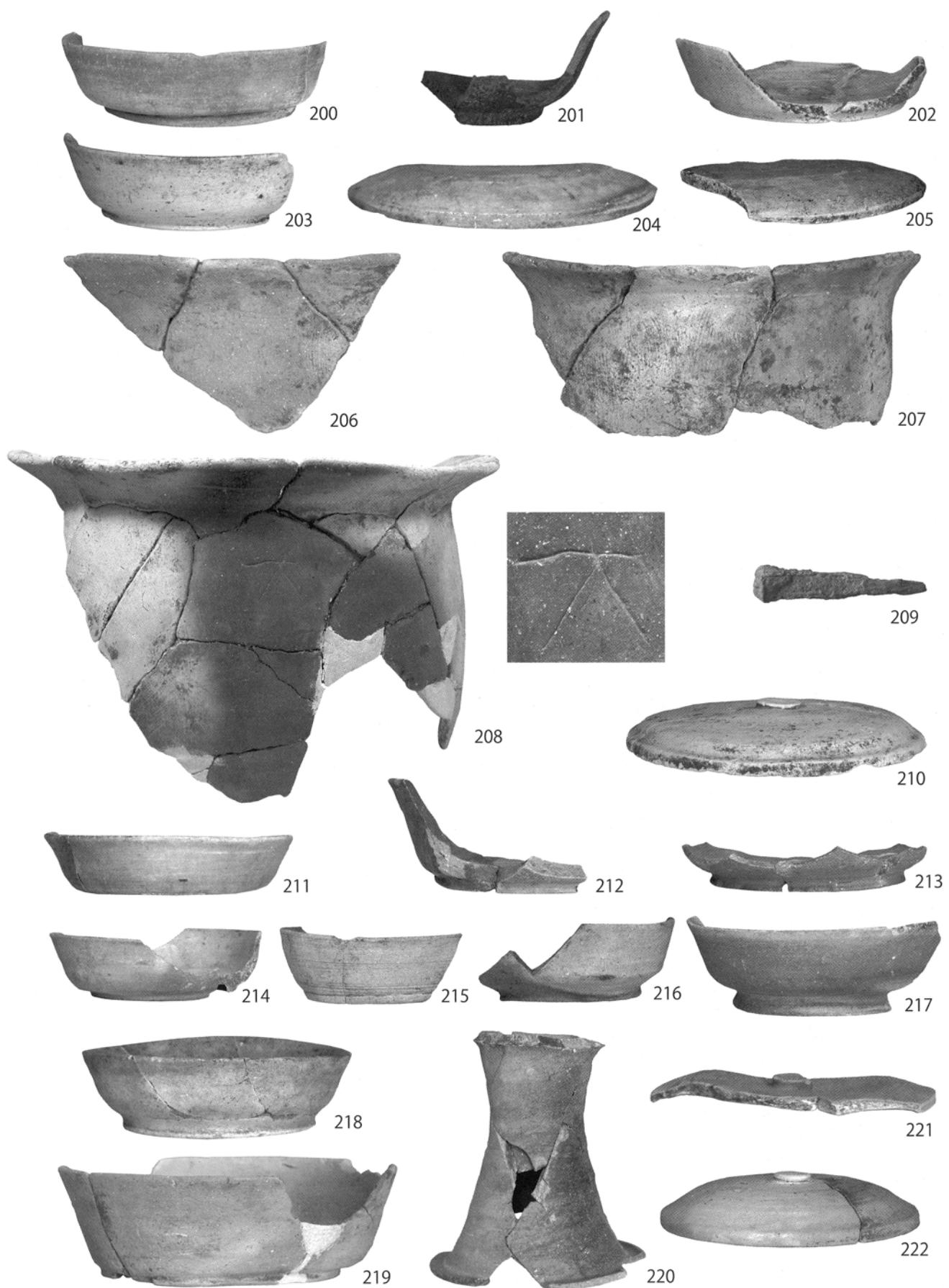
PL11



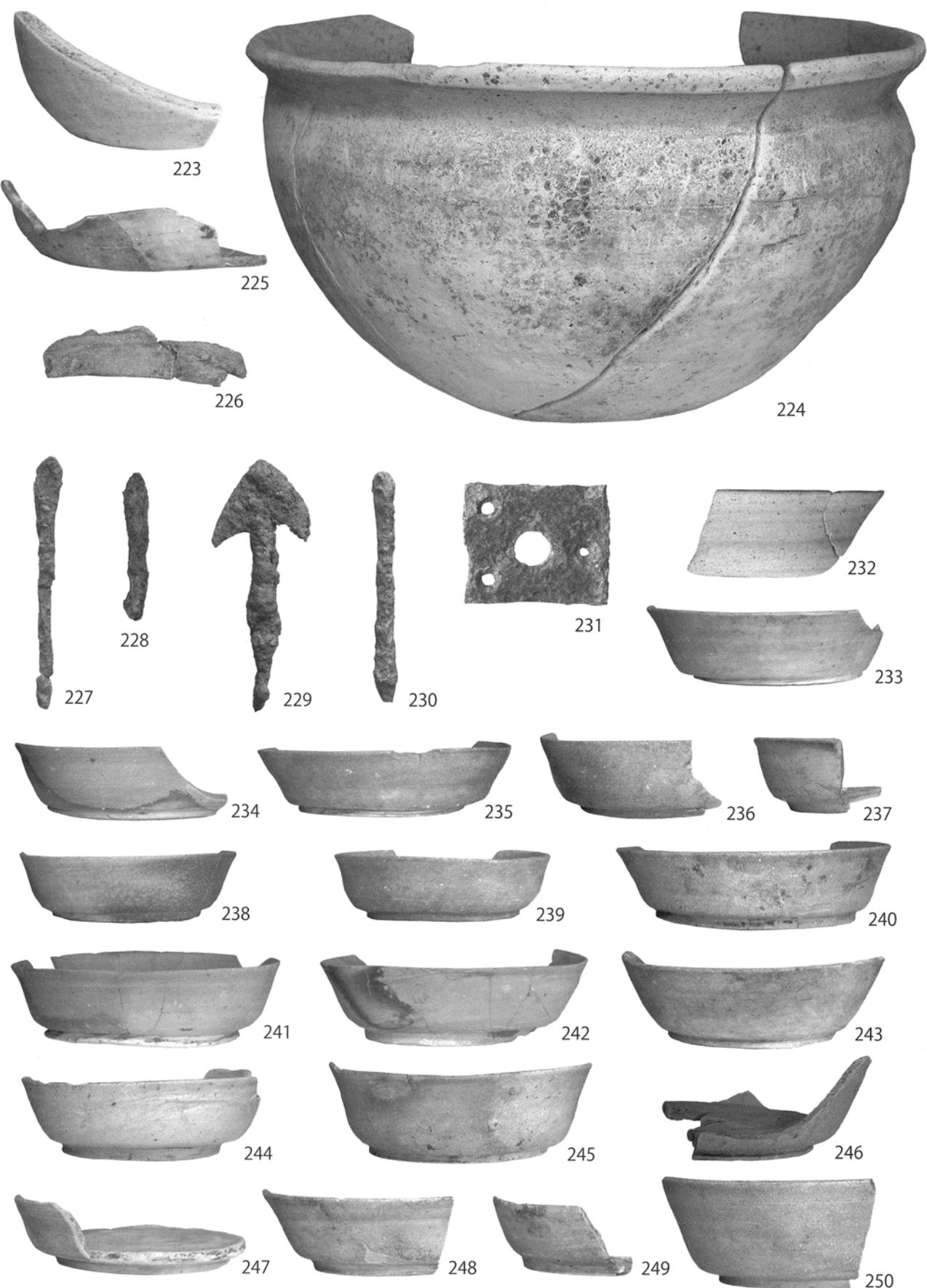
PL12



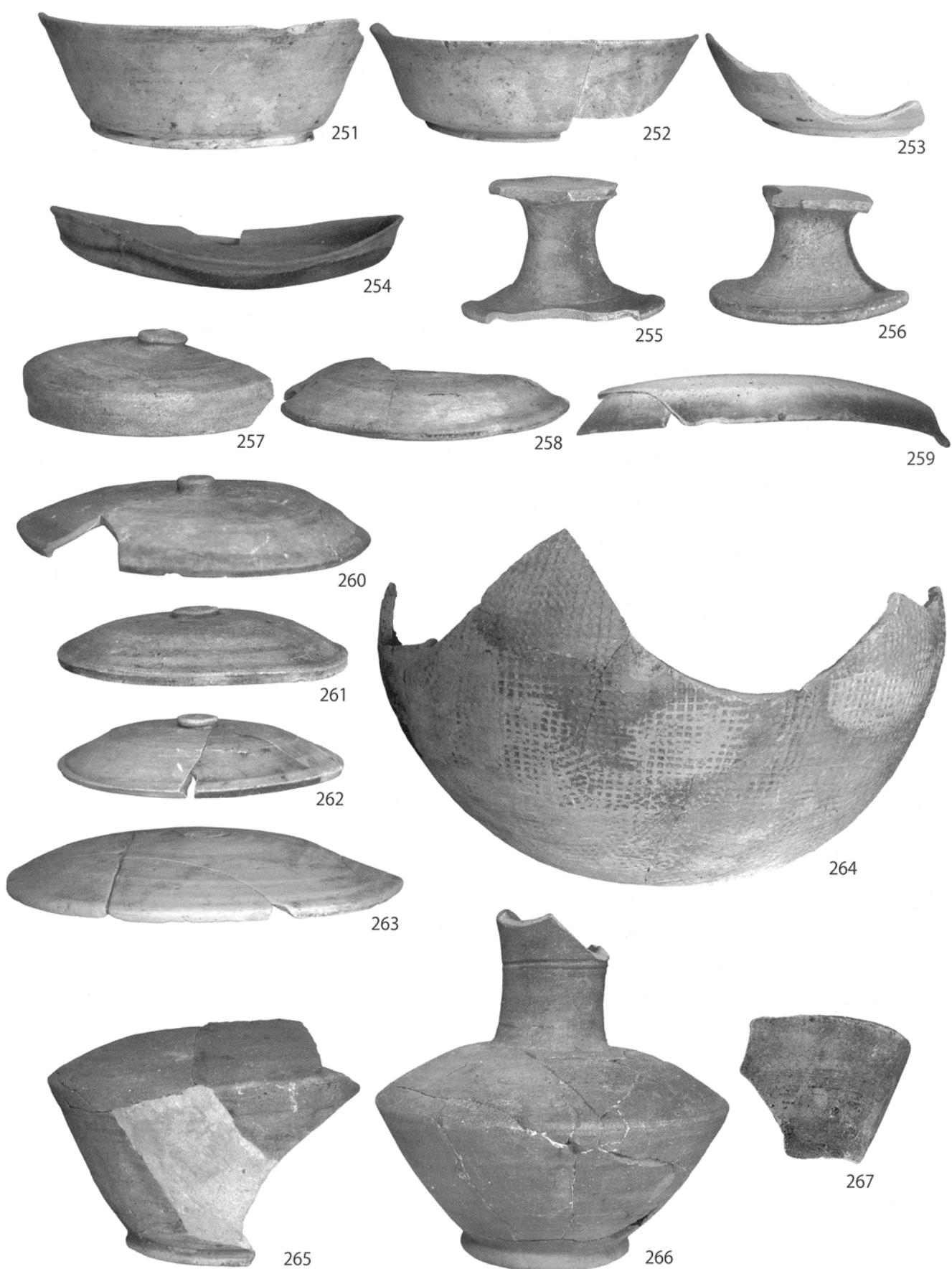
PL13



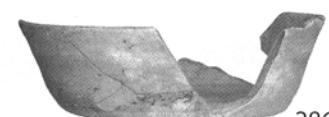
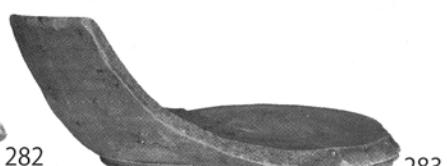
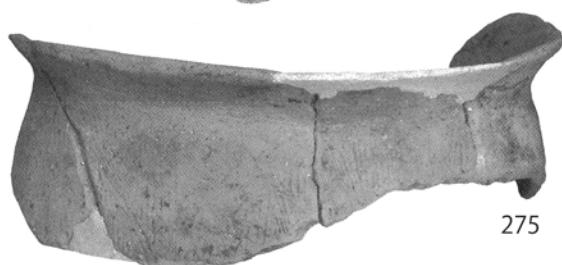
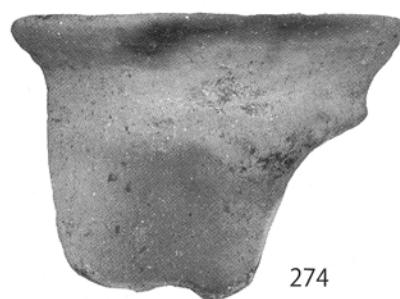
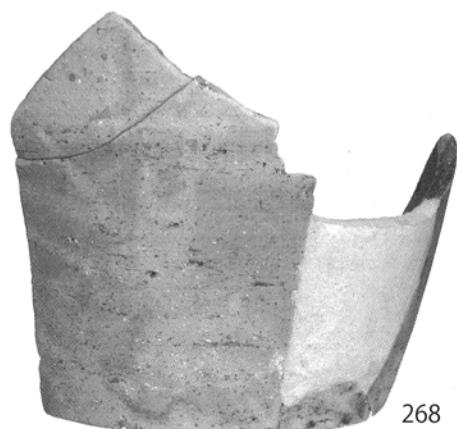
PL14



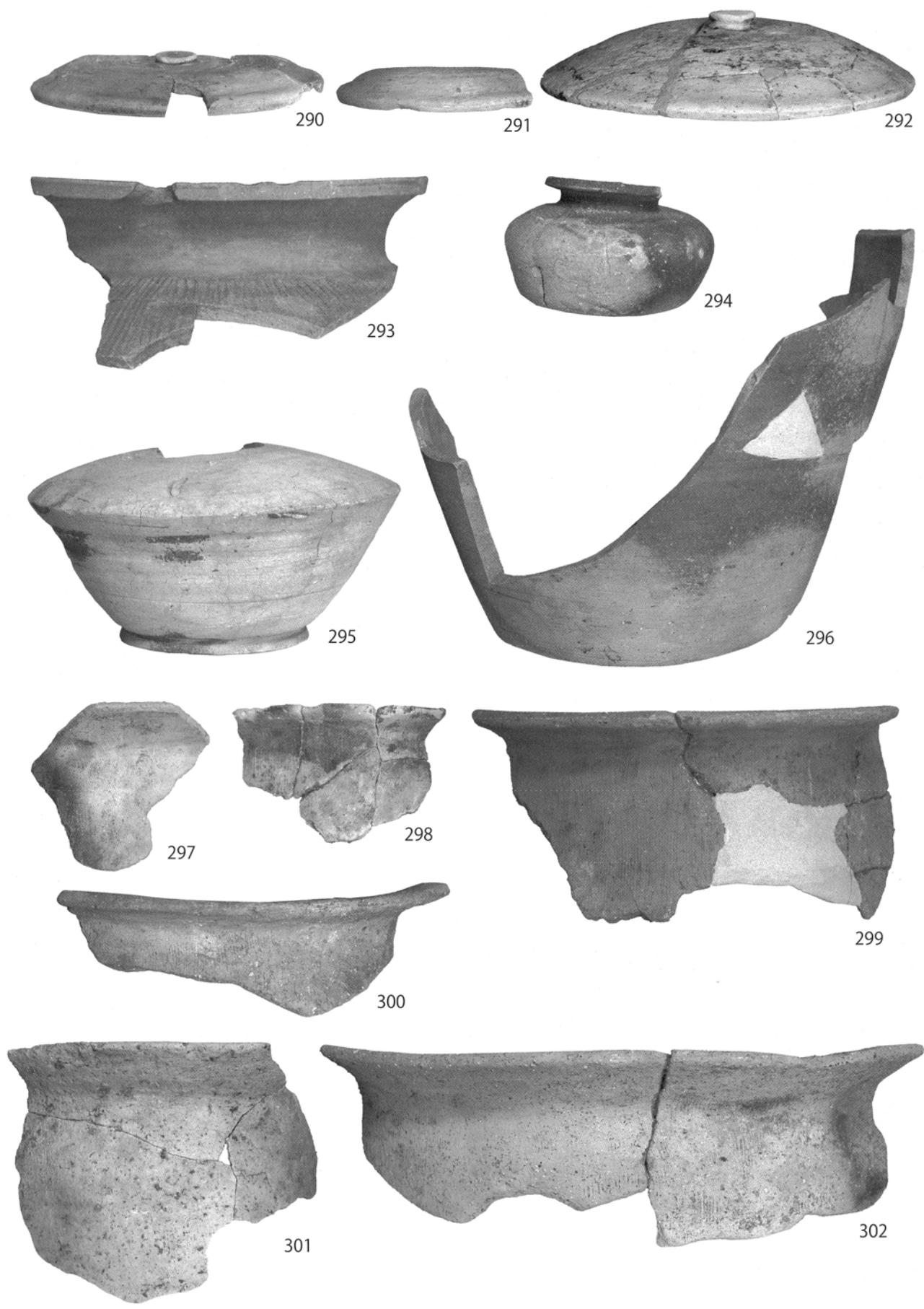
PL15



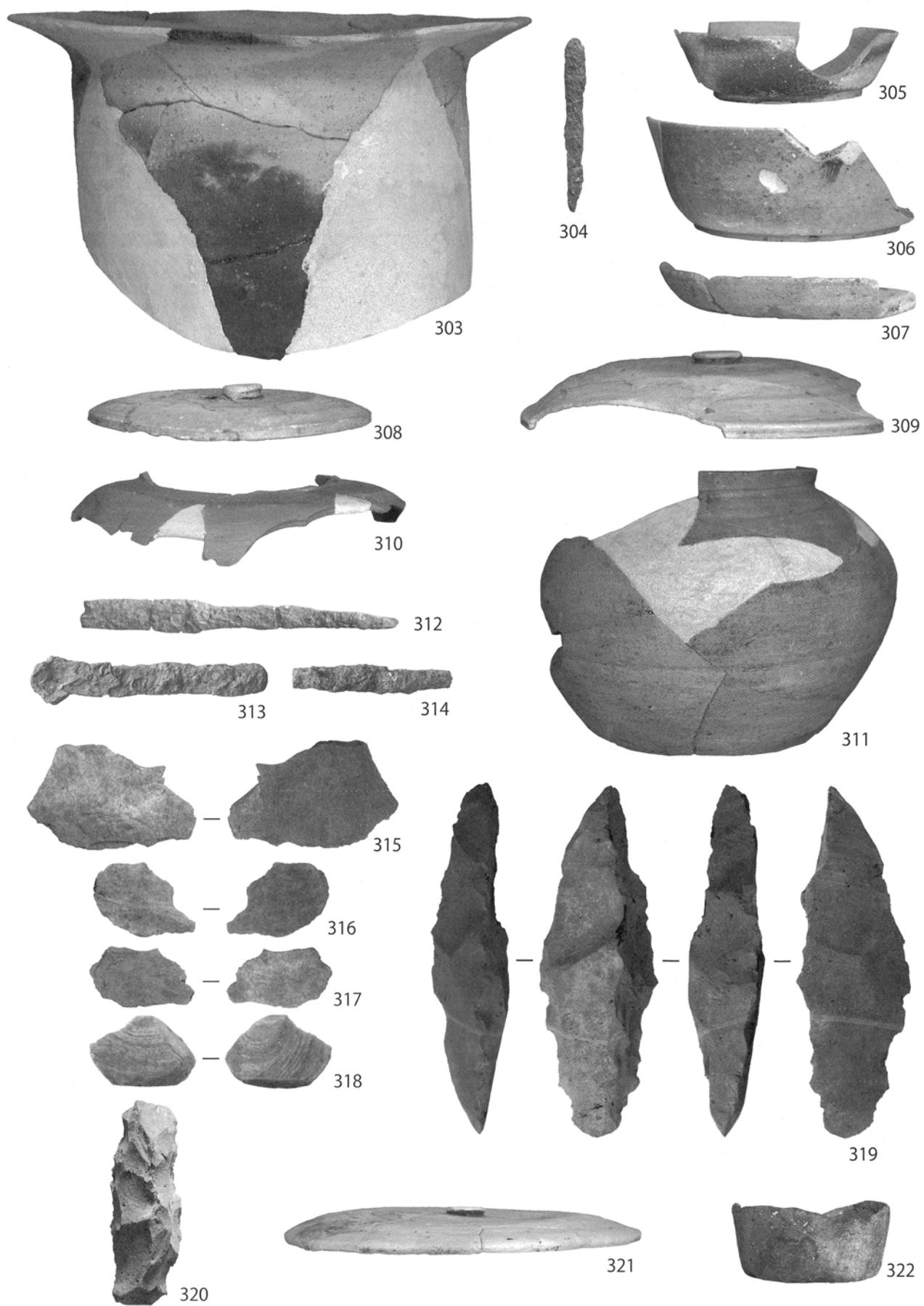
PL16



PL17



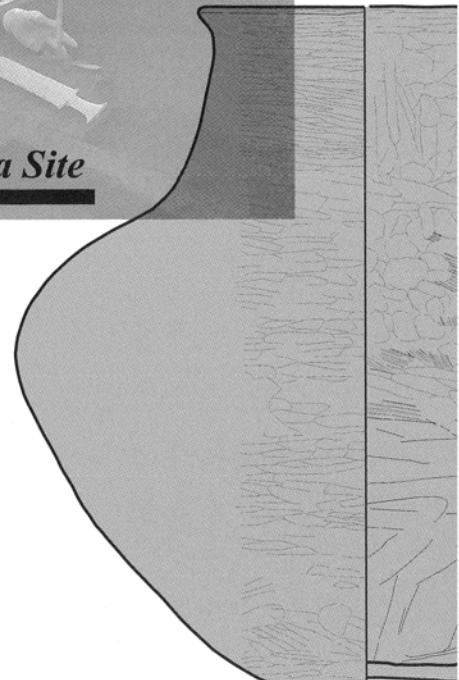
PL18



雜餉隈遺跡 第15次調査



The 15th Excavation Report of Zasshonokuma Site



IV. 第15次調査の概要

1. 調査に至る経緯

平成15年8月8日に、九州旅客鉄道(株)の代表取締役社長・石原進氏より、福岡市博多区新和町二丁目25番地（総面積1,932m²）について、集合住宅建設に係る埋蔵文化財事前審査願が福岡市教育委員会に提出された（事前審査番号15-1-034）。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である雑餉隈遺跡群に含まれており、申請地周辺においても埋蔵文化財発掘調査が多く行われてきた地点である。これを受けた福岡市教育委員会では、平成15年8月12日に試掘調査を行い、対象地内において遺構が存在することが明らかになった。このため事業者と福岡市教育委員会で、埋蔵文化財の取り扱いについて協議がなされた。

この結果、事業地内において地下に掘削がおよぶ範囲について、発掘調査を行う合意を得ることができた。しかし福岡市教育委員会が発掘調査に着手する時期と、事業者の工事日程に調整が困難な事態が生じた。そこで民間調査機関である岡三リビック(株)埋蔵文化財調査室が、九州旅客鉄道(株)の調査委託を受けて発掘調査を受託することになり、九州旅客鉄道(株)、岡三リビック(株)埋蔵文化財調査室、福岡市教育委員会の三者間で、適正な発掘調査を実施するための協定書が取り交わされた。また福岡市教育委員会の指導のもと、岡三リビック(株)埋蔵文化財調査室が発掘調査を行うことになった。発掘調査は平成15年11月10日から開始し、平成16年3月5日に終了することができた。整理作業および報告書作成は、調査終了後に開始し、平成17年3月31日に刊行するに至った。

なお、現地で調査を行うにあたり、ご理解と多大な協力を頂いた九州旅客鉄道(株)をはじめとする事業者関連各位、および指導を賜った福岡市教育委員会の諸氏には、ここに記して感謝の意を表します。（敬称略）

池崎譲二・池田祐司・池ノ上宏・井澤洋一・石井扶美子・岩下義之・久住猛雄・小池史哲
 高野雅博・田上勇一郎・瀧本正志・田中壽夫・常松幹雄・長家伸・橋口達也・堀田正道
 吉留秀敏・山口讓治・山崎純男・米倉秀紀・柳田康雄・力武卓治
 福岡市教育委員会埋蔵文化財課・福岡市埋蔵文化財センター・九州旅客鉄道(株)・(株)友清商店

2. 調査体制

事業主体（調査委託）	九州旅客鉄道(株)
調査主体	福岡市教育委員会
調査担当（調査受託）	岡三リビック(株) 埋蔵文化財調査室
調査員	堀苑孝志（埋蔵文化財調査室 室長） 中山 浩（埋蔵文化財調査室 研究員） 天野直子（埋蔵文化財調査室 研究員） 整理作業のみ
発掘作業	加治久佳・菊澤将憲・倉園真記・柴田徳平・中下まり江・古川 満 松尾祥子
整理作業	佐田祐一・倉園真記・中下まり江・平野由美子・松尾祥子

V. 第15次発掘調査の記録

SC001 竪穴式住居跡

【遺構】

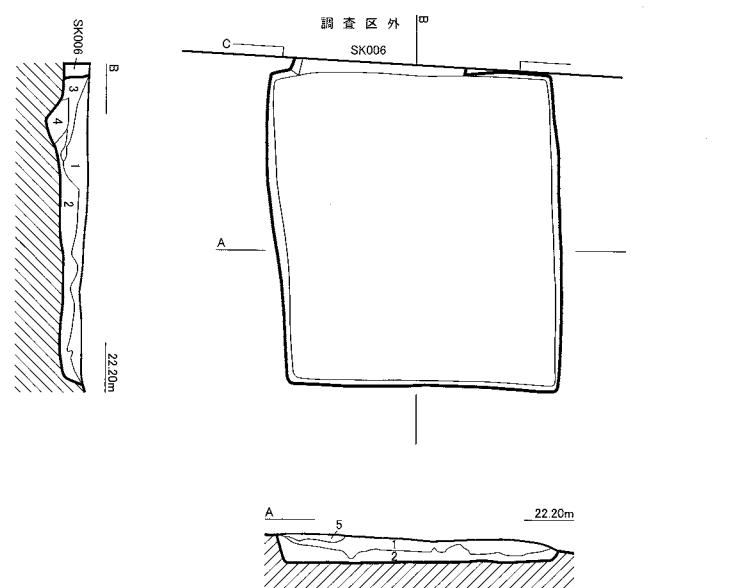
上面は後世の造成により削平され、残存する掘り込みは浅い。東壁の一部がSK006土坑と重複するが、相互の時期的関係を判然とすることは困難であった。但し竈が確認できなかつたこともあり、或いはSK006土坑に破壊された可能性がある。そうすると北壁側に竈は構築されたことになる。

【遺物】

环身は(001～010・012)、断面四角の低い高台が底端部より内側に貼り付き、体部が直線的に外上方に立ち上がるタイプと、体部下位が丸みを帯びるタイプの両方が認められる。

环蓋(017～022)は、口縁部が断面三角形で、垂直に短く屈曲させ、内側に明瞭な稜が残る。

こうした环身や环蓋の特徴から、8世紀代前半を主体とした遺物構成と考えられる。



- | | |
|------------------------|----------------------|
| 1. 黒褐 5YR3/1 粘性あり・しまり強 | ローム粒子を中量含む。炭化物を少量含む。 |
| 2. 黒褐 5YR3/1 粘性あり・しまり強 | ローム粒子を多量含む。炭化物を少量含む。 |
| 3. 黒褐 5YR3/1 粘性あり・しまり強 | ローム粒子を少量含む。 |
| 4. 黒褐 5YR3/1 粘性あり・しまり強 | ロームブロックを多量含む。 |
| 5. 黒褐 5YR2/1 粘性あり・しまり強 | ローム粒子を少量含む。 |

- | | |
|----------------------------|-------------|
| 1. 黒褐 7.5YR3/1 粘性あり・しまり強 | ローム粒子を少量含む。 |
| 2. 暗褐 7.5YR3/3 粘性あり・しまり強 | ロームを中量含む。 |
| 3. にぶい褐 7.5YR5/4 粘性あり・しまり強 | ロームを多量含む。 |



Fig.83 SC001・SK006 遺構平面図

全 体	平面形態	長方形
	主軸角度	竈が未確認のため不明
	規 模	南北 2.30 m × 東西 2.50 m
	壁	東壁の約半分ほどが SK006 土坑と重複する　深さ 0.20 mを測る
	ピット	なし
	周 溝	なし
床 面	全体的にロームが硬質化する	
	掘り方	なし
竈	位 置	確認した範囲内では認められず、SK006 土坑と重複する北壁に構築された可能性あり
	形 状	不明
	中心軸長	不明
	燃焼口幅	不明
	壁	不明
	火 床	不明
	袖 部	不明

Tab.52 SC001 遺構観察表

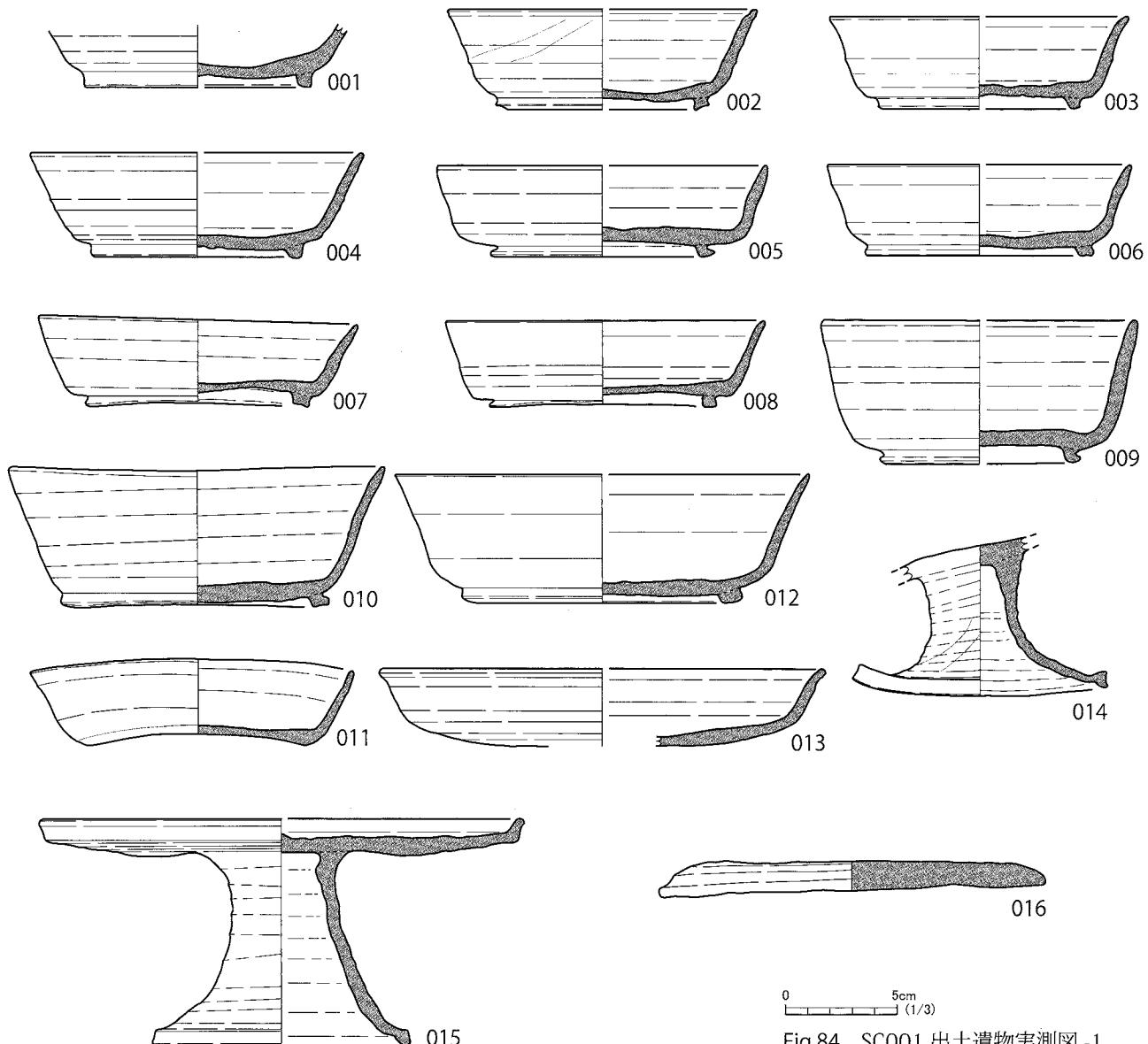


Fig.84 SC001 出土遺物実測図 -1

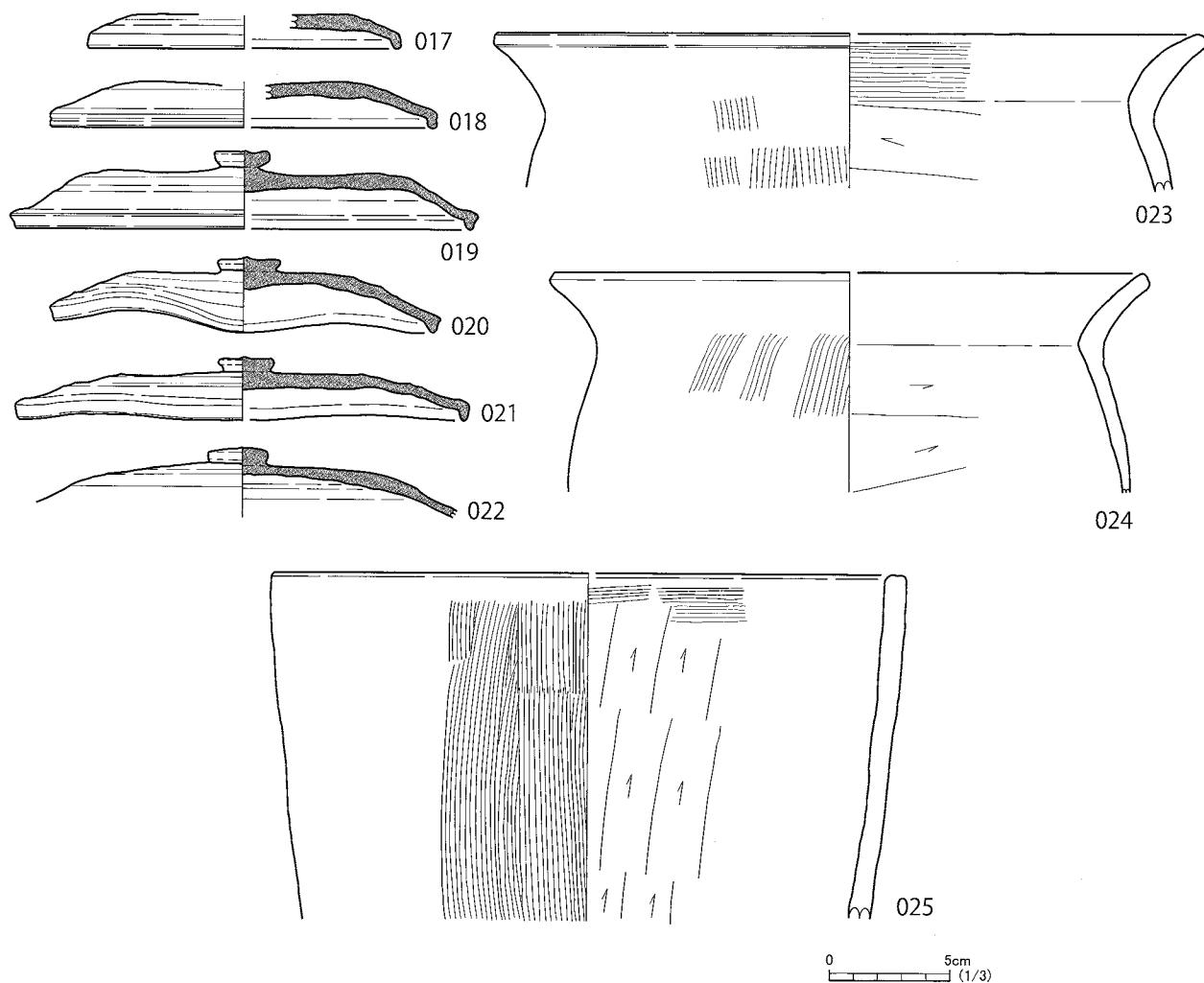


Fig.85 SC001 出土遺物実測図 -2

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
001	須恵器	埋土下層	不明	10.2	不明	褐灰 10YR 6/1	底部のみ残存。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
002	須恵器	埋土下層	(13.8)	(9.5)	4.8	灰白 10YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部内側が外反する。体部外側には下位から口縁に向け、絞りあげた痕が斜め方向に残る。断面四角の高台が、底端部より内側に跳ね上がるよう貼り付けられる。
	环身						
003	須恵器	埋土下層	(13.4)	(9.0)	4.1	灰黄褐 10YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部が外反する。体部下位は回転ヘラ削り。断面四角の高台が、底端部より内側に跳ね上がるよう貼り付けられる。
	环身						
004	須恵器	埋土下層	(15.0)	9.4	4.7	灰黄褐 10YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上る。体部下位は回転ヘラ削り。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底部内面にハケ目。
	环身						
005	須恵器	埋土下層	(14.8)	10.0	4.1	にぶい黄橙 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。高台が、底端部より内側に跳ね上がるよう貼り付けられる。
	环身						
006	須恵器	埋土下層	(13.6)	10.2	4.1	灰黄褐 10YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の低い高台が、底端部よりやや内側に貼り付けられる。
	环身						

Tab.53 SC001 出土遺物観察表 -1

()内の数値は推定の法量を表す

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
007	須恵器 环身	埋土下層	14.3	9.9	3.7 ~ 4.1	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の低い高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底部は回転ヘラ切り後に、ヘラ削り調整。
008	須恵器 环身	埋土下層	14.6	10.3	3.9	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
009	須恵器 环身	埋土下層	(14.2)	9.0	6.4	にぶい黄橙 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
010	須恵器 环身	埋土下層	16.9	11.8	6.3	にぶい黄橙 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がり。断面四角の太く低い高台が、底端部よりやや内側に貼り付けられる。
011	須恵器 环	埋土下層	14.5	9.5	3.3	褐灰 10YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。歪みが生じ、底部が盛り上がる。体部下位は回転ヘラ削り。底部には静止糸切り痕が認められる。
012	須恵器 环身	埋土上層	(18.6)	12.5	5.8	灰白 10YR 8/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部と底部の境は丸みを帯び、明瞭ではない。断面四角の高台が、開き気味に貼り付けられる。焼成不良で軟質。
013	須恵器 皿	埋土下層	(20.0)	(17.4)	3.5	灰白 10YR 7/1	底部は丸みを帯びる。口縁部は外反する。焼成不良で軟質。
014	須恵器 高环	埋土上層	不明	11.4	不明	褐灰 10YR 6/1	环部は欠損。脚部外面に絞りあげた痕が斜め方向に残る。器形に歪みが生じる。
015	須恵器 高环	埋土上層	(21.9)	(11.6)	10.2	褐灰 10YR 6/1	环部は浅く、口縁部を短く直立させる。
016	須恵器 蓋	埋土下層	14.9	—	1.1 ~ 1.7	灰白 10YR 8/1	円盤状の形状を呈する。焼成不良で軟質。
017	須恵器 环蓋	埋土上層	(13.0)	—	1.4	褐灰 10YR 6/1	口縁部は断面三角形で、垂直に短く屈曲する。内側に明瞭な稜が残る。天井部は回転ヘラ削り調整。
018	須恵器 环蓋	埋土上層	(16.0)	—	1.9	褐灰 10YR 6/1	口縁部は断面三角形で、垂直に短く屈曲する。内側に明瞭な稜が残る。天井部は回転ヘラ削り調整。
019	須恵器 环蓋	埋土上層	(19.4)	—	3.2	褐灰 10YR 5/1	口縁部は断面三角形で、垂直に短く屈曲する。内側に明瞭な稜が残る。天井部は回転ヘラ削り調整。
020	須恵器 环蓋	埋土上層	16.2	—	3.1	にぶい黄橙 10YR 7/2	口縁部は断面三角形で、垂直に短く屈曲する。内側に明瞭な稜が残る。天井部は回転ヘラ削り調整。器形に歪みが生じる。
021	須恵器 环蓋	埋土上層	(18.8)	—	2.6	褐灰 10YR 6/1	口縁部は断面三角形で、垂直に短く屈曲する。内側に明瞭な稜が残る。天井部は回転ヘラ削り調整。
022	須恵器 环蓋	埋土上層	不明	—	2.9	灰白 10YR 8/1	天井部は回転ヘラ削り調整。焼成不良で軟質。
023	土師器 甕	埋土下層	(14.7)	不明	不明	橙 5YR 6/6	外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。
024	土師器 甕	埋土下層	(24.8)	不明	不明	浅黄橙 7.5YR 8/4	外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。
025	土師器 甕	埋土下層	(26.3)	不明	不明	浅黄橙 7.5YR 8/4	外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。

Tab.54 SC001 出土遺物観察表 -2

() 内の数値は推定の法量を表す

SR002 木棺墓

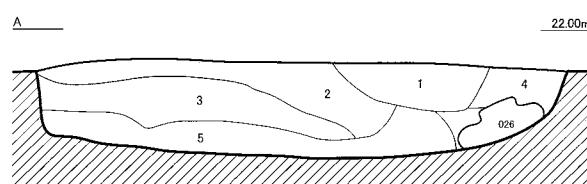
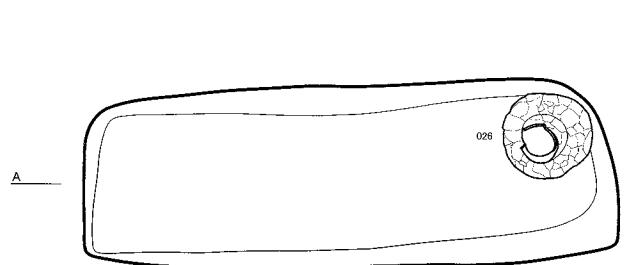
【遺構】

後世の造成により、遺構上面は削平される。平面の形態は 0.7×2.1 m の長方形を呈し、約 0.3m の深さであった。棺材および被葬者を示す人骨等は確認できなかったが、遺構の形態から類推し、木棺墓として取り扱うこととした。

北東隅の下層からは、押し潰された状態で、完存する壺（026）が認められる。

【遺物】

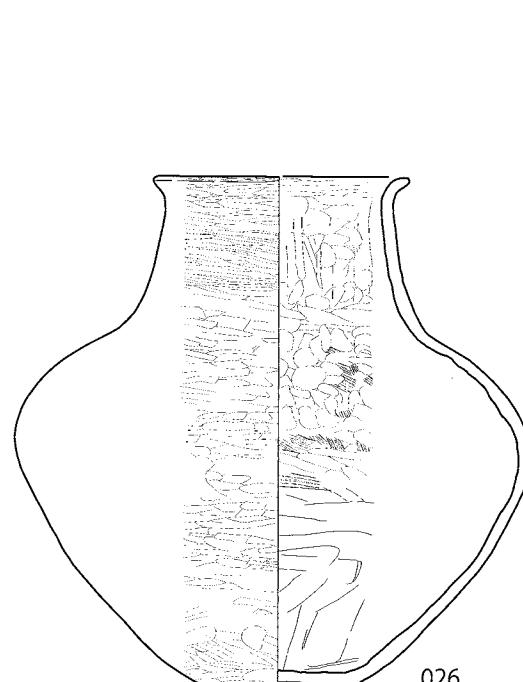
出土遺物は、副葬品の壺が 1 点のみである。器形は体部中位が大きく張り出し、球形の膨らみを作り出す。頸部は内傾気味に直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。器表面は頸部から体部下位にかけて、横方向に研磨が施される。内面はヘラ削りが全体的にみられる。時期的には他の木棺墓出土の土器とほぼ同時期で、弥生時代早期の夜臼式系として位置づけられる。



- 1. にぶい赤褐 5YR4/3 粘性あり・しまり強 ロームを多量含む。
- 2. 黒褐 5YR3/1 粘性あり・しまり強 ローム粒子を少量含む。
- 3. 黒褐 5YR3/1 粘性あり・しまり強 ローム粒子を中量含む。
- 4. 黒褐 5YR2/1 粘性あり・しまり強 ローム粒子を少量含む。
- 5. 灰褐 5YR4/2 粘性あり・しまり強 ロームを主体として構成される。

0 1m (1/30)

Fig.86 SR002 遺構平断面図



0 10cm (1/4)

Fig.87 SR002 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
026	弥生土器 壺	埋土下層	13.5	8.1	27.0	褐灰 7.5YR 6/1	底部から体部は大きく外傾しながら、球形の胴部を作る。頸部は直線的に内傾しつつ、口縁部で外反する。器表面には横方向に研磨が施される。

Tab.55 SR002 出土遺物観察表

SR003 木棺墓

【遺構】

SR002 木棺墓から、東側に 7 mほど離れた位置で、長軸方向の傾きをほぼ同じくして確認された。ここも後世の造成により、遺構上面が削平される。平面の形態は 0.8×1.85 mの長方形を呈し、約 0.4mの深さであった。棺材および被葬者を示す人骨等は確認できなかったが、遺構の形態から類推し、木棺墓として取り扱うこととした。

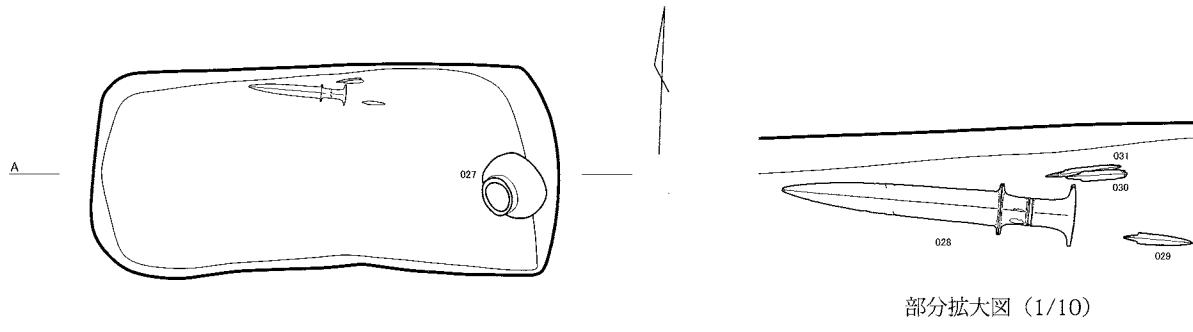
東壁中央の下層からは、完存の壺（027）が認められた。さらに北壁沿いに鋒を西側に向かた状態で、有柄式磨製石剣（028）が1本と、これとは全く逆位に鋒を揃えて並んだ、有茎式磨製石鎌（029・030・031）が3本出土した。

【遺物】

壺は他の木棺墓出土のものとほぼ同時期で、弥生時代早期の夜臼式系として位置づけられる。器形および特徴も類似する。

有柄式磨製石剣は表面が風化し、脆弱化が進んだ状態にあったため、鋒の先端が僅かに欠損するが、本来は完存品を副葬したものである。柄から鋒までの全身には、研磨した痕が明瞭に認められる。柄の中央には節帶を有する。両面中央には鎬が通り、断面は菱形を呈する。基部から並行して延びる剣身は、途中で屈曲すると先細り鋒へと向かう。

有茎式磨製石鎌は1点が、脆弱化して先端を欠損するが、本来は完存品を副葬したものである。3点のいずれもが細身で、柳葉形を呈する。鎌身の両面中央には鎬が通り、断面形態は菱形を成す。茎部は関からほぼ直角に作り出され、多面体に研磨されながら、末端に向かい先細る。然るに断面も角ばった多面形となる。



部分拡大図 (1/10)

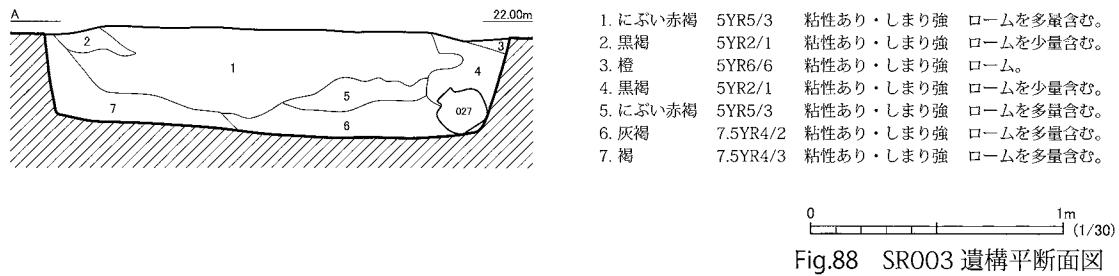


Fig.88 SR003 遺構平面図

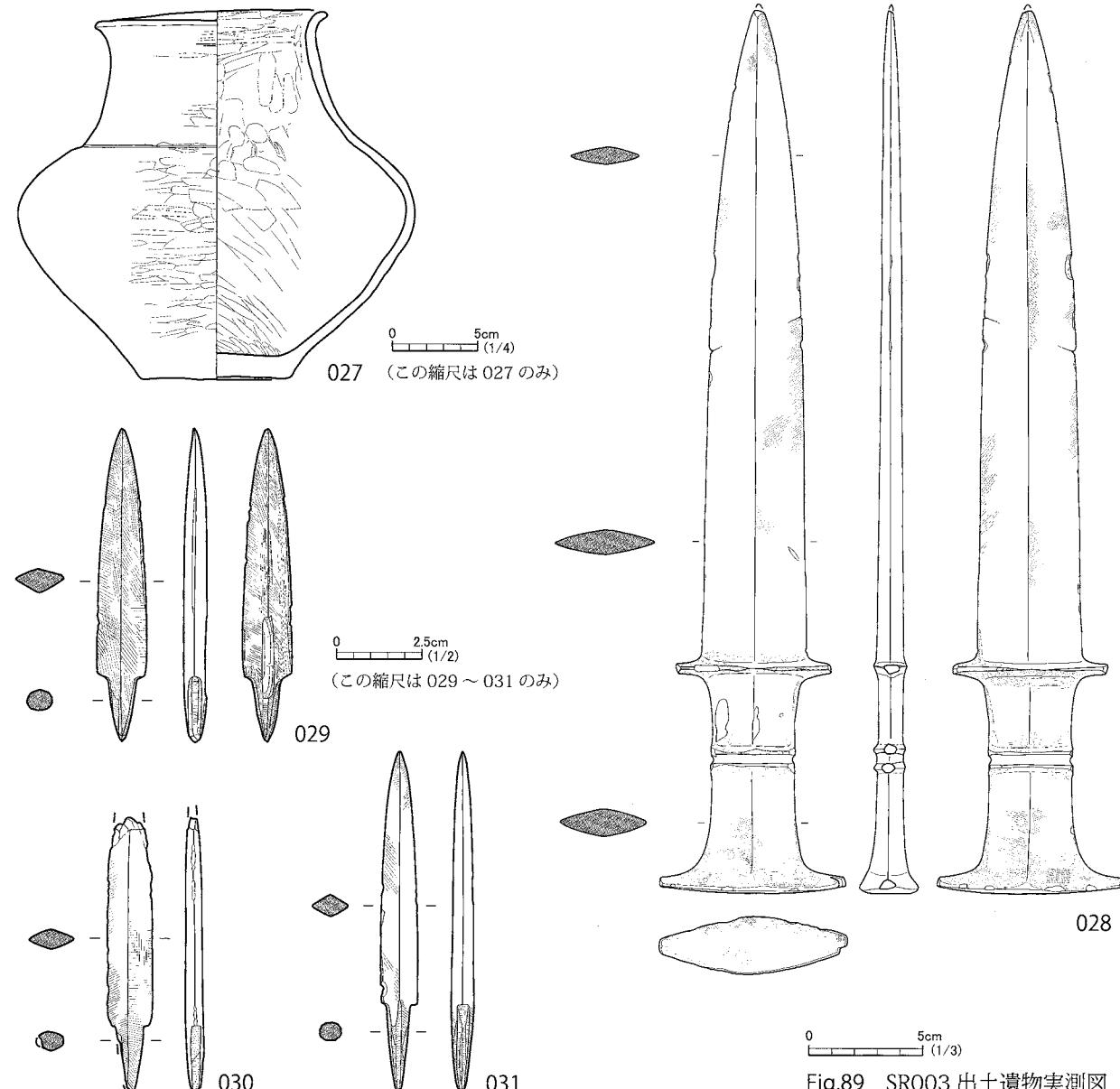


Fig.89 SR003 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
027	弥生土器 壺	埋土下層	13.3	8.7	21.0 ~ 21.6	にぶい黄橙 10YR 7/3	体部は大きく外傾しながら、球形の胴部を作る。頸部と体部の境には、一条の沈線が巡る。頸部は直線的に内傾しつつ、口縁部で外反する。器表面には横方向に研磨が施される。
028	有柄式 磨製石劍	埋土下層	全長 38.9	身最大幅 4.6	身最大厚 1.0	重さ(g) 260.0	先端部が欠損。全面に研磨した痕が明瞭に認められる。身の両面中央には鏽が通り、断面は菱形となる。柄の中央に節を有する。粘板岩製。
029	有茎式 磨製石鎌	埋土下層	9.2	1.5	0.7	8.2	全面に研磨した痕が認められる。鎌身の断面は菱形、茎部の断面は多角形を呈する。片面中央部に溝状の窪みを持つ。粘板岩製。
030	有茎式 磨製石鎌	埋土下層	8.1 残存部分	1.3	0.5	6.5	全面に研磨した痕が認められる。先端部が脆弱化し欠損する。鎌身の断面は菱形、茎部の断面は多角形を呈する。粘板岩製。
031	有茎式 磨製石鎌	埋土下層	10.0	1.1	0.7	7.4	全面に研磨した痕が認められる。鎌身の断面は菱形、茎部の断面は多角形を呈する。粘板岩製。

Tab.56 SR003 出土遺物観察表

SK004 土坑

【遺構・遺物】

後世の造成により、遺構上面は著しく削平される。平面の形態は、 0.6×1.5 mの隅丸長方形を呈し、深さ 0.15 mを測る。当遺構に伴う出土遺物はなく、時代および性格は不明である。

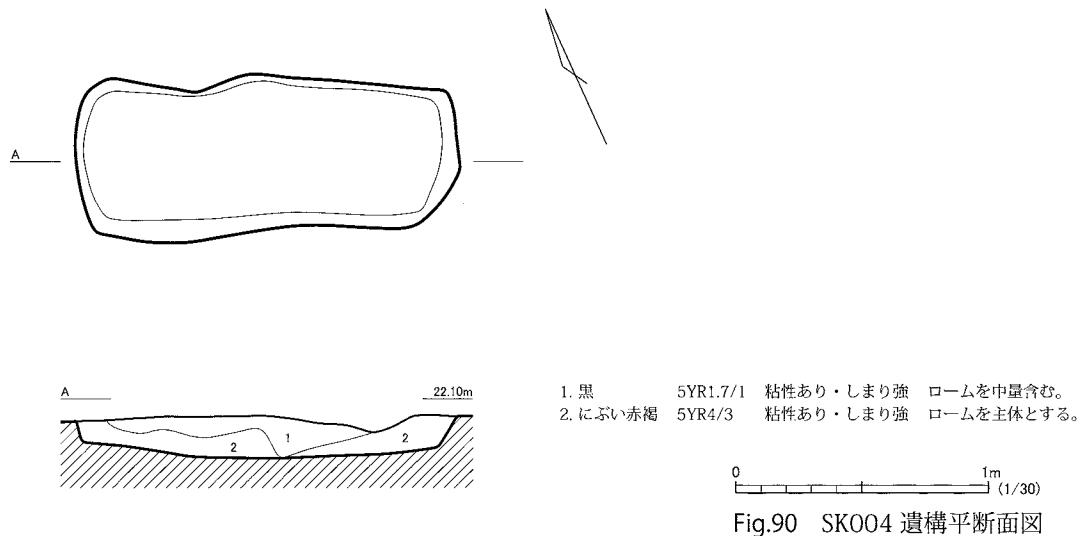


Fig.90 SK004 遺構平断面図

SC005 竪穴式住居跡

【遺構】

上面は削平されていることもあり、残存していた掘り込みは浅い。中央部を大きく抉るようにして、攪乱が床面の下までおよぶ。竈はその攪乱際に辛うじて残存していた。こうした状況から、攪乱は調査区外の北壁までもおよぶものと思われるが、未調査ということもあり、南北方向の規模は不明である。確認できた床面は一部分であるが、ロームが硬質化した状態であった。

【遺物】

当遺構に伴う出土遺物はない。

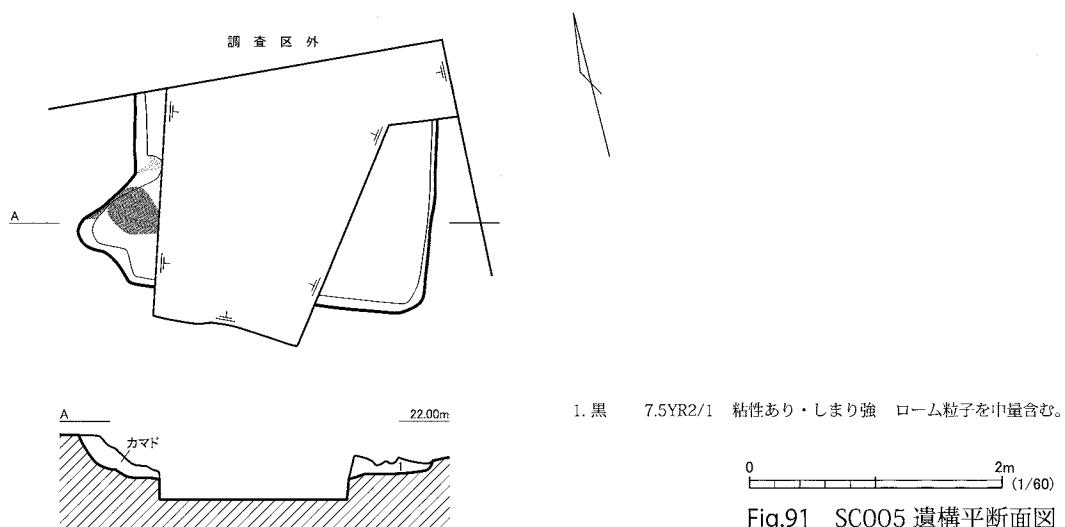
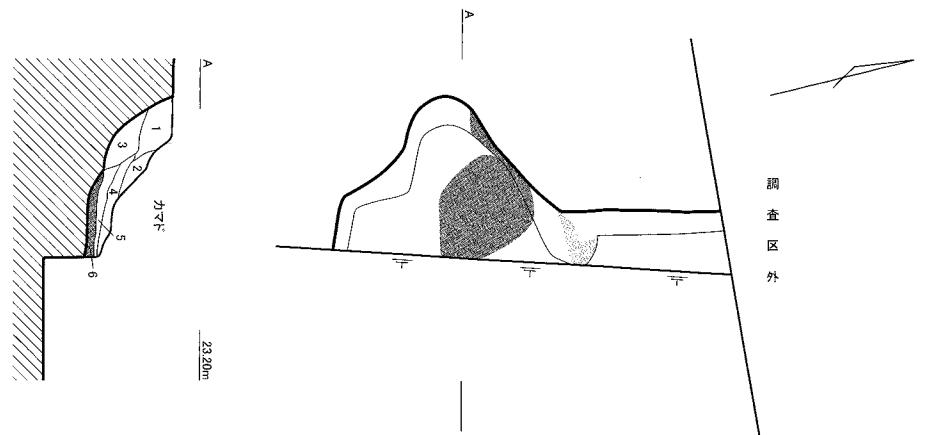


Fig.91 SC005 遺構平断面図



- | | | | |
|--------|----------|-----------|------------------|
| 1. 明褐灰 | 7.5YR7/1 | 粘性あり・しまり強 | 粘土を主体とする。 |
| 2. 黒 | 7.5YR2/1 | 粘性あり・しまり強 | ローム粒子を少量含む。 |
| 3. 黒褐 | 7.5YR3/1 | 粘性あり・しまり強 | ローム・焼土を少量含む。 |
| 4. 橙 | 7.5YR6/6 | 粘性あり・しまり強 | ロームを主体とする。 |
| 5. 褐灰 | 7.5YR4/1 | 粘性あり・しまり強 | ローム・焼土・炭化物を少量含む。 |
| 6. 橙 | 7.5YR6/6 | 粘性あり・しまり強 | 焼土・炭化物を多量含む。 |

0 1m (1/30)

Fig.92 SC005 窯平面断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	W- 74 -N
	規 模	東西は 2.40 m、南北は搅乱および調査区外のため不明
	壁	上面が掘平されており、深さは 0.10 m と浅い
	ピット	確認した範囲内では認められず
	周 溝	確認した範囲内では認められず
床 面	中央部	確認された範囲内では全体的に硬質化する
	掘り方	確認した範囲内では認められず
竈	位 置	東壁の南側寄り
	形 状	煙道部が突出する
	中心軸長	0.40m
	燃焼口幅	0.50m
	壁	北側が火熱作用を受け、赤褐色に硬質化する
	火 床	燃焼口に火熱作用を受けた面が認められる
	袖 部	片袖部分に粘土が認められる

Tab.57 SC005 遺構観察表

SK006 土坑

【遺構】

SC001 竪穴式住居跡の東壁と重複するが、相互の時期的関係は前述したとおりである。当遺構は限られた範囲での確認に過ぎなく、全体的な形態については不明である。はたして土坑であることにも疑問は残される。

【遺物】

当遺構に伴う出土遺物は、須恵器の壺蓋（032）が1点のみであった。口縁部を短く屈曲させ、内側には稜がみられる。こうした特徴から、8世紀代前半の所産と考えられる。

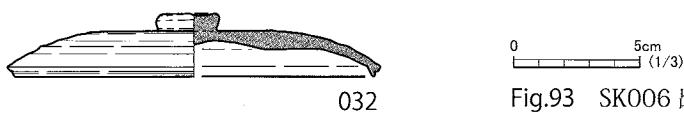


Fig.93 SK006 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
032	須恵器	埋土下層	(14.8)	—	2.5	灰白 10YR 7/1	口縁部は断面三角形で、垂直に短く屈曲する。内側に明瞭な稜が残る。 天井部は回転ヘラ削り調整。
	壺蓋						

()内の数値は推定の法量を表す

Tab.58 SK006 出土遺物観察表

SC007 壘穴式住居跡

【遺構】

北側が約1/3ほど搅乱により消失する。床面は住居中央部が硬質化し、その下には掘方が認められる。現況において竈は認められず、おそらく消失した北壁か、東壁に構築されていたものと考えられる。

【遺物】

出土遺物は寡少で、埋土上層から出土した壺身(034)は、体部中位から口縁にかけて外反しつつ立ち上がる。

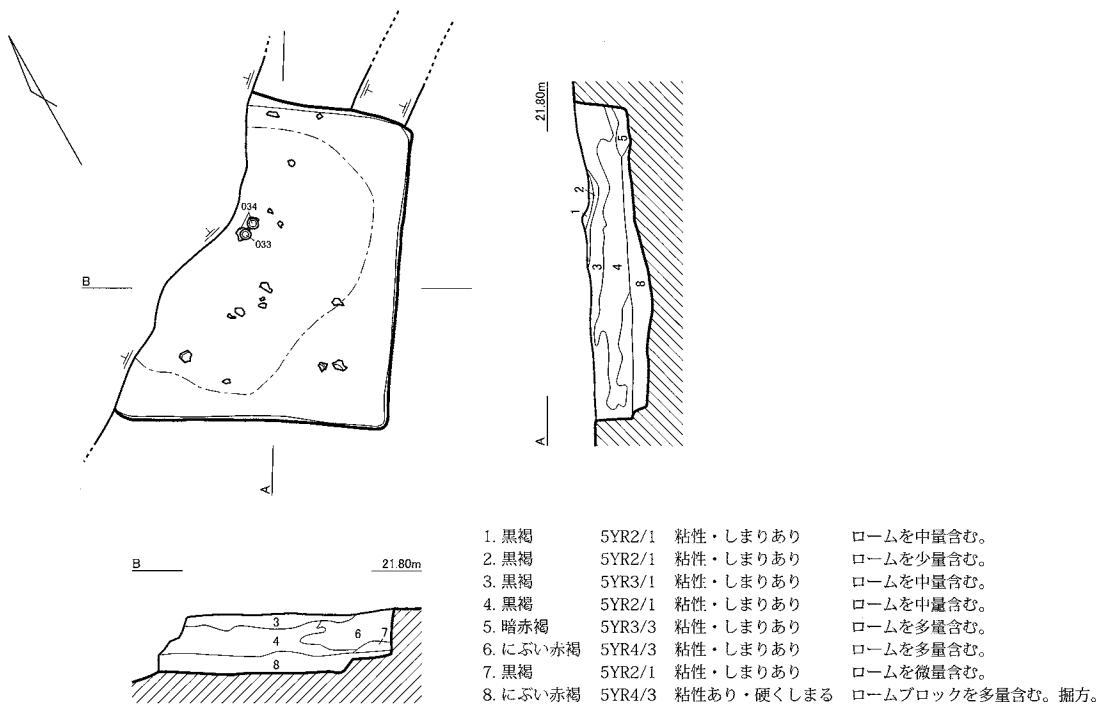


Fig.94 SC007 遺構平断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	竈が未確認のため不明
	規 模	東西は攪乱のため不明、南北は 2.50 m
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.30 mを測る
	ピット	確認した範囲内では認められず
	周 溝	確認した範囲内では認められず
床 面	床 面	壁際周り以外の、中央部が硬質化する
	掘り方	あり
竈	位 置	確認した範囲内では認められず、攪乱を受け消失した北壁、もしくは西壁に構築された可能性あり
	形 状	不明
	中心軸長	不明
	燃焼口幅	不明
	壁	不明
	火 床	不明
	袖 部	不明

Tab.59 SC007 遺構観察表

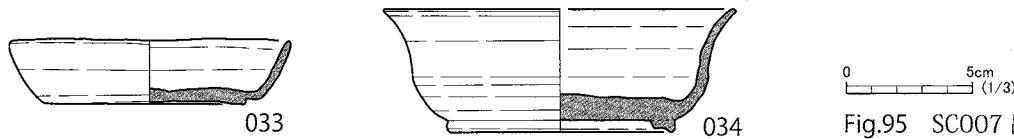


Fig.95 SC007 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特 徴
			口径	底径	器高		
033	須恵器	埋土上層	(11.2)	8.5	2.5 ~ 2.6	にぶい黄橙 10YR 7/2	底部端の一部に、ヘラ切りの段差が未調整のまま残る。
	坏						
034	須恵器	埋土上層	(14.0)	9.0	4.9	褐灰 10YR 5/1	体部下位は丸みを帯びつつ立ち上がり、口縁部で大きく外反する。
	坏身						

Tab.60 SC007 出土遺物観察表

()内の数値は推定の法量を表す

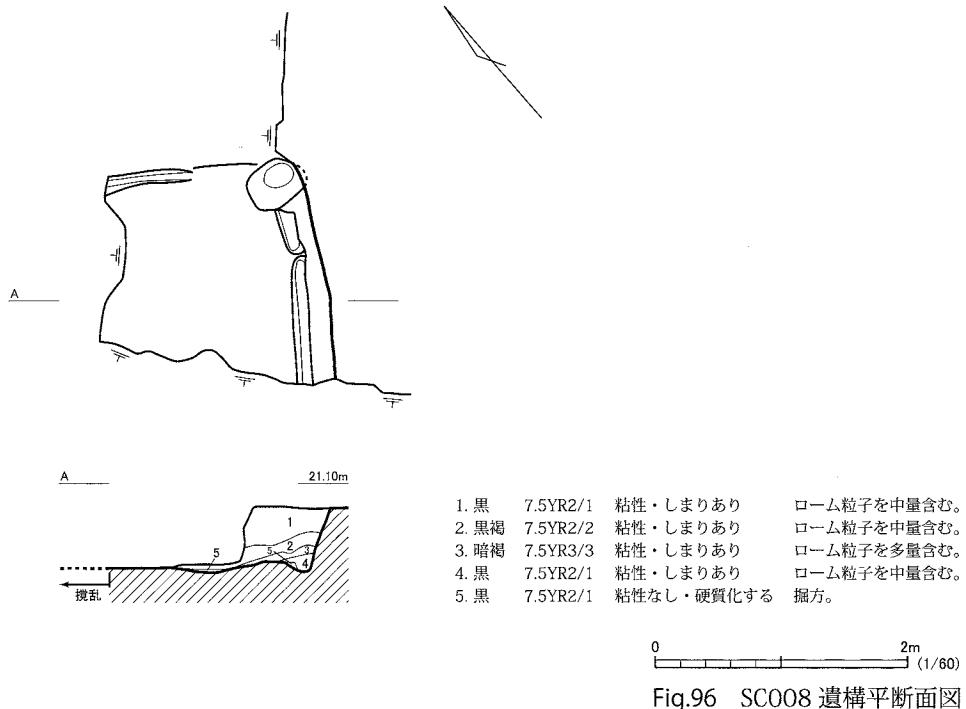
SC008 穫穴式住居跡

【遺構】

攪乱により大部分が消失し、南東隅が残存するのみである。この隅には小穴が認められる。床面は全体的に硬質化する。現況において竈は認められず、おそらく消失した壁面のいずれかに構築されていたものと考えられる。

【遺物】

出土遺物は寡少であったが、時期を窺い知ることのできる遺物に、P1 内から出土した坏身 (035) がある。断面四角の高台が底端部より内側に貼り付けられる特徴から、8世紀代前半の所産と捉えられる。



全 体	平面形態	方形
	主軸角度	竈が未確認のため不明
	規 模	北東隅の約 1/4 のみが残存する程度で規模は不明
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.4 m を測る
	ピット	北東隅に長径 0.45 m、深さ 0.25 m の小穴
	周 溝	確認できた範囲内で、北壁と東壁にあり
竈	床 面	確認できた範囲内では、全体的に硬質化する
	掘り方	あり
	位 置	確認した範囲内では認められず、攪乱を受け消失した部分に構築されていた可能性あり
	形 状	不明
	中心軸長	不明
	燃焼口幅	不明
壁	壁	不明
	火 床	不明
	袖 部	不明

Tab.61 SC008 遺構観察表



遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)			色調	特 徴
			口径	底径	器高		
035	須恵器 环身	P 1	14.6	9.5	3.9	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上る。体部下位は回転ヘラ削り。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。

Tab.62 SC008 出土遺物観察表

SC009 穫穴式住居跡

【遺構】

当遺構の立地環境を俯瞰すると、舌状に延びた台地が緩やかに南側に傾斜してゆき、眼前には浅い谷地形が迫る。所謂、台地の際ともいえる。そうしたことから、集落の中でも最も南側に位置することになる。

当住居跡の規模を他と比較すると、最も大型の部類に属することになる。しかし西壁の周溝をみると、途中でくい違う部分が認められる。これは、ある時期において、住居の拡幅が行われた可能性を物語る。

竈は北壁に新旧の2基が存在する。中央部に小さく突出する方は、手前に周溝が掘られることから、こちらを以前に使用されていた旧の竈と考えた。また奥行きが短いことから、本来の竈の位置は、この住居跡の、まだ内側にあったと想定できる。それが住居の拡幅時に、竈本体の大部分が破壊されたものと考えた。すると先ほどの周溝のくい違いも合点のいく説明ができる。

このような状況から、北壁と西壁が拡幅されたことになる。東壁については明確にはし難いが、壁面らしきものが土層断面内にみられる。また東壁周溝の掘り込みは、西壁の内側の周溝とほぼ同じ高さである。南壁については、全く様相を知る術がなかった。さて、こうした状況から察すると、単純に一回り小さな旧住居跡が、そのまま拡幅されたというのではなく、東西方向に関していえば、西側にずれるような格好で構築されたことになる。

拡幅に伴い新たに構築された竈は、北壁東寄りの大きな方である。西側の壁面が搅乱により大きく破壊され、燃焼部も大きく抉られていた。焼土や炭化物は部分的にみられるが、火熱作用を受けた面は認められなかった。

床面は全体的に硬化し、北東隅と竈の手前側に土坑が認められる。

南壁には出入り口と考えられる張り出しが認められる。周溝もこの部分で途切れる。張り出しはその大部分が搅乱により、消失するため規模等は不明である。

以上、こうした住居跡の規模の大きさや、張り出しを持つ特異性は、他の住居跡にみることの出来ないもので、集落内における優位性を感じられる。

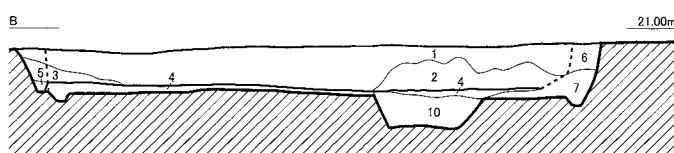
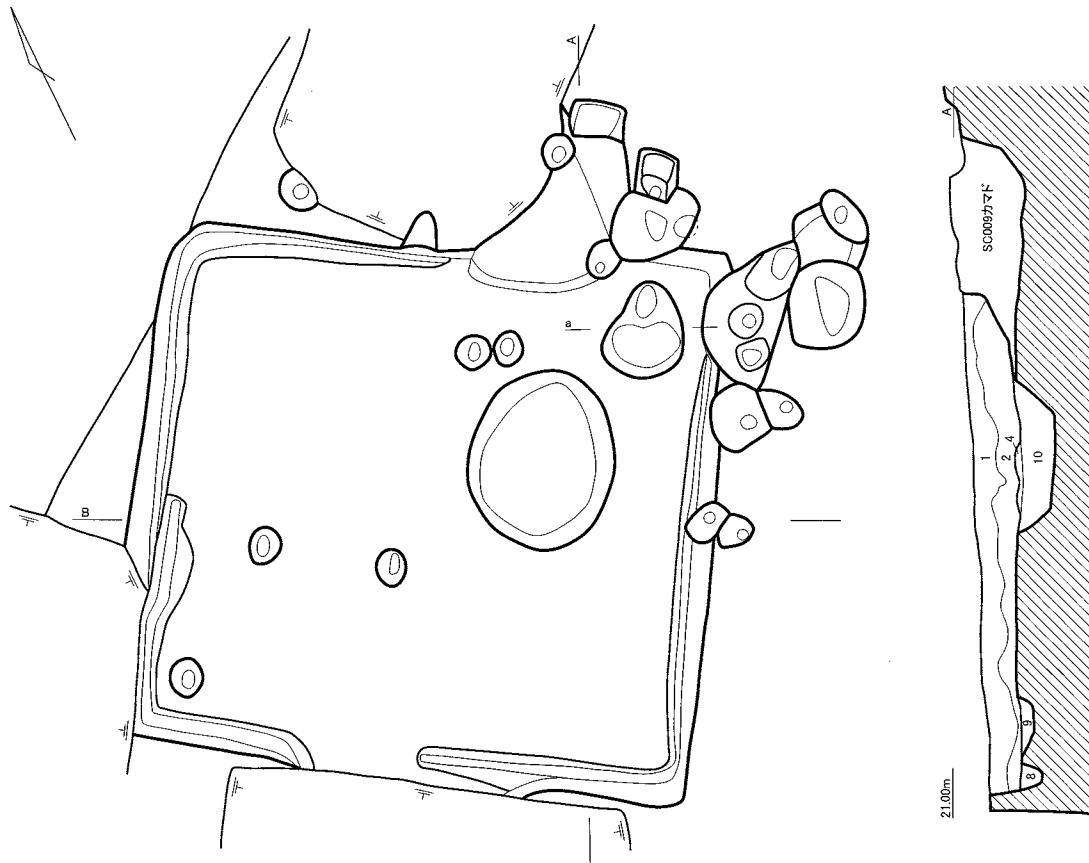
【遺物】

しかし出土遺物をみる限りでは、前述したような優位性を示すものを認めるることはできなかった。また、他の住居跡と比較した場合でも、遺物の出土量は寡少で、その大半が破片で占められ、完存もしくはこれに近い良好な状態のものは僅かである。

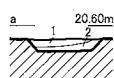
このような数少ない資料であるが、坏蓋はタイプの異なる2つがみられる。まずは口縁が退化し、天井部は低く扁平なもの（040）と、断面三角形で垂直に短く屈曲させるもの（041）がある。

坏身（037・038）は体部下位が丸みを帯び、ここに底部との境が不明瞭となり、こうした位置に高台が貼り付く。いずれも外面底部に「×」印がヘラ書きされていた。

坏身や坏蓋の特徴から、8世紀代前半の所産と考えられるが、口縁部が退化する坏蓋もある点から、前半中葉の様相を反映しているとも考えられる。



1. 黒褐	7.5YR3/2	粘性・しまりあり	ローム粒子を中量含む。
2. 黒褐	7.5YR3/1	粘性・しまりあり	ローム粒子を少量含む。
3. 黒褐	7.5YR3/1	粘性・しまりあり	ローム粒子を少量含む。
4. 明褐	7.5YR5/6	粘性・しまりあり	ロームブロックを多量含む。
5. 褐	7.5YR4/3	粘性・しまりあり	ローム粒子を主体とする。
6. 褐	7.5YR4/3	粘性・しまりあり	ローム粒子を少量含む。
7. 褐	7.5YR4/3	粘性・しまりあり	ロームブロックを中量含む。
8. 褐	7.5YR4/3	粘性・しまりあり	ローム粒子を主体とする。
9. にぶい褐	7.5YR5/4	粘性・しまりあり	ロームブロックを主体とする。
10. 褐	7.5YR4/3	粘性・しまりあり	ロームブロックを中量含む。



1. 黒褐 10YR2/3 粘性あり・しまり弱 粘土を少量含む。
2. にぶい黄褐 10YR4/3 粘性・しまりあり ロームブロックを中量含む。

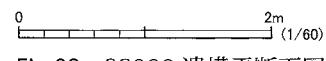


Fig.98 SC009 遺構平面図

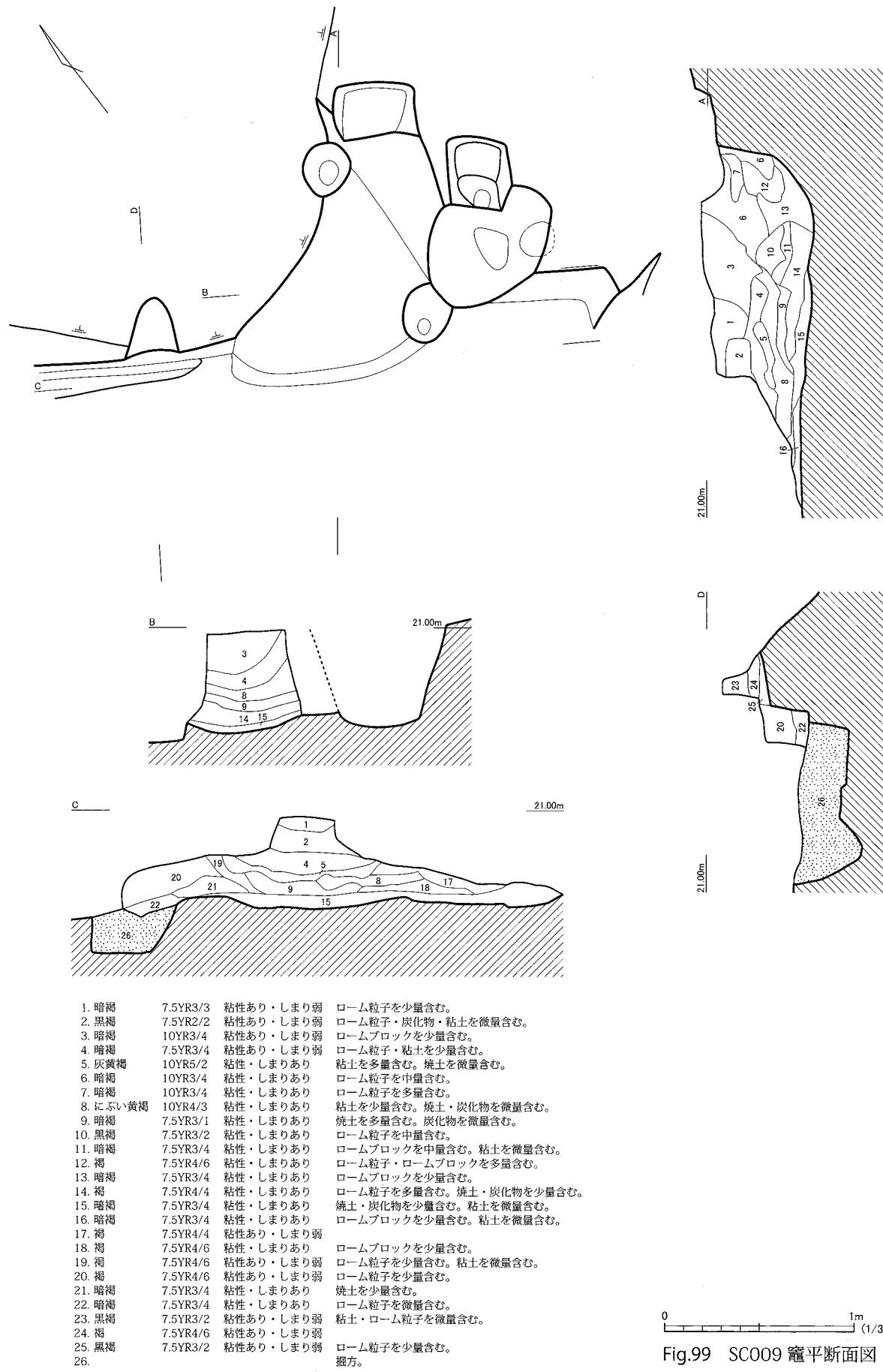


Fig.99 SC009 瓢平断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	竈 2(新) N - 30 - E
	規 模	東西 4.60 m × 南北 4.15 m
	壁	深さ 0.40 m を測る
	ピット	北東住居外に複数認められるが関連性は不明 住居内には 7 基あり、内 2 基は竈付近に位置し規模も大きめである
	周 溝	竈と張り出し部分以外で認められる
	床 面	全体的に硬質化する
竈	掘り方	あり
	位 置	北壁中央を竈 1(旧)、東側寄りを竈 2(新) とする 2 基が認められる
	形 状	竈 1(旧)：奥壁部分が小さく突出する 竈 2(新)：西側壁を攪乱で破壊される
	中心軸長	竈 1(旧) 0.15m 竈 2(新) 0.75m
	燃焼口幅	竈 1(旧) 不明 竈 2(新) 不明
	壁	竈 1(旧)・竈 2(新) の竈において、火熱を受けた面は確認できず
	火 床	竈 1(旧)：不明 竈 2(新)：不明
	袖 部	竈 1(旧)：不明 竈 2(新)：不明

Tab.63 SC009 遺構観察表

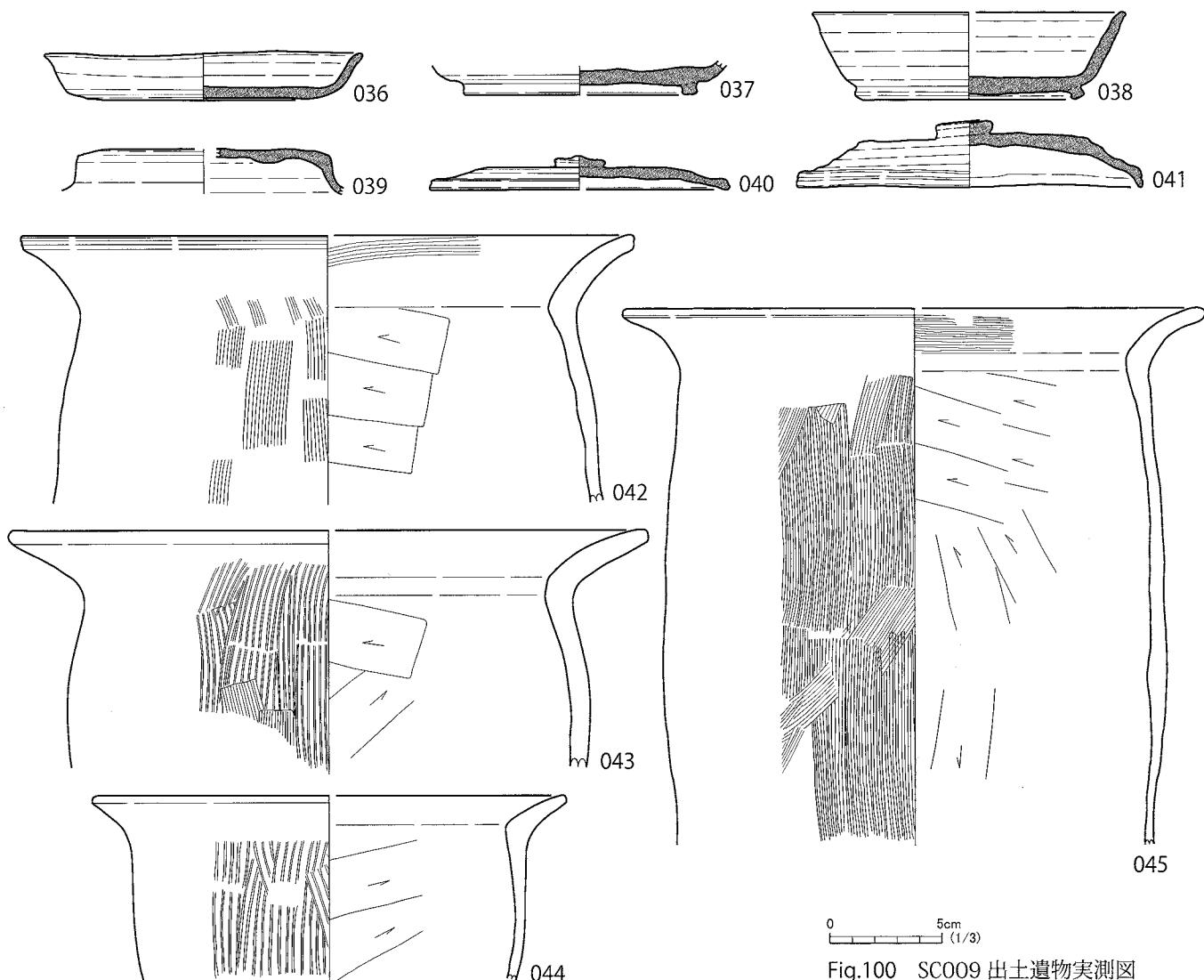


Fig.100 SC009 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
036	須恵器 坏	埋土上層	14.2	8.9	2.1	褐灰 10YR 6/1	口縁部が外反する。体部下位は回転ヘラ削り。
037	須恵器 坏身	埋土下層	不明	(10.4)	1.3	明褐灰 10YR 7/2	体部下位は回転ヘラ削り。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底部内面はナデ調整。底部外面に「×」印の線刻あり。
038	須恵器 坏身	埋土上層	14.0	10.2	3.9	灰白 10YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、開き気味に底端に貼り付けられる。底部外面に「×」印の線刻あり。
039	須恵器 蓋	床面上	不明	11.2	2.1	褐灰 10YR 6/1	水平の天井部から、体部をやや開き気味に屈曲させ、口縁部で大きく外反させる。
040	須恵器 坏蓋	埋土下層	(13.4)	—	1.5	褐灰 10YR 6/1	口辺は消失し認められないが、内側に僅かな稜がみられる。天井部は回転ヘラ削り調整。
041	須恵器 坏蓋	埋土下層	15.4	—	2.8 ~ 3.0	褐灰 10YR 6/1	口縁部は断面三角形で、垂直に短く屈曲する。内側に明瞭な稜が残る。口縁部外面には摘み出した際の、指先の跡が沈線となって周る。
042	土師器 甕	埋土上層	(27.4)	不明	不明	橙 7.5YR 7/6	外面はハケ目。内面は口縁部がハケ目、頸部以下はヘラ削りが施される。
043	土師器 甕	埋土下層	(28.6)	不明	不明	橙 5YR 7/6	外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。
044	土師器 甕	埋土下層	(21.2)	不明	不明	橙 5YR 6/6	外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。
045	土師器 甕	埋土下層	(26.0)	不明	不明	橙 5YR 6/6	外面はハケ目。内面は口縁部がハケ目、頸部以下はヘラ削りが施される。

Tab.64 SC009 出土遺物観察表

()内の数値は推定の法量を表す

SK010 土坑

【遺構】

平面形態は隅丸方形を呈すると思われるが、北側は搅乱により大きく抉られ消失する。規模は壁面の深さが約 0.5m を測り、断面は浅鉢状を呈する。部分的ではあるが底面付近で、硬くしまる部分が認められる。さらに、この下面には不整形の粗い面があり、掘方として捉えられなくもない。そうすると硬質化した部分は床面ともみれることから、住居跡の可能性も考慮できる。

14 次調査においても類似する遺構が確認されているが、円形の住居跡を留意しておかねばならないであろう。

さらに類例の蓄積によって、具体的な評価がなされることを期待するところである。

【遺物】

出土する遺物は寡少といえる。坏身 (046) は、体部下位が丸みを帯び、その最も下に高台が貼り付けられる。

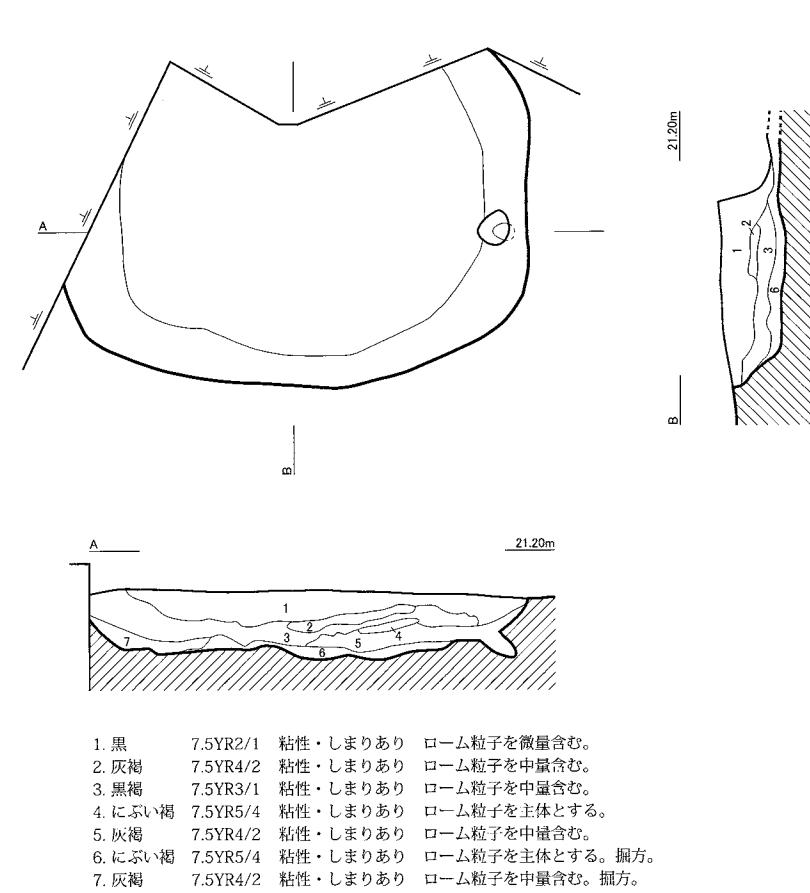


Fig.101 SKO10 遺構平断面図



Fig.102 SKO10 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
046	須恵器	埋土上層	13.5	9.8	3.8 ~ 4.4	褐灰 10YR 6/1	体部と底部の境は丸みを帯び、口縁部で外反する。断面四角の高台が低端部際に貼り付けられる。底部に板目の圧痕。
	环身						

Tab.65 SKO10 出土遺物観察表

SR011 木棺墓

【遺構】

遺構上面は削平され、さらに西側が約1/3と東側の一部が、既存建物の基礎により消失する。遺構の規模は幅が0.6m、現存する長さは1.3m、深さは0.4mを測る。この外周には一回り大きな広さで、段状の掘方が認められ、粘土が埋められる。おそらく木棺を納めたであろう空間との隙間に、充填されたものと裏込めと推測される。棺材および被葬者を示す人骨等は確認できなかったが、最下層上面では、部分的に炭化物が認められ、床板の存在を窺わせる。こうした状況から、木棺墓と類推される。

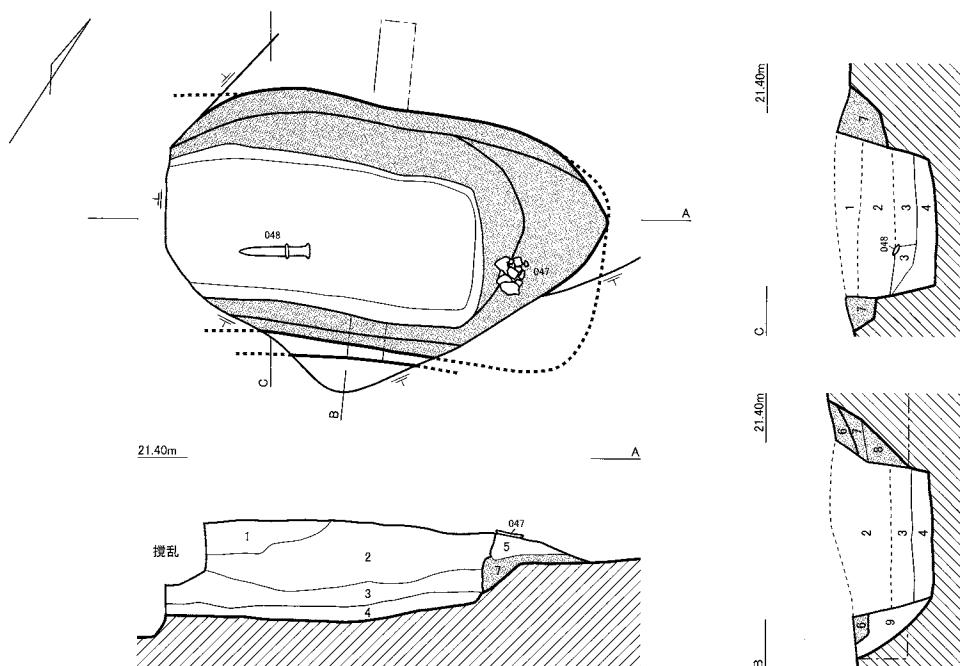
墓壙内のほぼ中央付近からは、鋒を西側に向けた状態で、有柄式磨製石剣(048)が1本出土した。

また、墓壙の東壁の上端には壺(047)が1点認められた。ここは掘方を粘土で埋めた、位置的に棺の外側に当たる。

【遺物】

壺は、後世の攪乱で欠損する部分が多いが、他の木棺墓出土のものとほぼ同時期と捉えられ、弥生時代早期の夜臼式系として位置づけられる。

一段柄式の有柄式磨製石剣は表面が風化し、他の石剣よりもかなり脆弱化が進んだ状態であった。そのため研磨の擦痕さえも認められないほどであった。両面中央には鎬が通り、断面は菱形を呈する。基部から並行して延びる剣身は、途中で屈曲すると先細り、鋒へと向かう。



1. 黒	7.5YR2/1	粘性・しまりあり	ローム粒子を少量含む。
2. 黒	7.5YR2/1	粘性・しまりあり	ローム粒子を中量含む。
3. 黒褐	7.5YR3/1	粘性・しまりあり	ローム粒子を微量含む。
4. 褐	7.5YR4/3	粘性・しまりあり	ロームを主体とする。炭化物を微量含む。特に上面において部分的に認められる。
5. 黒褐	7.5YR3/1	粘性・しまりあり	ローム粒子を多量含む。炭化物を微量含む。
6. 黒	7.5YR2/1	粘性・しまりあり	炭化物を少量含む。
7. にぶい橙	7.5YR6/4	他より粘性としまりが強い	粘土とロームを主体とする。
8. にぶい褐	7.5YR5/4	他より粘性としまりが強い	粘土とロームを主体とする。
9. 明赤褐	5YR5/6	粘性弱・しまりあり	ロームを主体とする。掘方。

Fig.103 SR011 遺構平面図

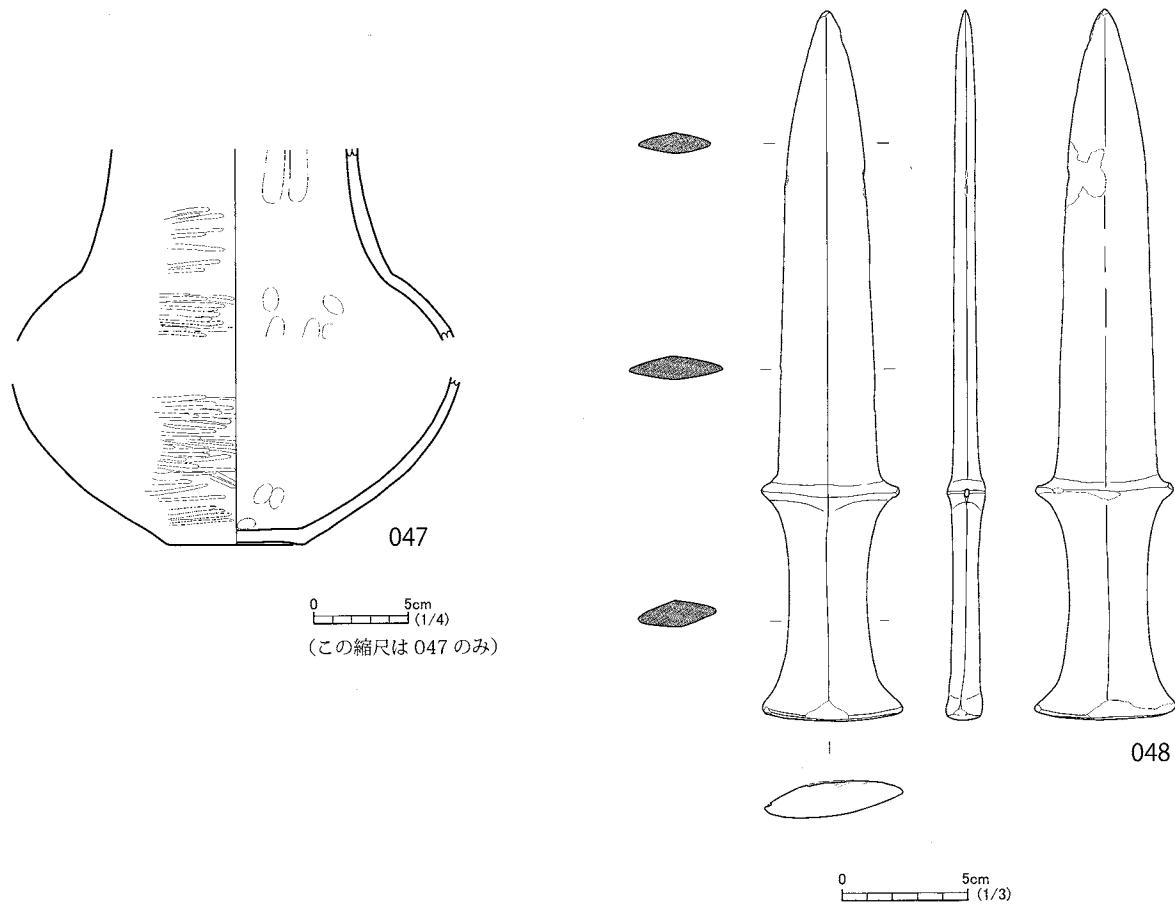


Fig.104 SR011 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
047	弥生土器	遺構上面	不明	(7.3)	不明	浅黄橙 7.5YR 8/4	底部から体部下位と体部上位から頸部にかけての部分が残存する。体部は大きく外傾しながら、球形の胴部を作る。頸部と体部の境は、段を成す。器表面には横方向に研磨が施される。
	壺						
048	有柄式 磨製石劍	埋土下層	全長	身最大幅	身最大厚	重さ(g)	他の石劍と比較すると風化が著しく進行しているため、表面が粗く研磨の痕が残らない。両面中央には鎬が通り、断面は菱形となる。粘板岩製。
			28.3	3.9	1.0	150.0	()内の数値は推定の法量を表す

Tab.66 SR011 出土遺物観察表

SK012 土坑

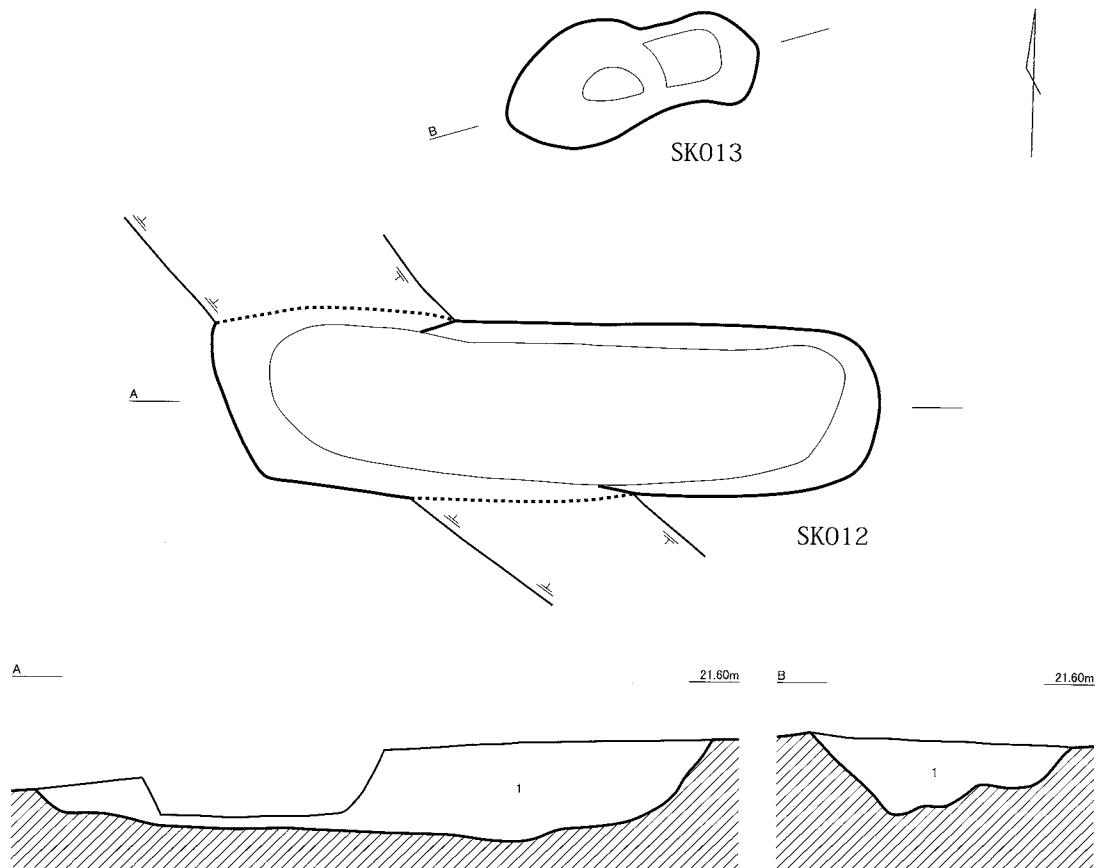
【遺構・遺物】

後世の造成により、遺構上面は著しく削平され、溝状に延びる搅乱が横断する。平面の形態は、約 0.7×2.6 m の隅丸長方形を呈し、深さ約 0.4 m を測る。当遺構に伴う出土遺物はなく、時代および性格は不明。

SK013 土坑

【遺構・遺物】

後世の造成により、遺構上面は著しく削平される。平面の形態は、約 0.4×1.0 m の瓢箪形を呈し、底面には段差がみられ、深さは約 0.2 と 0.3 m を測る。当遺構に伴う出土遺物はなく、時代および性格は不明。



1. 黒褐 7.5YR2/1 粘性あり・しまり強 拳大のロームブロックを多量含む。

Fig.105 SK012・013 遺構平面図

SK014 土坑

【遺構】

後世の造成により、遺構上面は著しく削平される。平面の形態は、約 0.7×1.6 m の歪な長楕円瓢箪形を呈する。底面には僅かな掘り込みが認められる。深さは約 0.2 m を測る。

【遺物】

遺構確認面より有茎式磨製石鏃（049）が 1 点出土するが、攪乱層との境でもあり、確実に当遺構に伴うかについては疑問である。

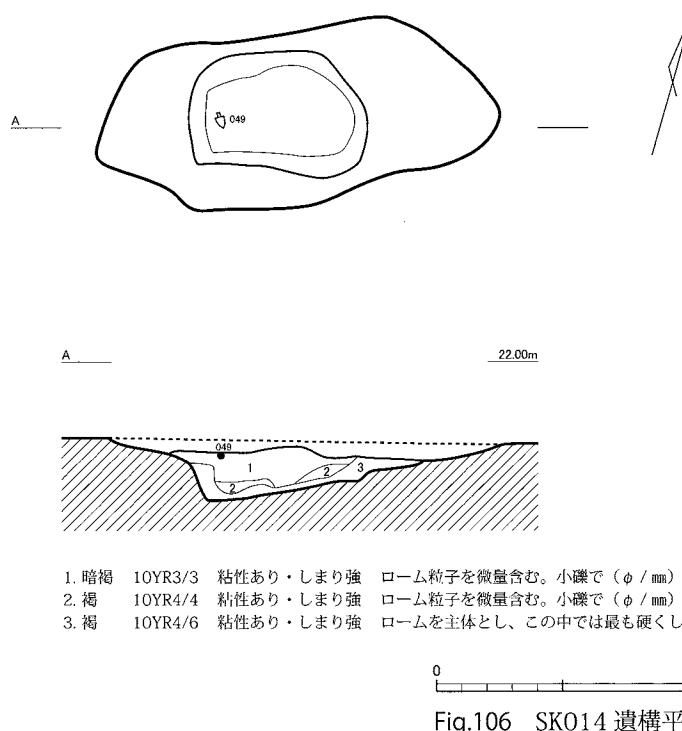


Fig.106 SK014 遺構平断面図

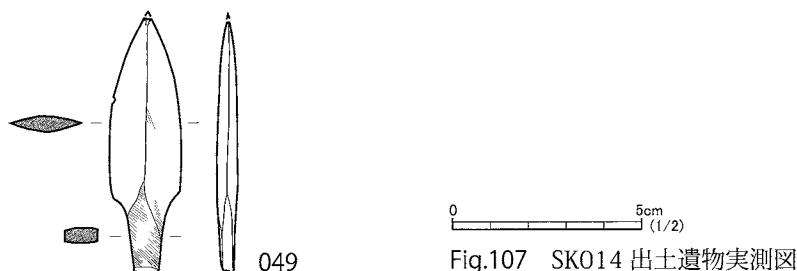


Fig.107 SK014 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)				特徴
			全長	最大幅	最大厚	重さ (g)	
049	有茎式磨製石鏃	埋土上層	6.8	1.9	0.6	7.9	全面に研磨した痕が認められる。先端部が脆弱化し欠損する。鏃身の両面中央には鏃が通り、断面は菱形となる。茎部の断面は四角形を呈する。粘板岩製。

Tab.67 SK014 出土遺物観察表

SR015 木棺墓

【遺構】

遺構上面は削平され、西端側は排水管が横断し破壊する。平面形態は長方形で、規模は約 $0.9 \times 1.95m$ 、深さは $0.35m$ を測る。東端側には段が認められるが、この部分を掘方とすれば、木棺を納める墓壙の全長は短く約 $1.5m$ となる。

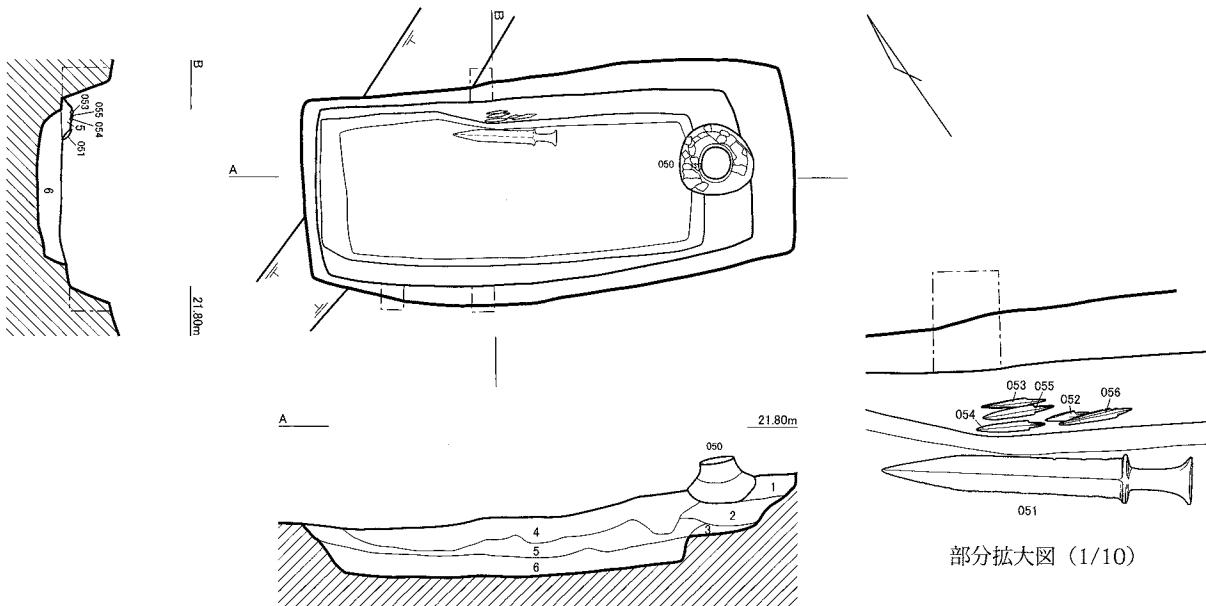
棺材および被葬者を示す人骨等は確認できなかったが、最下層上面では部分的に炭化物が認められ、床板の存在を窺わせる。墓壙の下層からは、北壁沿いに鋒を西側に向けた状態で、有柄式磨製石剣（051）が1本出土した。さらに先端を石剣と同じ方位に、揃え並べた有茎式磨製石鎌（052・053・054・054・056）が5本出土した。また墓壙の東壁の上端には壺（050）が認められた。これは位置的に棺の外側に当たる。

【遺物】

壺は弥生時代早期の、夜臼式系として位置づけられる。

一段柄式の有柄式磨製石剣は表面が風化し、脆弱化が進んだ状態ながら完存である。剣身の両面中央には鎬が通り、断面は菱形を呈する。基部から並行して延びる剣身は、途中で屈曲すると先細り鋒へと向かう。

有茎式磨製石鎌はいずれも脆弱化しているが、完存品である。4点が柳葉形を呈する。いずれも鎌身の両面中央には鎬が通り、断面形態は菱形を成す。茎部は多面体に研磨されながら、末端に向かい先細る。この中でも056は、関から鈍角に作られ、鎌身の片面片側に樋らしき溝をもつ。



- | | | | |
|---------|----------|------------|------------------------|
| 1. 暗褐 | 10YR3/4 | 粘性あり・硬くしまる | ローム粒子を少量含む。 |
| 2. 褐 | 7.5YR4/6 | 粘性あり・硬くしまる | |
| 3. 暗褐 | 10YR3/4 | 粘性・しまりあり | 黒褐色土粒子・ローム粒子を少量含む。 |
| 4. 黒褐 | 10YR3/2 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を多量含む。 |
| 5. 暗褐 | 10YR3/4 | 粘性あり・硬くしまる | ローム粒子を微量含む。 |
| 6. にぶい褐 | 7.5YR5/4 | 粘性・しまりあり | 上面に炭化物を微量含む。ロームを主体とする。 |

Fig.108 SR015 遺構平断面図

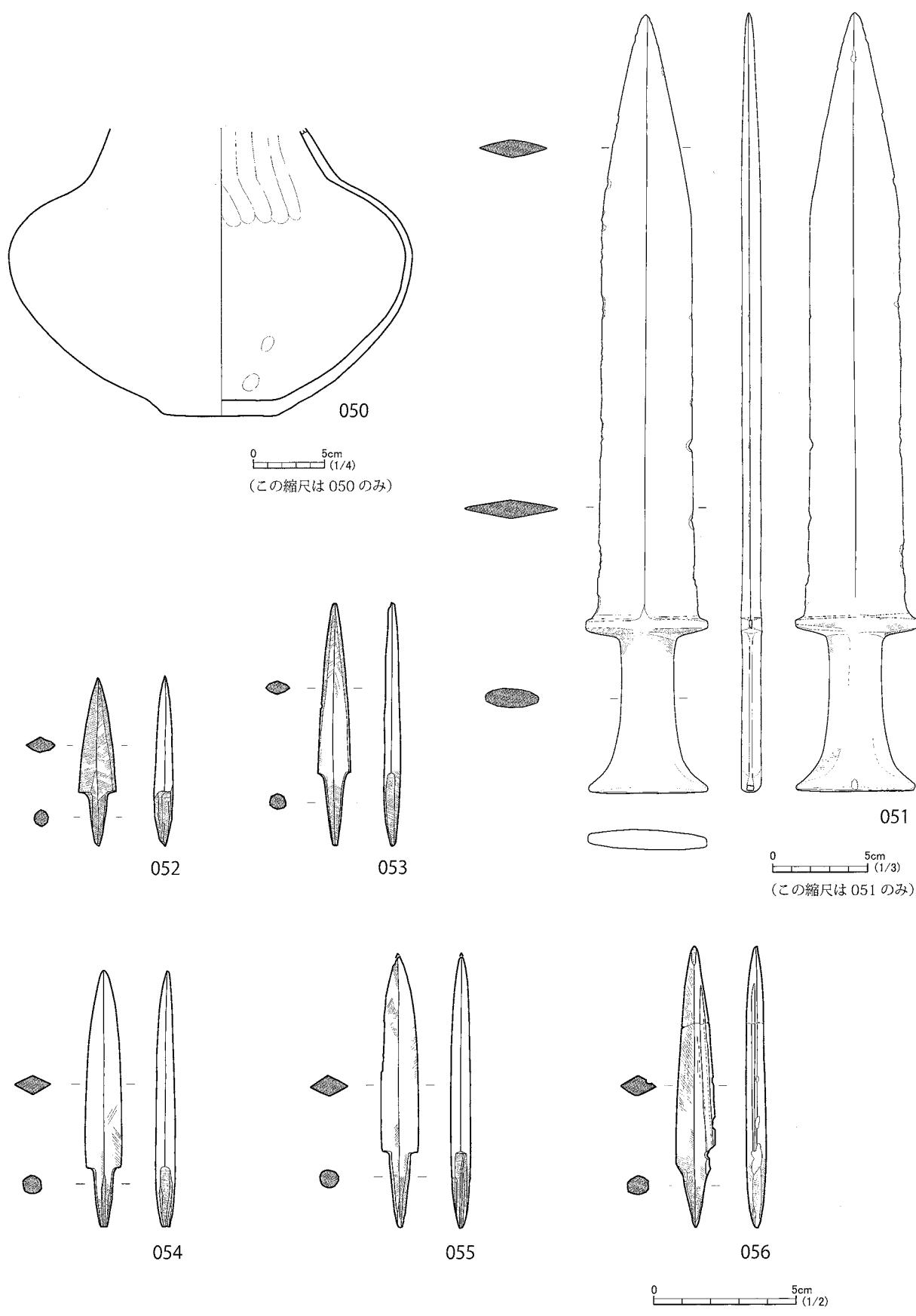


Fig.109 SR015 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
050	弥生土器 壺	遺構上面	不明	(8.2)	不明	浅黄橙 7.5YR 8/6	口縁部を欠損する。内面はナデ調整され、頸部についてナデあげる。
051	有柄式 磨製石剣	埋土下層	全長	身最大幅	身最大厚	重さ(g)	風化が進んでおり、柄の部分にのみ研磨痕が認められる。両面中央には鎌が通り、断面は菱形となる。前段の形状が、他の石剣と比較するとよく表れている。粘板岩製。
			41.0	5.0	1.0	260.0	
052	有茎式 磨製石鎌	埋土下層	5.9	1.3	0.7	3.6	全面に研磨した痕が認められる。鎌身の断面は菱形。茎部の断面は多角形を呈する。粘板岩製。
053	有茎式 磨製石鎌	埋土下層	8.5	1.2	0.6	4.6	全面に研磨した痕が認められる。鎌身の両面中央には鎌が通り、断面は菱形となる。茎部の断面は多角形を呈する。粘板岩製。
054	有茎式 磨製石鎌	埋土下層	9.0	1.3	0.7	7.2	全面に研磨した痕が認められる。鎌身の両面中央には鎌が通り、断面は菱形となる。茎部の断面は多角形を呈する。粘板岩製。
055	有茎式 磨製石鎌	埋土下層	9.5 残存部分	1.3	0.7	7.9	全面に研磨した痕が認められる。鎌身の両面中央には鎌が通り、断面は菱形となる。茎部の断面は多角形を呈する。先端部が脆弱化し破損する。粘板岩製。
056	有茎式 磨製石鎌	埋土下層	9.9	1.4	0.7	6.2	全面に研磨した痕が認められる。鎌身の両面中央には鎌が通り、断面は菱形となる。茎部の断面は多角形を呈する。片面片側に溝を持つ。粘板岩製。

Tab.68 SRO15 出土遺物観察表

() 内の数値は推定の法量を表す

SK016 土坑

【遺構・遺物】

当遺構に伴う出土遺物はなく、時代および性格は不明。やや不整形ながら長方形の平面形態を呈する。遺構上面は後世の造成により削平され、さらに東側が攪乱により消失する。幅は約1.0mで、現存する長さは2.0m、深さは0.2mを測る。

当遺構に伴う出土遺物はなく、時代および性格は不明。

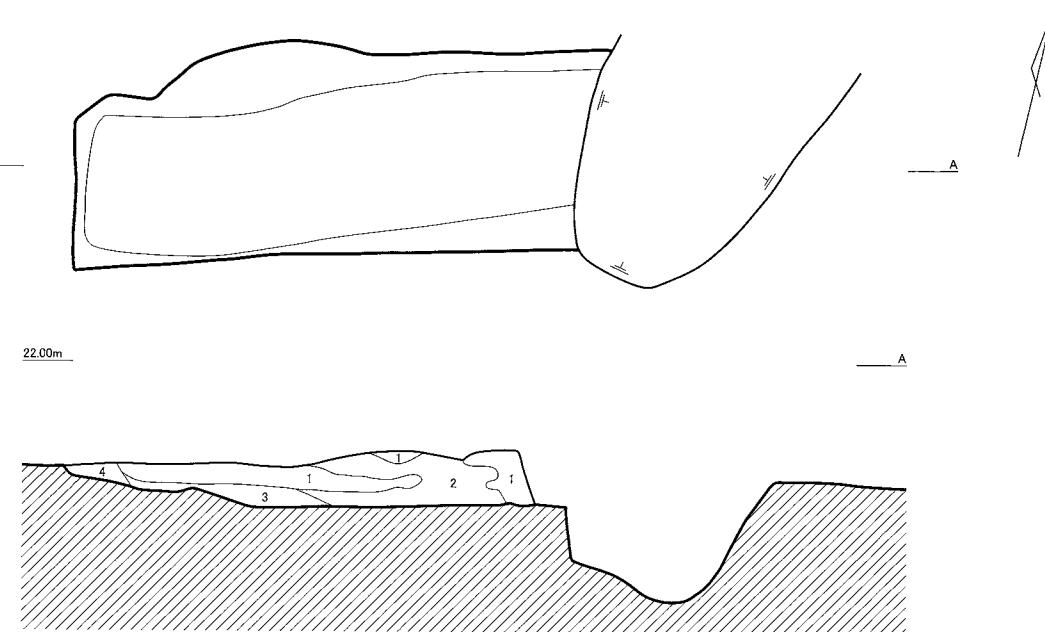


Fig.110 SK016 遺構断面図

SC017・018・019 竪穴式住居跡

【遺構】

3～4軒の住居跡が重複していると思われるが、上面が削平された上に、樹木の根が床面を著しく破壊する。こうした状況から、遺構相互の重複関係を、明確にするのは困難であった。

住居跡は西側から SC018・017・019 竪穴式住居跡とした。まず SC017 と SC018 竪穴式住居跡の、相互の時期関係については、前者の床面が後者の遺構内に認められない。次に SC017 と SC019 竪穴式住居跡についても同様のことがあり、最も深い SC017 竪穴式住居跡がここでは新しい。SC018 と SC019 については、直接に重複する部分がないことから不明である。

SC017 竪穴式住居跡をさらに観察すると、その平面形態は攪乱の溝を挟み、壁面の角度が異なつており、さらにもう1軒が重複する可能性も考えられる。

【遺物】

SC018 竪穴式住居跡には南東隅に小穴が認められ、坏身（061）・皿（062）・坏蓋（063）が出土している。坏身は、体部下位は丸みを帯び、底部との境を明確にし難く、この辺りに断面四角の低い高台が貼り付く。重複する SC017 竪穴式住居跡にも坏身（058）が出土するが、先ほどのものと時期差を明確にするのは困難である。これらは8世紀代前半代の特徴をもつ。

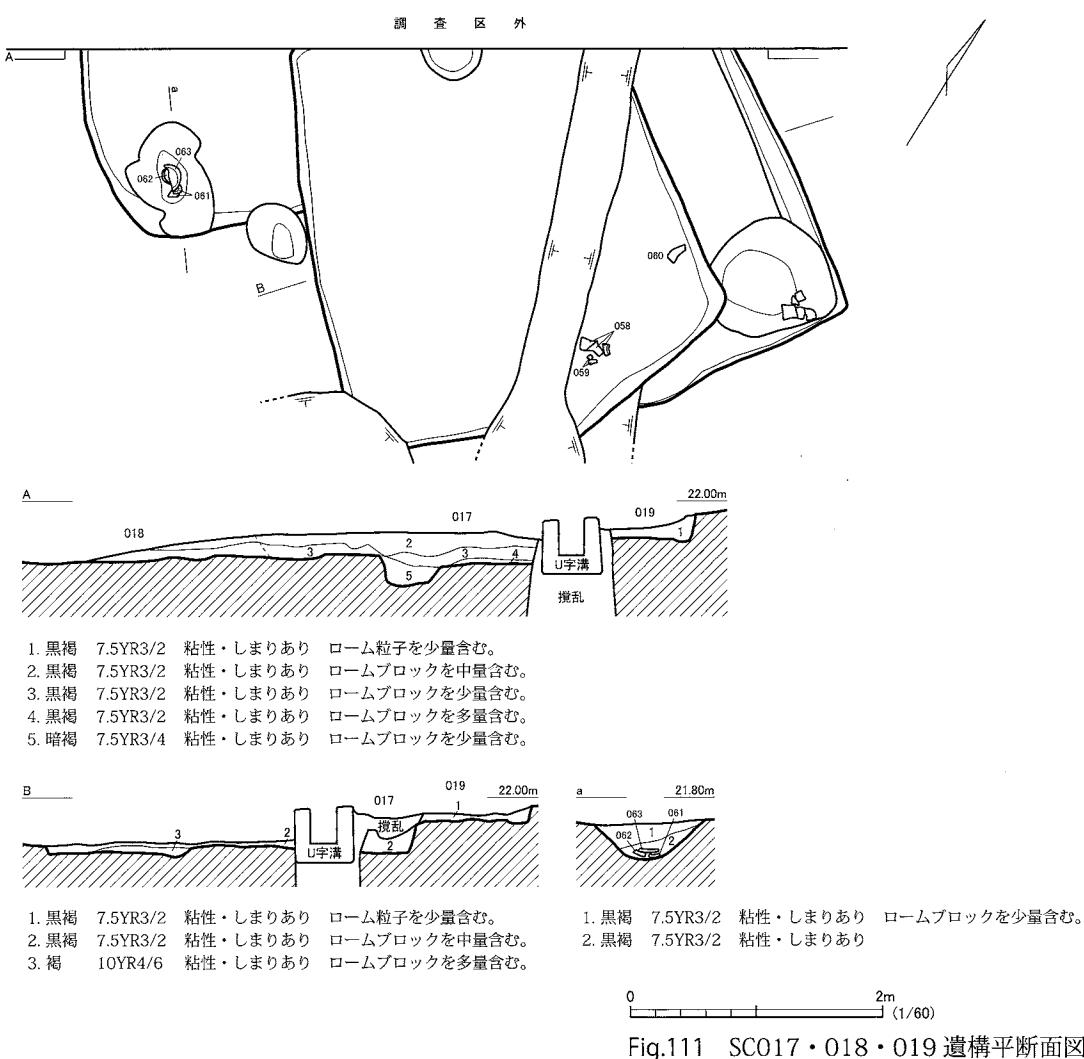


Fig.111 SC017・018・019 遺構平面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	竈が未確認のため不明
	規 模	東西は調査区外のため不明、南北 2.90 m 但し全体の形状がずれるため、2 軒が重複する可能性もあり
	壁	上面が掘平されており、深さは 0.20 m と浅い
	ピット	直径 0.4 m、深さ 0.2m の小穴 1 基
	周 溝	確認した範囲内では認められず
	床 面	樹木の根の影響で破壊が著しい
竈	掘り方	確認した範囲内では認められず
	位 置	確認した範囲においては認められず、これ以外の箇所に構築されたか攪乱の可能性あり
	形 状	不明
	中心軸長	不明
	燃焼口幅	不明
	壁	不明
	火 床	不明
	袖 部	不明

Tab.69 SC017 遺構観察表

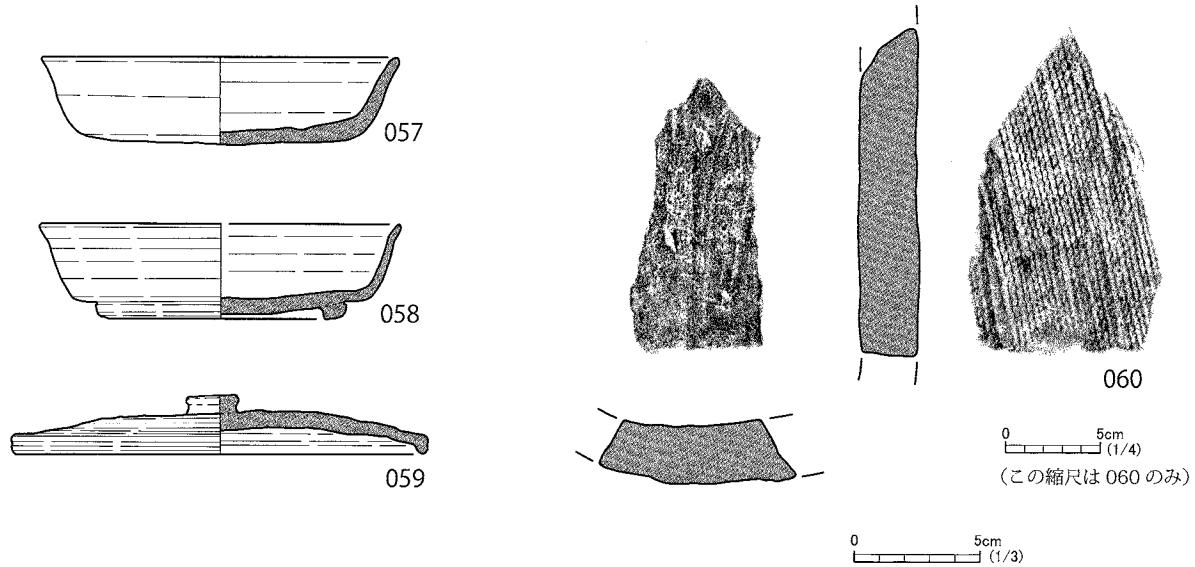


Fig.112 SC017 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特 徴
			口径	底径	器高		
057	須恵器	埋土下層	14.2	11.0	3.5	褐灰 10YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。
	坏						
058	須恵器	埋土下層	(14.3)	9.9	3.8	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部がやや外反する。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	坏身						
059	須恵器 蓋坏	埋土下層	16.5	—	2.3	褐灰 7.5YR 6/1	口縁部は断面三角形で、垂直に短く屈曲する。内側に明瞭な稜が残る。天井部は回転ヘラ削り調整。焼成不良で軟質。
060	瓦	埋土下層	—	—	—	にぶい黄橙 10YR 6/4	表側には叩き目、裏側には布目が認められる。

Tab.70 SC017 出土遺物観察表

() 内の数値は推定の法量を表す

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	竈が未確認のため不明
	規 模	南東隅の約 1/4 のみが残存する程度で規模は不明
	壁	上面が掘平されており、深さ 0.25 m と浅い
	ピット	直径 0.40m、深さ 0.20 m の小穴 1 基
	周 溝	確認した範囲内では認められず
竈	床 面	樹木の根の影響で破壊が著しい
	掘り方	確認した範囲内では認められず
	位 置	確認した範囲においては認められず、調査区外の部分に構築されたか、或いは SC017 に破壊された可能性あり
	形 状	不明
	中心軸長	不明
	燃焼口幅	不明

Tab.71 SC018 遺構観察表

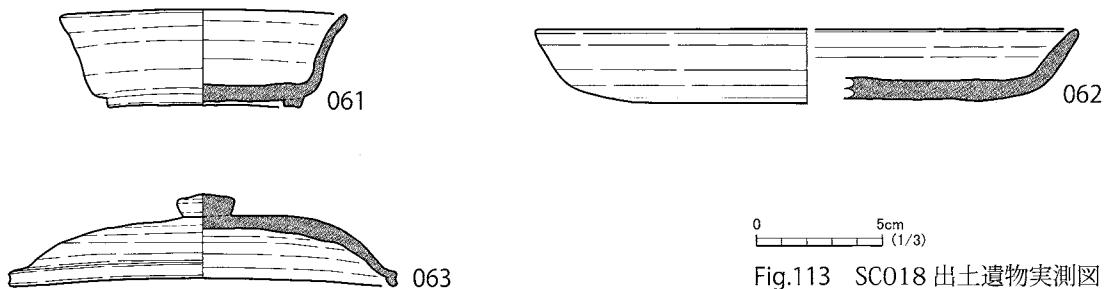


Fig.113 SC018 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特 徴
			口径	底径	器高		
061	須恵器 环身	P 1	11.4	7.5	3.7 ~ 3.9	褐灰 10YR 6/1	体部下位は丸みを帯びつつ、外上方に立ち上がり、口縁部で外反する。
062	須恵器 皿	P 1	(21.6)	(18.8)	2.9	褐灰 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部下位は回転ヘラ削り。
063	須恵器 环蓋	P 1	15.4	—	3.7	灰 5Y 6/1	口縁部は断面三角形で、垂直に短く屈曲する。内側に明瞭な稜が残る。 口縁部外面には摘み出した際の、指先の跡が沈線となって周る。天井部は回転ヘラ削り調整。

()内の数値は推定の法量を表す

Tab.72 SC018 出土遺物観察表

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	竈が未確認のため不明
	規 模	北東隅の約 1/4 のみが残存する程度で規模は不明
	壁	上面が掘平されており、深さ 0.05 m と浅い
	ピット	南東隅に直径 0.90m、深さ 0.30 m の小穴 1 基
	周 溝	東壁にはないが、北壁に認められる これ以外は調査区外のため不明
竈	床 面	樹木の根の影響で破壊が著しい
	掘り方	確認した範囲内では認められず
	位 置	確認した範囲においては認められず、調査区外の部分に構築されたか、或いは SC017 に破壊された可能性あり
	形 状	不明
	中心軸長	不明
	燃焼口幅	不明

Tab.73 SC019 遺構観察表

搅乱・表土

調査区の大部分が近現代の造成により、遺物を包含する層は失われ、現代の建物の基礎工事においてはローム面が深く抉られ、消失した遺構も多かったと想像するに難くない。

こうした状況において、どの遺構に所在するか不明になってしまった遺物も多く、残存度の高いものや特徴的なものに限り、以下に取り上げた。

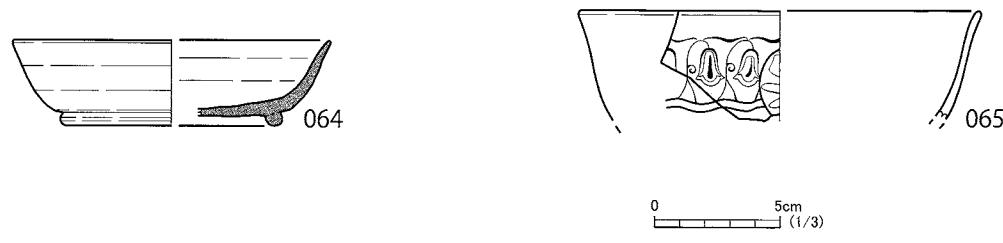


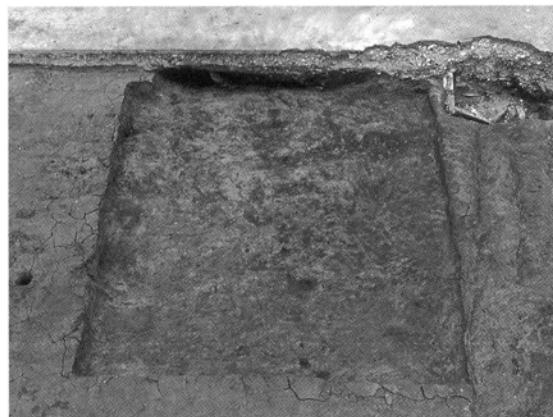
Fig.114 搅乱・表土出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)			色調	特 徵
			口径	底径	器高		
064	須恵器	搅乱	(12.6)	(8.8)	3.4	灰白 10YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部より内側に貼り付けられる。
	坏身						
065	青磁	表土	(16.0)	不明	不明	明緑灰 5G 7/1	器表面劃花文が連続する。
	碗						

Tab.74 搅乱・表土出土遺物観察表

() 内の数値は推定の法量を表す

PL19



①. SC001 壴穴式住居跡（南から）



②. SC005 壴穴式住居跡（南から）



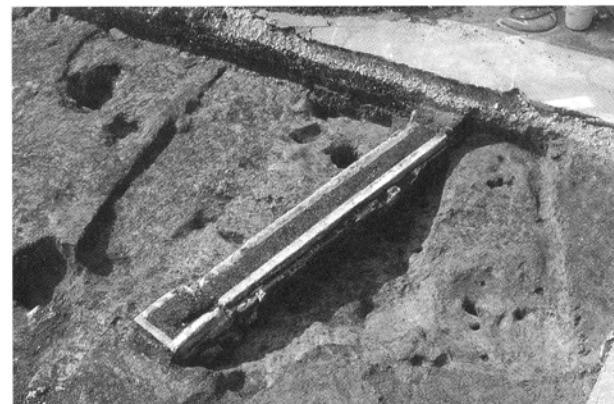
③. SC008 壴穴式住居跡（北から）



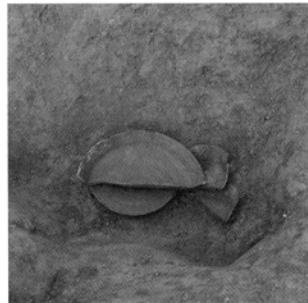
④. SC009 壴穴式住居跡（北から）



⑤. SK010 土坑（南から）

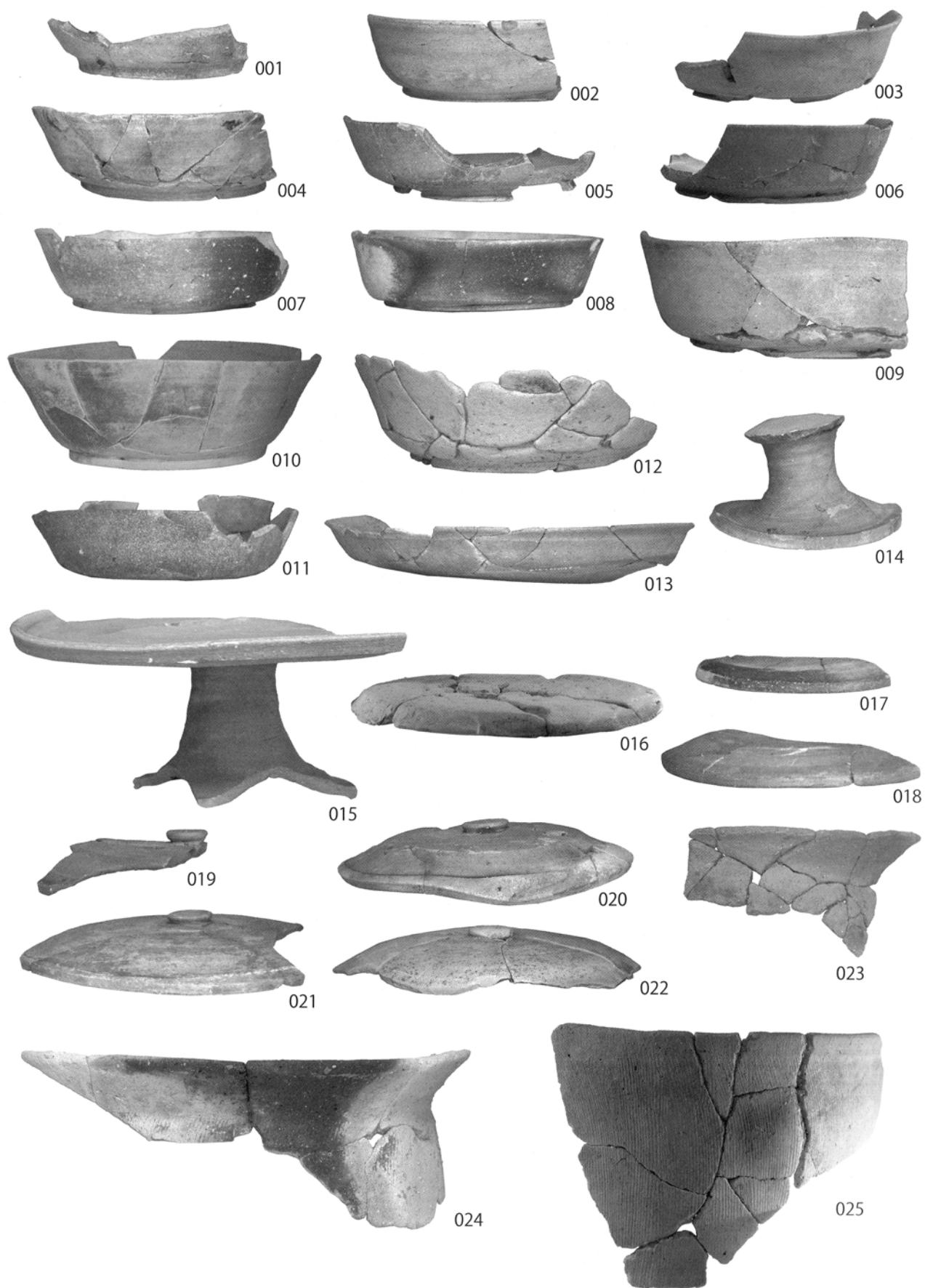


⑥. SC017・018・019 壴穴式住居跡（東から）



⑦. SC018 壴穴式住居跡
P1 遺物出土状況（南から）

PL20



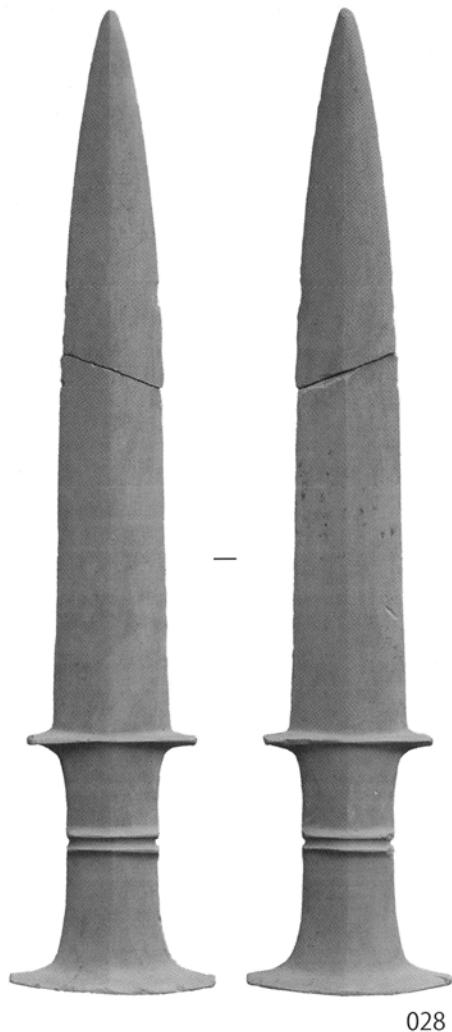
PL21



026



027



028



029



030



031



032



033



034



035



036



037



038



039

PL22



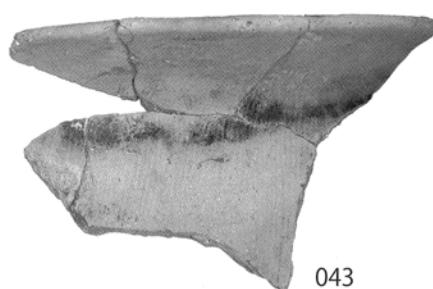
040



041



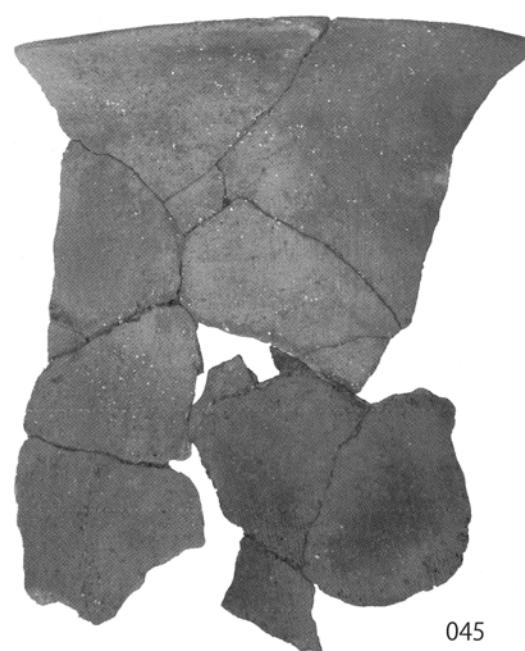
042



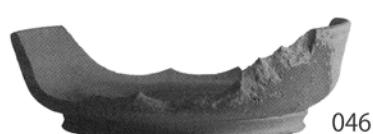
043



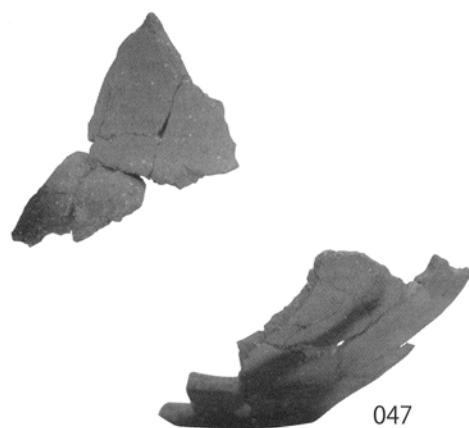
044



045



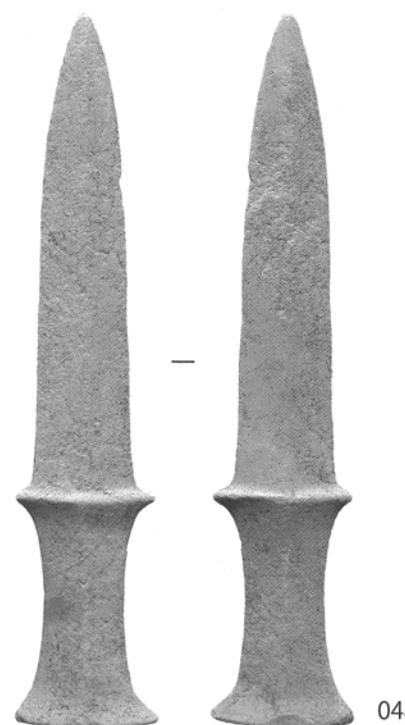
046



047

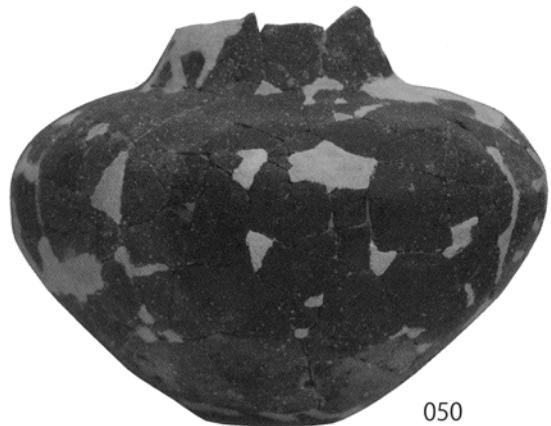


049

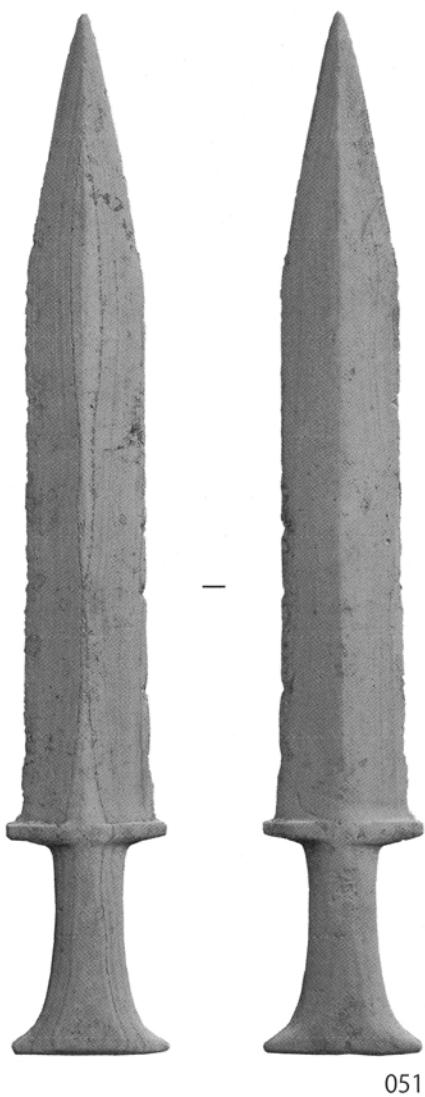


048

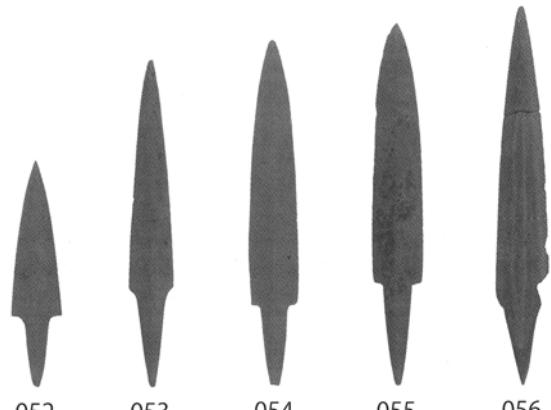
PL23



050



051



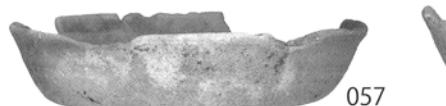
052

053

054

055

056



057



058



059



060



061



062



063



064



065

VI. まとめ

1. 調査の概要

今回の第14・15次調査区は、雑餉隈遺跡の中でも、舌状に延びた台地の南端部に当たる。この周囲には浅い谷地形があり、遺跡の周知範囲もほぼこの縁辺に沿うような格好で指定されている。同様のこととは、隣接する南八幡遺跡や麦野遺跡などでも言え、八ツ手状に浅い谷が幾筋も存在している。各遺跡は便宜上から、字名を冠して呼び分けられているが、共に関連性は深く、隣接した位置に集落が形成される。

これらの集落は、8世紀代前半に突如出現したかと思うと、およそ半世紀ほど存続した後に消滅してしまう。今回の調査でも、出土する遺物から同様の傾向がみて取れる。こうした原因の背景を考えると興味は尽きないが、ここに少しばかり成果を整理をしておきたいと思う。

また、15次調査においては、予想もしなかった弥生時代の木棺墓を発見するに至った。しかも完存の有柄式磨製石剣が、1つの遺跡から3本も出土すると言う、極めて稀な事例となった。それは弥生時代の開始時期や文化の伝播について、再検討すべき必要性を迫る内容でもあった。

2. 古代の集落について

8世紀代を主体とする奈良時代の竪穴式住居跡は、第14次では19軒、第15次調査では8軒を確認した。ただ、第15次調査区は、現代の建物の基礎が著しく遺構を破壊しており、既に消失してしまったものもあると考えられる。しかし舌状に延びる台地の先端部に向かうに従い、遺構の密度は疎になる傾向が窺える。

そうした状況で、最も南に位置する第15次調査のSC009竪穴式住居は、規模が約4.15×4.6mを測り、他と比較しても群を抜いて大きいのが分かる(Fig.115)。これについては前回の調査で、北

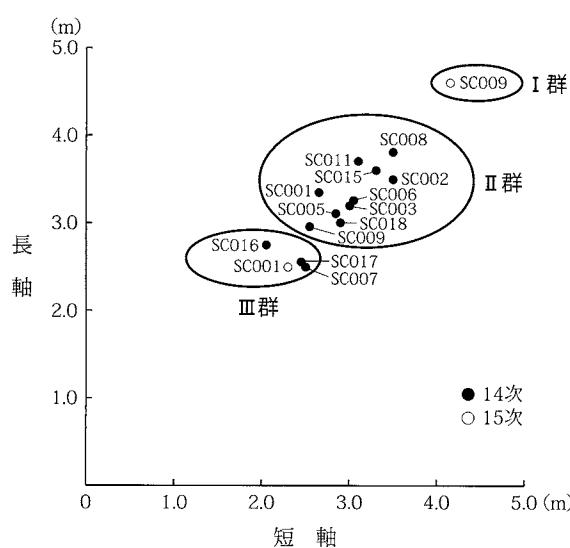


Fig.115 竪穴式住居跡の規模と類型

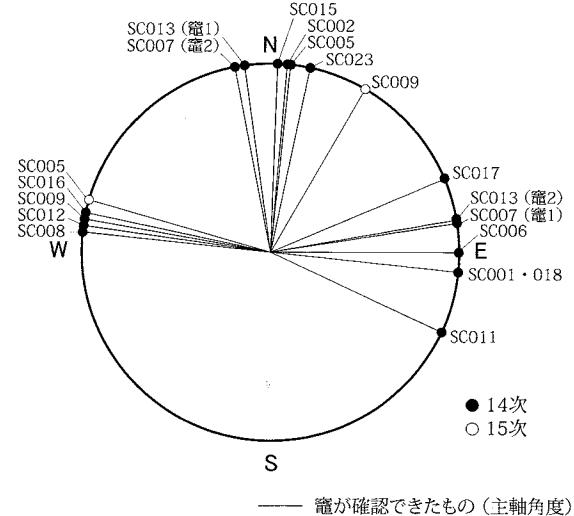


Fig.116 竪穴式住居跡の主軸角度

側に約 150 m 離れた第 5・7・8 次調査（以後、前回調査とする）の成果から、集落内における階層性の存り方に、糸口を探ることができる¹⁾。

今回の成果では、第 14 次調査区の北側に、小穴が集中する箇所があったが、積極的に掘立柱建物跡につながるようなものではなかった。しかし大型の住居跡が、これ以下の小さな規模のものを囲うように配置される点については、SC009 竪穴式住居跡が、谷に面した集落の南限という、縁辺に位置することから、必然的に他の住居跡を取り込む格好に映らなくもないである。

次に竈の構築される位置と、住居跡の平面が真北に対してどれくらい傾くかを、主軸角度として表してみた (Fig.116)。これでみると、竈が構築される方位は北側が多くを占め、次いで東側、そして西側となる。これは前回調査でも類似する傾向を示し、北側が卓越して多く、東側そして西側の結果となっている。

また、平面形態についても若干長方形になるものが、前回調査では報告されている。今回の調査でも、第 14 次調査の SC001・SC016 竪穴式住居跡、第 15 次調査の SC001 竪穴式住居跡が、これに該当する。

さて、竈そのものの形態についても、みておく必要があるかと思われる。前回調査では住居跡内に直接に取り付くタイプと、張り出し部を設けて、構築するタイプが紹介されている。今回の調査でも、竈側壁の左右、もしくは片方に、浅い段状の張り出しを認められるものが幾つかあった。第 14 次調査の SC002 竪穴式住居跡の竈 2 や SC008 竪穴式住居跡は、それが最も顕著にみられ、両側には平坦に削り出された段がある。この上面を粘土が薄く覆うようして認められることからも、竈が構築された痕跡であることが判断できる。しかし、こうした張り出し部を持つタイプは、住居跡全体の中では少数派である。これらの有無については、住居跡の規模に起因するとした指摘がある²⁾。確かにこうした傾向は窺えるものの、小型だけでなく、大型の住居にも張り出し部を認めるものもあり、竈本体の構造まで含めて、検討していかねばならない問題ではないだろうか。

この構造を考える上で、興味ある事例を紹介しておくことにする。第 14 次調査の SC018 竪穴式住居跡の竈は、奥壁からトンネル状に煙道が延び、その先に煙出しの小穴が認められた。この小穴からは土師甕の破片が出土しているが、煙出し部分が崩壊しないように埋設した可能性がある。前回調査では、こうした煙道が長く延び、煙出しの小穴も残るものが多くを占めているようだが、今回の調査ではこの SC018 竪穴式住居跡の残存度が最も良好であった。これ以外にも煙道が長めなものは、第 14 次調査区の SC002・005・006・008・015・023 竪穴式住居跡などある。しかし、SC016・017 竪穴式住居跡に至っては、奥行きがなく、幅広の形態である。

そこで張り出しが住居の規模に関連する問題で、もし竈が寝間を占有する面積を緩和しようとした考えに基づくなら、SC016・017 竪穴式住居跡はどうであろうか。2つとも規模は小さい部類に属し、張り出し部さえ持たない上に、煙道が未発達な構造では、寝間をかなり圧迫しそうである。そうすると先に述べたように、張り出しあは単純に規模に起因するだけでなく、竈本体の構造的な違いも考慮しておかなければならないと考える。

次に竈の袖部にも目を向けてみると、ロームを床面から低く削り出して基部とするものと、床面に直接に粘土を貼り付けるものがある。第 14 次調査の SC005 竪穴式住居跡は、その両方を併せ持つもので、竈に向かい右側は削り出されており、左側は粘土を貼り付ける。同じく第 14 次調査の SC011・016・017・023 竪穴式住居跡では、両側を粘土で構築している。第 14 次調査の SC013 竪穴式住居跡については、竈に向かい右側に粘土に覆われた礫を芯とする部材が認められる。この周囲には、さらに同じ大きさの礫が 2 つ転がっていたが、竈を破壊した際に転がり出たものであろう。

ここで竈の左右にも目を転じてもらいたい。そうすると、住居跡片隅のいすれかに浅い小穴が認め

られるものが、多いことに気づくはずである。そして幾つかの住居跡においては、この中から完存する土器が出土する。一般的に、この小穴は貯蔵穴などとも言われ、収納の場として認識されている。であるから出土する遺物も、通常は住居廃絶時に近いものと考えられ、遺構の時期を知る好資料になり得る。こうしたものは、第14次調査のSC001・005・008・013・017竪穴式住居跡、第15次調査のSC009竪穴式住居に認められる。第14次調査のSC011については住居片隅ではなく、竈が北東隅に構築するために、スペースを確保できない理由から、東壁の途中に設けられたと判断される。こうした小穴の存在は、この時代の住居跡では普遍的にみられるものである。しかし、第14次調査のSC005竪穴式住居跡の場合については、出土する遺物の器種構成に、収納していたものが取り残されたと、単純に判断しかねる側面がある。それは出土した遺物が、須恵器の高壺と壺、土師器の甕の3点で、こうした組み合わせに、祭祀的な意識性が垣間みえるからに他ならない。あいにく、これを裏付ける材料を持ち合わせていないが、住居廃絶時には祭祀行為を行う事例は、数多く報告されていることからも、こうした可能性を考慮しておく必要性はあるだろう。

最後に第14次調査のSC003竪穴式住居跡の、床に残る火熱面について触れておきたい。この火熱面は、住居跡内の南側中央でみられる直径0.4mほどの範囲で、強い火力を直接に受けたらしく、赤褐色に硬質化していた。この南側には浅い小穴が接してあるが、火熱の一部はこの中までおよんでいた。そうすると火を受けた時には、この小穴は開口していたことになる。小穴の底には平滑な面を上にした台石らしきものが据えられており、炉的な機能を果たしていたものと推測される。そこで小鍛治などが考慮できるが、これに伴う金属製品や、作業時に発生するであろう鉄片等は未確認である。

3. 古代の出土遺物について

今回の調査でも、遺物の多くは、竪穴式住居から出土する。それも下層に掘り進むにしたがい、破片から完存品へと良好な状態の資料が得られる。遺物は須恵器が圧倒的に多く、次いで土師器の甕をはじめとした器種が続く。そこで編年作業が進んでいる大宰府政庁跡の出土資料に基づき、須恵器を中心に述べていくことにする。須恵器の器種は、8世紀代前半を主体とした、壺身・壺蓋・壺・高壺・皿・盤・壺・甕・鉢で構成されている。この中でも壺身と壺蓋の出土量は、他の器種を凌駕しており、それぞれの個体を比較するのに好都合と言えた。

それらの特徴を、まずは壺身からみていきたい。壺身は高台が低く、断面が四角形のものが底端部より内側に貼り付くものが多い。稀に底端部の近くに付くものもみられるが、やはり内側に置こうとした意識性が窺える。さらに高台の形態を細かくみると、端部が外側に跳ね上がるものの、内傾するものに分けられる。これについては高台を貼り付けた後に、整形した際の指の摘み方や押さえ方に起因しているようである。体部については、外上方に傾斜する角度はあまり開かず、ほぼ直線的に立ち上がる。この中には体部下位に丸みを帯びさせ、底部との境が不明瞭になるものも多くみられる。前者は底部との境が明確に捉えられ、したがって内側に貼り付けようとした意識も明瞭となる。しかし、後者はその境が曖昧ゆえに、貼り付けられる位置も個体により微妙に前後するようである。この両者に時期差を見出すのは容易ではなく、1つの遺構から共に出土する場合も多いことから、並行して存在していたと考えられる。

壺蓋は断面三角形の口縁部を垂直に折曲げ、その際に内側に明瞭な稜線が残るものが多い。次いで、この部分を僅かに摘み出す程度で、内側の稜は不明瞭となり、外面には摘み出した際の指先の痕が浅い沈線となって廻るものもみられる。こうした特徴に、四半世紀単位での細分化は可能かと考えられ

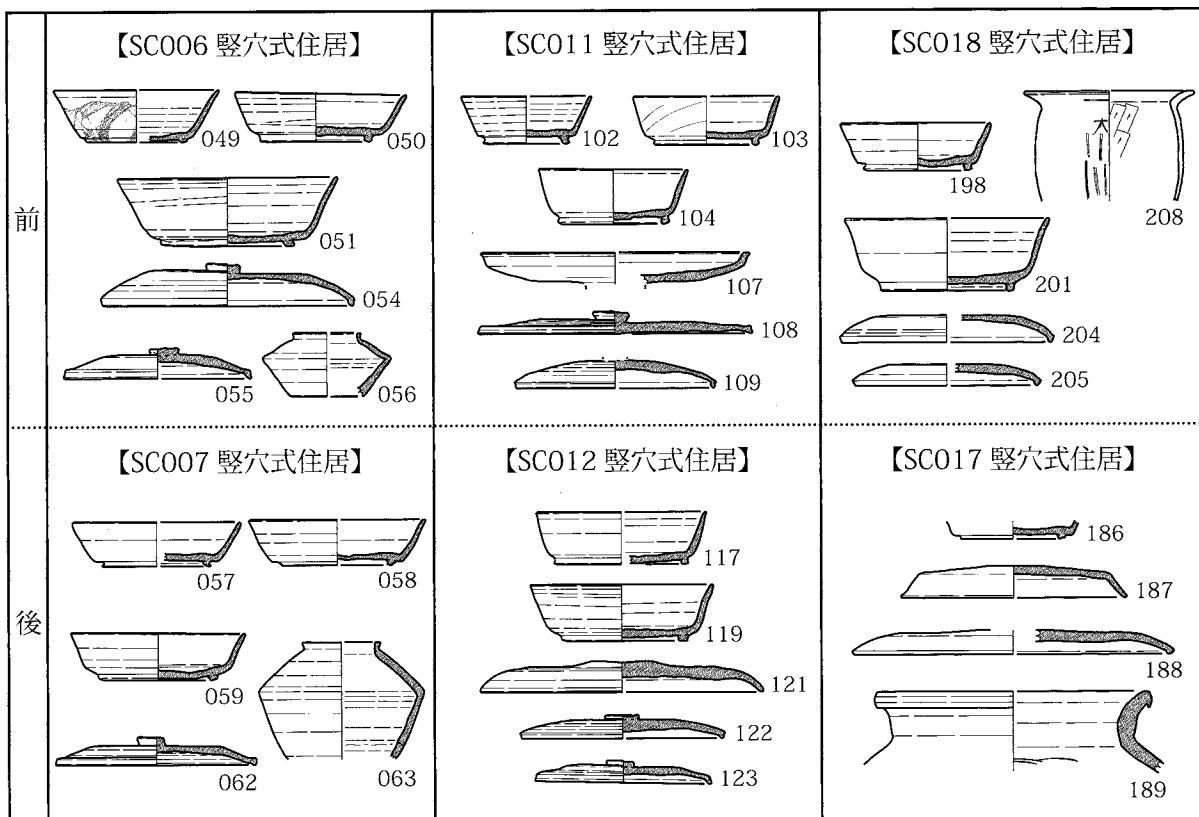


Fig.117 重複する豊穴式住居跡出土の遺物

る。この点について前後する時期から再確認しておくと、7世紀終わり頃になると反りを持たず、端部を斜め下方に折り曲げてたものが現れる。8世紀代前半になると、その屈曲する角度は真下に変化し、さらに折り曲げるだけでなく、摘み出す程度の擬似的な作為のものが現れる。こうした変遷を重複し合う豊穴式住居に求めると、第14次調査のSC006と007豊穴式住居跡、SC011と012豊穴式住居跡、SC017と018豊穴式住居跡に傍証できる(Fig.117)。但し、一つの住居跡内で、口縁部を屈曲させるタイプと、摘み出す程度のタイプが、共に出土する場合もあり、こうした形態の変化は、緩やかに進んだと思われる。そして8世紀代後半になると、口縁部はいよいよ退化し、ついには消滅することが知られている。

ついでながら、SC021と023豊穴式住居跡から出土した長頸壺を紹介しておきたい。これらの特徴は、体部上位がきつく屈曲し、これより下位に回転ヘラ削りが施される。底部には低い高台が貼り付き、頸部は途中まで細く絞られるが、そこから口縁部に向かい開くと、端部を横に屈曲させる。こうした長頸壺は、大宰府の第Ⅱ期政庁の中門地鎮具として用いられたものが知られている。

以上、簡単に触れる程度であったが、さらに精査を試みる過程において、細かな編年への糸口になればと思う。

4. 古代の雑餉隈遺跡から見えてくるもの

この様に、前回との調査成果を比較するだけでも、かなりな部分の類似性や問題点が浮き彫りになってきたと思う。そして、8世紀代前半の短期間だけ営まれた、集落の消長の背景を考えた時に、最もこの遺跡の持つ本質的な面白さがある。

それは、どうみても自然派的な集落の出現ではなく、為政者の強制的な意識を感じずにはいられないからである。もし、こうした意識というものが介在しているのであれば、いったい何に起因し、どのような目的、そして役割を担わされたのか、興味が尽きないところである。

このような問題を、現時点で具体的にするのは困難であるが、この地域に関連する歴史的背景をまずは概観しておきたい。それには、これ以前の7世紀後半から、触れておく必要性がある。この時期を端的に表現すると、まさに内憂外患の出来事が相次いで起きている。まずは主なものを時系列に追ってみると、天智2(663)年に百濟と連合した大和朝廷軍は、白村江で唐・新羅の連合軍に大敗を喫することになる。そして今度は来襲に備えて、翌年には筑紫に防人と烽を配置し、水城を築くのである。その翌年には大野城や基肄城もさらに築かれた。しかし幸いにも憂慮した事態まで発展することはなく、逆に積極的な外交関係が結ばれることになる。国内においては、天武元(672)年に壬申の乱が起こり、これにより即位した天武天皇が、強固な中央集権国家の形成へとのりだす。こうした対外的諸問題や西海道九国二島の九州統轄という、重要な役割を担わされたのが大宰府である。外交、防衛、九州全土の経営と統治などの多面性は、万葉集にも詠われる「大君の遠の朝廷」の言葉によく表現されている。

7世紀第4四半世紀から8世紀にかけては、こうした緊張感はさらに和らいでいくようであるが、文武2(698)年には大宰府、大野城、基肄城、鞠智城を修治した記録がみられる。翌年にも大宰府、三野城、稻積城の修治が行われ、有事の危機は去ったものの、依然として維持管理は続けられていた様子が窺われる。そして大宝元(701)年には、大宝律令が制定されると、大宰府の諸制度もさらに整備が進むようである。その後も重用拠点として関連諸施設の造営や、国分寺をはじめとした寺院の建立が、8世紀代前半も相次いで展開したのは想像するに難くない。

地理的に大宰府に近い雑餉隈遺跡の集落も、こうした動きと決して無関係に存在していたとは思えない。こうした中枢機構に近く、そこから発せられる意向を速やかに反映するには、利便度の高い距離内にあるからに他ならない。そして国家的大事業や、その後の施設の維持管理にも、多くの労働力を必要としたはずである。この一端を窺わせるものに前回調査で発見された、7世紀末ないし8世紀初頭の大型建物群がある。その規模と配置には官衙的性格が認められ、役務に携わる人々を居住させた一つが、雑餉隈遺跡の姿であり、その必要性がなくなるのと同時に、集落は忽然と姿を消したのではないだろうか。

5. 弥生早期の木棺墓について

弥生時代の雑餉隈遺跡は、第5次調査において、前期の住居跡と貯蔵穴が存在する。さらに同地點では、中期の直径8mにおよぶ、円形の大型住居跡がみつかっている。この近くでは、南八幡遺跡の2次と3次調査で、住居跡が確認されているが弥生時代の密度は疎で、特に目立った発見もない。しかし、今回の第15次の調査成果では、夜臼式の土器を伴う4基の木棺墓が確認された。しかも3基からは、大陸よりもたらされたと考えられる有柄式磨製石剣が副葬されており、国内における弥生文化の伝播を考える上で、様々な問題を提議するに至ったのである。

まず、遺構の方からみていくと、いずれもが後世の搅乱を受け、残存状況は決して良いとは言えなかった。特にSR011木棺墓に至っては、約1/3が消失している有様であった。或いは発見された4基以外にも、完全に消失してしまったものがある可能性は否定できない。

4基の木棺墓の配置関係については、特に統一された意識性は薄いように感じられる。それは

SR002・003 木棺墓の長軸の向きがほぼ同じになる程度で、SR011・015 木棺墓とについては、そうしたものを見出すのは困難である。しかし壺を東短辺側に供献した点については、4基ともに共通した認識として捉えられる。

棺材については、いずれも腐食が進行し、全く残存しない。しかし、床面や壁面の掘り込みに、木棺の形態を類推するには可能である。こうした特徴と、遺物の出土状況をここで再確認しておきたい。

SR002 と 003 木棺墓は、隅丸長方形の掘り込みである。上面は攪乱により削平されていた。規模は SR003 木棺墓の短辺は、SR002 木棺墓よりもあるものの、長辺はかなり短い。両者とも床面は平坦で、棺材を支える溝等は認められず、東側短辺際の床面からは夜臼系の供献された壺がみつかっている。そこで、この壺が被葬者を埋葬する時に、何処に置かれたかについては、注意を払わねばならない点である。それは木棺の中なのか、或いは外に置いていたものが、棺材が朽ちていく過程で床面に転げ落ちてしまったのかなど、葬送時の様相に結びつくからである。こうした点に留意しながら、出土時の状況を振り返ってみると、壺は正位に近い状態で、壁面際で発見されている。つまり、動いた形跡が少ないと考えられる。すると、木棺内に被葬者と共に、埋葬された蓋然性がみえてくるのである。

さらに壺の置かれた方位は、多少の角度の振れはあるが、4基とも東短辺側に当たる。それは明らかに、東側という方位を意識して、埋葬を執り行つたことが分かる。おそらく被葬者も、これに合わせて、頭の向きをどちらか一方へ統一したことが考えられる。

そうすると石剣や石鏃の、向きはどうであろう。SR003 木棺墓は、北側長辺際の床面から有柄式磨製石剣 1 本と 3 本の有茎式磨製石鏃が出土している。これについても、周囲の状況などから、被葬者の傍らに置かれたものであり、動いた形跡が少ないと判断できる。そうすると、鋒の向きは石剣が西側に、石鏃が東側と反対を指す。ところが SR015 木棺墓も動いた形跡が少ないのであるが、1 本の有柄式磨製石剣と 5 本の有茎式磨製石鏃は、共に鋒を西側に揃えて並んでいる。置かれた位置は被葬者の傍らに当たり、頭の向きが統一されていたとすれば、身体の左右という問題も考えなくてはならない。例えば、SR003 と 015 木棺墓の被葬者の頭が、東側の壺の置かれた方にあるとすれば、仰向けの状態では右手の傍らに、石剣と石鏃が置かれたことになる。SR011 木棺墓でも、有柄式磨製石剣が 1 本みつかっている。位置は床面の中央付近で、鋒を西側に向けていた。これについては傍らに置かれたものではなく、被葬者の身体の上か、蓋板上が想定される。土層の断面からみても、床面から浮いた位置にあり、有機物の腐食と共に埋没したことを物語る。しかし、こうした過程を経ても、鋒の向きが全く反対になることは考え難く、指した方向には変化はないものと判断される。

ここで再び、木棺墓の形態に話を戻すことにする。SR011 木棺墓は、西側の約 1/3 が現代の建物の基礎により消失するが、隅丸長方形であったことには変りはない。特徴としては掘方が認められる点で、側壁には段もしくは緩やかな傾斜が設けられ、棺材との隙間を粘土で裏込めしていたようである。SR015 木棺墓も隅丸長方形で、床面に浅い掘り込みがあり、2 段掘りとなる。しかし SR011 木棺墓とは異なり、粘土で裏込めした形跡は認められない。また、石鏃は 2 段掘りされた上の段にまとまっており、この位置までを棺内として捉えた場合では、掘方を考慮すると無理な構造となる。残念ながら棺材が全く残存しない状況で、構造まで復元するにはどうしても限界があるかに感じられる。

先でも述べたが、SR011・015 木棺墓でも東短辺側から壺が発見されている。時期も夜臼式系で、SR002・003 木棺墓と同様に早期に属する。おそらく、この集団内においては、壺を供献する風習が少なくともあったと考えられる。しかし、SR011・015 木棺墓のものは、どうも棺内ではなく、棺外に置いた形跡が窺える。それは、先の 2 基のように、床面から出土するのではないからである。

さらに SR011 木棺墓の壺は、裏込めに用いられた粘土の上面で発見されており、明らかに棺外に置かれたことが判明している。SR015 木棺墓についても、1 段目の面から、かなり浮いた位置にあり、供献時に壺の置く場は、棺の中と外の 2 つのパターンがみられる。

以上、様々な問題点を思いつくままあげてみたが、これまでに確認されている木棺墓とも比較していく過程で、何らかの法則性や地域性が明らかにされていくことを期待している。

6. 有柄式磨製石剣と弥生早期の雑餉隈遺跡

これまでの雑餉隈遺跡の調査では、前期以降の遺構が認められているが、早期に属するものは寡聞にして知らない。では周辺地域まで視野を広げてみると、春日市の伯玄社遺跡で有茎式磨製石鎌が出土しており、時期もほぼ近いが早期の遺跡分布はやはり疎らに過ぎない。

こうした状況の中で、夜臼式系の土器を伴う 4 基の木棺墓は、予想もし得ない発見となった。しかも 3 基からは、完存する有柄式磨製石剣が副葬されており、大きな話題を提供した。おりしも炭素 14 年代測定 (AMS 加速器質量分析計) の較正結果において、弥生時代の開始年代が紀元前 5 世紀から、更に 500 年も遡る可能性が発表されて、まだ間もない頃である³⁾。実は 3 本の石剣も、こうした問題とは深い関わりがあり、今後は様々な形で傍証される機会も増えるであろうが、慎重に取り扱わねば、全く違った結果につながりかねない。こうした危惧も踏まえて、考古資料として石剣を持つ有効性を再確認し、弥生文化の伝播について、拙いながら予察を試みてみたい。

大陸側において石剣が分布するのは、遼東から朝鮮半島、そして沿海州南部の地域にかけてである。列島内では、対馬や北部九州、西部瀬戸内地域を主に、早期から前期末にかけて分布することが知られている。そもそも石剣は、銅剣を模倣した代用品であると、かねてより指摘されている。しかし列島内で、銅製品が認められるのは、前期末以降である。然るに石剣の故地は、大陸側に求められることになる。そこで祖型となった銅剣を特定できれば、曆年代の把握が可能点から、クロス・データリングを試みることにより、石剣の制作時期も自明となるはずである。しかし、祖型と考えられるものには、幾つかの候補があり、時代も大きく異なることから、慎重を期さねばならない問題がある。

そこで簡単ではあるが、こうした点を整理しておきたい。石剣の古い段階の形態は、有茎式で遼東に分布がみられるようである。次いで有柄式で、柄の部分に段をもつ二段柄式が現れるのだが、古式遼寧式銅剣を模倣したことが指摘されている⁴⁾。問題はその次に現れる節帶を持つ石剣である。これは段の部分が装飾化して、有節式になるとした、あくまでも遼寧式銅剣を祖型にして、单一系譜の変化を遂げる考え方で、次の段階では節帶は消失し一段柄式となる⁵⁾。これとは別に、節帶を中国式銅剣の柄にみられる、二重の円環に類似性を求める考え方もある⁶⁾。朝鮮半島において石剣が有節式から一段柄式にあるのは、先松菊里式から松菊里式土器の時代である。すると前者を祖型と考えた場合では、古式遼寧式銅剣は遼西・遼東において紀元前 800 年頃から紀元前 6 世紀段階にかけて用いられたことが知られている。そして後者の祖型である中国式銅剣は、春秋後期の紀元前 500 年以降に登場するもので、両者には時間的に大きな隔たりがみられる。だが、有節式石剣の祖型を中国式銅剣に求める考え方には、矛盾点が指摘されている。その最大の矛盾は、模倣される側の中国式銅剣の出現以前に、模倣した側の有節式の石剣が既に存在するという、説明し難い点があげられる⁷⁾。

第 15 次調査において、有節式の石剣は SR003 木棺墓から 1 本、一段柄式の石剣は SR011・015 木棺墓より 2 本が出土している。それぞれに供献された壺をみると夜臼式系で、早期の木棺墓に副葬されていたことになる。そこで弥生時代早期の時期を、これらの石剣から見直すと、紀元前 6 世

紀を下限に遡る可能性が考えられるのである。もちろん副葬されるまでの伝世性も考慮しておかねばならない。国内において出土する石剣の多くは破損品が多く、スダレ遺跡に物語られるように、戦闘において折れた鋒が人骨に突き刺さったものなど、副葬品としてはみなしがたい。それが一つの遺跡内で、完存品が3本も同時に発見されるのは稀であり、これほど複数本を所有し、副葬できた集団において、伝世の意識がどれ程あったかを考えると疑問が残る。また朝鮮系の柳葉形をした磨製石鏃も、石剣と共に持ち込まれたと考えられるが、SR003・015木棺墓の2基から、合計で8本が副葬品として確認されている。こうした背景には、石剣や石鏃を多数所有していたか、或いは供給が比較的に容易な環境にあったことが推測され、伝世品としての可能性は低いと判断される。

今回の3本の有柄式磨製石剣は、弥生時代の開始時期を知る上で、極めて重要な定点資料となり得ると確信している。そして東アジアの広い視座から、弥生文化を再び問い合わせ直す絶好の機会を与えてくれた。

堀苑孝志

- 註 1) 福岡市教育委員会「小結」『雑餉隈遺跡 4 福岡市埋蔵文化財報告書 第569集』1998年
この調査において、奈良時代を主体とする58軒の竪穴式確認されている。これらを規模から、I類からIV類まで4つのグループに類型化した試みがなされている。この中で、IV類とされる1辻が4.6m以上を測るもののが6軒あり、掘立柱建物跡群とI～III類の住居跡を区画するように配置される点に着目している。これは集落の共有の施設である掘立柱の維持管理と、そしてIII類以下の住居跡を囲い込むような格好から、集落内における階層性の存在を指摘している。
- 註 2) 同上
竈に張り出し部を持つ住居は、小さな規模に多く認められ、大きな規模になるに従い少なくなる傾向が指摘されている。これについては張り出しを得ることにより、竈を少しでも外側に取り付け、住居内の使用面積を広く確保しようとした目的があると推論している。
- 註 3) 国立歴史博物館が1997年以来行ってきた、炭素14濃度の高精度データを、AMSにより暦年に較正することに成功した。これにより弥生時代開始期の実年代が、紀元前400から500年と考えられていたのが、一気に1000年まで遡る可能性が導き出された。
- 註 4) 近藤喬一「東アジアの銅剣文化と向津具の銅剣」『山口県史 資料編 考古1』2000年
朝鮮半島の、慶尚南道蔚山郡東部採集品や慶尚南道義昌郡熊洞箱式石棺墓出土の、二段柄式の石剣が、中国の遼寧省遼寧県小黒石溝8501号墓の銅剣と形態的に類似することから、遼寧式銅剣を模倣して製作した点を指摘している。
- 註 5) 庄田慎矢「韓国嶺南地方南西部の無文土器時代編年」『古代文化談叢 第50集下』2004年
- 註 6) 柳田康雄「日本・朝鮮半島の中国式銅剣と実年代論」『九州歴史資料館研究論集』29』2004年
- 註 7) 宮本一夫「中国大陆からの視点」『季刊考古学』第88号 雄山閣 2004年

引用・参考文献

- 穂波町教育委員会『スダレ遺跡』1976年
- 福岡市教育委員会『雑餉隈周辺遺跡群 福岡市埋蔵文化財報告書 第528集』1997年
- 福岡市教育委員会『雑餉隈遺跡 4 福岡市埋蔵文化財報告書 第569集』1998年
- 春日市教育委員会『伯玄海社遺跡 春日市文化財調査報告書 第35集』2003年
- 福永伸哉 「木棺墓」『弥生文化の研究 8 祭と墓の装い』雄山閣 1987年
- 長沼 孝 「戦い 石の武器」『弥生文化の研究 9』雄山閣 1986年
- 橋口達也 「戦い 犠牲者」『弥生文化の研究 9』雄山閣 1986年
- 西谷 正 「東アジアの弥生文化 朝鮮半島と弥生文化」『弥生文化の研究 9』雄山閣 1986年
- 春成秀爾 「弥生時代の年代推定」『季刊考古学』第88号 雄山閣 2004年
- 大貫静夫 「研究史からみた諸問題 遼東の遼寧式銅剣を中心に」『季刊考古学』第88号 雄山閣 2004年
- 柳田康雄 「日本・朝鮮半島の中国式銅剣と実年代論」『九州歴史資料館研究論集』29 九州歴史資料館 2004年
- 藤原 哲 「弥生時代の戦闘戦術」『日本考古学』第168号 日本考古学協会 2004年

VII. SUMMARY

Zasshonokuma site is located at the center of Fukuoka plains that stretch over Fukuoka City, Japan. It is placed about 10km from Hakata bay and at an altitude of approximately 25m. The 14th and 15th excavation investigations were executed before the apartment construction on the archaeological site.

The Fukuoka City Board of Education took a primary role in this project regarding administrative control and academic guidance. Okasan Livic Co., the archaeological research section was in charge of the actual excavation, the material organization, and the report on these investigations.

I will make a brief report on the result of this investigation.

Nineteen pit dwelling marks were discovered on the 14th investigation and eight pit dwelling marks on the 15th investigation. We have found a large number of life tools which include bowls, lids, jars, plates of the Sue ware, and jars of Haji ware. These tools were mainly used during the Nara Period of the early eighth century, when they had lived in the pit dwellings. However, we have never found the pit dwelling marks of other periods. The excavated dwelling clusters were formed quickly but they disappeared within a limited time of fifty years thereafter.

As a background, I can imagine that these dwelling clusters were residence for the people who worked for administrative and military reform, along with the centralization process of the Yamato Court. Once they completed the reform, they did not need to reside in the pit dwellings any longer and the dwellings lost its “raison d’être.”

The most notable result of the 15th investigation was the discovery of the wooden coffins of the earliest Yayoi period. They were much older than the pit dwelling marks of the 14th excavation. Three out of four wooden coffins were found with a polished stone dagger with a hilt in. It is the very first time in Japan that complete figure of three polished stone daggers with a hilt were discovered all at once from the one site. The stone dagger with a hilt is made from one stone material and precisely polished up. They were distributed from Liaodong to a Korean peninsula and Maritime Provinces and had been discovered mostly in northern part Kyushu.

The stone daggers were found with the Yuusu style earthenware pots, which belong to the very first stage of the Yayoi period. This was around the same time when rice agricultural skills were brought into the Japanese archipelago from the Chinese Continent. Along with the advanced farming skills and stone daggers which were made in imitation of its bronze sword, these too, were imported from the Continent.

In fact, it is possible to clarify the real calendrical age of the stone daggers through cross dating, using the original model of the bronze sword and investigating the historical material of the East Asian Continent. However, there are still a few questions remaining in order to specify the original model. Most likely, the Liaoning style bronze sword, which developed in Liaodong, could be the model of the stone daggers. This consideration raises a new point of view for the time when the Yayoi period had exactly begun. Surprisingly, it may have begun in the sixth century B.C., which reveals a several century gap from the current estimated year.

In association with this, the noteworthy result of the carbon-14 dating technology has been presented recently, which reported the beginning of the Yayoi period to be in the tenth century B.C. The fortunate discovery of the three polished stone daggers with a hilt is so important because we now, should reconsider the Yayoi period in historical circumstances over the East Asian Continent.

Takashi Horizono

報告書抄録

ふりがな	ざっしょのくまいせき							
書名	雑餉隈遺跡 5							
副書名	第14・15次調査の報告							
巻次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第868集							
編著者名	堀苑孝志 入江俊行 天野直子							
編集機関	岡三リビック株式会社 埋蔵文化財調査室							
所在地	〒108-0023 東京都港区芝浦4-16-23 AQUACITY 芝浦 TEL 03-5442-1980							
発行年月日	2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
雑餉隈遺跡 (第14次)	ふくおかん 福岡県 はかたく 博多区 二丁目24番1号	40132	0308	33° 31' 59"	130° 27' 59"	2002.11.1 ~ 2003.1.24	600	集合住宅建設
(第15次)	ふくおかん 福岡県 はかたく 博多区 二丁目25番	40132	0308			2003.11.10 ~ 2004.3.5	650	集合住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
雑餉隈遺跡 (第14次)	散布地 集落	旧石器時代 奈良時代 (8世紀代前半)	竪穴式住居跡 19軒 土坑 8基	石器(三稜尖頭器・剥片) 須恵器 土師器 石製品		散布地 奈良時代の集落跡		
(第15次)	墓域 集落	弥生時代 (早期) 奈良時代 (8世紀代前半)	土坑 7基 木棺墓 4基 竪穴式住居跡 8軒	夜臼式系の弥生土器 有柄式磨製石剣 有茎式磨製石鎌 須恵器 土師器		弥生時代早期の墓域 奈良時代の集落跡		

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 868 集

雜餉限遺跡 5

2005. 3. 31

発 行 岡三リビック株 埋蔵文化財調査室
東京都港区芝浦四丁目 16 番 23 号

印 刷 (株) 第一印刷所
東京都台東区根岸二丁目 14 番 18 号

The 14th and 15th Excavation Report of Zasshonokuma Site

~ Excavation and Studies of ZASSHONOKUMA SITE in FUKUOKA ~

This report will cover the 14th and 15th excavation investigations of the Zasshonokuma archaeological site in Fukuoka, Japan.

In this particular investigation, we have discovered three wooden coffin graves from the earliest stage of Yayoi Period. In these graves, there were three polished stone daggers with a hilt and polished stone arrowheads, which are considered to have been brought from the Chinese continent. This is a valuable discovery to know how the rice farming culture had spread in Japan. Many pit dwellings from the early eighth century were also discovered. It has demonstrated the fact that a cluster of dwellings had been formed in this site. We have also found a number of relics, including Sue and Haji wares.

March 2005

FUKUOKA CITY BOARD OF EDUCATION

OKASANLIVIC.CO ARCHAEOLOGICAL RESEARCH SECTION